

---

# 道行き見えないトリッパー

ガビアル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

道行き見えないトリッパー

### 【Nコード】

N7834X

### 【作者名】

ガビアル

### 【あらすじ】

大層な必要性も、必然性もなく、リリカル世界に厨二容姿で混入してしまった主人公の一人称練習作品です。テンプレ展開と見せかけて斜め上に行くこと、まずは荒くとも完結、を目指しております。TS要素有りなので苦手な方はご注意ください。

## プロローグ（前書き）

初めまして。つたない拙作をご覧頂きましてありがとうございます。

皆様の小説を読んでいるうちに妄想止みがたく、書きつづつております。今までちょっと書いては直しての繰り返しでまともに完結した話を作ることが出来なかつたので、ただ勢いそのままに書き綴つていく所存です。目指すは不格好でも完結。

誤字脱字の注意。ご意見ご感想など頂ければ幸いです。

## プロローグ

声が聞こえる。

「起き ください、誰もが垂涎のトリップイベ がやって  
たよー！」

眠い。

買い換えたばかりの羽毛布団の暖かさに包まれながら俺はみじろ  
ぎをした。

そういえば昨日は徹夜の仕込みだった。眠いのも当……然……

「……ああもう！ 起 てーっ！」

……騒がしい。

布団を頭に被る。……静かになった。今日は祭りでもあったけ

……さわが……

「……これは てしまいましょうか……あー、ええと、駄目  
で 。職分ですし全う とですね」

ゆさゆさと揺れる。揺れる。揺れる。ゆれゆらゆら。じしん？

「……うほっ？」

「新感覚な寝ぼけ言葉なのです……いいですか？ まずあなたはト  
リップすること りました。何か があれば聞き入れ とも  
ます」

「……少女のこえが……とりっぷ？」

……とりつぶ……どりつぶ？ とら……ぶ？ とりつくおあと  
ーと……

「少女　ね？　ああ！？　話し　る間にま　が！　も、もう  
　　ったら仕　りません。望　言ってください！」

「んー……羽毛最高、このままねかせ……」

「羽毛……羽　ね。容姿は適　トリッ　の皆様が望むよ  
ものにしておき　」

何か聞こえる。なんかまあ。

「………すきに………して。ね………む」

「　　良い　を！」

ぼーっと布団の温もりの中で、夢見てるなーなんて夢の中で思いながら、俺はまた眠りについた。

目覚めは首筋をなでる冷たい感覚だった。

「………んあ？」

妙に細い声が聞こえる。それよりこの冷たいのは？  
起きてみ………ようとして体が固まった。

冷たいものはどうも生き物だったらしく動いている。首筋を這い  
ずりまわっている。

気持ち悪いのだが、どうも寝起きにこんなドッキリやられると驚  
きで固まってしまうようで、いや思考はどうもさつきから回るのだ  
けど、なんなんだこれ。なんなんだこれ。カメラはどこだ、氷で撫

で回してくれてる奴はどこだ？ うわ動いてる動いてる、蛇か蛇なのか？ 蛇っぽいって！

「っヴおうあっ！」

我ながらどうかと思う奇声をあげながら、慌てて布団から飛び出し、首に巻きついてるものを引き剥がして投げつける。

木にべちつと当たってその30センチほどの蛇はカサカサと慌てて茂みに逃げ込んだ。

「……お、お、驚えたー………て………あ？」

ぜーはー荒げた息を落ち着ける暇もない。  
何せ見ている目の前の光景が光景だ。

「……森？」

そりやもう立派な森だった。

樗、ブナ、檜。人の手あまり入っていないのだろう雑木がひしめき、ツタが絡まりあっている。

振り返って後ろを見してみる。

「布団だな」

さっき慌てて飛び出したせいかくしゃくしゃになった布団がある。それは別段おかしくない。

地面の上に直敷きしてあるのを除けば。

その向こうに10mほどの澄んだ池があつて、そこから手前は花が咲き乱れ、ザ・草原と言った感じののどかな風景になっているのを除けば。

先ほどまで変な夢を見ていたことを思い出す。

「また夢か？」

夢を夢と認識できるのって明晰夢というのだったか。

初めて見たかもしれない。しかし、蛇で目覚める明晰夢って、夢占いにかけてたらエライ酷い結果が出そうだ。

なんとなく、池の方に歩いてみる。

物語だと池の中から美人が出てきたりとか、未来の知識を映したりとかかな？

だが、覗き込んでみると、映し出されたのは。

「なんだこの子供……」

見たことない子供だった。

俺が右手を上げるとその子供は左手を上げる。

俺が左手であいーんのポーズをとれば、その子供は右手であいーんをした。

……いや夢なんだから百歩譲って子供になるのはいい。回帰の欲求なんて誰にでもあるし。

でもこの姿はねえよ。

「アルビノ銀髪オツドアイとか……」

こんな欲求が俺にあったのかー。厨二なのかー。中学の時に発症しなかったのが悪かったのかー。

少し逃避気味な思考が揺れる。

この調子だと邪気眼とか隠された人格とか黒翼の堕天使とかそういうのまで搭載されて……と、翼とか思い浮かべた時だった。

「ぶぶつ……おうふ……息ぐる……し……ぐあぁ」

寝巻きに着てたジャージの背中がなんだかもこもこって動いて盛り上がって、てか狭い。狭い！ 必然首が絞まって、締まる締まる締まる。ぐおおお……

限界点に突破しようという時、びりべりばりばりと、ジャージの背中が破けはじめ。なんと翼が……

「生えた……」

なにそれ怖い。

色は真っ白でもふもふ具合はなかなか良さそうだが、いや漆黒の堕天使とかにならずに済んで良かった……のか？ え？ えー？

いやなんだろうこれは。

うん。明日聞いてみよう夢占い。

こんな力オスな夢は何とつかすこすぎる。

いい年した男がとか、ふっと思っただが、いやコレだけの夢だと十分話しのネタになる。

ひとまずこれからすべきことは。

「寝るべ……」

いそいそと布団を直し、もぐりこむ。

固く眼をつむり布団を頭から被る。

翼が邪魔になるようなので横向きに体を丸めて。

なんだか……いろいろなんだか……夢でも脳は疲れてたのかもしれない。

きつとそうだ、新作メニューの仕込みで徹夜なんかするからこんな夢を見るんだな。

何も考えなくなかっただけかもしれないが。今度こそちゃんと真



つ  
当に現実に目を覚ましますようにと祈る。  
急速にぼんやりしてきて……………意識を手放した。

## 一話

今日は本当に酷い夢を見た。

寝ぼけて誰かに応対しちゃったなーと思ったら、草原で目覚めて、自分がどこかの厨二小説などでよく見かけるような特徴を兼ね備えたりしていて。

あまつさえ翼とかもこもこと元気に生えて、なにこのキメラ。いや天使ってよく考えたら人と鳥のキメラだよねとか思ったり思わなかったりした。

そんな夢を見たのさ。

「で、終わりになればよかったのに」

そんな夢、いや悪夢は際限なく、容赦なく、否応もなく続行中だった。

流石にあれだけ寝たらもう寝ることも出来ない。

恐らく今は昼。

なんとたつて太陽がいい具合に有頂天。俺の心も温かく照らしてくれればいいのに。

ため息が先ほどから連続して出ています。

なぜため息がでるかというと先ほどから嫌な予感がするわけで。

それは股間でむずむずしてるわけで。

いやただの尿意なんですけどね。

とてつもなく嫌な予感しかしない。

「そうだ、小便行こう」

京都行こうみたいなのりであえて軽く逝ってみる。誤字ではない。これは逝くが正しいのだ。

ちよつくら木陰に立って、まあ、寝巻きのジャージのままなので下ろさせてもらいます。

トランクスもちよつと下ろしてみまして、また戻して。

「見なかったことにしてえ……」

涙が溢れた。

なんたって、長年付き添ってくれた我が相棒が。マイ・サンが。愛すべきエツフェル塔が。ビッグダディが。ごめん嘘ついたビッグつて程じゃない。

「……………無あい……………」

へそまで届くようなご立派なもんじゃなかったけど。

毎朝自己主張してくれて、時にはちよつと困ったちゃんだった愛息。その姿が影も形も。

小さくなってたとか、しぼんでるとか腹の中に納まるという空手の奥義とかでなく。見事に玉も無い。

明日のジョーが灰になるような心境。

俺は灰になるという感覚を生まれて初めてその身に刻んだ。

思考停止とは便利な言葉だと思う。

応用範囲も広く、例えば誰もが考えてなかった事なのに、いざ政治家がそれで間違えればだれそれは思考停止に陥っていたことを反省しなければ云々なんぞと叩かれたりもする。

ただ時には、精神的に追い詰まっている時などにはこの思考停止というものは切実に必要となるものらしい。

性転換とかなんかクレバスがあったとかそんなんは思考のダムに

止めて考えないことにした。考えないったら考えない。  
なんで、とか、どうして、とかは時間のある時にゆっくりゲーム  
でもしながら考えればいいことだ。

『まず、もしもという時は状況に適した優先順位を付けて判断する  
ことだ』

そんな台詞を迷彩服を着ながら俺に語った親父を思い出す。  
別にアフガン帰りの軍人とかベトナム帰りのグリーンベレーとか  
ではなく、至って普通のサバゲーマニアである。

だが、マニアというものはこだわりも大きいのか、思い出すと、  
どこの軍事教練だよという知識もある。

「ひとまず目先のことを考えよう。それがいい、それに決めた」

本当に思考停止とはありがたい。

何しろほんと投げ出された五里霧中。何がどうしてどうなったと  
いう脈絡もなく、順序もなく、訳が判らない状態だ。……この場合  
の優先順位はというと、自己診断、状況把握だろうか。

気を取り直して、後方の静穏という名前が付きそうな池に向かう。  
上流から流れ込んでいる小さな川がせき止められて直径10mほ  
どの池のようなものになっているようだ。岩がごろごろあるわけ  
もないので、それほど溪流というわけでもないようだ。

水に触ってみるとかなりの冷水であることが判る。近いところに  
湧き水の源流があるせいなのだろう。

水面に映るアレな姿を見てため息を落とすも、いつまでもじっと  
しているわけにも行かないので、勢いよく水面に顔をつける。

「……ふぁー冷てえ」

いい感じにすつきりしてきた。

拭くものもないので、破れたジャージの上着で拭う。化繊は水の吸いが悪いがこの際仕方ない。

「さあて、まずは……」

自己診断。これはあまり考えたくないが、否定しても仕方ない。

この、明らかに日本人らしからぬスラブ系というか、ロシア人と言われて思い描く典型のような顔立ちで、銀髪オッドアイの痛い容姿の人物は俺ということらしい。

髪の毛の長さはあまり変わってない。耳が隠れるか隠れない程度のショートで、割とざんばりんと切つてある。

色はもう笑うしかないようなプラチナブロンド。さらさらの直毛である。アーモンド型の大きな目に高く通つた鼻梁。色白というか色素ねえだろというくらいの白い肌。血の色が透けて見えるので冷水で刺激受けた頬は今ピンク色だが。うわあ。

くじけるな俺。イタくてもくじけるな。がんばれ、やればできる俺はできる子だ。自己暗示をかけて再起動する。

目は左目が琥珀、右目が青。金目銀目という奴のようだ。瞬きを二回。水面に映る姿も瞬きを二回。睫長い。爪楊枝8本乗せがいけそうな感じである。

いやまあ、そこまでは人間の範疇だ。それはいい。よくはないけどいい。

背中感触が問題だ。この至つて普通に生えてる翼。なんだろうか、背中に腕でもついているかのような。天津飯の四妖拳、背中に腕が生えて手数が増える技だったか。そんなのを思い出す。

腕とは大分関節の付き方が違うが、何というか、当たり前前に普通に動かすことができる。手の平をパーにするような感覚で翼がばさーと開いたり。ぐつとすると折り畳めるとでも言えばいいのか。…いかん、ぐつとしすぎたら攣つた……うおお、痛え……びくびく

する羽根が微妙な気持ちを増幅する。

……どうしようか、大分人間辞めてしまっている気がする。この上さらに額に目でも出来たら、目も当てられない。というか人目に当たりたくない。幻想郷とでも立て札に書いて山に引き籠もるしかない。

落ち着こう、落ち着こう。深呼吸を数回して強引に落ち着く。

ともあれ、この羽根の長さは目一杯広げると片羽根で2メートルくらいか、そのくらいまでは広がる。両方広げれば、俺は体長4メートルの霊長類ということになる。いや、羽根生えてるから鳥類なのか？ 混ぜって霊鳥類？ やめよう。なんだかCOMPとか持っている人に使役されそうだ。コンゴトモヨロシクとか言う気はない。

そして、体を動かすのにまるきり違和感がなかったので気付かなかったのだが。……縮んでいる。洗濯機にかけられたニットのセーターのように縮んでいる。具体的には三分の二くらいに小さく。今の身長は120センチと言ったところだろうか。手足の長さも短く、手の平に至っては何というプニ具合。マシユマロと勝負が張れそうだった。……何とか子供にしか見えない。いや認めよう、今の俺は子供の体であると。認めざるを得ない。よし、自己診断はひとまずこれで……。

と、そこまでが俺の限界だった。

「ありえん……ありえん……」

頭をかかえてうずくまる。

夢だろ醒める醒める醒める。

「うあー……」

そんな自己診断にも思考停止という名の蓋をして、のろのろと立ち上がる。

今の俺を誰かが見れば、レイプ目というものを拝めたかもしれないかった。

「まあ、なんだ……状況、把握せんと……」

既にグロッキーです。

ギブアップボタンかナースコールがあれば連打していると思う。リングにタオル投げていいならセコンドに百本はタオル投げさせて。と言っても、いつまでこの状態でも仕方ないので。

大きく息を吸って吐く。頬に両手でビンタで気合を入れ。

「……痛うあ！」

思ったより力があつた。というか歯で口の中を切ってしまった。ひりひりするが、これはこれで気が紛れたので良しとする。

まずやる事は……

あたりを一通り探索した、あまり詳しいわけではないが、植生、また、木に付いている獣毛をチェック、危険な動物がいないかを確認する。一応熊避けに一定感覚で音を鳴らしている。

円を書くように池の周囲を軽く探索した後は、歩きやすそうな、木々の隙間の多い場所を縫って、放射状に探索をする。

迷わないように石でサインを残しながら木々の間を歩いていく。

『森歩きは急いではならない。落ち葉に隠れて穴があるなどはよくある事だ、大雑把な の事だ。注意しろよ』ふとまた、変人親父殿の台詞を思い出す。大雑把は自分だろうに、よく俺の事をそうけなしていたものだ。

……確かに、連絡手段もない今、怪我をしたら笑い話にもならない。ゆっくり着実に歩みを進める。 1時間も歩いた頃だろうか。唐突に森を抜けた。

「……おおう」

感嘆が出てきてしまった。  
森を抜けたと思ったら切り立った小高い崖になっていた。

クライマーでもないのに降りられる自信はないのだが、そこから見渡せる風景こそが有りがたいものだった。

街である。

距離は10キロメートル程だろうか。昼間というのに車も行き交い、それなりに活気のありそうな雰囲気である。中心部と言えそうな所にはビルが立ち並び、俺から見て左側は緩やかな湾となつて、海に面した公園や、倉庫街が広がっているようだった。

港湾都市と言えばいいのだろうか、ひとまず、おおまかな方角だけ確かめ、別ルートで近づいてみる事にする。

太陽が出てるうちなら、おおまかな方角だけは判る。

日が暮れる前には街に着きたいな、と疲れる足を持ち上げてまたゆっくり歩きはじめた。

「ついた……」

やっと森の切れ目というか、人里につながる道路が見えた。人家も見える。

どうやら山間の住宅街のような所に出たらしい。

途中で拾った手頃な木の枝を杖にして、ぐてーっとへたりこむ。空を見ると既に夕方。

木苺とか見かける度にちよこちよこ食っていたものの、流石に腹も減る。カロリーが足りない。

とはいえ、疲れているのは精神的な部分らしく、体は妙なことにあまり疲労を感じていなかったりする。3時間以上も道無き道を山



歩きすれば成人男性でも鍛えてない限り疲れは感じると思うのだが。そのあたりの感覚の違いというのがまた少々気持ち悪い。脳が体の動かし方を理解していないような気さえする。……考えるどつばにはまりそうなので、これも考えないことにするのだが。

「さて、とりあえず交番にで……も……？」

俺は自分の今の容姿を思い出して頭を抱えた。

「どこの世界に羽根生やした子供がいるんだよ……身分証明だって出来ねえし、前とは見た目も全く違うし……」

住所不明、戸籍不明、世界に類を見ない類の奇形を持った、保護者もいない子供である。

最悪の場合、闇社会で流通ルートとか、どこのバッドエンドですか。

悪い方向に考えるとキリがない。

ただ、この見た目で目立ちたくもないし、人目を忍んで家族に連絡、かね？

何しろ格好も普通に恥ずかしいのである。

羽根出す時に、上着は破れて、背中で結んでいる状態。

泥で汚れたジャージに、靴など当然ないので泥だらけの靴下。

背中から生えてる白い羽根。

どこの違法研究所から逃げ出してきたの？ とか言われそうだが、ライトノベルなら。

そんな事をつらつらと考えながら、意識して人家から距離をとって歩く。

時間としてはもう夕方を過ぎて、暗くなりかけている。

先ほどまでちらほらと帰宅する小学生が見えたのだが、そろそろ夕食と団欒の時間ということなのだろう。

実のところ。

「飯の臭いが漂ってきて腹が……」

今の俺の姿を見る人が見れば、ザ・シヨンボリというタイトルで写真撮ってくれるんじゃないだろうか。せつない。空腹時に美味そうな臭いせつない。マツチ売りの少女も確か、空腹なのに七面鳥を食べる家庭を夢見ているなんて描写があっただけ……判る、判るぞ少女よ。食いたいなあロースト七面鳥。中はジューシー、外はカリカリ。バジルとオリーブの香りがぷーん。

「うぐあ、とんでもないものを想像してしまった……腹減った……もう、性犯罪者のロリペド野郎でもいいから見た目に釣られて飯くれんだろつか……」

実際に襲ってきたらねじり潰すが。何をとは言わない。

自己主張を繰り返す胃袋を抑えて、気のない公園があったのでとりあえず水で腹を満たす。日本はすばらしい、水道水が飲み放題だ。涙が出そうになっているのはきつと気のせいだ。

とりあえず水分補給したせい、多少は余裕がでてきた。

一つ思った事があり、公園に設置されている自動販売機の下をよーく見る。普通なら懐中電灯で照らさないと見えないところだが、目をこらす。発見。そこらへんの枝で手繰り寄せる。

100円硬貨をゲットした。100円硬貨を2枚ゲットした。本当は届けないと遺失物横領になるのだが、非常時なので堪忍してもらおう。

自分自身でよく判っていない部分も多いのだが、どうもこの子供ボデイ、やたらスペックが高い。

夜目が利くわ、力強いわ、スタミナはあるわ、人の気配だの臭いにも敏感だったりする。

野生動物にでもなってしまった気分だが、羽根生えた妖怪とでも思えばおかしくないのかもしれない。妖怪……そんな事思いつく時点で段々俺の常識も壊れているようではあるが。

ともあれ、使えるものは使う。

何より、これで電話が使えるのが大きい。

というわけで早速公園の公衆電話で、硬貨投入。自宅の電話番号をプッシュプッシュ。

しかし、いまだにこの昔ながらの緑色公衆電話が残っているというのは懐かしさをそそる。

「携帯が出回ってからはめっきり見なくなったからなー」

今となればこの電話ボックスのべたべた貼られている、教育に非常に悪いピンクチラシも懐かしい。

プッシュし終わると、数秒の時間の後こう言われた。

「あなたがお掛けになった電話番号は、現在使われておりません。電話番号をお確かめになって、もう一度お掛け直し下さい」

心臓が早鐘を打つ。

「間違えた？」

再度硬貨を入れてゆっくり口で確認しながらプッシュ。

「あなたがお掛けになった電話番号は、現在使われておりません。電話番号をお確かめになって、もう一度お掛け直し下さい」

動悸が止まらない。なのに血の気が顔から引くのが判った。

三度、四度掛け直す。頭で番号が間違っていないか、思い出しなが

ら。

しかし、つながらない。

隣近所の……小学生の時から幼馴染、腐れ縁といってもいいかもしれない。奴のところに電話をかける。

今度もつながらなかつたらどうしようか、と少し指が震えた。

数秒待つと、電話のトルルルというコール音。

大きく息を吐いた。やがて、ガチャと音が響き相手が出る。

「はい、溝呂木です」

若い女性の声ではつきりそう言われた。

「溝呂木さん……ですか？　でなく……」

「はい、違いますよ？　お間違えでしたか？」

すいません間違えました、と言って切ったが、声はかすれて届かなかったかもしれない。

動悸が激しくなる。

冷や汗が止まらない。

ふと目が備え付けの電話帳に留まった。

探す。

覚えている限りの近所の新聞屋の名前、工務店の名前、工場の名前、魚屋の、小さい服屋の、行きつけの喫茶の、よく買い物に行くスポーツ洋品店の、腐れ縁の友人が大好きなゲームセンターの。

一致する店が存在しなかった。

それどころか、以前住んでいた、町の名前そのものが見当たらない。

判らない。何でどうしてこうなったのかが判らない。得体の知れない恐怖がこみ上げてくる。

唯一つ判るのは。

「……はは。やべえ……本格的にやべえ」

人との繋がり何一つない、本当の意味で孤独という事だった。

気が付いたら、最初目を覚ました時と同じ場所に帰って来ていた。顔はぐちゃぐちゃで涙だか汗だか鼻水だか判らない感じにグロクなってしまうようだった。

「……ああ……あー、はあ……」

なんだか、頭がぐらつく。池の水で顔をばしゃばしゃゆすいでとりあえずグロさを直す。

後ろを見れば俺と唯一つだけ、つながりのある布団。探索する時に枝に干しておいたものが目に止まる。

その月明かりに照らされた青白い布団が、なんともシユールで皮肉で滑稽に思われて。

「……あー、本格的に駄目だ。精神的に病んでそうだな俺……。ぷっ……くくツかっ……ぎやははは！」

笑いがこみ上げてくるなんて。

腹が痛くなるほど地面を転げまわって笑って、笑って、笑って。真っ白な羽根がドロドロになるまで転げまわって。

発作のように止まらない笑いの衝動が収まったのは、池にダイブして一通り泳ぎまわった後だった。

魚くんたち驚かせてごめん。おいちゃんも疲れてんのさ。

冷たい水の中でぶかぶか浮かびながら月を眺める。

眺めながら考える。

なんとなく、今まで気にしててもあえて考えなかった事を考える。

「俺の名前……なんだったけかなー……」

アルファベットで3文字、漢字で1文字だったと思った。

ただ、いくら思い返しても、墨汁をたらしてふきとったかのように曖昧になってしまう。

年齢も同様だった。

気付かないようにしていた。でもここまで考えるとどうしても気付いてしまう。

記憶の中のサバゲーマニアで破天荒で適当な親父も。

インドアでドラマに一喜一憂する妙にホットケーキが上手い母も。子供の頃からエアガンで遊んでいたらいつの間にかガンオタからアニオタへ変異していた隣の悪友も。

記憶はあるのに、思い出がない。顔も思い出せない。言葉は思い出せるのに。

水彩絵の具で描いた絵に水をぶちまけたかのようにぼかされている。

「……あー、うつだしのう」

「ごぼんと池に潜ってみる。沈む、沈む。あまり深いわけじゃないが、このまま沈めば底なし沼のように飲み込んでくれないだろうか。このボディだと水の中でも隅々まで見渡せる。

水底でザリガニが威嚇していた。指を目の前に出すと挟もうとしてくる。かわしてつつく。挟もうとする。かわしてつつく。かわしてつつく。逃げようとするので背中をキャッチ。捕まえた。

卵を大事そうに抱えている。声が出せるならしゃぎーでも言い出しそうな感じに怒っている。

なんだか力がいろいろ抜けた。

ザリガニは手放す。

水面に顔を出して息を吸い込む。

手のように自在に動かせるようになった羽根でばちゃばちゃと泳ぐ。バタ足の要領だ。バタ羽根？

水から上がって羽根の水を切る。絞った上着で体を拭う。

開き直った。

そもそもそんなに深く悩むのがとても苦手な方なのだ。多分。

落ち込むだけ落ち込んだら後は寝るだけ。

ひっかけておいた布団を草の上に敷き、虫除けの松葉を周囲に散らす。

明日は早くに起きてみよう。

そんな事を思いながら、すっかり馴れた翼にくるまって、上に布団を被る。

今は涼しいようだからいいけど、夏は暑苦しいかもしれない。そんな事を思いながら意識は薄れていった。

## 一話

流石に三回も同じ風景を起き抜けに見てしまうと、夢オチという現実逃避も成功しない。

そんな事を思いながら目覚めた朝だった。

思い切り伸びをしてコリをほぐす。空はまだ薄暗く、朝もやがかり、空気はひんやりとしていた。

気の早いキジがどこかでキエー、キエーと威勢のいい声をあげている。

昨日は混乱して騒いで泣いて寝て、何とか感情は落ち着いた。実は落ち着いてないけど、今は置いておき、今日やること、やるべきことを思い浮かべる。

「衣、食、住。それに情報か」

考えてみたら、昨日見た、港湾都市っぽい街の名前も確認していなかった。本当にせつぱつまつてたようだ。

今自分がどの場所に居るかぐらいは確認しないと。いや、ここは本当に日本なのか。日本に良く似たパラレルワールドとかの方が余程安心する。

ただ、とりあえずの方針は決まった。まずは

前方のブロックの壁に隠れて息を殺す。

周囲からは生い茂るツツジに隠れて、この小さい身は周囲からは完全に見えなくなっているはずだ。

出勤する父親と思わしき人達に、母親と思わしき人達。それに全体的に見かける子供は幼稚園か保育園、あるいは小学生が多い。年



齡が高くて中学生といったところか。

昨日確認した住宅街は、やはり思っていた通りの家が多かったよ  
うだ。

山に近く、新築が多く、道に沿って一戸一戸の土地が整備されて  
いた。

一つ一つの土地そのものはやたら広いというわけでもなく、恐ら  
く都市計画で整備された分譲地なのだろう。

こういう場所は若い夫婦が集まりやすく、当然子供も多くなる。  
さらに小さい子供は成長が早く、衣服などはほぼ使い捨てに近い状  
態になってしまうことも多い。

やがて、人通りが少なくなり、全く人が居なくなつたのを見計ら  
い。俺は目当てのものをかっさらって、そのまま走り去る。

50メートル先の森に向かい獲物を抱え、風になる。

森に飛び込み、先にマークしておいた安全地帯、大きな木の  
ウロがあり、隠れるのに調度良かった。ところまで行き着き、大き  
く息を吐いた。

「見られないでよかった……」

何せ今の自分の格好といたら、ヨレたジャージの下と、すりき  
れたソックス。上半身は上着というよりボロ。ついでに翼付き。こ  
んなのが後生大事に半透明袋を抱えて全力疾走してる姿とか見られ  
たら、なんというか……死ななくても大事なものが磨り減ってしま  
いそうだった。既にいろいろ遅い気もするが、せめて羞恥心だけは  
人並みにとっておきたかったのだ。

息を整え、さらった獲物を確認する。

そう、今日はどうやら燃えるゴミの日らしかった。

選んだ獲物はこの服がたっぷり詰まったゴミ袋。子供向けの服も  
それなりに詰まっていそうだった。

ほくほくと中身を確認し、使えそうなものを選び分けていく。

整理中、整理中、整理中。

うん……なかなかの物がゲットできた。

大人の大きさのワイシャツ、サイズが合わなくなって捨てることになったのだろう、あまり汚れもない。

普通のTシャツ3枚、子供にサイズが合わなくなったようだ。デザインが……某ネズミのキャラ物なのがちょっとアレだが。今の身体にぴったりなのが悔しい。

それに未使用のタオルが出てきたのには驚いた。貰い物で、余ってしまったのだろうが、なんとも勿体無いものだった。ともあれ、有り難く使わせてもらおうが。

嬉しかったのは運動靴が。少し大きいけど、十分履ける。裏にガムが付いてたが。今の親はこのくらいでも捨ててしまうのだな。ともあれ、履物は嬉しい。今まで靴下で外歩きだから、大分足に傷も出来てしまっていた。早速ガムを枝で削り落として履かせてもらおう。

……妙なのも大分出てきたというけど、使用済みと強く自己主張しているかのような、何かカペカペになっているセーラー服とか大人用スクール水着とか。蠟のついた麻縄とか。うんまあ、地面に埋めて証拠隠滅しておこう。というかこういうものはせめて紙袋で隠してからゴミに出したほうがいいと思うが……うん、ゴミ泥棒が言えることじゃないな。

少々げんなりとしつつも整理を終え、ひとまずこれで身支度を整えることができそうだ。一発目のゴミ袋でこれだけの当たりというのも相当に運が良かった。衣類が調達できるまで数回は同じことを繰り返すのを覚悟していたので幸先の良さに鼻歌が出てしまいそうになる。

最早、上着というよりボロか布切れと形容しなくてはならないジヤージを脱ぎ捨て、ワイシャツを羽織る。この大人サイズのワイシャツなら、翼をきっちり折り畳めば……

「……おうあってててててててっ」

羽根が攣ってしまった。悶えながら突発的に思いついたあの台詞が何とはなしに口から出てしまった。

「ぐうっ……白翼を持たぬものには判るまい……」

……痛みは紛らわせたものの、周囲に誰もいないというのに万が一を考えキョロキョロ見回し、一人赤面してしまった。いやホント、何言ってるんよ俺。

「うし、これでよし！」

身支度を整え……ズボンに類するものは無かったので元のヨレたジャージのままだが、せめてもと、くつついた埃だのゴミクスだのを綺麗に払って、準備は完了。ぶかぶかのワイシャツで翼を隠すことも何とかできているようだ。力入れてないとこもこしてくるので、それなりに大変だが、背に腹は代えられない。

思わず走り出しそうになってしまつ足を押さえながら、早足で街につながる道路に踏み出した。

向かう場所は高台から確認した総合デパート。行く戦場は地下一階食品売り場。

さあ、試食品の貯蔵は充分か？

「……はっ！」

何か、イタイ思考が混入した気がする。

身体に影響されて精神年齢が下がっているんだ。そうなんだ。絶対そうだ。理論武装は完璧だ。嘘だごめん。

頭をぶんぶん振って、とりとめのなくなった思考を追い出す。  
なんだかんだで、自己主張を繰り返す胃袋には逆らえず、途中から駆け足になってしまった。

いつの間にやら目的地に到着していた。

「……はらへった……はらへった……はらへった……」

ヨダレが口から溢れそうになってしまう。

なにやら凄い顔をしていたのかもしれない。

目の合ったサービスカウンターの人に、全力で視線を逸らされた。

ああ、まあいい。そんなものは些事だ。

なにしろこちらら、ココのところまともに食べてない。

地下へ続くエスカレーターを下り、試食品と思わしき肉を焼く香りが漂う。胃袋が際限なく自己主張を繰り返し、口の中にヨダレが充満する。

俺はごくりと溜まったヨダレを飲み込み、息を整え、『食欲』という名の人間三大欲の一つを全力で解き放った。

台風一過。

まさにその四字熟語がふさわしいかもしれない。

多くは語らない。ただ、一言だけ。

デパ地下の従業員さん、試食荒らしの事、本当にごめんなさい。

いずれ、金持ちになったら、この店でたっぷり散財しよう。

やっと満たされた腹を抱え、久しぶりに余裕のある気持ちで散策をする。

メインストリートというほどではないのだろうが、それなりに広い道に街路樹が植わり、ぼつぼつと散発的に小さな店が並ぶ。商店街があるとしたらその端のあたりなのだろう。腹ごなしにのんびり

散歩するにはぴったりの場所だった。

ただ、先ほどは食に夢中だったのもあって気にしなかったのだが、道行く人がちらちらとこちらを見てくる。と言っても、犬に散歩させているお爺さんとお婆さんくらいしか見かけなかったが。

やはり目立つのだろう……白人にしても真っ白な肌に銀髪でオツドアイ。小汚い格好。俺もそんなの見かけたら驚く。

ふと思いつて、人通りの多そうな方に向かう。少し前にちらつとメインストリートっぽい通りを見かけたのだ。そこは昼前というのにそれなりに人が歩いているようだった。

自分自身がどのくらい目立つかを把握しておこうかと思つての事だった。

「う……」

呻いてしまった。その通りを歩き始めて数分にも満たない時のことだ。

どうにも視線が刺さる刺さる。以前は全くこんな経験がなかったので、一目散に逃げたい衝動が心でもたげる。

とはいえ、変な格好の外人の子が歩いてる、程度の認識で済ませてくださいるらしく、一番緊張したお巡りさんの傍を通る時も、訝しげな顔をしたもののスルーしてくれた。

日本人の事なかれ主義に感謝。

ともあれ、やっと、というかようやくというか。現在地が判明した。

いや道路の案内標識に『海鳴駅2km』と書いてあるわけで。

よくよく見れば、道路沿いの標識にも市名が書いてあるわけで。

……俺は本当に今の今まで余裕を無くしていたらしい。というか自分の間抜け具合に膝が折れそうになった。頭を抱えて振り乱したくなった。この調子だと、何か他にもあほな事やってんじゃないのかと心配になった。

と、ともあれ、次のことを考えることにする。思い悩んでも仕方ない事はあるのだ。

衣食はなんとかなったので、次は住だ。

と言ってもこれはあまり心配していない。季節柄はどうも春と夏の合間らしく、野宿も難しくないシーズンだったからというのもある。長い目で見ればどうかと思うが当座は何とでもなるだろう。

ひたすら足で探そうかとも思ったが、ふっと思いついたこともあり、前に高台から一望した時に見えた銭湯に向かう。目当ては昨日拾ったなけなしの小銭で一つ風呂……といきたい所だが違う。ああ、コーヒー牛乳が恋しい。腰に手を当て、親父飲みたい。いや童心に帰ってイチゴ牛乳もなかなか……。

と、思考が逸れた。狙いはその高い煙突にある。昔ながらの銭湯の近所の子供なら一度や二度はよじ登って怒られたであろうあれだ。街の中から町並みを一望すれば、あるいは雨風のしのげそうな廃屋でも見つかるかもしれない。

結果から言えば、想像の斜め上のものが見つかった。

しかし、煙突に登って見回していたら、銭湯のおっさんに見つかってしまい、こっぴどく怒られたのは置いておく。

気を取り直し、見つけたお目当ての方に向かった。

方向としては元来た方向、俺が最初から居た山林の方向だ。

山と街の中間のような場所、通りから少し外れた側道に、周囲の田園風景とはまるで場違いなようなそうでないような、こんもりとした雑木林がでんと構えていた。

周囲は錆び錆びのフェンスに囲われ、とりあえずの境界を作っている。

入り口と思わしき鉄の門には、年代ものの鎖が張られ、封鎖されている。ところどころが割れ、雑草が生い茂るアスファルトの道が

その雑木林の中に続いていた。

「放置されて、ウン十年は経ってそうだな……こりゃ」

おじやましーすと小声で呟いて、1メートル少々の高さの門を飛び越える。

もはや山道と言ってもおかしくないようなボロボロの道を歩く事5分。ちよこちよこ曲がりながら、300メートルも道なりに歩いた頃だっただろうか。建物が見えてくる。

「……到着ーと。しかしこりゃまた……雰囲気のあることで」

思わず一人ごちてしまう。これは無理もないと思う。じやりじやり音を立てながら見て回る、靴を拾えて本当によかった。

塗装も落ち、虫食いのように穴が開いているトタン屋根。劣化してめくれ上がっている外装。ところどころで剥げ落ちて鉄筋しか残っていない場所すらある。

窓ガラスがかるうじて残っているのが奇跡のようなものか。床には落剥した破片だのなんだのとわからないものがビスケットのケースのように散らばっている。

最近流行りになっていいるらしい、廃墟巡りのコミュニティサイトに投稿したくなるような、立派な廃工場だった。

工場そのものの敷地も相当広く、かつては相当大口の仕事もしていたのだろう事は想像できる。今は工場の中身はがらんどろなので、どういった業種かは定かではないが、

ともあれ。

「あてが外れた……」

ちよつと落胆する。遠目で見た限りではそれなりにボロくも屋根、

壁が見えたので、雨風はしのげるとは思っていたのだが。間近に来て見ると劣化が酷い。

これは、雨でも降ってきたら、神社の軒下でも借りるか？ いや、考えてみたらこの子供ボデイなら泣き落として泊めてもらえるんじゃない？ 泣き落としとか正直ないな、却下。

などと、益体も無い事をつらつらと考えながらも、工場の探索を続ける。

と言ってもそう複雑な作りになっているわけでもなく、何のひねりもない箱型の建屋なのでそう見るところもないのだが。

外に出て、ぐるっと周ってみると、どうも最初に見えた一番大きい建屋だけではなく並行して二の字を描くように工場建屋が並んでいるようだった。

だが、さらにその奥にある小さな建物に目を惹かれる。

もしかしたら、工場の事務所あるいは休憩所として使われていたのかもしれない、工場の建屋より随分手のかかってそうな小屋がそっくり残されていた。

あてが外れたなんて言うてごめん。これは大当たりだったかもしれない。

入り口の戸はさすがに体を成さずに外に倒れこんでいるものの、おもむろに覗き込んでみれば、6畳ほどの土間……というかコンクリートが打ちっぱなしになっているだけだが、その中央に昔のダルマストーブが鎮座し、壁際には食器棚らしきものが置かれ、その近くに木製の椅子が無造作に積み重ねてある。

土間の奥には板張りの床になっている部分が4畳ほど。仮眠用のスペースのようだ。

うん。間違いなくこの工場の休憩所だったようだ。小さい作りのためか、屋根のトタンも幸い目立つ穴は開いていない。壁にいたっては、憩いの施設だけはと奮発したのか、鉄筋コンクリート作りの上に板を張っている。

ともあれ、これで住の問題もなんとか目処が立ちそうだった。不



法侵入には申し訳ないが目をつぶってもらおうとしよう。元々が放置されてる物件でもあることだし。

そして、ねぐらが決まれば、やるべき事はいくつも思い浮かぶ。

「まずは掃除……だなあー」

コンクリートの床に積もった凄まじい埃をうかつに散らしてしまい、むずむずする鼻を押さえて呟いた。

工場に掃除に使えるそうなもんでも落ちてるといいんだが……

いざとなれば、箒はそこらの枝でも束ねればいいし、雑巾は朝捨てたゴミの中から使えるそうにもない服を使えばいい。

昨日とは一転して上機嫌な自分に苦笑が出そうになる。いや、でた。

「くふふ」

思ったより気持ち悪い含み笑いだった。

どうやら俺はトム・ソーヤーかロビンソン・クルーソーの真似でもしていれば、こんな訳の判らない状況でも楽しめるらしい。

全くもって現金な事この上なかった。

### 三話

運良くねぐらを確保できてからは、掃除したり、痛んだ部分を修理したりで瞬く間に二日が過ぎた。

それなりに状態が良かったと言っても、元が廃屋なものには違いなので、手がかかるとかかかること。それなりにお金があればきちり修理してやりたいのだが、今は廃工場に転がっている雑多なものを組み合わせてなんとかやりくりしている。

例えば、錆びて穴が空きはじめている天井には工場の建屋で落っこちていた丁度いいトタンの破片を上から張り合わせている。接着剤はあちこちで使われていた樹脂を煮溶かしたものだ。

窓も一応あるにはあるが、窓ガラスが全損の状態だったので、これも工場内のまだ無事だった窓を移植。サイズが合わなかったので打ち付けてしまった。枠が木枠だと加工が楽でいい。

床板はかなり朽ちていたので、全て剥がし、コンクリートの地肌がむき出しになっている。今は拾ってきたダンボールを数枚敷いているが、いずれ無事そうな板材でも見つけたら張るのもいいかもしれない。

工場でもかなりの掘り出しものが見つかった。工具箱がそのまま見つかり、開けてみれば、酷い錆びの生えた工具もあったものの、それなりに使えるレベルのものもあった。例えば今、頑張つて研磨している小刀もその一つだ。幸い、砥石も普通に見つかったのでこうして研いでいるのだが、ここまで錆び錆びだったものを実用レベルまでするというのもなかなか手間の要ることではある。

一時間ほども費やし、それなりに研がれた小刀を懐に入れ、食料調達に行くことにした。

近場のデパートはこのところ試食品を散々荒らしてしまったので、さすがに行きにくい。というかそろそろ目をつけられているよなのだ。と言ってもあからさまに怪しい子供なので、目をつけら

れないはずもないとは思うが。そんなわけで今日は野で食料調達なのだ。

オラオラオラオラオラオラオラ！

ラッシュを叩き込む。その陽光照り返す水面に向かい、ひたすら、殴る、殴る、殴る。

君が！ 泣くまで！ 殴るのを止めない！

そのくらいハイテンションで暴れるのが効率がいいのだ。この漁は。誰かがこの姿を見ればなんて考えない。考えないったら考えない。

川の上流からそうやって暴れながら下流にゆっくり移動していけば、魚が追い立てられ、前もって石でせき止められているので、唯一の逃げ場所には網。

追い立て漁と言われるやり方だ。ちなみに網はなけなしの拾った硬貨で買ったダイーの洗濯ネットである。洗濯機の中で盛大に回されるのが前提の作りなので丈夫さは信用がおけるのだ。

追い込み終わって、網を回収してみるとなかなかの成果だった。知識だけで、やってみるのは初めてだったが上手くいったようだ。

「んー、ヤマメ、ハヤ……おお、こりゃカジカか。ニジマス多いな、放流でもした後だったか？」

あの最初に見た池の上流がこんなにいい感じに漁場になっていたというのは有り難いと同時に思わぬ誤算でもあった。

こういったいい感じの漁場はすでに漁協で管理されていて、今やっているようなことは露骨に漁場荒らしなのである。地元の実業関係者さん、ごめんなさい。……うんまあ、見つかったら逃げるか。遊漁料払えないし。

とりあえず、まだ育っていない魚は放して、それなりの大きさの魚だけ頂くとしよう。

魚は内蔵から傷むので、ワタとエラをその場で抜いて、熊笹でくるむ。

ついでに、川辺に生えているクレソンと行きがけに目についたマダケの筍を摘んで帰る。……コゴミも発見。いやはやい時期だ。む……あれは、ウドか。ゲットゲット。

ここでも洗濯ネット大活躍である。袋代わりに丁度いいのだ。食材が蒸れないし。

一通り山の幸を収穫し、ほくほくと帰宅したのだが。

「塩買えばよかった……」

調味料がないことを思い出し、地に手をつけてうなだれていた。がつくりである。

あの漁法を思い出したとはいえ、なんで洗濯ネット……いや、これはこれで今日は大活躍だったんだが……

「うう……俺の馬鹿……」

外を見れば、真っ赤に空が焼けていた。

見事なまでの夕焼けを背景に、カラスがカアカアと鳴いている。

それがまた馬鹿にされているようで、石を投げてやったが。今の境遇にはシャクに触る歌も思い出してしまったし。

「夕焼け小焼けでまたあしたー、まーたあーしーたーってか、ああ全く」

おいしい おやつに ほかほかごはんが待ってたらそりゃ帰りたいわなあ。

口に出したら何か負けるような気がして、考えるだけにとどめたとりあえず、味無しでも腹ごしらえをしよう、街に出ることにしよう。夜になればこの浮浪児姿も目立たないだろうし。

ぼりぼりと頭をかいて一つため息をつく。気を取り直して、家の外に作った即席のかまどに火を起こすことにした。

「おう、また見つけ」

「今晚はそれに専念しているせいか、以前よりはるかに発見率が高い。」

前傾姿勢をとり、目を爛々とさせ、小さな小さな輝きさえも見逃さない。

まさにハンターの心持ちである。

やってる事が小銭拾いでなければ、それなりにサマになっていたかもしれない。

若干人としての悲しみを感じつつも小銭の輝きは見逃さない。

しかし、この視線の低さと高スペック視力があつてのものかもしれないが、探してみると小銭つてのはかなり落ちてるものではある。絶対に人には見られたくないの、夜を待って出陣すること3時間。総計すると1000円程も見つかってしまった。すごい。

これだけ風漬しに探すとしばらくこの一帯は小銭はないだろうけど。

拾得してばかりでは何なので、ゴミ拾いも兼ねている。美化運動である。ホームレスのおっさんの行動と変わらない気もするが、ホームレスという単語で精神的に落ち込みそうな気がしたので考えない事にする。

「ぐーむ……」

背中を伸ばす。首を回す。上半身をひねってみる。背中をまくつて翼を伸ばしてみる。どうもこういう時にコキコキ鳴ってくれないと柔軟したという気分にならないのはまだ以前の感覚を引きずっているせいかな。ともあれ、前傾でいるのもいい加減疲れたので背筋を伸ばす。

小さな住宅地によくある公園、街灯がぼんやりとベンチを照らしている。公園の据え付け時計を見ればすでに12時。よい子はとくに寝る時間だった。とても悪い子なので寝ないけど。うん、自分で悪い子とか考えて少し気持ち悪くなった。水道でうがい。水分補給、ついでに顔を洗っておく。

意識がしゃっきりしたところで、街灯の下で今晚の拾得物の確認をする。

拾うのは小銭だけではなく、何かの役に立ちそうなものは拾っている。カッターだの、ボールペンだの、安全ピンだの、空のペットボトルだの。何かに使えそうなものは片っ端といってもいいかもしれない。

ついでなので、ペットボトルをよく水洗いしてから、水を入れて持ち帰る。水場が近くにないので少々手間だが仕方ない。それに近くにないと言っても歩いて20分の距離なのだ。中国奥深くの、毎朝水くみに崖沿いで何キロも歩くような環境に比べればずっとマシというものだ。比べる対象が間違っている気もするが。

しかし、この後どうするか……

今日、どうするかではない。

少ないながらも小銭を得ることができたので、あと同じことを二、三回繰り返せば1000円ショップなどを利用しながら、なんとか生きることはできそうだ。ただし、その先。

まるでビジョンが見えてこない。

いつその事、この反則的な身体能力でオリンピックピックでも目指すか？ いや、翼とか生えてたら問題になりすぎるだろう。

「あるいは切つちまうか？」

一瞬そんな気になったものの、さすがにそれは気が早すぎるように思える。というか医者行ったら絶対サンプリングとられる。こんな稀少すぎる例はないだろう。下手すれば、いつの間にか行方不明とかドラマによくある展開なんてのも……

いや、それはないと思ったものの、大小実験データの作成には「ご協力」させられそうではある。……えーと、うん。先延ばしかもしれないが、やはり人にこれを知られるのはアウトだな。

はー、とため息を一つ落とし、ねぐらに戻ることにした。

人の気配を気にしながら、夜中の散歩。妖怪にでもなった気分だ。

「お化けにや学校も、試験も何にもないってかー」

ついでに仕事もない。さらには多分戸籍もない。いずれは妖怪らしく、人の驚かせ方も勉強しておいたほうがいいのかもわからない。幸い、あの廃工場はいかにも何か出てきそうでもあるし。

そんなとめどもないことを考えつつ家路につく。

明日あたりは、必需品の仕入れと図書館でも探しておくでしょう。借りることはできないだろうけど、読むのは自由なはずだ。考えてみたら、ここが海鳴市であるという事しか知らないし。というか情報収集必要だつて、思ってたなかったか俺？ 思ってたな。

「……駄目だなあ俺は」

頭をぼりぼり搔いて嘆息。そろそろ痒い。ねぐらを片付けている間、水浴びもしなかったから無理もない事だったが。風呂に入りたい。暖かい風呂に。……いずれドラム管風呂でも作ってやると胸に決意した。

「……なんだよこりゃあ」

俺は頭を抱えて呻いた。怪しまれようが構わないよもう。あうあうあー。

当座の必需品の買い出しを終えて、寄ったのは図書館。とりあえず手に取ったのは新聞。

人気の少ない席に陣取り、とりあえず読み始めた時だった。のつけから衝撃がきた。

1998年5月22日（金）という日付である。

こめかみはずきずきする。確かに俺は『俺』であった時の記憶があやふやだが少なくとも21世紀には入っていたはずだ。ノストラダムスの予言騒ぎで世紀末は騒がれ、21世紀はテロが横行し、冷戦とは違った意味で物騒な時代に入っていたはず。

過去？ 時間遡航？

「ありえん……ありえん……」

何が起きてもおかしくないとはいっていたが、リアル時をかける少女になっちまうとかどんな罰ゲームなんだよ。

とはいえ、呻いていたが、逆に納得できてしまう部分もあった。

それは100円ショップの品物が妙にこなれていないというか、まるで新しくできた業種のような新鮮さが店に漂っていたこととか、街行く人たちのファッションだったりとか。

道を走る車の姿だったりとか。

微妙な違和感を感じ取っていたのだ。人との接触を避けていたとしても。

しかし、まあ、なんだ。



もうこの際深く考えるのはやめた方がいいのかもしれない。

時間遡航は不可能とか言われてなかったか？ とか、体が全く違うってことは脳も当然違はずなのに、なぜ記憶を留めておけるのか？ とか。

今度こそ、今度こそ何が起きてても驚かない。驚かないったら驚かないさ。

は・は・は、と妙に乾いた笑いが自分の口から漏れていた。

「はー……」

頭を抱えたままうつむいて大きなため息を一つ。

動揺が思ったより早く収まった事を少し訝しく思ったが、もう考えるのも面倒臭くなってきていた。

ぱらぱらと新聞をめくり読み始める。

おおむね、記憶と違いはない……というか、何年の何月に何が起きたとか、よつぼどの事でもない限り正確に覚えてない。競馬で一当てして大もうけとか、どこかの悪役の二番煎じも思いついたが、それこそスポーツ年鑑でもなければ、思い出せるものではない。上手くはいかないもんだ。

「むづ……」

新聞を元に戻し、気分を戻すためにトイレに。

すれ違ったおっさんがぎょっとしていた。失礼な。一応今日は人前に出るので、午前中に服も体も洗ったというのに。臭いか？ 臭うのか？

自分で嗅いでみるが判らない。鏡の前に行っただと理由に気づいたが。

「……………ああ、見た目がヤヴァいの忘れてた」

「このところ人を避けていたというのもあるし、気にしてる余裕もなかったというのもあるが。」

「そういえば、結構な厨二容姿だった。」

「んん？」

鏡を見ていたら、ふと違和感に気付く。

頭頂部から右斜め前にひよろつと触覚のような髪が……

「おお、これが噂に聞くアホ毛というやつか」

鏡みたいに細かく映すものでないと気付かなかった。わしわしと頭をかき混ぜてもひよろつと出てくる。しかし、これはアホい。目をきつくして睨み付けてみる。しかしアホい。俺はごくりと唾を飲み込んだ。

「すごいな、アホ毛の性能。何というシリアスブレイカー。どんな情景描写でさえ、最後に『アホ毛が静かに揺れた』を加えればギャグ空間にしかないぞ」

そんな馬鹿な事をぶつぶつ呟いていたら随分と気分転換にはなった。

我ながらアホなことである。

図書館で、食用になるキノコのスケッチや、この辺一帯の地理などをメモっていたら、閉館の時間になってしまった。

途中で司書さんがこちらに気付いたらしく、何か話しかけようと

してくる。逃げ続けたが。

捕まったら、学校のフィールドワークの一環です。とても言うっておこう。欧米人に見える姿だし、勝手に深読みしてくれるだろう。きつと。

まずまず、有意義だった。

ねぐらに戻ってから整理しないといけないが、多分この答えで合ってると思う。

「この世界は『俺』から見てパラレルワールド」

海鳴市という単語に覚えがないのも当然。地図を見たら日本の形が微妙に違っていた。

都道府県の名前も一部聞き慣れないものがある。なんだよ犬上県って。

歴史もちらっと見た程度では判らないものの、何らかに違いは出ているのだろう。

何より、すんと、面白いように腑に落ちた。

ああ、そりゃ俺の家族も友達も街すらも存在しないのも説明つくわ。

「いや、しかし……波瀾万丈すぎる」

すでにお腹いっぱいです。

小説や漫画の異世界召還された連中はよくこんな状況で頑張れるな。そろそろ俺はへこたれそうだぞ？　なんかもう、リスク考えてもそこらの病院に入って、記憶が変なんですーとか言って保護してもらおっか？　なんて思いついてしまっくらい。そんな愉快な事しないけどね。

「後は、なんでこんな体なのか……だが、それこそ訳判らんよなあ」

もうそういうもんだと思うしかない。

ともあれ、しばらくは細々と暮らしながら図書館通いの暮らしが続くことになりそうだ。

いずれはまともに戸籍持って、かつてのように小さいながら飯屋でも構えて、人並みに暮らせるようになれば……いいなあ。

夕暮れに染まった道を歩きながら、ちよつとばかり黄昏れた。

## 四話

5月も末に入り、そろそろ気温も高くなりはじめ、同時に雨雲が  
かかりやすくなった。

流石に何度も何度も落ちてきている金銭を頼りにするわけにもいかな  
いので、最近では、海沿いの防波堤や磯で釣り客向けに飲み物や弁  
当、釣り餌を売っている。

朝釣りをする人は多いので、特にかきいれ時でもある。と言つて  
も自分で弁当など作って販売するには許可もいるし何より責任もと  
れない。早朝からやっている弁当屋さんの弁当を買ってそれを少し  
高く売るというだけだ。

と言つても、釣り人そのものの数が多いわけではなく、近くに釣  
り具店がないのも食べていけるほど売れないからだろう。……そん  
なスキマ産業的な商いだが、平均して一日500円前後の収益が出  
るので、有り難い限りではある。もっとも、見た目でちょっと引か  
れて最初は買って貰えなかったが。今は名物と化している。アメリ  
カでは子供のレモネード販売が社会勉強になっているんだよーとか  
言っておいたから、そんな小遣い稼ぎ兼社会勉強と思われる可  
能性は高いが。

実のところ他にも試したこととして、よく聞くアルミや鉄材の収  
集を試してみたことがある。ホームレスの人たちが空き缶を現金に換  
えているあれだ。幸いねぐらとなつている廃工場には分解すればい  
くらでもリサイクル可能な資源がごろごろしている。

ただ、やはり買い取って貰えなかった。それどころか、親は何し  
てやがるんでえと怒られた。考えてみたら当然だったかもしれない。  
社会実習とでも言っておいた方がよかつたか……。戦後すぐの時代  
だったら子供でも鉄くず買って貰えたのだからうけどな、残念だった。  
さらにもう少し暖かくなれば、砂浜でバーベキューなどする人が  
増えるだろうから、炭やガスボンベ、足りなくなりがちな調味料な

どの売り歩きもいいかもしれない。

売り歩きの姿を外から見たらかなりシユールだろうけどそれはもう気にしないことにした。気にしてたら生きていけない。

そんな生臭い事をつらつら考えつつコンビニに向かう。今日は弁当はもとより、釣り餌やストックしていた釣り道具も残らず売れたので、収益が大きかったのだ。たまにの贅沢として甘いものを買うというのもいいだろうと思うのだ。……いや、素直に言えば甘いものが異様に美味い。舌も子供化を起こしているのかもしれないが。きまぐれにプリンを食べた時どう表現してよいか迷ってしまうくらい美味かった。不思議なものだ。

一度、ねぐらに戻り、売り歩き用のクーラーボックス、まあ発砲スチロール箱に布を張っただけなんだが、を置いて、近場のコンビニに向かう。

店員に胡散臭げな顔をされながらも買う。ちょっとだけお高い、某なめらかプリンである。先ほどから翼がうずいて仕方がない。感情に反応するとか犬の尻尾か？ そりゃ店員に胡散臭げに見られるというものだ。

どうせなら見晴らしの良い場所で楽しもうと、地図を思い出して、ちよつとした高台の八束神社に向かう途中の事だった。

ネズミ嫌いの猫型ロボットの出てくる国民的アニメ、あれに出できそうな空き地が通り道にある。そりゃもうザ・空き地！ というくらいに見事な空き地なのだ。工事に入る前に企業が潰れたりでもしたのか、古い建材がちまちま積まれている。定番である土管も見事二段重ねになっている。それがどうなるかというと、近所の子供にとつて、十分すぎる遊び場になってしまうのだろう事は想像に難くない。

積みまれている建材とか、少し危ないだろうと思って、以前通った

時に見てみたのだが、誰かが既に対処したようで、崩れないように固めてあったりしてあって、無用の心配だった。誰がやったかは知らないが、親御さんの誰かかもしれない。子供の事を見ていないようでもよく見ているものだ。

ちなみに、末日である今日は日曜日で、そんな空き地で今日も元気に子供が遊んでいた。微笑ましくなるものの、遊ぶというには少し騒ぎが大きすぎないか？　と思う。

ちらつと覗き込んでみると、どうも空き地の領有権を巡っての小競り合いの最中だった。小競り合いというか喧嘩ごつこというか。一対一でお互いの陣営が人を出して喧嘩してるようだ。……ああ、そういうえば今の時代ってK1全盛期だったか。ピーター・アーツ、マイク・ベルナルド、アンディ・フグ、アーネスト・ホースト、サム・グレコ。綺羅星のような華のある格闘家が集まっていた時代だ。こちらの世界でも存在するのはスポーツ新聞で確認した。

「おお、ツバサ君だ。ヘルプ頼む！」

ぼーっと思いつきにふけていたら、お声がかかってしまった。見れば、先日ちよっかいをかけてきた二人組の子供に見つかってしまったらしい。めざとい。

確か背の高くてひよろつとしたのが安田で、背は小さいが元気にちよろちよろしてるのが南部だったか。何とはなしに1600メートル走でも走らせるとよさげな二人だ。

この二人に会ったのは二日前。場所は同じくこの空き地で「おお、ド　えもんそのままだ」と土管に乗って悦に入っていた時だった。この二人はどうも同年代のリーダー的な存在のようで、自分たちの遊び場である場所に得体のしれない見た目外人の子供が居ることで警戒したのだろう。第一声は「おまえ誰だよ？」だった。多分に攻撃的なものである。

見た目の年は同じくらい。となると、小学校三年生くらいか。ランドセルを背負っているところを見ると学校の帰りに寄ったようだ。

「ちよいちよいと子供扱いしていると何かスイッチが入ったのか」「うおーっ」とかチビの方が突進してきたので、がっぷり上手を取ってがぶり寄り、寄り倒し。いや、頭を打たないように手を挟んでる。残った方が慌ててしまつて行司の真似事をしてくれなかったのが残念だったが。その後も童心に帰つてしばらく遊んでいたのだ。

思えば、人恋しかったのかもしれない。名前を聞かれた時も、うやむやに誤魔化してさらつと居なくなることもできたのだが……。たとえば、思いつきの名前でも呼んでほしいと思つてしまったのは。

思いついたのは白井ツバサという名前だ。三秒で考えた。ネーミングセンスについては自分でも有り得ないレベルだと思っている。今更だ。……まあ、親が某サッカー少年の漫画が好きだったとも言えはいいか。

しかし何とも血気盛んと言おうか……。この安田と南部のトゥットプは自分たちの遊び仲間を率いて、上級生と遊び場の権利を賭けて対決しているようだった。聞いてみると相手は二年歳上らしい。体格差もあつてなかなか勝てないようだ。聞けば、すでに10戦連敗。下級生グループは意地と負けん気でやつてるようなものらしい。……上級生はそれ遊びとしか思つてないだろ。

ともあれ、ここは混ざつて大暴れするのも大人げないので、盛大に大人げない振る舞いをするに似た。大体ヘルプを請われたからには答えねば男が廃るといふものだ。身体は……。いや何も思つまない。

「先生頼みますぜっ！」

安田、お前はどこのチンピラだ。犯人はヤスとダイイングメッセージを意味もなく残すぞ。



大暴れと言っても、二人抜けばいいようだ。どうも五人制の勝ち抜きのように、今のところ二敗一勝のようだし。ルールを考えたりは空手漫画とかの影響も受けてそうだな。先鋒次鋒とか言ってる。一人目は奥衿と袖を掴んできた。あれ？ 柔道？ おお、綺麗に大外刈りをかけられた。しかも、怪我させないようにこちらを浮かせてる。本当に五年生かこいつ。と言っても、技をかけられてる最中にそんな長考がいくらくらいに余裕でもあるんだが。

相手の軸足に、よろつと右足を絡めてやるとバランスを崩して倒れる。マウントポジションになってから頬をつまんで引き延ばす。上上下下左右左右とコマミコマンドを引つ張った頬に叩き込んでいるうちに10カウントが終了。予想外の行動にやられてる方も啞然としていたようだ。勝利。

「ういなー」

気が抜けそうな勝ちどきなのは勘弁してほしい。真面目にやっけたまるか。

二人目の相手もまあ、適当に遊んで勝った。というか体格も小さいのにこの身体はスペックが高すぎる。実は吸血鬼とかいうオチだったりしないよな、と意味もなく犬歯を触ってチェックしてしまったり。

と、そんな感じで自分の身体の不思議を思っている俺を置いて、安田と南部が勝ち誇っているが、どうも雲行きはすんなりと行かないようだ。

俺が二人目に相手したのは、なかなか負けず嫌いだったようで、しかも下級生になどとは……というプライドの高い子だったらしい。こちらも助っ人を呼ばせてもらってもう一戦だ。文句言つなとか言っている。

「いや、俺はそろそろ行こ」

「乗った！ こっちにやツバサがついてるかな。簡単にや負けないぜ。今までの借りをまとめて返してやらあ」

「……うかと」

南部くんや、それは虎の威を借るようで男の子としてはどうかと思っぜ？

その台詞を聞いてニヤツとした上級生は取り巻いてる子にその助っ人さん呼びに行かせた。「クラスメイトの一大事だと言って引っ張ってこい」とか言ってるが、これってそんな一大事だったのか？

うんまあ、小学生の思考回路はさすがによくわからん。

待つてる間、暇なのでダシていたら、さすが小学三年生、安田と南部も含めて持ってきてきたサッカーボールで遊びはじめてしまった。先ほどの柔道やってたっぽい五年生の子もそうだったが、運動神経の多いのが多いようだ。輪になってリフティングをしながらパス回しをしているようなのだが、上手い上手い。単純にサッカー勝負でもすれば上級生に勝てたんじゃないか？ と思ってしまう。

そんな様子をぼーっと見ながら、いい天気だなーと土管の上でへたれていたら、どうやらその上級生の助っ人が到着したらしい。着いて、様子を一別するなりとても帰りたそうにしていたが。

「……で、どんな一大事だった？」

無表情だ。子供ながらにして精悍さを感じさせる顔というのは珍しいかもしれない。そんな顔でぼそっと呼び出した上級生に聞いていた。

なにやら、その上級生が拝んで頼むよーとか言っているが、まあうん、呼び出された方としてはいい気分ではないわな。「話にならん。帰る」とか言っている。

何となくその無愛想な子に軽く同情していたのだが。こちらも早くプリンにありつきたいので、帰るなら帰るでよしなのだが。

「おー！ ネクラ女の兄貴なんて敵じゃねえよ！ とつとと帰れ帰れ」

空気の読めない事に定評のある南部がとても燃えやすい燃料を投下した。

先の一言と共に空気が軽く凍り付いた事にも気付いていない。パネエ。

「……そのネクラ女とは美由希の事を言ってるのか？」

「おう。あんたあの高町美由希の兄貴だろ？」

同じクラスなんだぜ！ とか言ってるが、駄目だこいつ。早く何とかしないと。空気の読み方と人様の家族を悪く言っちゃいけませんんと言っておいた方がいいのか。

なんだかその無愛想な、ええと、美由希ちゃんの兄？ が、ゆらありと向き直る。

「気が変わった。受けよう」

「よ、よっしゃ、頼むぜ先生！」

安田、声が震えているぞ。そして押し出すな。

なんと言うか、うん。勝っても負けても南部には謝らせるとしよう。子供のうちだからこそ、直しておかないと……。放置しておくところからも舌禍を引き起こしそうだ。

俺が押し出されると、訝しげな顔をされた。視線は南部に注がれている。……。ああ、南部が相手だと思ってたんだな。

ちよいちよいと肩を叩き、声をかけるとする。

「あー、その。気持ちは判るんだけど、相手は俺なんだ。すまない」  
「……そうか」

どうもげんなりしたようだ。

ああ、言ってみればお互い巻き込まれたもの同士だな。

「高町恭也だ。……上級生を二人とも下したと聞いている。何か武道でもやっているのかもしれないが、こちらも古武術を少々嗜む身だ。遠慮なく来るといい」

この人はこの人で本当に小学五年なのだろうか？ いや身長や体格はそれっぽいが、口調とか言動が老けすぎだろう。嗜むとか同世代が言われても判らないんじゃないか？

というか歩いてても体がまったくぶれていない。武術とか程遠い俺でも判るくらいにぶれていない。こう言うのを隙がないと言えはいいのだろうか。

「一応、白井ツバサだ。よ、よろしく?」

名乗りとか知らないのでとりあえず片手をあげてよろしくしてみる。なんだかさらにやる気をそいでしまったようだが、仕方ない。

こちらら、格闘技なんて学校の授業以外でやったこともないのだ。相撲や総合格闘技など見るのは好きだったが。

結果からすると負けた。かなりあっさりと。……だがなんだろうこれは。

目の前で高町恭也が頭を下げている。

「知らなかったとはいえ、すまん」

とか言ってる。微妙に顔が赤くなっているが。低学年に頭下げ羞恥心か？

いや、本当に頭下げられる覚えがないんだが。なんだろう。んー、確か流れは……

開始から投げ技か腕を取りにきたので避けてたら、何か蹴りだの何だのと飛んできて、それでも頑張つて避けてたら、ニヤアとか楽しそうに笑ってあばばば（形容不可）な事になってきたので、あれだ、足を払いにいったのだが、股ぐらを掬われてそのまま投げられた？

「ああいや、謝られる理由もないんだけど、さっきの技つて掬投げ？」

「よく知ってるな、小柄な相手には有効なんだ」

ちなみに、古流の場合後ろから鞆丸を握り潰して硬直させて投げられるようにも作られている。とか聞かされた時には股間がひゅんとなった。今はないけど。

「つか、なんだ？ 高町、さんの異様な強さは。武術嗜んだってレベルじゃないだろ？」

「幼い頃からやってたからな。立てるか？」

そりゃ立てるが、いや驚いた。この世界には武術の達人の小学五年がいるらしい。一応今のスペック、蠅を箸で捕まえて宮本武蔵ごっこか出来るんだが、それでも目が追いつかないスピードって何？ いや何というか……

「世の中広いもんだな……」

独白はため息と共に吐き出された。

とりあえずは、このすげーすげーと騒ぐ南部に一言物申しておくか。謝っておくようにと。

その後は何だか、先の立ち会いで毒を抜かれたらしく、上級生グループが時間を置いて場所を使うということで落ち着いた。てか、エアガンを皆持っていたところを見ると、ここを射撃場とするつもりだったらしい。丸く収まったところで、そろそろ行くでしょう。ちよっと関わったつもりが、一時間ほども過ぎていたようだった。…あ、プリンがぬるまってそうだ。

おざなりにじゃーなーと声をかけて、神社へ向かうことにしよう。

「……お？」

「む？」

「高町、さんもこつちに用事か？」

……言いづらいなら名前でもらっていい、と言われた。なら俺の事もツバサと呼んでおいてくれと言い、改めて名前でもらわせてもらう。小学生に敬語つけて呼ぶのは、こつ……何ともむずむずするものがあったのだ。見た目年上とはいえ。

その恭也だが、どうもこれから鍛錬だと言うときに呼び出されたりしく、奇しくも行き先が同じだった。八束神社である。しかし、日曜の朝方から何やってるんだ、とも言いたいような。余り覚えちゃいないが『俺』がこのくらいの時は日曜に限らず遊び回っていたような……口を出すべき筋合いでもないけど。

ほつぽつと時折会話をしながら、のんびり歩く。

どうもこの恭也という奴は沈黙が嫌いではないタイプのようだ。無口というのともちよつと違うようだが、無愛想……というのも最初の印象だけだったな。判りにくいだけで。同道していると少しは判る。車が近づいてきたらさりげに車線に近い方に動いているし、

向かいから自転車などが来れば、自分が半歩先に進んで避けさせる。年下の引率は慣れているという風情でもある。

何にせよ、そう子供子供した精神なわけでもないようで、どんな生き方したらこうなるのかは判らないが、付き合いやすくはあった。ただ、趣味で最近盆栽に手を出していると聞いた時はリアクションに困ったが。ある程度成熟というよりこいつ中身、老成してないか？

時期が時期なので、道ばたのハマナスの紅色を愛で、アジサイもぼちぼち見頃ですなあなどと話しながら歩く。

『はまなすの丘を後にし旅つづく』の句を思い出して、旅情そそられるものでもあるな、などと話し合い……

いかん、つられた。老人の寄り合いのような会話になってしまった。小学生にして何という爺むささか。しかも片方は明らかに日本人離れした外見。シニールにも程がある。

「用事は終わった、恭ちゃん？ ……えあ、だ、誰？」

神社の階段を登り終えると広い境内が見え、女の子の声が降ってきた。

ああ、しょうもない用事だったよ、と言いながら女の子に近づくと恭也。ああ、どうやらこの子が妹の、みゆきだっけ？ 南部が言っていたネクラ子ちゃんか。

ちよつと失礼な事を考えながら見ていると、……別にネクラという風にも思えないが、人見知りの傾向はあるようだ。恭也の後ろにそそくさと隠れてしまった。頭の後ろでまとめている三つ編みがひよこひよこ恭也の陰から出ている。何ともその小動物めいた動きにほんわかしてくる。恭也はいつもの事らしく一つ苦笑してから言った。

「先の話にも出てきたが、妹の美由希だ。そういえば……聞いてい

なかったが同年代くらいじゃないか？」

年齢10歳くらいに見えるので、あなたが間違いない。肯定すると、あごに指を当ててしばし考え、妹と仲良くしてやって欲しい。と言い、少し離れてアップを始めた。これはあれか、後は若いものでごゆっくり。という奴なのだろうか？

高町美由希はおろおろしている。突然の事態に混乱しているようだ。

俺は恭也の計らいに感謝をささげつつ、初々しくうろたえている美由希の膝の後ろと頭の後ろに手を伸ばし抱きかかえ。片手で挨拶をする。

「じゃあ恭也、また後日」

「人の妹をナチュラルにさらうな」

「……ちっ」

そこはまあ、冗談だったので普通におろすが。ちよっとお持ち帰りしたいと思ったのは秘密だ。

しかしなんだろうか、ロリペドからは遠く離れた趣味だったはずなのだが、子供子供した仕草がこれほど可愛く見えるとは……。いや、思えば空き地の子供の時もそうだったか。むっ……保護欲求というものだろうか？

……ああ、投げっぱなしの冗談の後に放置してしまった。なんだからやるせなさそうにこちらを見ている。視線が痛かった。

とりあえず、定型通りに何のひねりもなく自己紹介と挨拶を交わした。他愛もない話を振ってみたりしているとさすがに緊張も解けてきたのか、普通に話してくれるようになったが。

そういえばいつ知り合ったのかと聞かれて、つい先程だよと言った時は信じられないようなものを見る目で見られた。さらにはこの一言である。



「…あ…あの、ぶつきらぼうな人だけど悪い人じゃないから、恭ちやんをよろしくお願いしたくて。剣と家族の事ばかりで男友達は今まで誰もいなくて…ええ、と、その」

言葉が思いつかなくなったのだろう、次第にごによごによ言葉が小さくなっていく。しかし、言いたい事は判った。天を仰ぎたくなつた。妹に心配されてんぞ恭也くんや。…というか判りやすいな、兄は妹を心配して妹は兄を心配してって、既にして相思相愛じゃないか。砂糖吐くぞ。

「…?」  
「…?」

「剣?」

さらつと流してしまつたが、古武術とか言つてなかつたつけ? 見れば同じく「?」を顔に浮かべて首をかしげている美由希。

「別に隠すつもりでもなかつたんだが、うちの流派の中心は小太刀だからな」

アップを終えた恭也が近づいてきて解説してくれた。何でも家で伝えられている古い流派なんだとか。使う武器の事はぼかしていたものの、種類って事でもなさそうだ。しかし、小太刀二刀ねえ、何というか…

「忍者にしか思えん」

「俺もたまに思つ」

思ってるんかい。

「ただ、国家資格を取れるほど忍者らしい訳ではないな。やはりあくまでもうちの武術だ」

あるんかい国家資格。なんだかこちらの世界にびっくりである。実はこの世界の連中って、背中の翼程度じゃ驚きもしなかったりするんじゃないだろうな。必死こいて隠してるのが馬鹿馬鹿しくなってくるぞそれは。

……と、大分話し込んでしまっていたな。美由希ちゃんも兄を待ってるようだし頃合いだろう。

「長々と話しちゃったな、鍛錬があるんだろ？ そろそろ邪魔にならないとこにでも行っとくよ」

「む、そうか。ところでツバサは神社に用事でもあったのか？」

「おお！ プリンを見晴らしの良い所で食べようと思ってね」

何とも言えない微妙な表情を浮かべた二人を残し、景観の良い場所を求めて散策を始めるのだった。

## 五話

「う……ぬるまったい……が、美味しい」

さすがのこだわりプリン。冷たさが無くなっても濃厚な卵とクリームのコク、ほどけるような舌触りは健在だ。

八束神社の境内はそれ自体が一つの小山の上に設けられている。本殿の造りの割に土地はかなり広く、それは先程まで話していた高町兄妹が鍛錬をできるだけのスペースがあるという事からも判る。

その境内の端、ちよつとした崖になっていて、落下防止の柵があり、そこからは海鳴市と海岸線が一望できる。30年は経っているだろうなかなかの大きさの楓がその風景に彩りを添え、秋頃、紅葉でも始まればさぞかし映えることだろう。

そんな絶景を眺めながらの甘味はなかなかもって良いものである。この子供舌になって一番嬉しい部分かもしれない。

ゆっくり味わいながら食べ終わり、余韻を楽しむ。遠く聞こえるホトトギスの鳴き声が一層風情豊かなものにしてくれるようだ。

「うし、充電完了」

身体はあまり疲れを感じないが、精神的な疲れは別なのだ。メリハリをつけて休まないと保たない。

今日は朝方から人と接する機会が多く、それなりにストレスになっていたようだ。

「しばらく人と没交渉だったからなー」

独り言をつぶやきながら神社の入り口の方にゆっくりと歩く。

日を見るにまだ正午には達していないようだが、10時から11

時といったところだろうか。正午を回ったところでサンドイツ屋でパンの耳でも仕入れようと思っていたのだが、まだ、少々時間があるようだった。

「おー、やってるやってる」

境内の本殿よりちょっと離れた場所。木々に囲まれた少し平地になっっている場所で、高町兄妹は鍛錬を行っているようだった。

少し茶目っ気を刺激され、気配を消して、息を殺しながら近づいてみる。

ちなみに、この技術にはかなり自信がある。アホ親父に幼少期よりサバゲーに連れ出され、いかに大人に見つかからないようにするかを突き詰めた結果、かくれんぼの達人と化してしまっていたのだ。

それに今の身体のスペックが加わると、誇張表現なしでとんでもないことになる。と言ってもこのように障害物がある場所限定だが……何分、この真っ白い肌と髪と目は目立ち過ぎる。

と、それなりに近づくことに成功してしまった。二人はまだ気付いていないようで、今は型稽古をしているようだった。小太刀二刀と言っていたように二尺あまりの木刀を使って、ゆるゆると型をなぞり、攻めたかと思えば守り、隙を作り、誘い込み、一刺しを与えらる。

ゆっくりした動きとは裏腹に二人の顔は真剣そのもので、見ているだけでこちらも緊張してしまいそうだった。

その一巡の動作が終わると、また同じ構えに戻り　速っ！

同じ動作の攻めから守り、隙を作ってから誘い込み、そこからのカウンターまでの一連の動作を先程のゆっくりとした動きから一転していきなり凄まじい早さで繰り返す。

出すほうも出すほうだが、受けるほうも受けるほうか。

若干小学三年生の子供がそれを型通りに捌いてみせるとは誰も思わないだろう。大体、あんだけゆっくりした動きに慣らされれば、

急激な速度の変化に動体視力が追いつかない。というか脳が追いつかない。なんというかとんでも剣術だなこりゃ……

「ん、これで今日の分は終わりだ。上達したな美由希」

「ふへえー」

どうも終わりらしい、何やら恭也はトレーニング帳？ を取り出してメモをしている。美由希はへたりこんで肩で息をしているようだ。

「お疲れさま、随分ハードな鍛錬だな」

「うんー、でも伸びてるっていう、実感があるからねー……………つてええええ！ いつからそこにっ」

木に引っかけてあったタオルを美由希に渡してやると盛大に驚かれた。ああ、こらこら、驚くのはいいが鼻水が出る。タオルの端で拭いてやる。

「いや、ゆらゆらと型稽古してるあたりから？」

「気付かなかった……………」

そりゃ、野生の鳥にも気付かせないから。

さらに、こここのところ隠し事が多いのでこそそしていたらさらにかくれんぼスキルが上がった気がする。今ならスネークになれる。

「でもすごい隠れ身だね。恭ちゃんは気付いた？」

「む、いや……………」

何やら恭也は思案気にしている。考え込むとこいつ全く感情が読めなくなるんだな。仏頂面もいいところだ。

考えがまとまったようで、こちらを真っ直ぐに見て言った。

「少し立ち会ってくれないか？」

「あー、いい……よ？」

あれ、適当に返事してしまったが。

立ち会い？

何というかどうしてこうなった。

その後、木刀を一振り渡され、お互い一刀の状態で打ち合ってみるとか。

何考えているのか判らん。打ち合い稽古は竹刀じゃなかったか？とりあえず、やるだけやってみるか、見よう見真似で振り回してみる。全く当たらん。当然か。あのとんでも剣術を納めている以上、素人の振った剣など丸見えだろうな。

ただ、恭也の方で相当加減しているのか、こちらも一応は全て避けることが出来ているんだが。

「ッ！」

10合も打ち合ったり、かわしたりしたところだったか。

何を思ったか、俺が思い切り振った袈裟懸けの下で下から打ち合おうとしていた木刀を落とした、って危なッ！

体重を乗せた一撃を振り下ろしているのを、無理矢理腕の力で止める。痛てててててて！ 攣る！

「うおお、あーぶなかったあ……」

恭也の頭上10センチ位のところで木刀は止まっていた。冷や汗がどつと出る。

腕攣ったが。

しかしこいつぁ……

「何やってんだよ……幾ら何でも危なすぎだろ？」

俺の馬鹿力で振られた木刀だ。幾ら素人の大振りといっても、当たったら洒落にならない。

非難した目で見てみると、目を落として幾分かすまなさそうな声で言った。

「……まず、済まなかった。試すような真似をしてしまった事を詫びる」

「はえ？ 試す？」

アホ声が出ちまったじゃないか。アホ毛に続いて「はえ」とか「ほえ」とか言いだしたらとてつもなく末期だと思つので、そういう妙な事を唐突に言わないで欲しいものだった。

んー、しかしまあ、なんか真面目な目えしてるし。とりあえずは。

「聞こうか」

「ああ、全てを話す訳にはいかないが」

わざわざ、そんな言う必要もない前置きを入れる恭也にがつくりと肩を落とす。真面目なのはいいんだが、融通効かないんだな。

まあ、なんだ。一通り聞いたところによると、要するに、割と二人の流派は敵が多いのでそれなりに日常も警戒している所に、何故か妙な運動能力もった外国の子供が絡んできたので、敵味方定かならず、剣で試してみよう。というトンデモ理論だったらしい。最後

の恭也が木刀を落とした瞬間に少し殺気でも混じれば、敵だと判ったそうだ。殺気感じ取れるとか……いや、そうだな、まだこいつも老成してるものの小学五年生だった。そりゃ殺気くらい感じるよな。

「あー、なんだ。とりあえず第三の目とかは開眼しないようにな？」  
「？」

「いや、判らなければいいんだ……ともあれ、理由があんなら気にするなよ。俺は気にしない」

と言つても、真面目で堅物なこやつはどうも申し訳ないと思つているようなので……

『じゃあさ、友達にでもなつてくれよ。それでチャラな……嘘だ。そんな甘酸っぱい少年漫画的のEコーがかかるような台詞を吐くはずもなく。案外面白かったから、剣の基本でも教える。とでもごねて納得させる。高町家のトンデモ剣術じゃない方でな、とは言つておいたが。……いや、流石にさっきの立ち会で文字通り子供扱いされたのがなんともかんとも。うん、くやしいのかもしれない。別にどんな奴にも勝ちたいという程、勝負事に執着はないが、あそこまで軽く扱われると、時にはそういう気分にもなる。というか、先程の無防備に見えた状態でもあいつ悠々と避けられたらしい。腕攀らせて止めた俺は涙目である。』

そんなごたごたしてるうちに正午のサイレンが海鳴市に響き渡つた。焼きたてパンの耳を狙っている身としてはそろそろ行かなくてはならない。

名残惜しげに「ツバサくんまた明日くる？」とか聞いてくる美由希ちゃんに癒された。普段は早朝にやっている鍛錬らしいので、それに合わせて来ることにして別れる。

天気は残念ながらそろそろ雨が落ちそう、ただ心はほっこりしていた。



昼食は香ばしい焼きたてパン耳を山で採れたキノコのスープと共に頂く。ハーブ類もかなり入っている。最近では種がどこからか運ばれたものか、野にも自生しているものが多いので助かった。

ぼつぼつと屋根から音が聞こえてきた。

どうやら雨らしい。やれやれと腰を上げると、外に干してあった魚を回収して屋内に入れる。若干生臭くなるが、こればかりは仕方ない。

それなりに本降りになりそうなので、今日は山に出るのは諦める。低い山だからといって雨で視界の悪い中、山歩きなど好んでするものではない。

そうになると、唐突に暇になってしまった。

食料のストックはまだあるし、必死こいて修繕したおかげで、生活環境もそれなりに整っている。

ぼーっと音のするトタン屋根を見上げているのも飽きたので、雨がやむまで燻製でも作ることにする。

やり方は簡易に作るなら至極単純だ。ある程度の熱に耐えられる密閉容器があればその中で魚なり肉なりを燻せばいい。乱暴な言い方ではあるものの、そういうものだから仕方ない。

ということを使うのはどこにでも手に入る段ボールである。幸いダルマストーブという便利なものがあるので、排煙管を途中で外して穴を開けたダンボールに直結すれば簡易スモーカーの完成だ。間にブロックを挟んで熱で燃えないようにはしてある。温度管理はさすがに適当になるが、ひとまず、先程回収した干しておいた川魚をダンボール内に吊り下げる。

スモークウッドを買っていたわけでもなかったもので、薪として集めておいた木の中からナラっぽい木を選んで火を入れる。煙が目的なので、最初に熾火を作ってから少量ずつ足すのみに留める。

もちろん、作業は全て小屋の外。小屋の屋根を延長した形でトタン屋根をつぎはぎ延長して、柱で補強。少し盛り土をして簡単な屋根付きテラスのようにしてある。本格的な梅雨前にやっておいて良かった。屋内でダルマストーブを調理用で使うこともできるが、これからの時期は暑くてかなわないし、一応土間に竈でも作る気になればできるが、換気扇などついていないのだ。あるいは天窓でも設けない限り煙たくて困る。

煙で燻している間に、ついでの仕込みということで、血抜きをしておいたキジバト　よく朝方にホーホーポッポーとリズムカルに鳴く鳥だ。見つけたので石を投げたら見事に落ちた。その下ごしらえでもしておく。羽根をむしってからストーブとは別に設置してある竈の火で炙り、残った毛を焼く。ワタを抜いてから水で洗う。手羽と足、胸とモモあたりに手早く解体して塩水に漬けて臭み抜き。ガラはこのまま鍋にかけてスープを取ることにする。

香味として公園に生えていた月桂樹の葉を数枚、ネギの代わりにノビル、山椒の葉を投入して竈にかけておく。

切り取った手羽先は塩胡椒を振り、切れ目をいれてセリの葉をダイレクトに突っ込んで、尖らせた木の枝に刺して竈の火の近くに立てて置く。まあ、ただのおやつ代わりの焼き鳥だ。

こうして料理をしていると以前の仕事を思い出してやはり楽しくなってきたしまう。料理というものを余り上品なものにたたくなくて、店ができた時もわざと飯屋　なんてつけて、メニューも和洋中なんでもござれなんてのにするから、出だしは大変なもんだった。伝票管理なんぞも考えないで見切り発車なんてするから　には大分迷惑を……

「いっつ……」

こめかみを揉む。記憶のあいまいな部分を頑張っと思いだそうとすると、脳味噌が反乱を起こすかのように頭痛が起こるようだ。…

…むづ、脳に痛覚って無いんじゃないか？  
さすがにもう泣き喚きなどはしないが、やはり少々落ち込むものはある。

「せつかくの良い気分には水差しちまつたなあ」

背中の翼も心もち垂れてしまったようだ。ちなみに今は隠す必要もないので、背中に穴を開けたTシャツなどを着たりしている。…ふと思っただが、今の姿で鳥の手羽に齧り付くとか、かなりシユールなのかもしれない。共食い？ 気にすることなく食うが。

考え事をしてる間に、ほどよく焼けた手羽の肉厚の部分に噛みつく。外はカリカリ、中からセリの香りと混じった濃厚な野鳥の肉汁が溢れる。やはり焼き鳥はブロイラーより野鳥の方が味が濃くて美味い。何とも至福である。といっても一串なのであつという間に食べきってしまったのだが。

そんな事をしているうちに辺りも暗くなってきた。鳥人間（笑）にも関わらず夜目が利くので、月明かりでもあれば夜もあまり不自由はしなかったのだが、さすがにこれだけ雲がかかってしまうと夜になれば、まるで見えなくなってしまう。蠟燭に火を灯す。ただ、そう無限にあるものでもないの、やはり今日は早く寝ることにしよう。江戸時代のような、日が昇れば起き、日が暮れば寝る生活なんてものを自分がやるとは思わなかったが…：：：妙なおかしみを感じながらぼんやりと雨音を聞き、夜は更けていった。

「基本は両手共に小指で握り、他の指で支えることだ」

とのことらしい。何かと言えば刀の握り方とのことだ。言われた通りに握っているのだが、もっと柔らかく握れとのことである。添

え手は鶏の卵を握るつもりでとか、すっぱ抜けない？

足運びも含め、何度かやり直しを食らいながら、形になってきたら、とりあえずはそれで素振りを倒れて立ち上がれなく程度にやれとのこと。

スパルタじゃね？ とこぼしたところ、恭也と美由希に「何いつてんだこいつ」的な不思議な顔をされた。そのくらいは当たり前前らしい。恐ろしや。

「ごちゃごちゃと何をやっているか」というと、先日ちょっと口に出した、剣の基礎を教えてくださいという約束の事だ。こいつはあれか、俺様が教える以上は生半可で済ませるつもりはないとかそういう奴なのだろうか？

これを使えとか言って渡されたのは鉄芯入りの木刀。出所を聞くのと口を濁していたがどこから持ってきたのか……小太刀二刀の練習では使わないであろう長さ、そしてずっしりと重みがある。

「それをまともに振るえるようになれば三尺の野太刀が振るえるようになる」

こいつは俺を侍にでも仕上げるつもりなのだろうか？ 並の同年代の子供の力だと10回も素振りすれば腕上がないんじゃないだろうか。

ただ、このチョイスも理由があつてのことだったらしく、俺の一番相性が良さそうな剣を考えたらそうだったということらしい。

単純に力と速さがある分、小手先の技に頼らないで『一の太刀を疑わず』の示現流のような方針で鍛えるのが良いそうさ。かけ声はちえりおーとでも言えればいいのか？

……いや文句を言う気はないし、そこまで考えてくれたのは有り難いが、剣の基本という話はどこに飛んでいった……？

「考えてみれば俺も美由希も他流を使える練習相手は居なかったか

らな。楽しみなことだ」

物騒な事が口から漏れてますよ……聞こえなかった事にしよう。なんだこのドラゴン。ールの住人のような小学五年生は。なんだ、今更だが、割と関わってしまうといけないような人物だったのか？

「……ええ、と。ね、いつしよに頑張ろう？」

多少申し訳なさそうに、でも同年代の仲間が出来たのがそれなりに嬉しいのか、ゆるっとした笑顔を覗かせた美由希の顔はかなりの癒しになったのだった。衝動的にお持ち帰りしそうになり、恭也に物理的な突っ込みをかまされたの言うまでもない。

## 六話

早朝は神社で剣を振り、昼は山海でのハンター生活。空いた時間は売り子でお金を稼ぎ、夜は夜で、恭也をフルボッコにしてやんと胸に秘め、やっぱり剣を振る。

そんな生活もいつの間にか二ヶ月が過ぎた。

いやはや、目的を持って何かやっていると感じると時間の流れがとても早く感じる。

さすがに二ヶ月も続けているといろいろ判ってくるもので、まず。

「ツバサ、お前は剣技を使うことはできない」

と言うことだった。唐突にこの台詞を言われた時は頭が疑問符ばかりになったものだ。

まるで判らるので説明を求めると、少し難しい顔をしながら話を始めた。

「大なり小なり技とは、弱いものが強い者に立ち向かうための術だから、どんな技でも……俺や美由希の使う御神の技でさえ、ほとんどは弱者が使えるように作られている」

そこで一息切ると、言葉を選ぶかのように考えながら続ける。

「ツバサの運動能力、反射神経、単純な膂力。全て人を大きく超えるものだ。だから、お前には使える技という技が無い。もし技を使うとしたら……お前自身が作るしかないだろう」

確かに細かい事を考えるより、ただ速く斬りつけた方が性にもあっているが……そこまで化け物じみていただろうか？

というか、さらつと人のこと人外扱いしているな。

「……自覚がないようだな。お前が本気で木刀を振って頭に当たれば、頭蓋骨折で済まずに吹き飛ぶぞ?」

顔色を読んだのか、そんな怖い事を言い始める。いやいやまさか。美由希の方を見ると、こくこくと頷いている。

がつくりうなだれる。危ないとは思ってたものの、そこまで危険物になっていたとは。

「ツバサくんは……大雑把だから」

「美由希ちゃんや……それフォロワー違う」

しかし、そんな危ない剣の割に何度も何度も受け止めてられていたが……。

ふっと思ったので聞いてみると、殺気のコもっていない武器は捌くのに苦労しない、だとか。

「私は、割と加減されてるから避けやすいかな?」

と、これは美由希の言。いや、防具も着けてない女の子に本気で木刀で殴りかかるとか気分的に無理だから。

恭也なら良いのかというの良いのだ。こいつは、にやーとか怖い笑い浮かべながら捌きに捌いてしまうのだから。むしろ、もっと回転を上げる! とか注文が飛んできたりもする。

「しかし、そりゃ俺って相当怪しかったんじゃない?」

ふっと思ってそう言うと、二人ともコケていた。背後にズコーと擬音が幻視できてしまいそうだ。さすが御神の剣士、見事なコケか

たである。

「今更、それを言うか……」

「あ、はは……ツバサくんは……大物だね」

そんなことがあったり。

また、本格的な夏に入り、ミンミンゼミが喧しく鳴き立てる頃、恭也がしばらく来れなくなるので美由希を頼むと言われた事があった。

聞いてみると何とも呆れるような理由で、夏休みを利用して武者修行に行くてくるらしい。まあ、それはこの剣術馬鹿のことだから理解はできる。

しかし、頼まれるのはやぶさかではないが、なんで俺？ 確か父親が剣術教えてたりしてるんじゃないかなかったか？

その問いに、恭也は驚くほど複雑な表情を浮かべた。

「その……だな。実家が……ピンク空間なんだ」

小学生とは思えない疲れたため息と共に言う。

「なのは……うちの末の娘が可愛い盛りの二歳でな。うん、それはいい……それはいいんだが、なのは挟んでの二人が……甘くて……甘過ぎて……」

いつまで新婚気分で居るつもりなんだ、と呟きながら声にならない呻きを漏らす。

やっとわかった。父親から剣術を教えてもらっていると割に外で鍛えてばかりだった理由が。

砂糖の海に飲まれて溺死しそうだったんだな。



俺は同情の念をこらえきれず肩を抱いた。

「よくやった……今までよくやった。お前は暫く武術の世界に浸りきって、自分を取り戻してこい、な。美由希ちゃんの事はしばらく任せられたよ」

「……すまん、頼む」

そんな三文芝居みたいなことをやってみたり。

そして、夏休みと言えば、風物詩というものがある。

小学生なら割と高確率で苦しむことになる夏休みの宿題である。

「というわけで、自由研究が進まないの。……助けて？」

「……その無理してる上目遣いをやめたら助けるよ」

やった、と小さくガツポーズする美由希。上目使いでお願いとか誰に教わったと聞いたらカーさんと来たもんだ。

高町家の母親は茶目っ気成分が多めらしい。

しかし自由研究か……昔を思い出してみるも、記憶が曖昧以前にもう覚えてない。……そりゃ小学生の時の頃ってあんま覚えてないよな。

んー、とカップ麺が出来上がる時間ほど頭を悩ませ、とりあえず選択肢を出してみる。

「実験、社会見学、図画工作、自然観察、どれがいい？」

「ツバサくんの好きなので！」

がつくりと力が抜ける。昼食に入る店を探してるわけじゃないぞ。美由希はこういう天然な所がたまにあるので時に困る。普段は同年の子供からしたら大人っぽい部分も見えるのだが。

恭也もこれは毎年手伝わされているのだろうか？ いや、奴のとだから、説教臭い事を言ってから参考になりそうな本でもさりげなく置いておきそうだな。

と言つても恭也の真似は難しいし、結局あーだこーだと言ひ交わしたあげく、自然観察。貝殻の調査というとても無難なところに落ち着いてしまった。

「やってきました臨海公園」

ここ海鳴の観光名所の一つでもある。

広い敷地が魅力の場所で、砂浜には夕方になるとバーベキューをする家族や若者がかなり居る。日々の稼ぎどころの一つだった。

海水浴客で賑わっているが、今回はそっちには向かわないで、海水浴禁止の区域。そちらは砂浜があるとはいえ、遠浅ではなくすぐに深い棚があるようで、遊泳は禁止されているのだった。

やることは単純で、海辺に落ちていた貝殻を拾って図鑑で確認、標本として回収し、貝の名前と大まかにどこで拾ったかをメモに書き込んでいく。これなら一日で終わるし、ありきたりながら悪い評価は貰わないだろう。手分けして貝を拾い出すのだった。

……おおむね一時間も拾い集めた頃だろうか。それなりに色々な種類の貝殻を集めることができ。一端合流することにした。

美由希が貝を集めている地点に着くと、一心不乱に図鑑を読む姿があった。

間近に立ってみる、気付かない。一拍考えたのち、後ろに立っておもむろに自分の背中に手を回し、たたんでいる翼から羽根を一枚抜き、無防備な首筋にセット。3、2、1、ごー。

「……！！ ひっひひゃふひふはひゃあーっ!？」

なでりっとした瞬間、飛び上がりそうになるけど動けない！ と

言った感じにびくんと背が伸びる。翻した手でもうひとなですれば、ぶるぶると震えながら意味不明の声が漏れた。

あまりの反応の良さにちょっとうっとりとしてしまいそうに……  
いかんいかん。

「癖になってしまいそ……いや、美由希ちゃんの方は調子どうだ？」

「……何か聞こえたくもないような言葉が聞こえた気がする」

気のせいだと言って、じと目で見つめる美由希をよそに開かれた凶鑑を覗き込む。子供向けの貝類凶鑑の巻き貝のページが開かれていた。

「あ、ねえねえ、この貝なんだと思う？ 凶鑑に出てなかったの」

と、美由希が凶鑑をどかすとその下敷きになっていたのは直径20センチはあろうかという巨大な巻き貝の殻だった。というかこれはアレだ。生きた化石。

「オウムガイじゃん……」

「えええっ！」

どうやら美由希も知っていたようだ。貝殻だけだと想像つかなかったか……確か、イカとかタコに近いんじゃないかなかったか。そりゃ、凶鑑によっちゃ載ってないよな。

たまに砂浜に漂着することはあるらしいが、まさか見つけてしまうとは、ただけ運がいいというか何というか。

ひとまず、俺が回収してきた分でそれなりの数は揃ったし、オウムガイという目玉もある。自由研究としては十分だろうと言うことで、帰る事にした。帰り道に今時珍しい屋台のタイヤキ屋を発見すると美由希は目を輝かせ。

「あ、あれ、恭ちゃんが絶品って言ってたタイヤキ屋さんだ」

と、走り出した。いつもは控えめだが、こういうところもあるらしい。

早く早くと言うもので、急ぎ足で追いつく。

「今日は手伝ってもらっちゃったし、私がおごるね」

なんて言うので有り難く奢られる。しかし……店を覗き込むと種類豊富なこと、チーズ、カレー、ピザ、ジャーマンポテト、泰山麻婆、メシアンカレー……後半何か危険な香りがしないでもない。

頼んだが最後、後戻りできなくなるような……ゲームブックで言うならいきなり『あなたは壁に潰された』というページに飛ばされそうな選択肢、そんな気がしてならない。

「……いやいや、妄想だ……」

頭を振っていると、美由希が首をかしげて待っているので、手っ取り早くチーズ味を頼む。

美由希はつぶあんを頼んだ。家が洋菓子を扱う喫茶なのでこういう時はあんこの入ってるものを選ぶのがお決まりらしい。

ベンチに座ってもくもくと食べる。

しばし、まつたりした時間を過ごして解散した。こんな何も無い穏やかな日々というものも良いかもしれない。普段が普段、山で獣を追いかけたり、恭也を仕留めに行ったり、生活費のために愛想を売ったりしているので特にそう思うのかもしれないが。

暦は8月に入り、いよいよもって暑くなってきた。実のところ涼しい格好がしたい。タンクトップ一枚と短パンでうるつきたい。

ただ、日差しが厳しいのだ。紫外線が激しく責め立てる。メラニン色素が極端に少ないだろうこの身体にとって、夏でも長袖は必須だった。何せ日焼け止めも無しにあまり太陽の直射を受けると水ぶくれすら出来てくる。本当に困ったものなのだ。そんな今の格好はぶかぶかの長袖シャツに、バザーで安く手に入れたジーンズ、髪は一回切ったのだがまた伸びてきて鬱陶しいのでスポーツキャップの中でまとめてしまっている。真夏でさえなければそれほど怪しまれるほどの格好でもなくなってきたはずだ。

そんな季節外れの格好をしたまま、クーラーのよく効いたデパートに入り、迷わずもう常連と化している書店コーナーへ。大窓の外には溶けるような日差しの中せわしなく人が行き交う。だが、この一枚の窓の内側は天国だ。立ち読みも可で、最近ではもっぱら日中の最も暑い時間帯はここで過ごしている。

「おう、これは……」

一冊の本を見つける。シュールな猫漫画。ねこ るだった。ちなみにこの世界ではまだ作者も元気に活動しているようだった。

ぱらぱらと読みふけり、記憶より鮮烈なシュールさを感じてその鬼才に震撼した。

そんな猫漫画を読んでいたのが悪かったのか、視界の端、窓の外にふっと猫耳が映った。低い位置ではない。普通の人の頭のある位置に、だ。

「むう？」

瞬きを二度三度、やはり歩いている。

猫耳、猫尻尾つけた女の子が二人、初老の男性の後ろを従者よろしく歩いている。どんなプレイだ？

あり？ あまり変に思わなかったが、よく見ると服とか相当アレじゃないか？ モノトーン調のワンピースで、何というかボディコン？ 上は肩パッド入ってて、スーツっぽくもあるのだが。

控えめに見ても何かのコスプレにしか見えないのだが、何だろうかアレ。目を離すと別に違和感ないというか。その違和感の無さにかえってモヤモヤするものを覚えるのだが。

「ぬーむ……」

悩んだ時間はわずかだった。

見失ってしまうかもしれないし、どうも気になって仕方ない。後をつけてみる事にした。

幸い、気配を殺して隠れる事については、恭也のお墨付きさえ貰っている。このまま前に行く猫娘ズとおじさん、三人でその手のホテルにでも入るなら……まあ、そういう業種のサービスだったのだろうし。とりあえずあの感じた違和感が気のせいなのか確認したい。つけて見ると違和感はなおさら大きくなってきた。ちょっとだけ迂闊だったかと思ってしまう。

何しろ周囲の人間がまるで不思議に思っていない。

猫耳とか露出の高い服とか、あるいは前を行くザ・紳士と言った風体のステッキ持った初老の男性とか。目立つ部分はかなりあるのだが、誰もそれが異様だとは感じていないようだった。

暑い盛りというのに、冷や汗が流れる。

真っ直ぐ歩いているだけなのに、人通りが見る見る減ってきた。

ふっ、と三人は左に折れ、路地に入っていく。なんだか判らないが、いや判らないから怖いのか。……もう興味本位の追跡はここで終わりにしようと思いい、左は見ないように真っ直ぐ歩いて、通り過ぎようとした。……したのだが。その瞬間身動きがとれなくなった。

「……なっ……く……!!」

声が出たと思ったら次の瞬間には喉に何かが巻き付き、声が出なくなる。

周囲を見ても誰もこれが異常だとは気付いていない。何が起きている……？

「ありや、可愛いストーカーさんだねえ」

「ロツテ、眠らせる程度でね」

りょーかい、という妙に間延びした声と共に視界が暗くなり、急速に意識は遠のいていった。

## 七話

時空管理局なんてものがあるらしい。

大仰な名前である。いや、実際やってることも大仰っぽいのだが、実際のところどういう組織なのかは実感をもって判ったと言っただけではない。

ただ、今は確認のしようもないので、鵜呑みにするしかないと言っただけが現状だ。

どんな現状かという話は一時間ほど前に遡る。

目が覚めたら隣に住んでいる奥さんがベッドで寝ていた。昨晩はいささか、酒の度が過ぎたようだ。

……なんて、アダルトな展開はなく、清潔そうな、一見して普通のホテルの一室だった。飾り気のない部屋にはベッド三台と簡易化粧台が配置されている。その端のベッドに寝かせられていた。

身を起こして、あくびを一つ。しかしまた、なんでこんな場所で目を覚ますことに……

ああ、思い出した……

妙な違和感。ぶんぶんの三人連れを追いかけたら、捕まえられたんだなこりゃ。自分を過信していたかもしれない。好奇心鳥を殺すとか、洒落にもならない。

ただ、捕まえられたと言うには警戒がザルというか、普通にベッドに寝かされてたんだが、これは危害を加える気はないよーって事なんだろうか？ それとも自信？ あるいは両方か。前触れもなく急に身動きも発声も抑えられる事を思い出すと、下手な動きはしないほうがいいか。



「あ、起きた？ ……動転してるかもしれないけど、少し待ってね、紅茶でも入れてくるから」

急にドアが開いて、ビクツとする。すぐに紅茶を入れてくるとかいつて引っ込んだが、先程街で見た女性の片方だった。淡いブラウンの長髪を揺らしていたが、その頭にあっただのはやはり猫耳だった。とりあえず、急に何をされるといっわけでもないようだ。素直に待つ。というかそれしかできないんだが。

しばらく待っていると、初老の男性と共にティーセットを持った女性が入ってきた。

男性が慣れた手つきで紅茶を入れ、サイドテーブルに置いてくれる。自分のカップにも注ぐと、一口味わい、目を細め一つ頷くとコトリとソーサーにカップを戻す。

妙に美味そうに飲みやがる……！

そろそろ手を伸ばして出された紅茶を頂く。ふんわりと甘い香りが鼻孔をくすぐる。口に入ればなかなかの渋みを感じさせるが、不快な渋みではなく、苦さとは別のもの。コクと言ってもいいかもしれない。紅茶は詳しくないが、何とも美味しい。やるなこの男。

「おかわりはいるかね？」

気がつけばカップが空だった。

してやったりという笑顔がシャクだが、斜めを睨みつつ、そつとカップを出す。

うう、美味しい。

妙にまったりしてしまった。

「……何、そう構えられても困るのでね、そつだな……」

目の前の初老の男性は少し考える仕草をした後、一拍を置いて言

った。

「目の前の人物がいつたい誰なのか、今の君の状況、君を取りまくこの世界が何なのか。一つ一つ話していききたいのだが、構わないかね？」

「……いや、今の状況から話してほしいとこなんだけど」

それを説明するためにも必要なことでね、と前置きし、少し悪戯っぽい顔になるとこんな事を言った。

「実はね、私は魔法使いなのだよ」

これは……すごいな爺さんと返すべきなのか……？ さすがに偶然だろうけど、こんな台詞を生で聞けるとは思わなかった。

恐らくこの世界の誰にも判らないだろうネタで勝手に俺が戦慄している、妙な表情にでもなっていたのか。

「うん？ 信じにくいかな、ではこれでどうだろうか？」

指をぱちんと鳴らすとその指の上に魔方陣のような模様が空中に現れ、子供向けの人形劇が立体映像として動き始める。

これは……驚いた。

「幻術魔法のアレンジだが、なかなか面白いだろう？」

「……む」

またしてもしてやったりという笑顔をしてやがるので、何とも言えない気分になる。そう言えば先程の映像といい……ああ、忘れてた。子供にしか見られてないよな。あれか、このしてやったりという笑顔は微笑ましく思われてるとか、そんなたぐいの笑みなのか……

少しやさぐれそうになる。  
ともあれ、そう！

「今の俺はどういう扱いなんだ？」

言葉を飾っても仕方ないので単刀直入に聞いてみる。

「ふむ……女の子が『俺』などと言うものではないよ？」  
「は？ え、いや……」

少し混乱した。女とか、いや確かに身体はそうだが。ってそうじゃない、見た目ではそんなのは判らないはずだ。きつと。少なくとも今朝、鏡で見た分には。

……ああ、そうだ。なんで気付かなかった。ストーキングしていた見た目からして不審な人物を確保すれば、ボディチェックくらいはするわけで、身体の事も……翼生えてる事とかもばればれ？

俺、オワタ？

「そう慌てないでも、大丈夫よ？ 脱がしたのは私だから。背中のはそれは……私はちよつと……本能刺激されちゃったけど」

男性の一步後ろでにこにこ控えていた女性がニヤーと笑った。鋭い犬歯が見える。よく見れば瞳孔が鋭くなってる。こつちはこつちで別ベクトルでまずい。食われる予感が消えない。猫と鳥なんて相性が悪すぎる。いや自分でも何考えてるんだか、誤魔化せるのか？ というかこの反応割と普通なのか？ 訳わからん。

「なに、慌てないでほら、砂糖でも入れて飲むと良い。落ち着くと思っよ」

そう言って砂糖を一杯、二杯と入れ差し出してくれる。

落ち着けというのは確かなので、うん。頂く。脳裏には「まだ、あわてるような時間じゃない」と仰るツンツン頭のバスケマンが……馬鹿な事を考えて、紅茶の甘さを感じるうちに頭が冷えたようだ。どのみち、何を知られようとも今の状態はひたすらまな板の鯉なんだから、こちらはひたすら情報を聞き逃さないようにするしかない。

ただ、この態度からすると随分友好的なようだが……いや、話しかけも無しにいきなり拘束されたわけだし、楽観は禁止か。

「ふむ、そうだね……落ち着いたところで名前でも聞かせて貰えるかな？ 私はギル・グレアムという。君は知らないかもしれないが、イギリスという国の出身でね、先程見せたように少々魔法使いもやっているのだよ」

「……白井ツバサ、です」

と言うと少し目を見開かれた。適当につけた名前だってバレたか？ 日本語判ってるみたいだし、そりゃばれるか。幸いそこはスル―してくれるようで「じゃあ、今の君の状況だ」と、組んだ足の上に軽く手を乗せ言った。いちいちサマになる爺さんである。

「次元漂流者という言葉があるのだが……」

そこからは、様々なことを一気に説明されたので整理するので正直一杯一杯だった。

判らないものを聞き返せば、どういうものかを的確に説明してくれたし案外この爺さんは教師などに向いているのかもしいない。

どうも、世界というのはやたらめったら多いらしく、そのの行き

来の技術を持っていて警察のようなことをしているのが、その時空管理局という組織らしい。

このグレアムという爺さんもその所属の魔法使いらしく、魔導師と呼ぶそうだ。スゴ腕らしい。後ろで猫娘がお父様は管理局でも有数のトップ魔導師なんですよとか自慢げにしていた。

ふと、そこまで情報開示していいのかと聞く。

良いそうさ。というか次元漂流者の保護規定というものがあって、ある程度の情報開示は構わないそうさ。

そう、俺はその次元漂流者というものに当たるとはらしい。

ただ……

「第130管理外世界？」

「こんな場所だよ。故郷ではないかね？」

空間に投影されたモニター、これも魔法らしいが。それに映ったのは少し緑がかった空を背景に映る石造りの町並みだった。手前には青い海が広がる。白亜の石造りの建物は地中海にこんな場所があると聞われれば信じてしまいかもしれない。よく見ると建築様式も全く違うし、建物に書かれている文字だろうものは全く読めない文字だったが。だが本当に驚いたのはそこではない。

歩いている人を見れば、服装などはどこか西欧ファンタジー的を思わせるような服装だ。ローブといえはいいのだろうか。ゆったりした服装に身を包み、サンダルを履いている。それも驚きではあるものの……その背中にある翼が一番の驚きだった。

歩いている人歩いている人は全て。大小、色の違いはあるものの、翼を持っている。

それはあまりに馬鹿げた光景で……、いや自分も人の事言えないというか言えなさすぎるのだが。

「……大丈夫かね？」

「ああ、いや、違う。違うんだ。俺の世界じゃない。普通の世界なんだ。地球だったんだ。気付いたらこんな姿になってたんだ。訳わからねえよ。何なんだよ。説明してくれよ。なんで羽根とか生えてるんだよ」

気付けば平坦な声で思っている事を垂れ流していた。涙も出てこない。ただ眼前に映っている翼の生えている連中の姿を何となく見ている。

ああ、そうか。根拠も意味もなく……帰れる可能性があるとか、ちよつとでも縋っていたんだな。

ちよつとでも考えれば……こいつらが次元漂流者だと判断した理由はこの翼だろうに。

グレアムの爺さんは俺が垂れ流した言葉を聞いて、少し驚いたようにした後、何かを考えるように腕を組み、目をつむり、また指先を一つ鳴らすと言った。

「少し、話してみる、良い」

「なんで急にカタコトに？　というか、発音がまるつきり違うぞさつきと」

また一つ指を鳴らす。

「ああ、翻訳魔法を切ったのだよ。しかし、難しい日本語をそれだけ流暢に話せるということは嘘ではないようだね」

そんな魔法使ってたのか、何でもありだな魔法。

さて、この場合どうすべきか、とか首をひねっている爺さんをさておき、冷めてしまった紅茶を口に運ぶ。あんな世界見せられて、動揺して、まるっと全部話してしまった。あ、元男だったってのは話してないか。しかしこんな動揺する映像だっただろうか。指先が

まだ震えてる。落ち着け俺の右腕。

「君の事情は私にも正直、見当のつくものではない。……だが、そうだな。やはり一度管理局の保護プログラムに従う形ではあるが、しっかりとした検査を受けた方が良いのではないかな」

そこでさらにふむ？ と首をかしげると。

「もちろん、日本出身のようだしこの土地に既に馴染んでいるのなら、無理強いすることではないが」

いや、どこの常識だよ。この年で浮いた容姿持って土地に馴染めるってすごいぞ。

……割と生活は何とかなってるが。

「……お父様、そろそろ約束の時間ですよ」

猫娘、アリアというらしい、が声をかけてきた。

「む？ おお、そのようだ。すまないが不動産屋との約束があつたね」

と腰を上げる。正直聞き足りないものもあつたのだが……迂闊ながら、不満が顔に出ってしまったのか、やれやれとでも言いたそうに苦笑すると、くしゃくしゃと頭を撫で回された。

「とてつもない借りがある友人が居てね、せめて小さい娘さんの為に家の一つでもプレゼントしてやりたいのだよ。少々君には暇なことになるからね」

ないがしろにしている訳ではないのだよ？ とあくまで子供扱いである。内心でちよつといらつとしてるのだが、表面に出すとまた頭を撫で回されそうである。くそっ。

しかし家の一軒とはまあ正直。

「豪儀だな爺さん。リアル足長おじさんという奴か」

「……そうであつたらどんなに良いだろうね」

何か言葉に違和感を覚えるも、見上げた時には先程と変わらない飄々とした顔だった。

考えがまとまつたらこの電話番号に連絡したまえ、とメモを渡され、アリアさんに送られホテルを出た。送り狼ならぬ送り猫か。うん、実際この人は猫だつたらしい。使い魔というもののようだが、どういふ原理で人型になつてるのかは知らない。きっと魔法というでたらめパワーだろう。

アリアさんには別れ際に声をかけられた。

「お父様はああ言つていたけど、あなたは保護された方がいいと思うの。結構精神状態不安定だつたでしょ？ 管理局の医療はいろいろこの世界より進んでるところもあるから、当てにできると思う」

連絡は三日以内に頂戴ね、それ以後は出立しちゃうから。と言い、油断していたら別れ際にまた頭をクシャクシャと撫でられた。そういえば帽子……、ホテルに忘れたな。

アリアさんの姿が見えなくなると大きいため息をつく。  
精神的に疲れた。

時間に見ればわずか一時間ほどだつたか……街角の時計を見て確認する。

頭を整理するためにひとまず家に戻ることにし、街を後にする。  
暑い中に汗で濡れた髪の不快感を感じだけがいつまでも後を引いて



いた。

## 八話

もう無意識にでも帰っていけるだろう、住み慣れたねぐらに戻り、勢いのまま布団にダイブした。

うつぶせのまましばらくその体勢でいると、眠りたくなってくる。何も考えずに寝て起きたら全てがすっきりしてるんじゃないか？

そんなありえない誘惑がふつふつと沸いてきた。

ああ、俺は弱いままだ。

この世界に来て割り切ったと思っていてもそんな割り切れるものじゃない。

考えたくもない事に蓋をして、見ないふり、臭わないふりをして、剣術に無理に没頭して。ずっとそれから顔を背け続けてきたが。

「すっかり掘り起こされたなあ……」

自分と同じ姿の人間たちが一杯いる風景。

自分は孤独ではないのだなとも思える反面、俺はあの風景には入っていけない異物だ。

あんなに動揺したのはその辺が理由だろうか？ 判らない。自己分析と言っても、あのにゃんこのアリアさんの言とおおり、精神的にはガタが来てる。判断力が酷いものになっていない保証がどこにある。

ははつと笑う。仰向けになり、天井を見た。安っぽいトタン屋根の天井だ。

神様を馬鹿にするように舌をつきだしてみる。

何も無い空間を仰向けのまま殴りつけてみる。

突きだした拳を緩め、一本一本指を開く。真っ白で小さな手。毎日の力仕事、家事、剣を振っているからか傷が絶えない。自分の手であると同時に『小さい』なんて思ってしまう手。

ふー、と息を吐きながらぱたんと手を下ろす。

この身体は借り物。

その可能性を思いつかなかったわけではない。ただ、考えればど  
ん底に落ち込んでしまいそうで、見ないようにしてきた。

自分という存在が何なのか。

「うわあ、我ながら……」

文字通りうわあである。なんと香ばしい。我に返った。ふっと何  
の前触れもなく我に返りました。

考えても仕方ないことをぐちぐちと考えすぎた。

頭を抱えて、バタ足をしながら転げ回りたくなる。

……うん、やることは既に決まっていた。

迷うわけもない。あのグレアムという爺さんについて行く。

確かにこちらの住み慣れた我が家、ようやく我が家とすんなり思  
えるようになったが。を残して行くのは忍びないが、この世界にい  
ても知れることは限られているし、この姿と同じような連中が居る  
なら会ってみたい……とも思う。家族とかが名乗り上げてきたら、  
正直怖くて逃げ出さない保証はできないが。

「行くかつ」

ちよつと気合いを入れて無意味にはね起きる。渡されたメモを持  
ち、まだ蒸し暑い外に飛び出した。

「6時頃に待ち合わせをしようか、夕食は期待していてくれて構わ  
ないよ？」

と、いうことなので、手持ちの中でそれなりに見える服を着て出  
発した。

フリーマーケットというものも侮れない。特に子供服などは成長  
に合わせて回転も激しいので、驚くほどの値段でひと揃いの衣服が  
揃ってしまうのだ。と言ってもさほど、今までとあまり代わり映え  
するわけでもない。上着にしているものがルーズシルエットのＴシ  
ヤツに下が黒のコットンパンツになっているだけである。ちなみに  
あわせて１００円ワンコイン。子供が買いに来たので安くしてくれ  
たのかもしれない。有り難いことだ。

指定された待ち合わせ場所に着くと既に、グレアムの爺さんにお  
供の二人が待っていた。

既に店に予約を入れてあるとのことで、のんびり歩きながら向か  
うことに。

しかし、前を歩く二人を見て改めて思うのだが、この認識障害魔  
法というのはとても便利だと思う。魔導師や野生の動物のような勘  
の優れてるものには通じないらしいが。

なにしろ、耳も尻尾もまるで隠していないのに、誰も気付かない。  
……魔法なんてのが俺にも使えるようだったら教えてもらおう。最  
優先で。

「ふむ、やはり日本に来たならば、一度来てみたくてね」

着いた店は寿司屋だった。しかも頑固そうだ。黒光りする年代も  
の引き戸にエンジ色ののれんがかかっている。

開けると落ち着いた声でいらっしやいませと声をかけてくる穏や  
かそうな店主が居る。

ショーケースはなく、シンプルなカウンターに本日のお薦めと書  
かれた手書きのお品書きがある。

一言二言、言葉を交わし、奥の座敷に通される。

「旅行の記念に心ゆくまで美味しい寿司を頂きたくてね。まず大將の仕切りで四人前頼むよ」

暗に、金にうるさい事は言わないよ、なんて粋な注文をしてみせる。グレアム爺さんあんた何者だ。

座敷は四畳半の間で、こことカウンター席のみで店を回しているようだ。ちよつとしたらお茶を持ってきてくれたので、他愛もないことを話しながら待つ。

ただ、その待つ時間が問題だったのか。

「お腹すいたなー」

とロツテさん。この人はアリアさんの妹猫らしく、何とも直情的でこう、たまに俺の事を美味しいものを見るかのように見るので。

うん、お腹すいたなと言いながらこつち見んな。犬歯を光らせるな。尻尾が狩りの体勢になってるぞ。

冗談でやっているのは判ってるので、気にしないのが一番なんだが。

そんなことをしているうちに寿司を運んで来てくれる。

運んで来たのは若い店員さんだったが、どうやら息子さんらしい。外国人のようだからと適当に寿司を出すということも無いようだ。

まずはあっさりとした鯛、ヒラメ、イカである。

そして、マグロ、甘エビ、ホタテと続き、穴子、ウニ、イクラ。

締め巻きのものはネギトロにカツパ巻き。ああ、やっぱり納豆出さなかつたか……残念。

お茶を飲んで一息ついた。

何というかあつという間に食べてしまった。

とても久しぶりに食べた上等な寿司だったからか。

自分の事ながら食事でここまでこうなるとは安っぱさを感じないでもないのだが。

……とても満足してしまった。我ながら顔が緩んでいるのを感じる。けふあーなどと間延びしたげっぷが漏れた。

「これはこれは、何とも生魚がこれほど美味とはな」

「父様、父様、このイクラってのもすごいよ」

「ちよつとロツテ、それは私の……」

この三人にも好評なようだ。

しかしふと思ったのだが……猫ってワサビ駄目じゃなかったっけ

？ ……まあ、大丈夫ならいいや。

皆で食事を終え、お茶を飲みつつほっこりと食後ののんびり感を楽しむ。

さて、と一つ前置きをすると、グレアムの爺さんが真面目な顔になった。

目配せ一つ受け取って、アリアさんが何かぼそつと呟くと、空気？ が変わる。

「……ふむ、これも感知するかい？ 第130世界の人間はリンク1コアを持たないとデータ上ではなっていたが、どこにでも例外は居るといふことかな」

どこか嬉しそうに言う。

んー。異論はままあるが。

「というか、何を？」

「何、この部屋一帯に認識阻害の結界を張ってもらったのさ。もう少し強力なので封時結界というのものもあるのだがね、あれは少々大雑把にすぎて、隠蔽にはこちらの方が向いているのだよ」

さて、と前置いて、続ける。

「これで、少々お伽噺めいた、そしてちょっと安物のSF染みたお話をしても、外には世間話にしか聞こえないはずだ。昼間、話そびれた事でも話すことにしようか」

と言っても、もう、俺の意志は伝えてある。

本人の意志が確認できれば、次元漂流者の保護プログラムに従って、本局の置かれているミッドチルダというところで検査と書類申請すればいいらしい。

保護責任者にもなつてくれるというので、休暇中なのに悪いね、と言ったら、子供が遠慮するものではないよ、と言われた。

……あ、そう言えばまだその辺の事詳しく話してなかったか。

しかし、会ってたかだか一日でそこまで信用するというのもな……いや、どのみち検査……魔法は未知の部分多いし、ううむ。ごちゃごちゃ考えるのも面倒になってきたし、昼間の事考えれば今更か。それなりに長考していたらしい。視線がこちらを向いて、じっと待っているようだった。

うん。ぶつちやけることにした。下手の考え休むに似たりである。元、男であったこと。年齢も最低でも成人は越えていたと思う。

普通に働いていて、いつかは記憶が曖昧だが少なくとも地球の未来軸……しかもパラレルワールドと思われる場所に居たこと。

言っていて、今話している事が自分の考えた妄想のような気もしてくるが。前世の話とかを信じ込んでしまっている小娘になった気がしてくる。

ただ、現実には小説より奇なりを地で行くような事も覚えているので、そこが……そこだけが妄想でないことの証明か。

世界貿易センタービルに旅客機で自爆テロとか、俺ではとうてい思いつくことではない。そして、21世紀になって急に増えた世界各国の巨大地震。スマトラ沖地震とかゼロから考えつくのはまず不可能だろう。と言っても、この地形すら違うパラレルワールドで果

たして同じ歴史をなぞるかハマった判らないのだが。

ここまで話したところで、グレアムの爺さんは頭痛をこらえるような顔をして額に手を当て考え込んでしまった。

整理中なんだろう。やはりこういった事例は魔法なんて事に関わっている管理局という所でもそうあるものではなかったか……

「確たることを言えるわけではないが……ロストロギアと我々が呼んでいるものがある」

目をつむったまま、低い声でそんな事を言いだした。何か嫌な思い出でもあるのか、妙に迫力がある。

なんでもそのロストロギアというものは過去に滅んだ文明の遺産なんだそうだが、時折、暴発して困った事態を引き起こす事も多い厄介なものらしい。ロストロギア絡みの案件の心構えは「どんな事態も起きて当然」と言うことらしいからその厄介さは極めつけのようだ。

「俺の状態はそのロストロギアが絡んでいる可能性大？」

「……もちろん、君自身の特性、あるいは自然現象、またはどこぞの変人科学者が妙な実験でも試してみたのか、可能性を言っていたらきりがないがね」

こんなことを言うとクラナガンの学者連中には笑われてしまうのだが、と少し苦笑し。

「この世界……管理局には第97管理外世界と呼ばれているのだが、この世界特有のレイラインと言うものの存在を私は信じていてね。ロンドンやここ、海鳴の地はその吹きだまりのようなんだ」

デバイス未使用で魔法を使うと、この地の魔力流に微弱な一定の



流れが集約していることに気付くそう。そのレイラインが呼び水となつてロストロギアが集まりやすい状態になったり、住人に魔導師の資質を開花させてしまふ可能性はあるんじゃないか、この現象を自然科学のように魔法力学からの観点で解き明かしていけばきっと面白い事が……とそこまで熱く語つたところでふと我に返つたのか。

「……む、まあ、年寄りの与太話だ。話半分にな」

耳が少し赤くなつていゝが。見ないことにする。男はいつだつて夢を見ていたものよな。気持ち判るぜ爺さん。

気を取り直すかのように、言葉を続けた。

「君のその事情については……私も多少心当たりはあるので調べておくしようか。管理局で検査を受ける時にもそう問題はないだろう。精神干渉の魔法による被害者への治療というのもし少ないがあることだ。ただ、精神と体に齟齬が出ないかの検査は多くなるとは思ふがね」

何というかこの爺さん異様に頼りになる。管理局員つてなこんな奴ばつかなのだろうか。

気がつけば随分話し込んでしまった。店を出れば夏の薄ぼんやりとした月が高く昇つていゝ。

管理局への出立は先だつてアリアさんが言つていたように三日後らしい。

「しばらく、この世界に戻つてくることも難しくなるから、急だとは思ふが身の回りの支度をしっかりしてきなさい」

との事である。多分この世界で、誰かの世話になつていゝのだと

思ったのだろうが、残念。ほぼ身一つの生活だ。挨拶すべき人は居るが、そう荷造りするほどの物などは最初から持ち合わせていない。とはいえ、綺麗にしてから行けるならその方がいいか。

明日明後日は掃除と挨拶回りに費やされる事になりそうだった。

まだ暗い早朝からの掃除を終え、綺麗にした室内を見回す。

うん。三ヶ月ちよいとは言え、世話になった家だ。雨漏りしては修理し、風で戸が外れては修理し、の手間がひどくかかった家だったが、自分の手一つでここまで整えたねぐらなので、やはり感慨もひとしおである。山の稜線からそろそろと顔を覗かせる太陽を見て、そろそろ行けば丁度いいかと思い、いつもの木刀をひっさげ、動きやすいように髪をバンダナで纏める。

軒先で頬をぱんと叩き気合いを入れる。今日は勝つ。……という気分で行く。

定例となっている神社での早朝鍛錬である。最近では何とか恭也には躲されるより打ち合うか、逸らされる事が多くなった。未だに一度も当てた事がないが。

美由希相手なら力で押し切れる……が、体のスペックでのごり押しというのはとてもあれだ。うん。すごく釈然としない。

そんな美由希も才能は俺なんかより余程潤沢にあるようで、一つの技や型を覚えるのは遅いものの、一つ覚えてしまふとそれが崩れない。

恭也が思わず愚痴ってしまうほどの才能らしい。俺ぐらいの年ごろになれば今の俺よりずっと上なんだろうなと、背中を煤けさせながら言っていた言葉は忘れない。後々でのからかいの種として。

「というわけで、ちょっと今日は気合い入れていくぞ恭也ア！」

「何が、というわけなのか知らんが。来い」

ともあれデッドヒートが繰り広げられるわけもなく。

いつも通り脳天をスパーンとされ、ぐもおおおっと地面を転げ回った。気合いや気力でいきなりパワーアップするのは主人公の特権だったらしい。

「ぬー。最後まで御神の技とやらも出させられなかったか」

「最後？」

明日引越すんだよ、と言うと、心持ち寂しげに「そうか」とだけ返してきた。どこまでもこいつらしい。

美由希にも挨拶しないとあって見ると。

「……遠くに行っちゃうの？」

目が潤んではる。いや、ちょっと、これどうすれば？ お、おう？ などと自分で言っても慌てるだろう声が出る。アイコンタクトで恭也に助けを求めるとニヤニヤ笑っている。おい、妹が泣きそうだぞ、それでいいのか高町兄よ。

「あ、ああ、ええとな。また会えるし、落ち着いたら手紙出すから、な？」

「……よかった……友達また……居なくなっちゃうかって……」

あくあくしておられる……何か気付かぬうちに地雷を踏んでいたようだった。

あーよしよしと子供をあやすように軽く抱いて頭の後ろをぽんぽんする。

しばらくして……泣き止んだ頃には妙に顔が赤かった。

美由希の後ろで恭也がさらにニヤニヤしている。こいつ案外人を

おちよくるの好きだろ？

……恥ずかしかつてるだけだよな、美由希は？

「かーさんが言っていたが女は小さくても女だそうだ」

そんな事をぼそつと恭也が耳打ちしてきた。

いや、それ言われたのお前だろ？

「それとな、その木刀はやる。餞別だ」

さりげなく進呈された。むう、俺からも何かやりたいが……そうだな。

「恭也、美由希ちゃん。二人に秘密基地を進呈だ」

怪訝な顔をする二人に俺の整えたねぐら、廃工場の場所を教え、森に近いし、何より人目を気にする必要がない。修行場に最適だぞ。ただし、行くなら明後日からな。と言っておく。

神社以上に人の気がないからなあそこ。これから美由希もぐんぐん恭也のような変態的な機動をする剣士になっていくのだろうし、十分に暴れられる修行場は必要だろう。

高町兄妹との挨拶を終えた後も、いろいろと挨拶回りは続いた。

三ヶ月も生活していればそれなりに人付き合いというものも出てくるというものだ。

空き地の子供たち、何故か最近任侠映画でも見たのか会ったび仁義を切ってくる安田。結局、調子に乗ると空気が読めなくなる癖が直らなかつた南部。

商売相手の釣り場のおっちゃん達、砂浜でバーベキューによく来ていた大学生グループ。

弁当屋のおかみさん。フリーマーケットのお姉さん。

……あ、そういえば、両親がやっているとかいう喫茶翠屋だったか、美由希から誘われてたけど行くのを忘れていたな。

しばらく前に、高町夫婦のピンクオーラによる恭也の煤けっぷりを見て以来、何となく避けていたのかもしれない。

今思えば、恭也が武者修行とか時代錯誤の事をしていた頃、美由希は何だかんだと理由をつけて外に居たがったが、あれもそうだったのだろうか……

両親が仲むつまじいのは良いことなので頑張れとしか言いようがないのだが。

一通り回り終え、ねぐらに帰ったのはもう日も傾きかけている時間だった。

軒先に干してある魚が目に入る。……これも何とかしないとな。一つ思いついた。

昨日の夜は美味しい食事を頂いたので、今度はこっちから馳走することにしよう。猫の好きそうなものはかりあるし。思いついたら即電話である。ついでに、少し散財して付け合わせとワインでも買ってくるでしょう。

どんなメニューにするかなどをつらつらと考えながら、最寄りのデパートに足を向けた。

俺の先導により招かれて早々、目を塞いで天を仰いだのはグレアムの爺さんだった。ひどいリアクションだった。この、門を抜けてすぐ目に入るぼろぼろの廃工場見れば気持ちも判るけどね。

どんな暮らしをしていたんだと聞かれたので、正直に話すとオウジーザス…とか小声で漏らしていた、感心はちよつとされるかもと思ってたが、そこまで驚きポイントが……？

首をひねっても仕方ないので、奥の小屋近くに設置した、食器棚を改造して作ったテーブルにつかせて料理を運ぶ。

と言つても時間もなかつたしさほど、複雑なことはいない。  
付け合わせの生野菜のサラダや、パン、チーズ程度である。

メインディッシュは肉、魚の一斉在庫放出である。

竈にかけられて程よく熱された網の上に油を塗りつけ、適当に切った肉、魚を置いていく。しかしリーゼ姉妹の視線がすごいことになっていく。ロツテさんなどは俺が焼いているすぐ後ろでうずうずと見ているのだが、少々身の危険を感じないでもない。

ちなみに最初は鴨肉だ。野性味溢れる鴨肉はこうやって炭火で焼き鳥にして塩胡椒でシンプルに食べるのが一番旨いと思う。昨日捕まえ、今朝方絞めたものだ。

おっと、爺さんには脂がきついかもしれないので切ったレモンの皿を出しておくか。

夏場なので後は塩漬け肉や燻製肉、魚のスモークになってしまふが、どれも野趣溢れるもので、猫姉妹にはとても好評だった。

ワインはせいぜいがボルドーの有名どころくらいしか知らないので、酒コーナーで店員に聞いて適当に買ってきたものだったが、そう外れではなかつたようでゆったりとしたペースながらも着実に減っていった。というか、英国人には足りなかつたか？ 英国人というと、こうパブで大ジョッキを傾けているイメージがあるな。

そんなことを思いながらグラスに口をつける。

水だと思つたら残念、ワインだったんだ。そう、これは事故以外の何者でもない。旨い。子供ボデイだからと自重してたまるものか。対面でグレアムの爺さんがおやおやとか笑っている。

ちなみにリーゼ姉妹は二人、猫形態なので二匹か？ で、もつれあつてごろにゃんしている。理由は簡単デザートに出したキウイフルーツの効果だ。そう、マタタビ科マタタビ属和名オニマタタビのキウイフルーツである。ちょっとした悪戯心だったがこれほど効果があるとは……今度またやろう。カメラでこの姿を残せないのが心底残念だ。

「今日は、楽しませてもらったよ。娘達もあれ以来なかなか心からリラックスできなかったようだしね」

もつれ合って戯れているリーゼ姉妹を見て微笑むグレアムの爺様。見た感じも言葉も好々爺といった感じなのにどこかで硬いところがあるような……わからん。

少しふわふわしたものを感ずる。

……酔ったか。あれしきで。悔しい。でも感じちゃうびくんびくん。テンションが変である。まあ、楽しめたというなら。

「それなら、良かったよー。歓迎した甲斐があるあね」

「ところで、君の保護にあたって申請する名前が必要になるのだが

……」

「……名前？ ああ、適当に付けちゃったしね」

にやりとグレアムの爺さんは笑い。

「とても君にぴったりな名前を思いついたのだよ。差し支えがなければ私につけさせて貰えないかね？」

いかん、睡魔が。スイマーが……

「あー……ツバサって呼んでくれる人も居るから、そんだけ残してくれれば……好きにして……」

「ふむ、では決まりだな」

あれ、何かデジャビュが……あれ？

「生命に溢れる野生児の君にはその性を補う名前を……『理性』の意味を持つティーンと名付けよう」

うん、これなら見た目通りなかなか可愛らしい響きだ、などとおっしゃる。……て、ええ？

「さて、出立は明日の午前だ。ここの後片付けは私たちに任せて子供は眠りなさい」

「ぬ……む、客にやらせるわけには」

「アリア、この子を寝場所に連れて行ってあげなさい」

はいお父様、とアリアさん。いつの間に復活を……いや、それよりな、まえ。

そして有無を言わず布団に入れられ、その心地よさでいつしか意識はとろけてしまった。

「しまったアーツ！」

そんな自分の叫びで目を覚ました。ばつちり覚えている。

酒に酔って、眠くなっていたところで、名前を……

いや、自分のネーミングセンスとかはかなりどうかとってたので、人の名前にケチつけれる筋合いはないんだが。

うむ。何か釈然としない。

「ティーノ……ていの……なあ？」

名前の響きを舌で転がしてみる。

確かに見た目日本人じゃないから良いの……か？

ただあからさまにこう、外国系の名前は違和感がすごいというか



……急に妙なあだ名でもつけられたかのような心持ちになる。

もつとも、アリスとかシルヴィアとかあからさまな女性名でない分まだグラム爺様の優しさなのだろうか？

惜しむらくは濁点。ディーノだったら普通に居そうだ。

外に出ると既に日が昇っていた。

日頃の習慣を考えるとびっくりするくらい寝坊だ。

どうもこの身体のアルコール代謝はよろしくないらしかった。

「ふむ、起きたかね？ おはよう」

何とすでに家の前に三人とも来ていた。

そういえば出立は確かに午前とか言っていたような気がした。

「あー、おはようさん。えーと、荷物はもう纏めてあるから、身支度だけするんで20分ほどまってるな」

「何、慌てないでも構わんよ」

と言われても、実際のところ荷物といっても精々使えそうな服とか木刀、ちよつとした覚え書き程度である。バッグ一つで収まっている。

くみ置きの水で顔と頭を洗い、体を拭く。身支度を調べ、それで準備は完了である。

何でも、その管理局へ行くには次元港がある世界までひとまず魔法で転移してから、入管手続きの後行くことになるらしい。

「さて、行ったらしばらくはこの世界に来ることも出来ないだろう。やり残しはないかね？」

思い出した事があり、ちよつと待って貰う。

今までのすごしたねぐらに向かって手を合わせ感謝。

「ありがとうございました」

一拍置いて背を向け、三人の足元に広がる魔方陣に足を乗せる。

目で、良いかね？ と確認してくるので大きく頷いた。

さて、これから行くところはどんな場所なのか。

繋がっている道先は見えないものの、踏み出す方向は見えたようだった。

歩くだけ歩いてみるとしよう。

## 八話（後書き）

野生児 命名

の伏線回収。

そしてその命名がまた見え見えの伏線になったりしてますが、ひとまずこれで一部というか起承転結のうち起は終了です。

## 幕間一

無機質な電子音が幾重にも重なり、その狭く暗い部屋に反響する。ぽこり、ぽこり、と培養槽の中を攪拌する気泡が生まれては消えてゆく。

あまりに幼すぎる少女の全身には不似合いで不格好なチューブが絡みついていてた。

時折生まれたての雛が首を伸ばし羽根を伸ばすかのように、少女もその背中の小さな翼を伸ばし、顎を上げ小さなあくびをした。

いつしか白衣を着た男がその培養槽の前に立っている。まるで宝物のように少女を見つめ、そっと無機質なガラスの筒を撫でる。

どこか少年期を抜けきらないかのようなその目が大きく開き、細くなる。

いつからだったろうか、少女はそのまどろみからゆっくりと抜け出していく。

髪の色と同じ色の長い睫が浮かび上がってきた気泡に揺らされた。まぶたが恐る恐るともいったかのように開き始め、やがて、虚ろに開いているだけの目は焦点を結んでいく。

白衣の男は何かに耐えかねたかのように一つ身震いをすると言った。

「おはよう」

少女を最大限歓迎するかのように、両手を広げ、慣れない笑顔さえ浮かべこう言った。

「おはよう……はじめまして、アドニア」

幸福を招くアドニスの花言葉から取ったんだ、と理解できようはずもないのに話しかける。

こんな花だよ、と慌ててその明るく輝く黄色の造花を胸のポケットから取りだそうとして　落としてしまった。

あ、あ、と慌てながら落下途中に手を出し、受け止めようとする。かろうじて両手で受け止められると、ほっと息を吐き、それを少女の目の前に差し出した。

「本物でなくてすまないね。本物は太陽のように綺麗なんだよ」

何が気に入ったのか少女はその培養槽の中で手を伸ばす。

ただ真似をしているだけなのかもしれない。

男がその調子でしばらく寝物語のような、一人語りのような他愛もない話をしていると、いつしか少女のまぶたは再び落ちていた。

男はその寝顔を飽きることなく見続け、一つため息をつく。

瞑目し　目を開けた時、何かを捨て、何かを決めた目になっていた。

ガラスの中の小さな少女に語りかける。

「ねえ、アドニア……僕の子よ……僕はどんなことになるうとも君を守るよ。例え」

男は唾を飲み込んだ。ごくんとという音がその静かな部屋にやけに響いた。

「例えどんなことをしようとも」

## 九話

「いや……いやいやいや、なにこれあり得ん」

何という事か……今日はとてつもなく夢見が悪かった。

少女と一見、科学者の夢だったが、あれか、父とか欲しい年頃なのか？ 深層心理とか確かめたくない……な。

というか台詞回しといい何というか、頭を抱えてベッドを転げ回りたくなってくる。

いや既に転がったが。頭抱えてうわぁーと。

「ひ……ひどい目覚めだ……」

唸りつつ、顔を洗いに一階の洗面所まで降りて行く。吹き抜けになっっている階段を下りていく途中の窓から外を見た。また、今日も見事な朝もやなこと……

ここミッドチルダ東部の山間いは夏になってもそれなりに涼しい。過ごしやすいとは言えるのだが、毎朝冷たいもやが立ちこめるともう涼しいを通り越して、肌寒さすら感じる事もしばしばなのだった。

水で顔を洗って気分をすっきりさせる。

洗面所の鏡を見ると、美人なのに適当な表情のせいで三枚目な姿が映っている。切ろうとするとなぜか妹たちが悲しげになるのかなかなか切れず、いつの間にかセミロングと言えるくらいまで伸びてしまった髪を後ろで纏めて髪ゴムで縛る。

勝手口に傘と一緒に置いてある馴染みの木刀を持って庭先に。

早朝のしんと静まりかえる空気が気持ち良い。

バランスを取るように体の正中線の延長で木刀を片手で持ち、真上に振り上げ、正面に振り下ろす。

思った通りの線を木刀が通ることができた。今日は夢見のわりに調子が良いようだ。

ふっと止めていた息を吐き、素振りを始める。

ただ、無心に振る。

そのうちにとりとめもない事が頭に浮かんで消えた。

もうこの庭先での毎日の日課を繰り返し、一年。

それなりに充実した日々のせいか、ちょっと昔にすら感じてしま  
うが。

あの、故郷とは酷く似ていて、でも少し違う『地球』を離れてからの事を思い出す。

グレアムの爺様に連れられ、行くことになったのは時空管理局本局とか呼ばれているスペースコロニーだった。

次元航行船の中から初めて見た時はそりゃ驚いた。魔法とか魔法とか魔法とか言っていたのに、目に映るものはSFである。何という魔法詐欺か。……もっとも、航行船とか局員が使っているデバイスとかで何となく予想はついていたのだが。

次元漂流者としての登録を終えた後はひたすら検査、検査、検査である。

俺のような例は今までに無いそうで、覚えている限りの事を話せさせられるわ、やたら細かい精神診断をやらされるわ、身体の立体系スキャンはもとより、内蔵や脳機能まで検査である。

グレアムの爺さんが話していた、精神干渉型の魔法というものも試してみるも、難しい顔でかぶりを振っていた。渋る医者に頼んで聞き出してみると、人間の精神構造じゃないとか……これは凹んだ。

精神診断ではとりたてて異常な結果がでなかっただけに凹んだ。と言っても聞けばサイコパスとかそういうことでなく、処理をする脳に過負荷がかかって普通ならとっくに死亡。最良で植物状態とか言

われた。一部の記憶が段々薄れて行ったのはそのせいかもしれないとか。普通に動いているのが奇跡というより一周回って悪魔の悪戯めいていると。……何それ怖いである。正直少し漏れた。

「管理局の技術なら何とかなると思ったのだけど……ごめんなさいね」

検査の為にあてがわれている部屋まで戻ると、付き添いをしてくれたアリアさんが眉を八の字にしてすまなさに言った。

……ああ、局の医療なら当てにできるとか言ってた事が。

へたれた猫耳が反則だ。全力で愛でたい。

あ、いや。

「？」

実のところ、そちらは気にしてないし、自分の心の問題はやはり自分で解決したいので、無問題。……いや無問題ではないが、びびっても仕方ないというか。大分前に開き直ったことでもある。

むしろ、自分の身体の事が知れて良かったよと言っておいた。

これはへたれ耳猫さんへのサービス精神などでなく、本音だ。

この身体が標準より力強い身体なのは知っていたが、データに示されると驚くばかりだったのだ。

筋密度が違う、骨密度が違う。そもそも染色体が違う……どこのオーガー族かと。翼がひよっこり背中に生えてる通り、純粋な人間ではないらしい。どちらかというところと亜種。

ただ、この管理局というところは様々な世界に接触するだけあって、そこらの認識は曖昧なようだ。

極端な話、頭が一個手足があつて言葉と意思疎通ができれば人間という扱いつばい。ありがたいが何ともアバウトな話だった。

医者としてはフィジカル面の方はあまり珍しくもないデータらし



いが、ちょい前まで普通の人間をやっていた俺としてはちよつと興奮である。目先の事に集中して肉体面での確認をしなかったのが悔やまれるくらいだった。うん、いずれ分厚いステーキ肉を焼いて「モニユ……ムグ……」と食べてみる事にしよう。

「そういえば、今更なんだけどグレアムの爺さんって実は大物だったりする？」

と、アリアさんに聞いてみる。

そう、実はこの本局に来て判つたのだが、あの爺さんやたら敬礼されるのだ。前言つてたトップ魔導師とかつてそんなに凄いのか。それに、俺自身は書類申請のために一回入ったきりだが、やたら立派な一室を使っていたものだった。

アリアさんは人差し指を唇に当て、小首をかしげている。何か思い返しているようだった。

「あ、そう言えばまだお父様の事を詳しく話してなかったかもね」

聞けば提督さんらしい。歴戦の勇士らしい。艦隊指揮官であったこともあり、執務官の長でもあったらしい。

いや、管理局の役職名とかよく判らないんだが、何だか字面だけでも凄そうである。

んー、何だか凄そうだが、ぱつとこない。しかしそれって俺もグレアム提督と呼んだ方が良いだろうか？

その事を聞いてみると。

「人前でなければ、好きに呼んでいいと思うよ？ お父様も何だかその率直な物言いがかえって気に入ってたみたいだから」

人前だと提督と呼ばれるのも仕事のうちだから駄目だけどね、と

言い残し、こちらの頭を一撫ですると部屋から出ていった。仕事らしい。

部屋から誰もいなくなると俺はベッドにぼふりと身を埋めた。

サイドテーブルに置いてある魔法が使えない人向けの情報端末を手に取り、暇つぶしも兼ねて特に目的もなく雑多な事を調べていく。

と言つても、何分言葉が読めない。ミッド語とか言うらしい。翻訳ソフトを通しながら眺めているのだが、やはりちよつとでも本格的に知りたいならミッド語の勉強は必須のようである。

実は妙な新種のウイルスだの細菌だのがついてないかの検査結果がでるまで病棟から出られない事になっているので、暇なのだ。

『猿でも判るミッドチルダの言葉』という差し入れされた本を取り出す。猿か……鳥でも理解できるだろうか？ 本当に鳥頭になっていないことを祈りつつ、久方ぶりの勉強を始めた。

そんな事をしつつ一ヶ月。

一通りの検査も終え、出た結果は、色素異常以外は特に健康面、精神面共に異常なしとのこと。というか精神面の方は常識の埒外だったので……匙を投げたらしい。ともあれ、安定はしているそうなので今すぐどうこうと言つたものではないとのこと。

それと、一応、こちらの地球で同じ事が起きるのか判らないが、この先起こるテロや地震についての事を言つと、考えない方がいいとのことだった。

考えてみたら当然かも知れない。俺の話した事を鵜呑みにしたところで、パラレルワールドで起こった事が地形すら違う、歴史も恐らく違うだろうこちらの地球で同じく起こるとは考えにくいし、そもそもパラレルワールドを考えるより他の可能性……例えば違法研究者による記憶や精神に関わる実験、ロストロギアによる記憶、精神への干渉を疑われているようだ。

色素異常については語るまでもないだろう、アルビノ状態のことだ。ついでに虹彩異色症、オッドアイと呼ばれるそれだが、も患っ

ている。

こちらはカラーコンタクトの着用と肌の保護クリームを渡された。これらはどちらも紫外線のほとんどを遮ってくれるそうなので、かつ体への負担もほぼゼロ。コンタクトはつけっぱなしにして寝ても一ヶ月は保証、クリームは通常の保湿クリームとして毎日使っても良いそうなので……地球のそれより遙かに進んでいる。妙なところで技術差を感じてしまった。ともあれ有り難く使わせてもらう。

ミッドの言葉というものにも大分慣れてきた。人間成せば成るとはよく言ったもので、医者と話す時以外は翻訳装置も外して、暇な時にはひたすら端末でニュースだの何だのをちまちま辞書を使って翻訳。気付いていたらそれなりに馴染んでいて、専門用語や変な言い回しは苦手だが、日常会話くらいなら既に何とかなるし、文字も子供の読む絵本くらいなら何とかなつた。

この検査を終えた後の予定だが、そこは管理局の保護プログラムである程度規定されているらしく……というか、見た目じゃなくて16くらいで申請すればよかったか？ 10歳という申請年齢のために児童養護施設に入ることになった。グレアム爺さんは少しすまなさげにしていたが。これは……うん。俺も考え無しだった。申請するときに見た目通りでいいんじゃない？ とか軽々しく記入してしまったから。数ヶ月も子供扱いされて生活してた弊害が出てしまった。今思えば種族特性なんですとか言えば多分20と言っても通る事が判るが後の祭りだ。

養護施設については爺さんの肝いりで、というか後援しているらしい施設を紹介してもらおう運びになった。

来た場所はミッドチルダ……管理局の発祥した世界で、本局とは別の意味で本拠地とも言うべき世界だとか。その東部11区画という場所らしい。

魔法の普及した世界らしいが、別に人がびゅんびゅん飛んでいるわけでもなく、交通機関は地球とそれほど変わるわけでもなかった。

ただ、化石燃料を使っているわけでもなさそうで、やたら静音なバスから降りると結構な山間이었다。北東と北西に大きな山が見える。二つの山に挟まれる形のふもとらしい。隣あった12区画が観光地、第10区画が工業地になっており、そこに働きに出る人のベッドタウンになっていているそう。元は田園地帯で果樹栽培も下火とはいえ未だに有名ならしい。

10分程歩いた所にログハウス風の洋館があった。かなり大きい開かれた門の向こうには中々見晴らしの良い庭になっていて、整えられた花壇が彩りを添えている。

「いらつしゃい。そろそろ来る頃だと思っていたわ」

門の前で出迎えてくれたのは一言で言えば、品の良いお婆さん。

真っ白な髪に皺の刻まれた顔。グレーの瞳を細めて柔和な笑みを浮かべている。背筋はぴんと伸びており、こちらにゆっくりと歩みよってくる姿も微塵もゆらぎが感じられなかった。

「グレアムの爺さんは余程親しいのか、やあ、しばらく。と声をかける。」

「この子が例の子。ティーノだよ。結局、局の検査では何も判らないも同然だった。まあ、扱いは難しくなるだろうがよろしく頼むよ」「扱いつて……爺さん、俺はそんなに手間かけさせるつもりはないよ?」「

ひとしきり軽口を叩いていたら苦笑された。

「初めまして、ティーノ。私が当院長カラベル・アルメーラですよ。あなたの事情は提督から伺ってるわ。これからよろしくお願ひしますね」

そう言つて俺の前にしゃがみこみ、微笑んだ。くしゃりと頭に手を置かれたので何ぞやと爺さんを見る。何か悪戯でも思いついたかのように口元が笑っている。

「カラベルさんはかつてベルカ貴族達の教師をしていた事もあつてな。様々な分野に精通している万能の教師のような人だ。君は分別こそあるものの知らない事が多いだろうからね、万事教えてもらうといい。……そうだな、私からも頼むよカラベルさん。この子の道行きも、あの子達に負けず劣らず苦勞をしそうではあるからね」

その時はまったく思つてもいなかった。

「ええ、任せて頂きましょう。私の名誉にかけて立派に育てあげてみせますから」

淑女教育などが始まるなどは。

「今思えば、あの時どんな手を使つても強固に反対しておけばよかったのだろうか……」

時にそんなことを思つたことも2度、3度ではない。

むしろ20度、30度となく思つたものだ。おおむね遠い目をしながら。

最初にカラベル先生、今は先生と呼んでいる、が提督から事情を聞いていたと言うのは嘘ではなかったらしく、今はこんな体だとしても数ヶ月前は男性として生きていた記憶があると言うことも知っていた。その上で動じず揺るがず「それがどうしましたか？」などと、さらりと言われて口をぱくぱくさせて絶句してしまつたのは未だに覚えている。

そんなことは前提の上で、人の世とうまく付き合つてゆくために

はまずは自分の身体ともうまく付き合うこと……らしい。

「厳密には違いかもかもしれませんが、私が性同一性障害の子を見てきたのも二人、三人ではありません」

まずは、嘘だと思ってもいいですから一週間ほど続けてみましよう。などと言われ、つい頷いてしまったのが運の尽きだったのかもしれない。

教え方が上手すぎるのだ、この人。

決して厳しいとは言えない。ただ、どこをどういじれば人がどう伸びるのかを把握し、手の平の上に乗っている事を感じさせずに手の上で転がす。そんな先生だったのだ。

いや、それは責任転嫁というものか。

カラベル先生の教え方がとても巧みであったのは間違いないが、砂地に水が染みこむように馴染んでいってしまったのは『私』という存在だ。

これが、精神は身体に依るといふ事なのだろうか。

もっとも、女性として見られること、女性として振る舞うことに抵抗がなくなつた程度なので、実のところあまり変わってないのかもしれないが。

さらに、自分の身体の使い方というものも判ってきたような気がする。今思えば地球にいた頃の身体の動かし方というのは本当に力任せだったという事が判る。当然だ。男性と女性の身体では使い方に違いがある。意識が変わるだけでも相当に動かしやすくなっていた。

ちなみにカラベル先生に教えてもらったのは、そんな事だけでなく、例えばミッドにおける一般常識、例えば言語、例えば歴史、例えば文化、例えば数学、例えば科学。

あの人は本当に万能の先生だった。

もう70を越えているらしいが、背筋を曲げて年寄り臭い動きは

一切しないし、何でこんな田舎の養護施設の院長などしているのだ  
ろうか、一々不思議でもあった。もっともそれは後々になって、こ  
の人でないと収めきれないからというのが判ってきたのではあるが。

「ふッ」

早朝の素振り、その最後を吐息と共に放つ。

それまでは空気を裂いた音がしていた切っ先が、空気を切った甲  
高い音になる。銃の弾が通り過ぎるような高い音だ。

この剣速だけなら恭也にも負けない自信はある。とは言え柔よく  
剛を制すというか、読まれてあっさり躲されるイメージしか沸かな  
いのが癪でもあるが。

何とも悔しい。うん、別に男だろうが女だろうが悔しいというの  
に違いはなかった。別に恭也みたく剣が命ってわけではないが、い  
つか一発いいのを入れて凹ましてやりたい。

一応の残心を終えると、大きく息を吐く。

汗が一気に噴き出してきた。

素振り中は汗も出てこないのに毎度不思議なもんだ。とりあえず  
柵にかけてあるタオルで拭く。

辺りを見回せば漂って居た朝もやもなくなり、見晴らしが良くな  
っている。おなじみの新聞屋さんが来たので受け取り、そろそろ良  
い時間なので子供たちを起こしに行くとする。

二階の子供部屋へ行くと大人しい子なのにやたら寝相の悪いラフ  
イがベッドから落ちていた。持ち上げてベッドに一旦降ろしてから  
声をかける。

「おはよー、ラフィ。はいはい、しっかり起きてね」

「……ティノ姉、おふぁ……よ」

おはように欠伸が混じったようだ。カーテンと窓を開けて涼しい風を入れる。

「じゃあ、いつも通りラフィはこの部屋の皆を起こして」  
「うーい」

とまあ、年少組は大部屋で寝ているので、中の年長さんに起こしてもらうのが決まりとなっている。

隣の部屋に行って、ベッドにかがみこみ、揺する。ちなみに先のラフィもこのティンバーも同い年の8歳だ。

「ティンバー、朝だよー……お？」

えーと、何と言えはいいか。

胸を捕まれているのだが……11歳児の胸触って何が楽しいんだ。悪戯でこういうのは鉄板だったのは判るんだが。

「ティーノのつるぺた揉んだぜー」

「あー……十分堪能したか？ んじゃお仕置きね」  
「ぐぼオツ」

将来セクハラ男になってはいかんで、一応ゲンコツを落としておく。

「はいはい、痛い痛い痛い残りー」  
「飛んでいかないのかよっ！」

ぶーたれるティンバーのたんこぶを撫でながら魔法の言葉をささやいてやる。そりやお仕置きだからねえ。



ラフイに言ったのと同じように皆を起こすようにと言って部屋を出る。

10歳以上は自分で起きる事になっているので、子供の目覚まし時計役はこれで終了である。

ちなみに私も含めて10歳以上の5人はそれぞれ狭いながら個室を割り振られている。

その一室のドアが開いてぼーっとした顔が出てきた。

「おはようデユネット」

「……」

何も見えていないかのようにふらふらと歩いていく。

……まあ、いつもの事だ。

さて、今日は料理当番の日なので、これから朝食の時間である。

一階のキッチンに行き、共用のエプロンを装着。

早くも気分が乗りはじめると出てくる鼻歌を歌いながら、献立を即興で考え始める。

まずはとりあえずのサラダ。これは適当に生野菜をちぎってドカ盛りによければいいので楽だ。

昨日の夕食に出たロールキャベツが残っているので、コーンスターチでとろみをつけ、オレガノを少々。煮詰めておく。冷凍にしておいたパイ生地の上にそれを乗せ、チーズをかけてパイで挟んでオーブンでこんがり。その間に色々昨日の残っていた野菜をブイヨンで煮て、牛乳とバターを加え火を止める。さらに煮ている間に卵を人数分割って生ミルクを少し混ぜ、ベーコン、人参、ブロッコリ、タマネギを一口サイズに切って一緒にした後、火をとめたミルクスープを降ろして、フライパン二つを使って交互にオムレツを焼いていく。

この辺りで朝の掃除を終えて皆が食卓に集まり始めたので、出来たオムレツを運んでもらいながら人数分をひたすら焼く。

その数一六枚。火力があるので一枚一枚はあっという間に焼けるのだが、やはり枚数があるので多少時間がかかるな。

焼き終わったところにはオーブンのロールキャベツ入りパイも出来上がる。

スプーンを軽く温め直して配れば今日の朝食は完成である。

手を拭いて食卓についた時には、うむ。幼少組の反応がかなり良さそうだった。子供ってパイ好きだよな。チーズたっぷりなの奴。

さて。

ミッドには宗教色というのはあまりないので、食前の祈りみたいなのではないのだが。

「今日の糧を得られた事をあなたたちの神様、私たちの神様、育んでくれるこの地に感謝して頂きましょう」

と先生が穏やかに言う祈りが食事の合図だ。

これにはこの養護施設には訳有りの子供が多いのが関係している。管理局に保護される子供は数多いが、特殊な事情。例えば私のように何もかも原因不明のままひょっこり現れ、検査すればするほど意味不明な子供など、通常の養護施設に入れる事が難しいものが割と集まっている。中にはただの問題児もいるが。その為出身地方や考え方、宗教にもばらつきが多いので、こんな食事の合図になったらしい。

私は私で、おなじみの「いただきます」をやってから食べるのだが、小さい子はこのシンプルなのが判りやすいらしく、だんだん勢力を拡大中である。

食事が終われば、次は一服の休憩の後、座学だ。幼年組はかつて初等学校で教鞭をとっていたという近所のお婆さんが来て、ボラントイアで面倒を見てくれる事になっている。

私を含めた10歳以上の子は学力にもバラつきが凄いので、カラ

ベル先生による個別授業という形になっている。

一年も経っているので、それなりに覚えることができたのだが、得手不得手はやはりあるようで……自然科学、社会、歴史は軒並みいい点数だったのだが、数学、国語、科学は鳴かず飛ばずだったりする。国語と言ってもミッド語の話だ。どちらかというと英語に近い表音文字で、話す分には問題ないものの、文学表現などを読み解け、とかになるともうお手上げである。数学、科学は……言うに及ばず。

午前の座学が終われば、昼食の時間だった。軽めにパンとチーズ、果物で済ませ、幼年組はお昼寝の時間、その他は実習だった。私などは要するに礼法をこの時間に叩き込まれている。それはもう微に渡り細に渡り教え込まれた。と言うか気付いたらダンスまで踊れるようになっていた。花言葉や誕生石の由来なども一通り知ってしまった。どこで役に立つのかは判らないが。

それが済めば、自由時間。昼寝から起きた幼年組が大変暴れるので一番体力の余っている私が引率役になることが多い。

ちょっと庭から出れば山に囲まれているので、子供達を連れて遊びなどに連れていったりもしている。

これも最初は危なगरれたのだが、何度かボランティアで引率についてきてくれた獵師さんの証言で今は割と自由にやらせてもらっている。

なんだかんだであの地球で暮らしていた三ヶ月の間にちょっと野生児として目覚めてしまったのかもかもしれない。

夕食も当番制だが、朝とは違う人が作る。例えば今日はデュネットだ。私より一応5歳上と言うことになっている16歳と言うことだが、実のところその年齢よりマイナス3歳は若く見える。ちゃんまい系の黒髪少女だった。無造作にお下げを二つ作って前に垂らしたり後ろに垂らしたりしている。いつもぼーっとしているが、料理は普通に出てくるので先程自由時間で採ってきたキノコを渡しておく。じーっと三十秒ほどキノコを眺めていただろうか、口を開く。

「ティーノは」

「ん？」

「甘いのと辛いのが、いい？」

「……甘いので」

こくと頷くと、オリーブオイルできのこを炒め始める。

ただ、台所にはシチューのルウが最初から置かれていたのだけど、辛いので言ったらどういうものになっていたのだろうか？

喚く好奇心を抑えつつ、キッチンを後にした。

しばらく経ち、出てきた夕食はうん。普通のキノコと鳥肉のシチューである。

それにピクルスやマカロニサラダなどの付け合わせが置かれ、オーブンで再度焼きを入れたパンを並べる。

いつもの合図の後食べ始める。うん、美味しい。

ただ、気になってしょうがない。

「ねえ、デュネット」

「……？」

「シチュー作る時に辛いので言ったら何になってたの？」

「多分」

「多分……？」

「ゆごすにきいなるよろこびをもたらすものが」

よく判らないがネタとしても危険な気がしたのでデュネットの口を塞がせてもらった。

夕食後はトランプなどで楽しんだり、本を読んだり、先生は編み物などをしたりしている。

まったりした趣味の時間と言っていいだろう。

私はというと、自分の部屋で教本片手に魔法の練習中だったりする。

そう、何と私にもリンカーコアが確認されていたのだ。

肉体的にもまだ成長しきっていないし、これから変動することはありそうではあるが。

今のところ計測された魔力値は武装局員の平均値の上の方らしい。アリアさんに言わせると、十分魔法使えるし、あまり縛りもない程度のほどよい素質、だとか。

あまり褒められている気もしなかったのだが、グレアムの爺様はリーゼ姉妹も含めたその馬鹿戦力のおかげで里帰りも気軽に行けないのだとか。そういうのを聞くとほどよい素質という評価も素直に受け入れられそうだ。

ともあれ、私が真つ先に覚えたかった魔法とは、以前リーゼ姉妹の使っていた認識障害である。

何でも幻術魔法とかいうあまり人気のない渋い魔法だそうだが、私のようにどうしても目立つ翼が背中に生えてたりするとその有用性は死活問題にもなってくるというものだ。

確かに本局で検査してる間は出しっぱなしでも問題にならなかったものの、ミッドにきてみればさすがに私みたいなのは居ないので、また翼を隠すことになってしまっていた。一度開放的に過ごすことを覚えれば中々以前の窮屈さに慣れないのは人の業というものか。そしてとうとう覚えることができたのが半年前。

魔法を習い初めて、真つ先に認識障害を覚えようとして一月。

うん、アリアさんにも同情的な目で見られたり、何度か諦めそうになった。

認識障害はそう難しい魔法でないはずなのに覚えられずに三月。

うん、アリアさんも呆れ顔で、幻術に才能がないのは判ったのだから別の方向で考えてはどうかと言われた。ぐうの音もでなかった。もはや誰もが諦め顔な認識障害の魔法を覚えようとして半年。

やっと発動した。感動だった。これで翼を出したまま生活できる

と喜んだ。あまりの嬉しさにリーゼ姉妹にとっておきの鴨肉のジャーキーを送っておいた。

調子にのって魔法書に乗っていたオプティクハイドという魔法も習得してみようと思い、またもや努力の日々を始める。

これは要するに魔力を使った光学迷彩だ。SF小説ではおなじみでもある。

認識障害は魔力感知が出来る人や勘の鋭い人には効かないらしいので、光学迷彩と組み合わせれば完全に見た目は誤魔化せる。

なんだか全力で後ろ向きな気もするが、それだけ不便さを感じてきたということなのだろう。

しかし、その魔法の習得もこう、巧くコツが掴めないというか、魔力がするつと抜けてどこかに行ってしまうかのような感覚があった。上手くないかない。

と言つても何とか気合いで習得したが、それも半年かけて。

うん。才能ないと言われたけど何とかなるものだった。

酷く時間をかけて覚えたせいかわ、アレンジの仕方にも手取るように判るし、今では走りながらオプティクハイドで翼だけ隠すなんて真似もお手の物になっている。

一年かけて覚えた魔法は二つだけとか、知られた時にはラフィにすら笑われてしまった。

そんな一年余の生活は充実していたが生憎、調べたいものに関しては充実しているとは言いがたかった。

私と同じような姿の有翼種が住んでいる世界、第130管理外世界の事である。

何しろ情報そのものが少ない。辺境すぎる故か。

それこそグレアムの爺様に「まさか、一つの世界に関しての情報があればとは、正直思わなかったよ……」とため息を吐かせてしまった程だった。

初めて会った時に見せて貰った情報と旅行者に渡すパンフレット

よりも酷い内容しか管理局のデータには収まっていなかったのだ。  
無限書庫にでも行けば、見つかるかも知れないとは言われたものの、本局に居た時に聞いた話によると、凄まじい集積状態で未整理のデータの吐き貯めだとか。

気の長さにはそれなりに自信があるものの、さすがにちよつと腰が引けてしまうのだ。

結局決めたのは、管理局員になることだった。

結局、次元漂流者の保護プログラムの下でだと、第130管理外世界は言うに及ばず、地球にも行くことが出来なかつたりする。管理外世界への渡航そのものが認められていないのだ。当然と言えば当然なのかもしれないが。客は客なりにじつとしていてくれと言うことなのだろう。

ならば客でなくなればいいというのが私の結論だった。

幸い地元というにはちよつと離れているものの、東部第3区画にネルソフ魔法学校というところがある。

速成と自由が売りの学校で、飛び級し放題の何とも緩い学校である。

資金に関しては、魔力量に応じての奨学金制度が有り、まあ、計算したところ平の武装局員で一年、技術職で二年もやれば返済できそうな感じではあった。

編入する際には年齢に応じて初等科4年という扱いになるもの、もう子供扱いも慣れたものなので問題ない。

「うっし」

頬を叩き気合いを入れ直す。

取り寄せたパンフレットを見れば次の募集まであと5ヶ月だった。

まずは……苦手な理数系からかな……。

本当に、本当に気合いと努力が必要そうだった。

## 十話

ミッドチルダ東部第3区画。

基本、ミッドチルダ東部域というのは南部と並んで田舎である。農業に向いている土地柄がために技術的な発展を必要としなくても、それなりに収益が上がったということなのだろう。土地が安く、それに目をつけたのが12区画にある巨大テーマパーク、パークロードだったりするのだが。それはさておき、この第3区画もまた例外ではない。少々私の体には大きすぎる旅行鞆をひっさげて、えっちらおっちらと駅構内から歩き出せば。

「うん……まあ、判っちゃいたけどね」

何とものどかな地方の町並みと言ったところか。

駅周辺は栄えているものの、少し離れば畑が広がり、店はちんまりとした小売業が中心のようだ。

「ごそごそとガイドマップを懐から取り出し、道を確認する。

曲がる場所さえ間違わなければ判りやすい道順なようだった。

やがて開かれていく大きな門が見えてきた。

その門に続く大通りにはこれから新学年を迎えるのだろうか学生たちがまばらに歩いている。

年齢はばらばらなようで、私よりはるかに幼く見える姿もあれば大人の姿も混じっていた。

「ここは公立ネルソフ魔法学校。

あれから座学も何とか……うん、気合いで乗り切って、編入試験にきっかり受かった。

しかし、私がまた学校に通う事になるとは思っていなかったが、何とも緊張……いや違うな。何とも言い難いむず痒さがある。

不安要素を数えれば数え切れないのだが、なんだかそんなのは日



常茶飯事だったのである程度慣れてしまったようだった。

それよりも楽しみ……うん、楽しみなようだ。私は。

どうも気分がふわふわしている。いかんいかん。

少し道に立ち止まって整息。ちよいと前に地球に居た時に教えてもらったものだが中々役に立つ。

気を引き締めて門をくぐる。

まずは書類を受理してもらわなくては。

諸手続を終えて、カルガモの親子よろしく担任の教師だという小太りでちよつと勿体つけた初老の男性、パドスール先生の後を歩く。

ミッドチルダの教育システムは地球のものよりもかなり自由度が広く、学校ごとに学年システムが違ったり、酷い場合には学年なんてものがない学校もあるようだった。このネルソフ魔法学校の初等科では編入時は基本的に年齢で決まるよう……そこはある程度一学年に同じ年代を集めるためだろう。その後は一年ごとに進級試験があり、合格すれば一学年上に行くという形らしい。もっとも自由度が売りと言うとおり、飛び級はかなり融通が利き、学力、実技で高い点を取れば中等部を飛び越して高等部なんていうアクロバットも可能なようだ。あくまで、可能ではあるというレベルのようだが。メンタル的な育成についてはあまり関与していない、言ってみれば結果重視の促成栽培的な部分があるので、教育機関としてはどうかとも思うものの、常に人材不足なんて言われている局のニーズに合わせた経営とえばそうなのかもしれないかった。

そんな事を考えていると、どうも教室のドアが既に開いて手招きしているパドスール先生が居る。

うん、ぼんやりしていた。紹介してくれるらしい。

「さて君たち。改めて、紹介しよう。ああ、質問は後に回しなさい。

さて、今年から編入することになったティーン・アルメーラ君だ。

仲良くするようにな」

何ともひねりのない紹介をされてぺこりと頭を下げる。頭を上げる。

……静かだ。

あ、自己紹介とかこういう時するんだっただか？ お、おう、こういったコミュニケーションから離れてたからというのは言い訳にならないが、うつかりしていた……な、何か言わないと。

「し、紹介に預かりました、ティーンです。東部11区から来ました。ええ、と……趣味は料理で、特技は……野遊び？ です。これからよろしくお願いします」

こんなとこでいいのだろうか……？ パドスール先生の台詞を笑えないくらいひねりの無い挨拶になってしまった。というか予測うんまあ、様子を見るとすごく良い印象も悪い印象ももたれていないようなので安心する。てか平均年齢10歳だしね。考えすぎた。ひとまず空いている席に着くようにと言われ一番奥の席へ。

しかし、さすがミッドチルダ。

木製のレトロな机に見えて、しっかり机に情報端末が設置されている。埋め込み式で。椅子なども昔、地球の小学校で座ったようなパイプ椅子のように見えて、カーボン素材？ 軽くて弾性がある。座ると自然に背筋が伸びるようになっていたり、人間工学としても考えられているのだろう。

ミッドというのは見た目はレトロにしつつ、中身をこてこての技術で固めるというのが好きなようで、例えば街中を走る車にしてもオープンカーかと思ったら雨が降れば魔法技術で一瞬にしてルーフが構成されとか。バスの中で手すりや吊り手が付いている割に慣性制御技術でさほど揺れなかったりとか。何とも無駄を楽しむ技術者が数多いと見える。その姿勢は嫌いじゃない。

顔は真面目に、頭はぼーっとそんなことを考えながら、パドスー

ル先生の話、新学期なので定例のロングホームルームというものを聞く。そこらは割と世界共通のようだ。

……どうやら今年一年の目標なるものを書くらしい。端末を介したネットワーク内にクラスで使う共同掲示板というものがあって、そこに乗せて誰でも見れるようにすること。

なんともまた、恥ずかしいというか。これを恥ずかしいと思ってしまふ私はやはり日本人の感覚が濃く残っているのだなと実感した。

「うーん、目標……目標ねえ」

この学校に来た目的つてのがえらくまた生臭いので困る。

素直に書くと、とっとと局員にでもなって自由に動けるだけの権利を得ること、局員はなんだかんだ収入が良いのでそれも魅力。と  
なってしまうのだが。

……普通に書くとしよう。例えば同世代が考える目標となると何  
だろうか？

「今年是新銀河帝国を樹立し、ジーク・カイザー！　と言わしてみ  
せようかと思っています。赤毛の副官募集中」

「今年こそは気功波で月を砕く」

「俺は次元海賊王になる！」

いや……いやいや、これではネタに走っているだけだ。確かに地球ではクラスの一人二人は海賊王になる！　とかは書いてそうでも  
あるけども。

大体、次元世界でネタが判るわけもない、という微妙でもあつて。地球の漫画や娯楽文化というものが着々と次元世界にも浸透しつつあるのは確認済みだった。ちなみに何故か人気なのがナイト  
イダーというちょっと古いアメリカの特撮ドラマ……のリメイクである。車をインテリジェントデバイスにするとは何という発想だ！

と誤った解釈でマニアの間で好まれていたナイト イダーだが、それをリメイクしたものがミッドの子供向け番組で流れている。初めて見たときは吹いた。変形してロボになったのだから。魔法使うし。あれは地球のマニアが見たら喜ぶか怒るか……うん評価の難しそうなところだった。見ていた私も微妙な顔になってしまったのは言うまでもない。

お？ おお、それだ。

「デバイスを使いこなす事」

うん、目標はこれでいいや。

なんせ、モノそれ自体が高いデバイスである。今まで使いたくても使えなかったのだ。養護施設住まいでそこまでこねるのもなんだか気が引けるとこともあるし。魔法教本や調べた情報だとデバイス使うだけでも相当な負担低減になるようで、特に私のようにマルチタスクだの魔法式だのを咄嗟に組むのが苦手なタイプは是非ともお世話になりたいものでもあった。

この学校ではカリキュラムでデバイスを使わせてくれるので、それでいいや。何とも面白みにかけるけど。

さらに取って付けたような理由を200文字程書いて提出……この場合アップロードになる。して課題は終了。終わった人から自由時間になるようで、前の学年の時から仲良しだったらしい同士でつるんで教室から出る子も居る。本を取り出して読みふける子もいる。単位時間で束縛しないやり方は地球の学校と違ってフリーダムなようだった。ただ、1クラス40人ばかりも居れば興が乗って迷惑になるくらいに騒ぎ出す子も当然居るのだが、どうも即座に先生が注意した後連行していった。集団に迷惑をかける行為というのについてはことのほか厳しいようだ。

やがて授業が終わると、好奇心を刺激されたのか私への質問タイムが始まった。どうもクラス替えとかは無いようで、エスカレーター

1式に一年ごとに上がるクラスメイトにとって、私のような編入生や飛び級で割って入ってくるような学生は格好の話のネタなのだろう。

質問タイムの……詳細は……思い出したくもない。驚くほどのバイタリテイでもって根掘り葉掘り聞かれてしまった。あれは疲れる。

「子供って大変だ……」

頭では判っているのだ。

海鳴の空き地で子供相手に遊んでいたように、自然体で振る舞ってあげればいだけなのだ。

ただ、この学校になまじ11歳として入ってしまったので、つい子供らしく言うならどう言うべきだろうか？　なんて頭をよぎってしまう。

要するに、意識しすぎなのだろう。おいおい慣れると思うけども。一つため息を吐き、無意味に肩を揉みながら目的地に着く。

ぴたと足が止まってしまった。

上を見上げる。

男子トイレの表示がある。

左上を見る。

女子トイレの表示がある。

「む……む……」

か、考えてみたら。真つ当な公共施設で長時間過ごすのは、この姿になって初めてだった。

地球に居た三ヶ月は、それどころでなかったし。本局では検査の為の一室に軟禁されていたようなものだったし。養護施設に至っては皆で暮らす大きな家という感覚だった。

なので、世の中にはトイレの男女分けなんてのもあったな、なん

て今更に思い出すのも変ではない……と思う。

えーと……どうしようか？

体に合わせれば、女子トイレに入るのが当然か。

足を踏み入れようとして止まってしまふ。

判っている。別に恥ずかしがることでもないし、今更何を言っているのかも思うが、一度意識してしまうと、昔の……こう、男なのに女子トイレをちょっと覗いてしまったようなインモラルな気持ちで蘇ってきて……

「何をトイレの前で仁王立ちしてるんです？」

「……き、気合いを入れてまして」

「ああ……その、大変ですね。私の常備薬でよかったですらどうぞ」

便秘薬を渡された。視線がいたたまれなさそうに私の下腹部を一瞥し、その女生徒は私の傍をすり抜け、トイレに入ってしまった。

勘違いされた何とは言えないもの悲しさを胸に私も開いている一室に入るのだった。

ここネルソフ魔法学校は、全寮制である。

土地ばかり余っているからか、全部が個室として用意されており、実を言えばこの学校を選択した一つのポイントになってもいる。

入学初日の日程を終え、私は入寮初日でもあるので、そそくさとあてがわれた寮に来て、予め運び入れて貰っていた荷物を紐解きにかかったのだった。

と言っても、さほど大荷物があるわけでもないし、必要な生活家具などの一式はすでに寮に備え付けられているので、せいぜい、服を収納したり、本を収納したりなど置き場所を決める程度なのだが、そんな事をしてしていると見覚えのない箱があるのに気がついた。木

で出来た20センチ四方の小箱だ。蓋は綺麗に着色された蜜蝋で閉じられて、リボンでラッピングされている。

「んー？ ああ！」

思い出した。

荷物を宅配で送る時に、施設の子供たちが「これも！」と言って持ってきた箱だ。餞別ということらしい。慌ただしいさなかだったので、見るまで忘れていたよ。すまない。

丁寧に封された箱を開けると、子供達が書いたメッセージカードと共にプレゼントが入っていた。

「ありがたいなあ……」

こういうのは貰うと気持ちが温まる。ただ……ネタに走るような子も当然居て……

「コンドームとか……私に何を求めているのだろうか」

メッセージカードを読むと、そんな乱暴じゃどうせ彼氏の一人もできねーだろ……云々から始まって、……が出来てもそれ無しには簡単にやるんじゃないぞ。で終わっていた。

ティンバー……スラム出身の子だからまあ、そういう発想になるんだろうけど、そりゃ避妊は大事だからねえ。私にや機会も関係もないだろうけど。心配してくれてるみたいだから、気持ちだけはもらっとくか。

さらに中を探ると鉄製の5センチにも満たない箱が出てきた。振ると何かが揺れるような感じはあるものの何の音もしない。

箱には針か何か鋭いものでつけられたと思わしき溝が薄くあり、そこに血のような朱色が塗られている。ああ、と何となく判った私

は備え付けられたメツセージカードを手にとった。

輝くトラペゾヘドロンの一かけをあなたに託します。いざという時混沌を思い描きなさい。心の象形よりそれは這い寄る　と、手紙はここで途切れているのだが。最後の方に「愛を込めて、デュネツトより」とサインされている。本当にあの子はこの手の話が好きだ……この世界で某でつちあげ神話の古本を見つけたのでお土産に渡したのだが、ここまで嵌るとは思っていなかった。

ラファイからは青い地にエーデルワイスの花の飾りのついたバレッタを貰った。丁度いいのでポニーテールにした髪を後ろで纏めてバレッタで留めておく。軽く頭を振って確認。うん、すっきりして良い。

皆からの心づくしのボックスはひとまずしまい込み、整理の続きに励むことにした。

日々の授業は魔法学がなかなか楽しい。今までは基礎の部分は全て魔法の教本相手に独学でやっていたのでなおさらそう感じるのかもしれない。リーゼ姉妹もグレアムの爺様も忙しすぎでなかなか基礎から相手させるのも気まずすぎたといのもあるし。

施設の子はまあ……みんな訳有りの粒ぞろいなので、魔法技術を使えても訳のわからないやり方だったり、普通に使える人が居なかったりして教わるわけにもいかなかったし。

そして、それなりに学校にも馴染み、と言ってもあまり積極的に輪に加わったりしたわけでもないが、よく話す子の2、3人もできた頃。

お待ちかねのデバイス実技の時間がやってきた。

「なにこれ、有り得ない。効率よすぎ、楽すぎ、デバイスってどんなバグアイテム？」



私の感想はコレに尽きる。

あまりの驚きに魔方阵がでた辺りで停止させてしまった。  
いや原理は判る。

私の場合、魔法式を頭に浮かべて演算とか非常に苦手なので、その部分の計算を代行してくれればそれらもとても効率がよくなるのは判る。

いってみれば紙に計算式書いてしこしこ計算するのと、電卓でぱぱと計算するのとの比較のようなものだからだ。中にはデバイスに頼らなくても自分の頭で結界のみならず砲撃の複雑なプログラムまで組み立ててしまう様な猛者もいるらしいが。

私が幻術系の魔法を覚えるのに時間がかかったのも多分そこらに原因があるのだろう。最終的には剣振るのと同じ要領で少しづつ体成型を染みこませていったようなもので。逆にその感覚がアリアさんとかには判らないらしいが。

何というか、釈然としないのである。

せつせと石投げの練習してたら、目標をライフルで狙撃されたかのような。そんなやるせなさが身を包む。

いやいや、と首を振って気を取り直す。

やれること、出来ることがデバイスのおかげで飛躍的に広がるのは間違いない。

考えてみれば、管理局の支配権を支えているのがこのデバイス技術なのかもしれない。私のようなあからさまに魔法に適正のないのでも、魔力を持ち、ある程度それを操作できればデバイスを持たせるだけで魔法がバンバン使えてしまうのだ。さらに徴兵制などと組み合わせて、一定以上の魔力持ちにデバイスを配布したらとんでもない軍事国家になっていたかもしれない。つか、戦時中の日本とかこの技術知ったら絶対やつてる。ってかそれはかなり怖い想像だった。

「おおぅ……ブルツとしたあ」  
「……さつきから何を一人百面相しているんだ君は。真面目にやりなさい」

パドスール先生に怒られてしまった。いかんいかん、デバイスの便利さにかなり動揺してしまった。これでアマチュアも自作可能な練習用ストレージデバイスだというから困ってしまう。

ちなみに今行っている実習はまず基本の魔力素の圧縮からデバイスを通し、単純で何の指向性も持たない魔力スフィアを生み出すだけの魔法だ。

デバイスにある程度の圧縮魔力と共に起動の意志を込める。ミッド式と呼ばれるどこか機械的な魔方陣が生まれ、白色……という割にはキラついた魔力スフィアが生まれる。

「うん、問題ないな。魔力光は……銀色と」

さらさらと評価を書かれてゆく。

そう、魔力光もまた、ちよつと容姿と共に痛い色だったりする。精神的だけでなく物理的にもちよつと目に痛い。銀色と書かれたが実のところ少し青みがかかっている。蒼銀色というやつで、これを初めて知った時、私は自分が本格的に呪われているのではないかと少々心配したものだ。

そんなことがあったんだよ。どこまでこの身は痛い新事実が発覚すれば気が済むのか知りたいね？

次は自分が名のある人のクローンでATフィールドめいたものでも撒き散らしながらラスボスとがちがちに殴り合う展開になっても驚かないね。

それと恭也、お前さんの声聞いてるとどうも、峰打ちだと思ったけどたまたま持つてるのが両刃の剣で「スマン」とか言いそうだから注意な。何、根拠はないが直感だ。

と、サラサラと紙に書いて破り捨てる。

地球に送る手紙を書いているのだが、魔法関係のことは書けない。ぼやーと思ったままに書いてみただけの文章だった。

暫定的にはあるものの、次元漂流者の保護下から外れた事で地球に手紙を送ってもらうなんてことも可能になったのだった。

恭也と美由希には世話になった割にあっさり別れて、そのまま一年も放置してしまったので、少々バツが悪かった。

あの空き地で遊んでいたガキンチョ共、そのガキ大将といった風合いの安田と南部コンビも忘れていない。

今なら判るが、孤独は人をたやすく追い詰める。本人達にその意識はなくても私は彼らに救われた身だ。

あのまま生きていても、何とかなつたような気もするが、多分途中で疲れて、自暴自棄になっていたと思う。ただ生きるだけでは人は保たない。

「うあー……こつ夜中に筆を進めっていると臭いこと臭いこと……あー、でもたまにやいいかなあ」

うん。たまにだ。たまには素直に感謝の気持ちでも書いてみて、送ってもらおうしよう。

ロツテさんが最近用事があるとかで地球に行くことがあるらしい。手紙を書けたらついでに配達よろしくとも言っている。検閲も兼ねてくれるんだっけ。

……む、見られるのか。

やはり恥ずかしすぎると思う場所のみ消して、推敲する。

一通り書き終え、窓を開けて冷たい空気を浴びる。

背筋を伸ばすと思ったより気持ち良かった。凝ってたな。

しばらくは普通の授業、基礎の焼き直しだが、一ヶ月後に面白いイベントが予定されている。

卒業生は武装局員になるものも多いので、早いうちに魔法の怖さを知って貰おうということ、上級生との練習試合が組まれるらしい。

面白い。

素直にそう思う。

剣を振れば力になる。力があれば振るいたくなる。魔法もそれは同じだ。

恭也のような『武』を修めているような奴にとっては、それは下の下の下なだろう。

私はどうなのだろうか。

自分の心のブレを自分で感じる。私も結局小物もいいとこなのかもしれない。力を身につければ振りたい。

苦笑いがつい出た。淹れてから時間が経ってすっかり冷めてしまった紅茶を飲む。

そんな力がついたって程でもあるまいに、と思う。ただ、それを確かめるにもいい機会かもしれない。

「ん、試合に備えてもう一汗かいてくるか」

私は立てかけてある馴染みの木刀を手に寮の裏手に向かうのだった。

## 十一話

上級生との合同実習……という名目を借りた練習試合。

管理局に即戦力をばんばん送りたいこの魔法学校では、軍学校的な側面がある。

それがこの慣習で、魔法を使い始めて増長したり、遊び半分で暴発させないようと文字通り『身をもって』魔法の怖さを知って貰うというイベントだった。

実際恥ずかしながら私も増長していたと言わざるを得ない。何とか一矢くらいは報えるものだと思ってた。ミッド式は近接がおざなりだし、至近距離でシュートバレットとかで。

やはり、浮かれていた？

デバイスで一気にやることが開けてしまったので、実習まで一ヶ月。寝る間も惜しんでいろいろ試していた。

教本で見た、私ではデバイス無しでの起動なんか絶対無理な魔法なんかも魔力注げば発動出来てしまう事には感動したものだ。

射撃魔法なんか直射型でさえ生身で撃てないタイプなのでうれしゅうてもう。練習場でシュートバレット、基本中の基本の魔力弾とか撃ちすぎて出禁指定されたり。

他にも基本となる、バインドだのシールドだの。他にも移動系の基礎とか。幅広く……

うん、浮かれていたな。

結論から言うと、めったためにボコられた。

この上級生との……という言い回しがまた曲者で、私たちには直前まで明かされなかったのだが、相手するのは高等部の連中である。初等部の一年上とかでなく、中等部でもなく高等部である。

先生がソフトな言い方の前情報しか出さないから変だとは思ったのだ。

何が「魔法の怖さを知ってもらったために」だろうか。要するにレベル1の旅に出たての冒険者をレベル30の冒険者が愛の鞭という攻撃をして全滅させるという内容だったわけである。

なぜ、初等部の4年から実技とこの授業が組み込まれるのか判ったような気がする。

これは幼い子には少々刺激が強すぎる。というかトラウマにしかならないだろう。高等部を見たら地獄の獄卒を見たかのように泣き出すに違いない。

「そりゃ……軽々しく魔法使おうなんて気は……げふぁ……失せるな」

叩き込まれた圧縮魔力の残滓がまだくすぶっているような気さえる。ため息から煙のような魔力光がでそうだ。

ちなみに私はまだいいところまで行った……と思う。

何か気取ってる感じのイケ面が統制をとっていたので、弾幕を避けながら回り込んで奇襲には成功したはずだった。

至近距離からのシュートバレットも決まった。

問題は……全て読まれていて、プロテクションをとくに張られていた事だった。しかもご丁寧にあまり使われないはずの幻術魔法で見た目の隠蔽までされて。

にやりと笑うイケ面君がとても癪に触った。そして何と間抜けな事か。

防御魔法に向かっておらーと魔法弾を叩き込んでいた私は射的ゲームの的より簡単な的だったに違いない。

次の瞬間には360度全方位から飛んでくる魔力弾。

とつさに防御魔法を使えるほど習熟してなかったというのもあるし、いくら目が良くても避けきれはるはずもなく……現在に至る。

演習場は死屍累々。……と言っても見渡せば、積極的に攻勢に出なかった後衛は加減されてるようで、ほとんど当たっていないのも

いるが。

しかし、これでなかなか魔力ダメージというの痛いものがある。学校ということで、非殺傷設定は発動が遅れてしまうほどガチガチにかかっているはずなんだが。単純に魔法弾食らいすぎたか？

あーなんだ。とりあえず。

「くやしーなあ」

ぼつりと私が空に向けて吐いた言葉は誰も聞いてなかったと思う。

「どうしたのこんな時間に？」

アリアさんが少し驚いたかのような声で返事してくれた。それもそうだ。私も私なりに気を使っている。元が猫だったといっただけあって、リーゼ姉妹はどちらかというと夜型で、夜遅くなっから書類仕事を片付けているという話も何度かしたことがある。気を使って、夜は通話はしないようにしている。

いや、用件は簡単なことなんだけど、なかなか切り出し口が……

「あー、あのさ。私、地球に居た時剣術馬鹿に一度も勝てなかったって話覚えてる？」

「ええ……覚えてるわよ？ ちょっと前にロツテに手紙を頼んだって子でしょ？ あれ……ひょっとして、その彼氏君に会いたくなっちゃった？」

「その発想はなかったわ……いやいや、ありえんから」

思わず手をぱたぱた。

「なんてーか……今日、学校でやった魔法の練習試合でメタメタにやられちゃってさ」

いや、魔法使用者としての習熟が足らなすぎるってのは判ってるが、そういうのでなく……ぬーむ。上手く言葉にできない。

悔しいのだが、悔しさのベクトルが違うってか。ふがいなさ……か？ 魔法とはいえこんなにあっさりやられてしまった事に？

少し黙ってしまったって私に何を感じ取ったのか。

「んー青春よねえ……どう？ 強くなりたい？」

「えーと、強さとか弱さとかそういうのじゃなくて」

しゃらっぶ。と黙らされる。

「とりあえず、何か考え事するなら、強くなってリベンジしてからすっきりした頭で考えなさい。今のあなたは変な思考入ってるから」

私に任せてもらっていいよ、と言う。

……おう……この猫さんにはかなわねえ。

そこまで言わせちゃ頭を下げないわけにはいかないわけで。

「よろしくお願いします」

心の中で安西先生と付け加えるのは忘れなかったが。

翌日、わざわざ迎えに来てくれたアリアさんに連れて行ってもらったのは大きな家、いや屋敷とも言つべきものだったかもしれない。ちよつとためらってしまう私を尻目にアリアさんはつかつかと遠慮なくカードキーを通し門を開ける。

「……て、えー？ もしかしてここグラム爺さんの持ち家とかそ



ういつ落ち？」

そう聞くと、ちょっと寂しげに頭を振った。

「故人の家よ、昔は本人とあの子の部下が大騒ぎしていたものだけ  
ど」

と、話している時だった。扉が急に開き

「だ……大丈夫だからほ、放つといってくれっ！」

と家の中に向かって怒鳴りながら飛び出してきた、アリアさんに  
ぶつかる小柄な影。

あまりにアレな事態だったからか流石に反応できずにアリアさん  
ももんどりうって、その小柄な影とアリアさんはいろいろ絡みなが  
らまるでどこそのコントのようにごろごろと転がった。

ぶっちゃけ私もアレな事態でポカーンとしている。

そうこうしているうちに屋敷の開いた扉から包帯をもった、私と  
同じくらいの背格好だろうか？ 栗色の髪の少女が「待つて、待つ  
てよクロノ！」とか飛び出てきた。目の前のアリアさんと絡まった  
少年を見て固まっている。

何というカオス……。

その少年は見たところ、7、8歳だろうか。目を回しているが、  
子供にしては随分ひきしまった体をしている。ミッドには実はそれ  
ほど居ない黒髪をしていてちょっと郷愁をそそる。

ひきしまった体なんてのも格好が……まあ、上半身裸なので仕方  
ない。男の子なのだから別に見られても気にはしないだろう。

とりあえず、焦点がやつと戻ってきたアリアさんに、自分の状況  
を見て貰って、くんずほぐれずになっっていた体をほどく。すごいと  
ころに頭がすっぽり入っていた。なんとうらやまけしからん。

何とか場が収まったので、とりあえずどうぞと招かれ、応接間の椅子をすすめられる。先程の少女がお茶を入れてきてくれた所でお互いに自己紹介を始める。

この黒髪の少年がクロノ・ハラオウン、アリアさんが言うには私たちの世代で一番完成に近い魔導師という事になるらしい。ただ、いろいろ無茶な鍛錬なんぞもやっているようで、体もよくみれば傷だらけである。そこに丹念に薬を塗って、包帯を巻いている少女がエイミイ・リミエツタと言うそうだ。クロノ君は人前で手当されるのが恥ずかしいようで、顔を染めながらあっちの方向を睨んでいる。

「姉弟？」

「そおなんですよークロノったらお姉ちゃんの言うことなかなか聞いてくれなくてー」

お姉ちゃん困っちゃうなーと言いながら後ろから抱きしめて見せるが、それ傷に痛そうだぞ？

「ちつ……違う！ 姉じゃなくて学校の同期だ！」

「またまた大人ぶっちゃって」

ああ、なんかこの二人の関係が見えてきたような。

とりあえず、家を飛び出してきたのは手当させる、自分でやるからいいという掛け合いのすえだったらしい。

「んー、そっか。私もちなみに学生なんだ。魔法学校だけどね」

と水を向けるとびっくりの事実。

二人とも士官学校の二年生だという。

いやまあ、確かに管理局では三歳から魔法学校は入学可能だった

と思うが、士官学校も似たようなものだろうか。年齢を聞けば、クロノは9歳、エイミイは11歳だというし。

ただ、士官つて人使う部署だろうに、若くて平気なんだろうか。慣習化してれば何てことないのかもしれない実際、入ってみたい事には何とも言えないが。

「それで、私はロットと交代でたまに来て今でも訓練をつけているのよ」

アリアさんが経緯を話してくれた。

グレアム爺さんの同僚の遺児らしい、しかし、クライド……な。どこかで聞き覚えが……んー、思い出せないな。

ともあれ、これからするアリアさんとクロノ君の訓練を見せてくれるらしい。

まずは一流の魔導師がどういふ存在かを知っておくのが一番だそうな。

屋外に専用のフィールドが用意されているというので、場所を移して、エイミイと一緒に観戦する。

のっけからして引いた。

なんとつかもつ、うわあ……である。

「あはは……やっぱティーノちゃんも引いちゃう？」

「ああ、うん、あれは流石に……あ、血い吐いた」

フィジカルヒールで胃の止血を済ませまた向かって行くクロノ。フィジカルヒールで切れた腕の繊維を治癒して向かって行くクロノ。

フィジカルヒールで捻挫した関節を治して向かって行くクロノ。駄目だ、ぷつつんしてやがる……

「あれでも、一応合理的らしいの……本人達にとっては。フィジカルヒールで治せるようなダメージしか与えてないし、それで治せば治癒の腕も上がるし」

「うん……実際ヒールだけじゃなく魔法の練度も桁違いだし。何より誘導制御が半端ない」

私が食らった360度包囲の魔法弾とかより遙かに夕チが悪い。逃げ道を用意して、そこには常に罠。まるで迷路を描くように魔法を展開させてみせている。しかも状況に応じてリアルタイムで迷路の配置を変えながら。

そんな見ているだけで頭の痛くなるような模擬戦が1時間も続いただろうか……

「じゃあ、クロノ。宿題の成果を見せてね」

アリアさんが声をかけると、クロノの唇が少し持ち上がった。

『ステインガープレード・エクスキュージョンシフト』

魔方阵が乱れ咲き、水色の魔力光が空間一面を染め上げた。

五十本近いだろうか、ステインガープレードがアリアさんめがけて迷路から形を変えた刃の牢獄となり襲う。

アリアさんにはっこり笑って何か呟くと、プロテクションと思しき魔法で全方位の刃を防いだ。

「よくできました。今日はこれまでね」

「……一本も通らないとか」

満足そうなアリアさんと落ち込んでいるクロノ。

私から言わせれば、どっちもとんでもないのだけど……

エイミイがお疲れ様 - と水で濡らしたタオルをもってクロノの元に小走りに行った。ああしてみるとまるでマネージャのようだ。

私もゆっくり歩み寄って、アリアさんにお疲れ様と声をかけておく。

「どうだった？ クロノがランク試験受けるのは卒業時だからまだ決まってるけど、多分魔導師ランクはAA前後。私は使い魔だからランクにはめられないけど、AAAってとこだと思うよ」

「どっちの魔法にもどん引き」

正直なところをぶっちゃけるとかくんと頭が横に落ちた。コケるといっりアクションをよく判っている猫さんである。

「というか、アリアさんがそんなに派手に強かったとは思わなかったよ」

「見せてなかったからね、さて……」

と呟いて、手招きする。私は久しぶりに自分が捕食されるビジョンを思い浮かべた。ご丁寧に頭に非常食と書かれている。

「次はティーノの番だよ」

はぐれメタルのように逃げ出したかった。

が、しかし私もかつては男である。勇気を胸に一步を踏み出した。

「や、やや、やってやりゆら」

口は勇気を出してくれなかった。

実のところ……クロノに施したような訓練はアリアさんにとっても例外中の例外のようで、同じようなことをするわけではないようだった。

よかった、本当によかった。

ロツテだとノリ次第で危なかったけど、という喧きは全力ですル  
ーした。

「そっいえばティーノ。いつまで翼隠したままでいるつもり？」

「……あ、忘れてた」

少し考えて、クロノとエイミィをちょっと見てからアリアさんにアイコンタクトを取ると頷いた。

土官目指してるなら異種族との対応も当然あるってことだろうか。  
ならばよしと翼にかけっぱなしの幻術を解く。

「えええええええッ！！！」

「おおお！　すごいなこれは……」

めっちゃ驚いとるやないかい。

話が違つとばかりにアリアさんを見ると、ニヤニヤと笑っていた。  
くそ、無駄に可愛い。

「あー、お二人さん、世の中にはこういう種族も居るんだ。あまり驚かないでくれると嬉しいよ」

「……うん。おけおけ。ただ、後でもふもふさせてねー」

「了解した。エイミィ……君は自重な」

エイミィの目がちつと怖かった。

振り返って、アリアさんに話しかけようとしたが、何か表情が固まっていた。

「……さらっと流しちゃったけど、いつもオプティックハイドで隠してたの？」

「ああ、うん。便利だし」

どのくらいの間と聞かれたので、寝るときと風呂以外は全部と言つと、ねえわーとでも言うように手の平で目をぺちんと塞いだ。

後ろを見るとクロノも顔が固まっていた。

エイミイは？を浮かべているが。多分私の今の顔もエイミイと同じ顔になっている。

いつまで黙つても仕方ないとしても言うように首を振るとアリアさんが話し始めた。

「いい？ 確かに幻術系はデバイスの助け無しに発動するには向いてるけど、リソースは当然食うのよ？ それもオプティックハイドは動くもの複雑なものになればなるほど、リソースも魔力消費も上がる代物そんな」

ぴつと私の背中を指さした。

「そんな、いかにも計算が面倒臭そうなディテールと常に動く自分の一部分という対象。どんだけ魔力食うか判る？ 意識してなくてもどれだけリソース食ってるか判る？ というか何で魔力切れで気絶してないの？ そんなに実験対象で連行されたいの？ 実は稀少種族だということに変な部署に引っ張られそうになって、私と口ツテがどれだけ手を打ったか判るの？ ねえ？」

を、ををを……ああっ……ち、近い、近いですアリアさん台詞の

たびに近づいてきます！何か得体の知れないオーラを伴って！  
笑っているのにワラツていない、尖った牙が近い……ッ！しょ  
っ食される……もう、駄目、ぼ。

なんだか判らないが私は全力で謝り倒した。  
しばらくの激情が過ぎると、アリアさんは深いため息をついた。

「考えても仕方ないね……うん。とりあえず判ることだけでも試し  
てみようか」

私が割と常日頃から考えている『考えても仕方ない』にたどり着  
いたようだった。

とりあえずは、魔力切れの一件から確認してみることになる。

「あ、でも私デバイスないと、認識障害とオプティックハイドしか  
使えないよ」

練習用デバイスは学校の備品なので持ち出し不可である。

もっともそこは折り込み済みだったらしく、これを使ってとカー  
ドを渡される。これって。

「デバイス？」

「お父様からのプレゼントよ」

頭をわしわしされた。久しぶりだなこれ。ただ、あまりやられる  
とセットしたはずのアホ毛が立つんだけども。

「ティーノの保護責任者になったのに、何もおねだりされないうち  
に当人は局員目指し始めちゃったから。ま、このくらいはね」

あー。それを言われるとちっと申し訳ないというか。いや十分我



が儘言ってる気もするんだが。

なんだ、まあうん。……有り難く貰いマス。

「ありがと、アリアさん。後でグレアムの爺さんにも話しておくよ」「ん。……」と言っても、局員が使ってるスタンダードモデルをあなたに合わせて調整しただけのものだから、そこまで有り難がらなくてもいいよ?」

しゃちほこばってデバイスを受け取る私に少し苦笑している。

いやいや、あんたら金持ちだから感覚麻痺してるだろうけど、安い車買えるからね? オーダーメイドじゃなくちゃ嫌とか駄々こねるわけないでしょうが。貰えるだけ恩の字だつての。

エイミイに名前を付けないのかと聞かれたが、ストレージデバイスだと、自分のPCに名前を付けるようなものだ。

インテリジェントデバイスならともかく、あえて付けるもんでもないだろ、と言うと何故かクロノが目をそらしていた。少し顔も赤くなっている。

怪訝に思っただら。

「あ、あれは母さんのネーミングなんだ。ぼ、僕は関与していない」

何も聞いていないのだが一人で弁解を始めてた。9歳なんだし別に恥ずかしがることもないだろうに……マセてるなあ。ちよつと微笑ましいかもしれない。先程の、魔法をばんばん放つてた鬼っぷりとイメージが違いすぎる。

ちなみにこの貰ったデバイスの型式はQGシリーズというモデルらしい。武装局員でもB/Aランクの間で広く使われている中堅モデルとのこと。なんでもデバイスも魔力の出力に合ったものを選ばないと出力が大きすぎれば許容を越えてデバイスが破損、下手すれば爆発するし、デバイスのキャパシティに対して魔導師の出力が低

すぎればロスが多すぎて使い物にならないとか。

つまるところ、私の魔法出力は局員のその辺りのランクと同じくらいはあると見られているようだ。ああ、本局の検査で大まかには判るんだっけ。

早速、起動してみる。

私の個人データは既に登録されているようで、魔力を流し込んで起動の意志を伝えると起動状態に入った。

デバイスの情報を閲覧してみると、スペックや登録してある魔法プログラムを確認することができるのだが。

「あり？ 登録魔法ゼロ？」

「ティーノ用に調整したって言ったでしょ？ 具体的にはね……」

説明されてびっくり。

アリアさん。それは調整でなく改造と言う。この人意外と凝り性なのだろうか……

どう改造されたかというと、要するに演算機能と魔法プログラムを記憶しておくための記憶野を拡張。余分な場所はいらんとばかりに他の部分をとにかくこそげ落としてある。こそげ落としたという言葉で済ませていいのなら。……ある意味とてもデバイスらしいデバイスと言えればいいのだろうか。

「今の流行の逆にシンプルなだけの状態にしてあるから、好きに拡張できるよ？」

と、アリアさん。

なんでも、既存のデバイスをあえて改造したのは最近のデバイスに対する不満もあったらしい。なんでも現行製品はどう組んでもオールドラウンダーのデバイスにしかないから、面白くないのだとか。

昔の局員はこういうシンプルなのから自分のスタイルごとにいじり倒していたものよ、と言う。

……ああ、そういうえばリーゼ姉妹はグラム爺さんと一緒に長い間、管理局に居たのだったか。

ともあれ、このままでは練習もままならないので、クロノをちよいちよいと手招きして、彼のデバイスに登録してある中の基礎魔法をコピーさせてもらう。

「……何、このシビアでタイトでルナティックな設定」

本人きよんとしてるが、人の使うレベルじゃねえ。

コンマ1秒内に10から30単位で判断して指示を与えないといけないとか。

これだからマルチタスク強者は……困る。

私用に設定をとても、とてもとても緩くしておく。ちょっとクロノ覗くな、見ないでくれ、こんな姿。

……少々、背中を煤けさせながらも作業が終わったので、やっとこさアリアさんに向き合う。

「よし。気持ちを切り替えてティーン行きます」

「うん、じゃ基本の基本。シュートバレットを魔力切れるまで撃つみてね」

了解、とだけ言っつてとりあえず拙いシュートバレットを撃ちまくる。

途中で一タルーチンの起動指示が面倒になったので、簡単に制御文を加えて擬似的なフルオート射撃に切り替えた。このくらのプログラムいじりならさすがに一年みっちり魔法学をやっただけあって身についているのである。

……一時間経っても終わらないのでひとまず終了させられる。

「本当にどうなってるの……？」

アリアさんが頭痛そうに首をひねっていた。

私も首をひねっている。

というかこれまで、まともに魔力行使しなかったからこそ、やっと気付いた問題というか。そういえばここ一ヶ月の試用デバイス使ったの魔法行使も魔力切れって起こしたことないなーなんて思っていた。

二人してうんうん言いながら頭をひねっていると、クロノとエイミーが何やら思いついたのか、話しかけてきた。

「デイバイドエネルギーで総量を計ってみるといのは？」

「それ採用！」

と、アリアさん。

私かというとデイバイドエネルギーなんて魔法は知らなかったのだから余程ほけた顔でもしてただろう。

説明されてみると、どうも人から人に魔力供給するという魔法らしい。

便利そうなのに魔法教本にも載ってないくらいに流行ってないのは、供給時にかなりの魔力ロスがあるので単純に効率悪いらしい。

それでもいざという時などには世話になることもあるそうで、子供のクロノもアリアさんに叩き込まれていたようだった。

で、本来はこの魔法、自分の魔力上限を知ってからその魔力量のうちのどれくらいを渡すか、という計算をしてから使う魔法のようなのだが。

今回は要するに私がありったけ流す魔力から、魔力総量を逆算して測定しようということのようだ。

なんかこの魔法、使い魔にはあまりよろしくないらしく、クロノ

に頼んで計ってもらうことになった。

「んじゃ、クロノ君よろしく頼むよ」

ふつつかながら、と前置きして言ったのだが、このネタはもう少し年行つてからでないと判らないらしかつた。残念である。

私のデバイスに入力して貰ったディバイドエンジーの魔法を起動させる。

先のこなれない魔力弾の魔法より遙かに効率よく魔力が流れ出ていく。

それはそうだ。魔力を魔法に変換することもなく流し込んでいるのだから、例えるなら近所の小川とミシシッピ川くらいに流量が違う。

てか、あれ？

「……あれ？」

「あ、起きた」

気付いたら仰向けになっていた。エイミィの声が聞こえる。

あれか、これが教本にも載つてた魔力切れの気絶か？

意外にすつきり。

「普通一分かそこらで起き上がれないものなんだけどね、でもやつと判明したよ」

そう言つてストップウォッチを見せてくれるアリアさん。1分27秒。私が気絶していた時間らしい。

どうも私の体質で魔力素から魔力へ変換する効率が良すぎるのだらうとの事。何それ、やっと私のターンきた？

体質つてなんやねんとも思つたのだが、本局で検査したときの私

のカルテというか魔力を感知するレントゲン写真のようなものらしい、をどこからともなく取り出して見せられると、うん。

体質としか言えないのかもと思ってしまふ。

心臓近くにあるリンカーコアから伸びる魔力ラインが体を巡っているのだがひとときわ太い流れが翼に続いていて神経のように張り巡らされている。

確かにこんなもの見せられては、実験動物として引く手あまたな気がする。リーゼ姉妹がいろいろ手を打ったつても誇張じゃないんだろう。ちよつと浮かれてた自分が申し訳なくなってきた。

「もつとも、今は自動充電してくれる便利な魔力バッテリーくらいにしかないけどね」

酷い言いぐさだった。

言い返そうとしても言い返せないが。

総魔力量は確かに高いが、クロノ程ではないらしい。

何より、瞬間出力量がその総魔力よりかなり小さいのだとか。もつとも、そのかなり小さい出力でもAランク魔導師の出力くらいはあるそうで、こいつらのとんでも具合を確認したのみだったのだが。

その日はとりあえずそこでお開きということになった。

時間も大分経っていたし、アリアさんも忙しい中付き合ってくれて有り難いことだった。

クロノやエイミー、特にエイミーとは仲良くなれた。主に料理の話題で。11歳で料理の話をして盛り上げられる子が居ると思っていなかったので大きな収穫だったかもしれない。

肝心の私の魔導師としての訓練についてだが、実は私の魔力弾の不器用さを見ていて内心思うところがあつたらしく、剣振るのと同じく時間をかけて身につけていくしかない、と言われた。

作ってもらった訓練メニューを渡してもらいながらも、自分への

口惜しさという微妙さに少し沈んでいると、見かねたのかアリアさんが話しかけてきた。

「……現実には上手く行く事ばかりじゃないのは事実だから。とりあえず今のところ、ティーノができる事で一番役にたつことはね」「みなまで言うな……言わないで、何かが折れる」

うん。集団戦なら役に立つことはあるんだ。しかもとびきり。

私自身が魔力切れでの気絶でも起こさない限りは、総魔力量が大きいという事で誤魔化せそうでもあるし。確かに使えるんだ。個人戦にはあまり意味をなさないだけで。使いどころは大きい。

判ってはいるんだ。判っては。

そんな……『皆さんの魔力タンク』としてお役に立ちそうなティーノ・アルメーラです。

## 十二話

このミッドチルダに来て、日々の生活に余裕が生まれてからだ。少々思っていたことがある。

なんて、自分は微妙なのだろうと。

毎朝鏡を見るたびに思う。

さすがにこの身体になり、一年ちよつとも経って慣れてないとは言えない。

身長もかなり伸びて、今では137センチになった。と言っても平均からしたらまだ小さく、会うたびにリーゼ姉妹に頭をぐしゃぐしゃされるのはそのせいだと思っている。

顔つきはなんだかんだで整っている。きつとにっこり笑えば良い笑顔になるのだろう。

私が笑うとニヤツとしかならないのが微妙だが。

ちよつと声を出してみれば、鈴の響くような高い声が響く。合唱団も入れそうな良い声だ。

出す言葉がいちいち親父臭いのが微妙だが。

そんな私は魔法の方も割と微妙だったことにちよつとばかり落ち込んでいた。

いや、考えてみれば継戦能力という意味ではこの特殊技能とか体質はかなり有利なわけだし、将来的に局員になることを考えてみれば、現場において相当に役立つものになるというのはずに判る。

素人頭で考えてみても、補給が居るのと居ないのでは作戦の成功率に大きく関わるといっては判るのだ。

では何が微妙かといえば、性格に合っていないというそれに尽きる。

できれば、漲るパワーで蹂！ 躡！ なんてやってみたい。子供扱いと言われようがそれはちよつと否定できない。



先のクロノの出した最後の決め技とか見るともつ、なんとというか、  
ねえ？

線香花火が打ち上げ花火に憧れるようなもんだろうけどさ。

ぐだぐだしてくる思考を打ち払うように玄関に傘と一緒に差しっ  
ばなしの木刀をもって寮の裏庭に向かう。

最近この素振りの習慣もすっかり現実逃避の手段になっているよ  
うな気もしないでもない。

ぐだぐだと変な考えに浸ってしまったが、すっかり手にも馴染ん  
だ木刀を二、三度振って落ち着く。これで落ち着ける私は恐らく女  
としては相当アレなのだろうけど気にはしない。

恩師とも言えるカラベル先生には申し訳ないのだけど、やはり今  
の私はあくまで『私』であって男とか女とかそういう枠に収められ  
たくないような……青春の主張っぽくなってきた。

いい加減不安定なのは、何も施設から離れてしまった事や、ここ  
にきて明らかになった私の微妙な魔法体質。あるいはクロノという  
年下なのによたらすごい魔導師で開いた口が塞がらなかった事とか

……

というわけではない。

うん違う。

私は今年の8月で12歳ということになる。実年齢は判らないの  
で、登録時にグレアムの爺さんに拾われた時を誕生日にしておいた。  
肉体年齢はかなり適当に見た目で申請したのだが、その後の検査  
でも大体はその辺りらしかったので良いことにする。

さて現実を見ることにしようか。

朝方妙な感じだったのでトイレで痔だと思ったり、ちょっと押し  
出して血抜きかましてみたりごによごによだったのだが。

まあ、なんだ。綺麗に拭き取ってもこうして立っていると足に垂  
れてくる赤い液体。判ってるよ。下着ひどいことになってたし。

「……とうとう、来てしまった……か」

現実をようやく直視したことで、私の全身の力が抜けた。木刀を地面につきたて、ふらつく体を支える。聞くほど苦しいわけでもだるいわけでもなかったが、ただ気分的な問題だ。

「はア……………」

聞いた人が酷く鬱陶しい気持ちになりそうな大きいため息が口から出てしまった。

「あれを出すか」

そう呟いてずるずると寮の部屋へ這い上がる。何をと言えば前もって用意しておいた生理用品だが。全く、自分がこれほど動揺するとは思わなかった。前兆なんかもちよいちよい現れてたので警戒はしてたつもりだったのだけど……前もって準備だけはしていたし、自分なりに覚悟してたつもりだったのだが。これこそなってみないと判らないって事なんだろう。あれの装着を済ませ、着替え、シーツを洗濯機に投げ込み、一息つく。

……朝から、何とも気付かれずにはある。

ともあれ、私の月経がさほど酷い体調になるとかそういうのはなさそうなので良かったが。

ああ、時間もおしているし、そろそろ学校に行かないと。

普段通り授業を受ける。

尻の下が気になったが、そこは仕方ない。いずれ慣れる……とい  
いなあ。

休憩時間になるたびに、椅子をちらつと見てみたり、少々トイレ  
に行く回数が増えたりとしたものの、なんだ、まあ。無事に授業を  
終え、放課後を迎えることができた。

さすがミッド謹製。横漏れ無し12時間完全保証の文字は伊達で  
はないようである。付け心地も何の素材なのか知らないがさらさら  
のままである。何がとは聞かないでほしい。

ともかく一つ安心した。対処さえ間違わなければ普通に動けそう  
でもあるし。

気分を切り替えて、先日アリアさんから貰ったデバイスを取り出  
し、作成してもらった訓練メニューをふんぶん見ながら歩く。

行き先はここネルソフ魔法学校の野外訓練施設……とは名ばかり  
のグラウンド場だった。先日アリアさんとクロノが暴れ回った施設  
とは雲泥の差である。こちらにはモニタリング設備は元より、結果  
機能どころか通話機能もない。

いや、もつと良い施設もあるのだが、当然ながら人気が高く予約  
制なのだった。

この場所は要するに使い道もただのグラウンド。運動場である。  
一応学校の敷地内ということ、学校で貸与されているデバイスと  
そこにプログラムされている魔法のみは使用可能とされている。

グラウンドでは授業も終わって、クラブ活動中の学生達が汗を流  
している。どこの世界でもスポーツの形はある程度似るようで、今  
見えているのはサッカーに似たような競技だったが。バスケットボ  
ールやバレーボールに似たような競技もあるようだった。あまり放  
送などでは流していないもののストライクアーツなんていう格闘技  
もあるようだ。ちょっと試合が放送されたので見てみたら、魔力強  
化したAランクらしき魔導師がガチガチの殴り合いをするといった  
ものだった。うん、近接攻撃だとあまり非殺傷って効かないしね。  
そりゃもう普通に格闘試合で、これは確かにミッドじゃ放送しづら

いというのは判った。

「さて、と」

アリアさんから渡されたメニューの通りこなしていくことにする。どうかあの猫さん、あの戦技教導隊の助っ人やつてるだけあって、的確にツボをついてくる。

私の検査時のデータ把握してるからというのもあるのだろうけど、クロノを鍛えた手腕といいなかなか人を育てるのに向いているのではなかるうか。

書かれている事といえば、私にとっての最善は完全に魔力補給することに徹して、作戦行動の幅を広める事らしい。

何でも私のような存在が居ると低ランク魔導師の数を集めて弾幕を張ったり、一人の局員が撃てるありつたけの魔力砲を撃つなり私がチャージ。撃ってはチャージ。なんていう酷い真似ができるらしい。

これはミッド式魔法の弊害でもあるようなのだが、ミッド式魔法は基本、燃費が悪い。そのせいか、大威力の魔法は放てるが燃料不足のため一発で終わってしまうのでランクが低い、という魔導師も多いとのこと。私に似ているような、出力が低くて魔力量が多い人は既にそうやって投入されているそうだが、数が圧倒的に少ないとか。

その為のキモであるダイバイドエナジーについての詳細、相手との波長の合わせ方、魔力ロスの低減の仕方などが図解で説明されている。

そして、それ以外の事……は基礎を地道にやっていくしかないようだ。長い道のりである。翼の隠蔽用魔法を覚えようとした時に散々味わっている道のりでもあるが。

例えば、魔力そのものの制御訓練、及び魔力運用の効率化。マルチタスクの制御訓練。

派手な攻撃魔法ばかりが目立つミッド式魔法であるが、基礎はそんな驚くほどに地道な土台だったりする。そして、魔法と言ってる割にやっていることは理系な内容なのでマルチタスクに秀でていくかどうかかなりの割合を占めてしまうのだった。私は精々が2、3本。先日コピーさせてもらったクロノの設定はただのシユートバレットに30回もの制御判断が組まれていて、最低でもそれ以上のマルチタスク技能が……ががが。私の才能の無さもアレだが、クロノの天才っぷりも相当なもんである。

単純計算で、私が一発の魔力弾を用意してる間にクロノは十発の魔力弾を。あるいは十倍の大きさの魔力弾を用意できるということになる。実際には他にも雑多な細かいことがあるので変動はするし、何よりそれがクロノの上限とは思えないが。

「しかしまあ……」

時折いろいろ放り投げたくなる気分が出てきてしまうのは仕方ないと思う。

制御訓練で、作った魔力スフィアをぐるぐる動かしているのを止めると、ぱったりと仰向けに倒れた。

グラウンドの端っこは雑草もそのままなので、痛くもない。汚れるのは仕方ないが。

隠蔽してある翼をそろっと持ち上げて体の下に敷く。たまにやっているのだが、このふわふわ加減はなかなか良い。

初夏を思わせる風が吹いてまた眠気を誘う。

そういえば羊を一匹羊を二匹の入眠方法は日本語では意味がないらしい。

「One sheep, Two sheep...」

このsheepの部分がsleepと被って眠りやすくなるのだ

……とか、丁度……こんな感じに。

「お……おう？」

……気付いた時には日が暮れていた。

ああ、いかん寮監のおばちゃんに怒られてしまう。

いくらフリーダム極まりないこの学校とはいえ、仮にも教育機関。その辺はそこそこしっかりしている。慌てて、寮監のおばちゃんに端末を使ってメールを送っておく。一言の詫びも添えて。あとで施設近所の名産ワインでも入手してご機嫌をとっておくでしょう。

しかし、確かに寝付きはいい方とは言え、あんなあっさり寝てしまつとは……あの日とやらの影響だろうか。

伸びして凝ってしまった体をほくしながら、さて寮に戻ろうかと歩き出した時、グラウンドの端に魔力光が見えた。どうやら私の他にもこのグラウンドで魔法の練習をしているらしい。こんな時間までとは熱心なもんだと思い、興味を惹かれ近寄ると話声。どこかで聞いた声だった。

さらに近寄るとやつと人影が見えた。

このグラウンドも夜ももう少し灯りがあれば夜でも使いやすいのだが……夜目の利く私でもあまり見通せないのでは普通の人は大変だろうに。

「誰かと思えば……」

クラスメイトだった。

年齢は大体同じだったと思うが、平均からしても一回り大きい体躯の赤毛の少年が、その髪の色のごとき魔力光を迸らせ、的となっているのだろう小さな缶をよく狙い、よく狙い、放った。……外れ

た。なんだか親近感を覚える。

「……づあー、またかあ」

「今ので78射中69射がはずれです。そろそろその無駄な努力という名の特訓も疲れてきたのではありませんか？」

気付かなかったが少年の後ろの花壇のブロックに腰を下ろしている少女の姿があった。

なんとというか、うん、毒舌である。こんなキャラだったっけ？

いつも読書ばかりしていて、休み時間になるたびに本を読みふけている印象しかなかったのだが。

ここまで来ておいて夜目の利くこちらから一方的に見ているというのも何なので、挨拶くらいはしておくことにする。

特に洒落の聞いた挨拶なども思い浮かばなかったので普通にこんばんわ、と声をかける。

「まさか俺以外にも試合にむかっついて特訓してる奴なんか居たなんてなあ」

「実のところ休むつもりで転がってたら昼寝しちゃったんだけどね」

「ははは、あほだ！ あほがいる！」

「なんでも明るく笑い飛ばせば済むと思うなよ？」

何でもないような話を話しはじめて10分。何となく意気投合してしまった。

そう、ついでのようで申し訳ないが、名前も思い出した。確か……

「ダンピール？」

「何その夜になると牙が伸びてきそうな奴」

「いや、おま……君の名前じゃ？」

無言で脳天をチョップされた。デイン・ヒルと言う名前らしい。そうだったそうだった。

棒読みのそうだったーが顔にでも表れていたのか、デインは少し考え込むとじゃあ、こいつは？ と花壇に座っている少女を指さす。

「……ええ、と。本野虫子さん？」

「そのネーミングセンスはねえよ」

突っ込まれてしまったが実のところ覚えている。

「ココットさんだったよね」

「はい」

ファミリーネームは覚えてないが、ココットというのは料理の方の言葉でシチュー鍋とか小鍋、耐熱容器で調理する料理の事を指したりもする。覚える基準が何とも私らしいがそこは勘弁してほしい。何てことを隠すこともなく話したら、少々呆れられた。ちなみにファミリーネームも教えてもらった。ココット・フェアウェイさんらしい。

身長は私と同じくらい少々低いだろうか。同じクラスでも数少ない私より低身長組である。ふわふわのウェーブのかかったハニーブロードを無造作に後ろに流している。それだけだと華やかに感じるのだと思うが、飾り気のない黒縁フレームのメガネで至極目立たないというか地味な印象になっている子である。

2、3回は話したことがある。

年齢の割に話し方が丁寧で言葉も少ない。そんな印象しかなかったのだが、先程の毒舌は気のせいだったのだろうか……

「なんでお前の名前はさらっと出てきて、俺の名前は吸血鬼モドキだったんだろうなあ」



「日頃の行いでしょう。具体的にはデイン、あなたが毎日食べるパンの枚数ほどの罪を悔い改めれば違ってくるのでは？」

言い回しがくどかったせいか、混乱するデイン。

てかまあ、うん。

こんな人だったんだな、ココットは。

そろそろ二人も切り上げようと思っていたらしいので、一緒に帰る事にした。学校の敷地そのものが相当広いので、ここから寮まで20分は歩かないといけない。妙なところで紳士ぶっているのか、デインが夜道は危ないから二人を送っていくぜと言いだしたのだ。

ここはこのネタかと思ひ。にやりと笑い。

「送り狼になるのは勘弁しろよ」

とデインに言ったら、何それ訳わからない。という顔をされた。当然だったかもしれない。子供になんてネタ振っているんだ私は。

真性の阿呆なことやっちゃまったーと悶えることにならなかったのはひとえに、横から私の耳でしか聞き取れない程度の声で……

「わたしは歓迎しますけどね」

という呟きが聞こえてきたからだったが。

冷や汗が流れた。今時の子はいろいろとその、耳が早いのだな。

いや自分を棚上げて何を言ってるかというのもあるんだが、私はちょっと特殊なわけで、いやそもそもミッドの基準と地球の基準で違うという観点はないか？

私が内心でうんうん首をひねっているうちに寮の灯りが見えてきた。

「お、お。いつの間に……ともあれ、デイン君、送ってくれてあ

りがとな」

「……ありがとうございます、ティン」

ココットはなんとなく取り繕った言葉の礼を言って別れた。

その後はお互いあまり話すこともないまま、ココットの部屋の前で別れる。

寮室としてそっちの方が女子寮の出入り口に近いただけだったが。

別れ際に、少し首をかしげたかと思うと一言。

「では、また明日」

とだけ言い残して。

何ともあれだ。うちの施設の年上のはずなのに同じ年にしか見えないデュネットを思い出す。あそこまで不思議さんじゃないけども。そういえば、そろそろ休暇のある日にでも里帰りするのもいいかもしれない。

まだ、それほど長い時間離れたわけでもないのに、妙に郷愁を感じてしまう。

ついでに赤飯でも振る舞うか……その風習、理解できるミッド人は居ないだろうけども。

## 十三話

鹿を逐う者は山を見ず。ということわざがある。

鹿を追っている猟師は目先の獲物を追っている余りに、今進んでいる山を見ることもせずについ危険な領域まで立ち入ってしまうことを指し、ひるがえって、目先のことに気をとられて他に視線を向けることを忘れてしまっている時などにも使われる。そんなことわざだ。

今の私にはとても似合いの言葉かもしれなかった。

デインとココット。少々暑苦しくもさっぱりとして割り切りのいい少年と、未だにちよつとデインとの関係が判らない文学少女というのがぴつたり金の髪眼鏡。

この二人とは放課後の居残り魔法練習などを同じくやっていることもあって、何となく他の時間でも三人でいることが多くなってきた。

デインがそんな練習してるのは単純な理由で、先だつて行われた上級生との合同実習であつけなく土を舐めさせられたのが気に入らなかつたらしい。やられたらやり返す！ と、少年らしい瞳は気炎万丈。お前はどこの主人公キャラなのかと少し突っ込みたいところではあつた。

私はそこまで煮えきれていないものの、方向性は同じである。デインと共にリベンジ目指して練習することに意義はなかつた。

ココットはデインと長い付き合いのようで、本人は割と魔法にいても勝ち負けについても淡泊なようだったが、デインがやるなら付き合うといったスタンスのようだ。

そんな、夜遅くまで過ごすときも度々あり、寮監のおばさんに頭の上からない日々も既に一週間が経とうとしていた頃だった。

「よおっし！ この魔法と連携であいつらの包囲は崩せる。次の合同実習は貰ったぜ！」

何とか私たち三人での連携と一番攻撃力のあるディンの新魔法……砲撃のアレンジだが、を形にすることができた。ディンの喜びもひとしおである。もっとも、この場所ではアレンジも含めて砲撃系の魔法は最終的なテストもできないのではあるが。やはり一回模擬戦ルームの使用を申請して、連携のタイミングも含めて確認をとったほうが良いだろうな。ぶつつけ本番とかは勘弁だし。などと、つらつら考えているとココットが一言。

「……ディン、合同実習を睨んでの訓練でしたか？」

「え、ああ？ てかそれ以外に何があるよ？」

いきなり何を言い出すのかと疑問符を目に浮かべるディン。

「聞かなかった私も大抵の間抜けですが……カリキュラムの大まかな日程すら把握していないあなたはそれ以下です。あの一回以降、合同実習の予定はありませんよ」

「は……？」

「え……？」

あなたもでしたか……、と頭痛をこらえるかのようにこめかみに指を当てるココット。

私はといえば、埴輪のような顔になっていたかもしれない。

そういえば、そういえば。

カリキュラムを思い出す……うん。ないな。

何という視野狭窄。目標確認もしないで熱を上げていたとは。

私のがくりと膝を落とし、地に手を付けた。

うん、まったく。

鹿を逐うモノは山を見ず、なのである。  
デインに至っては放心している。やがて、むんと何かを決めたかのように唇を引き締め。

「こうなったら上級生を闇討……テブツ！」

ココットの放つ抜き撃ちの魔法弾が顔面に当たった。

あれは痛い。というか早すぎる。練習していた中でも最速の抜き撃ちではないだろうか。

「あなたは真性の馬鹿ですか、馬鹿ですね。知っていました。今更人並みの理解を求めようとは思ってません。ただ、こういう時は先輩に模擬戦をお願いすればいいだけでしょ」

闇討ちなんかしたら後始末が……とかいう小さい呟きは聞き流すことにした。私の精神安定のために。

「おお、その手があった！ よっし、早速行ってくるぜ」

と、デインは飛び出して行くのだった。

何となく流れに乗りそびれた私は未だぼかーんとしていたが。

結果から見れば。上級生との模擬戦は大変役に立つものだった。デインが言うには適当に暇そうにしてる高等部の先輩に頼んだらしい。

以前見たアリアさんとクロノの模擬戦のような、とんでも技術やとんでも魔力というわけでもなく、魔法の一つ一つがそれなりに上手いのである。それに使い方も上手い。そのやり方もまたさらに先

輩から盗んだものなんだよと爽やかに笑って、快く教えてくれた。  
私達三人相手にこと細かに、魔法の効率の良い使い方、ちよつとした裏技的なやり口などをしっかり3時間もレクチャーしてくれたのだった。

夕焼けの中、にこやかに手を振りながら去る先輩はなかなか絵になつていたものである。

「なんていい人だ……」

私も含め三人でほんわかしているも、ディンは何か我に返ったのか。

「ち………違つだろ！ これは違う！ リベンジしてねええええええええッ！」

叫びおつた。人目が………痛い………

ココットはこめかみに指を当て頭が痛そうにしている。

ちなみにここは高等部の敷地内である。

ここまで付き合ってくれたのでせめてもと先程の先輩を見送つた所だったのだ。

俺もあのくらの時はあんな時もあったなーとか、うわ叫んでるよかわいーとか、そんな声もこの耳は拾ってしまつたりするので、何というか恥ずかしいというよりは居たたまれない。

このままなのも何なので、まだがるとか言つてるディンの腕を掴み、ひとまず高等部から離脱しようとした矢先だった。

「何を騒いでいるんだディン？」

明るいブラウンの髪を伸ばした人が、そんな声をかけて歩みよつてきた。

少年っぽい顔立ちでなかなか柔和な顔つきをしている。造作は整っていてイケ面君とでも言った方がぴったり来そうではある。  
んん？ 何か見覚えが。

「……ちつ、てめえかよ」

何やら急に不機嫌になるデイン。

知り合い？ とデインに訪ねてみたのだが、どうも複雑らしく。

「知り合いなんかじゃねえよっ」

とか言っつて横を向いてしまった。完全にぶんむくれている。

さすがにそこまで言われては良い気持ちもしないようで、イケ面君も渋い顔になっているようだ。空気が悪いんだが。挟まれている私はどうしたらいいのだろうか。

ココットに目で「タスケテ」とサインを送るとココットはココットでイケ面君を見てるし、孤軍も良いところだった。

何だろココレとか思っていると救いの手は意外なところから現れた。それが救いかどうかは微妙な線だったのだが。

「なあにやってるの？」

「こんな所でたむろってないで早く行こ」

「店の予約に間に合わないよー」

きゃいきゃいと高い声、甘い声、しつかりした声が聞こえる。

彼は女の子を待たせていたのだろうか……しかし、三人同時に侍らすとは豪華な……

「あ、ああごめんよ、ちょっと以前の知り合いが見えたもんだから」

待たせちゃったね、とか言いながら去ろうとするので私はどちらかというとほっとしたのだが……

「ッ……待てよ」

デインが引き留める。イケ面先輩が何かと振り向くと、思わぬ行動にでた。

「俺だつてなあッ……負けねえッ」

そんな事を言い切ると何を思ったか近くにあって私の腕を掴んで引つ張る。右手が頭の後ろに回され、目を硬くつむったデインの顔が迫る。

ふつと頭に、昔読んでいた好きな漫画の一部分が思い出された。ズキユウウン！ という擬音が特徴のあの一場面である。名前が近いからって上手く行くとは思うなよ！ と私自身も少々謎のテンションに支配されながら右腕をその迫り来る顔にカウンターとして合わせた。

ドツギヤーンと吹っ飛んでいったのは驚いたが、振り向けばコックツトが青筋を立て、デバイスをちらりと見せる。私のカウンターに合わせて魔法を撃ち込んだらしい。相変わらずよく判らない早業だった。

もはやコントの舞台になってしまったので、苦笑いを隠せないイケ面君と笑いころげる女の子達三人組。

「なんだかもうぐだぐだになってしまったので、デインを回収し、それでは失礼しましたー」とばかりにそそくさと離脱したのだった。

「で、言い訳を聞こうか」



場所を移して尋問タイムである。

「っ……」

っ？

「つい負けん気が疼いて……」

「ああ……イケ面君が女侍らしてたからか……  
しかし腑に落ちないな。」

「でもデインはなんで、あのイケ面君に直接喧嘩売らなかったの？  
模擬戦だ！ とかい出しそうなもんだけど」

「今度は『イケ面君』か……相変わらずネーミングセンスが……」  
「しゃらっぶ」

みなまでは言わせん。そんなん自分が一番知ってるわ。  
で、なんで？ と重ねて聞くとそっぽ向いてしまった。どうもひ  
ねてしまったようだ。

ココットを見ると、親指を立てている。  
何かよく判らないが任せると。

『バインド』

デインを縛り上げ、後ろに回り込み、きゅっと締めて気絶させて  
しまった。

恐るべき手際である。

「これでお仕置きにもなりますし、ティーノ、あなたには話してお

いた方がよさそうです」

「お、おう……」

若干びびりが入ったのは責めないでほしい。少年が小柄な少女に手際よく気絶させられるのを目撃すれば戦慄するものだと思う。

まあ、なんだ。

聞いてみれば、デインは割といいとこの出身で魔法教育もなかなかの英才教育を受けてきたらしい。

じゃあなんでこんな言い方は悪いが金の無い庶民が入るような魔法学校に来たのかと聞けば。

「……親に反発して家出したからです」

「あー、そういう事情の人も居るわけか」

そしてデインと出会ったのが同期で入学したあのイケ面君である。そう、驚くところはあやつ同期だったらしい。

確かに高等部にしては背が小さかったが普通に馴染んでいた、いや、そうなるにあのイケ面君、今11か12歳？ ありえん。

驚くべき事はもちろん他にもあり、飛び級を繰り返して、一年ごとに進級しているデインを完全に置き去りにしている形なのだそうだ。

最初はデインもよく一緒に居て、魔法を教えたりして仲も良かったらしいが、魔法なんて学校で初めて教わるはずだったのにことごとく上を行かれ、飛び級を二度した時には既に二人の仲は冷え切っており、デインも最初は努力を繰り返したもののどうしても勝てず、苦手意識ばかりがすり込まれてしまったらしい。

「すっかりヒネてしまって……これだからボンボンは精神力が無いから困るんです」

そう言ってココットはデインを見る。

その目がやたら優しい事に本人気付いているのだろうか。

しかし……家出したいとこのぼっちゃんに、それを知ってる古馴染み……か。んー、カマでもかけてみようか。

「でも、飛び出してきちゃったデインを追いかけてくるココットもココットだよな」

「わ、わたしは……その、下請けの娘ですから……父様の思惑も……い、いえ、嫌なわけじゃなくて。ち、小さい頃から遊んで、え、えっと思意はなくてですね、え、あれ？」

ココットは程よく混乱しているようだ。

しかしここまで反応が良いとは思わなかった。普段本に熱中してあまり人と話さない分慣れてないのか？

やがて赤くなった顔のままうーうーこめかみを指で押していると少し落ち着いたのか、顔を向けてきた。……少し恨めしそうな表情をしている。

「わたしがデインと幼なじみなのは確かです。ですが、別に追いかけてきたわけでもありません。偶然です」

そういう事にしたらしい。

私も変にほじくり返す趣味もない。いじりはそこまでしておくでしょう。

それより。

「よし。事情が判ったところで、改めてあのイケ面君に一泡吹かせる作戦でも練るとしようか」

と私は言った。

「ココットは軽く目を開き、デインを見て呟く。

「でも、大変ですよ？」

時間かけてすり込まれた苦手意識の克服なら……うん。ショック療法だが。当てがある。

私は端末を起動させて、エイミィとクロノにメールを入れておく。不思議そうな顔をするココットに不器用にウインクなんてしてみせる。そんな気分だったのだ。

……あのイケ面がどこか記憶で燻っていたのだ。見た覚えもあるはずで、合同実習の時、私を撃破した上級生その人だった。

全く表情が違うので印象が被らなかったのだろう。

あの時はあんなに穏和な表情でなく、畏にかける獵師の顔をしていたものだった。

ともあれ、ここからは私自身のリベンジでもある。

まずはこの二人をあのとんでも魔導師。

私達より2つも下ながらとてつもない実力をもつクロノに会わせてみることにしよう。

……訓練を見るだけで常識を破壊される気分を彼らにも味わってもらおうなんて下心はない。ほんの少ししか。

## 十四話

「なるほど……うん、話は判った。僕で良かったら協力しよう」  
「え、頼んでおいて何だけど、そんなにあっさり頼まれちゃって平気？」

聞けば、名前を大ぴらに出すような事でなければ平気らしい。

なんでも、これも士官として部隊を率いるためには良い経験になるとか言っていたが、若干後付けっぽい理由なのを考えると、やはり根っこのところで良い奴なのだろう。

何を頼んだのかといえば、ディンやココットも含めた私達の特訓である。対イケ面君対策の。

最初はディンに対する、リハビリというかショック療法的にクロノと引き合わせようと思っていたのだが、エイミィに相談したところ、いつそまとめてクロノをお願いしちゃえよー、などと言われたりもしたので、率直にお願いしてみた次第なのだ。

……しかし、そりゃ頼めれば有り難いとは思っていたが、こんなにすんなり行ってしまっているのだろうか？ まだ二人とも会ってからそれほど日も経っていないのだけど、そこまで親しく思ってくれているというならそれはそれで嬉しいものではあるが。

ともあれ、予定を聞いてみれば、休日は士官学校も魔法学校も同じようだったので、次の休みに私達が出向く事となったのだった。

妙にセキュリティがしつかりしているバスを下車し、徒歩10分。ちなみにこのバスには少々驚いた。乗降口に探知機付きでデバイスを所持していれば判ってしまうらしい。私達は三人とも自分のデバイスを持って来ていたので乗務員も何かと思ったようだ。デバイス

を見せ、局に登録されていることを確認させてからやっとな乗る事ができたものだった。

以前はARIAさんに連れてきて貰ってスルーだったのだが、なかなか高級住宅街といった感がある。例えるならマンハッタンよりビバリーヒルズと言った感じだろうか。

目の良い私だからだから見えるというものでもあるが、あちこちの茂みの中に監視カメラが設置されていて、もしかしたら、いや確実に魔法的な監視システムも同時運用されているのだろう。

違法魔導師でも迷い込んだ日には即刻通報、1分も満たないうちに警備員がわから、5分も満たないうちに局員が飛んでくるなんてことになりそう。

そして道幅は妙に広く、街路樹の手入れも行き届いている。ちょっと目を遊ばせればその街路樹の中にも石像や周囲と溶け込むように作られた小さい噴水などがあつたりする。

家を見れば様式もばらばらで、そこはさすがミッドといったところだろう。魔法だけでなく文化もその幅が異様に広い。共通して言えるのは、庭が皆、妙に広いということだろうか。プールなんか標準装備していそうである。

そんなこともあり、少々落ち着かないものを覚えて、自分でも拳動不審かなーと思うくらいにキョロキョロしてしまっていたのだが、ふと見ればディンもココットも泰然自若。担任のパドスール先生のツラ疑惑についての話に興じていたりする。内心なんとなく慚然としたものを感じないでもない。……いいんだ私は小市民で。悔しくなんてない。きつと。

クロノとエイミィに二人を引き合わせたところで、早速、と言った感じでクロノの自主訓練というものを見せてもらう。オーダーは士官学校でやるような練習ではなく、クロノの『いつもの』メニューをお願いである。私はエイミィから記録映像とか見せられて感想聞かれたりもしているので、もうある意味慣れた光景なのだが……うん。あの二人にはいい刺激になると思う。

「嘘だろ……」

「デ、デイン、しっかり気を保つのです、いつもの阿呆顔はどこにいきましたか、なな、何をかたかた震えているのですかあなたらしくもない」

放心したデインの手をしっかりと掴んでかたかた震えているのはコソットである。

うん。水鉄砲の射撃ゲームで優劣競った後にグリーンベレーの射撃訓練見せつけられるようなものだからね。気持ちは判る。初等科とかで魔法勉強してるのがなんだかなあと思えてきてしまう。いや、基礎をないがしろにしちゃいけないのは重々承知だし、クロノはスタート地点も環境も違いすぎるってのは判ってるんだが。

エイミイがこの後のランチの支度でもしてくるよー、と言うので驚きっぱなしの二人を残し、私も手伝いをしにキッチンに行くのだった。

「エイミイ、献立はどうする？」

「んー、動いた後になるから考えてるのは胃にあまり重くないように、くらいだけど。リクエストでもある？」

「んにゃ、おまかせ。二人も特に食べられないものは……ああ、デインが海鮮アレルギーだとか前言ってたような」

んじゃ、手早くクレープでも作りますかと分担して取りかかる。

クレープと言うとお菓子のような印象も強いのだが、生地には塩味をつけて、野菜や肉やチーズを巻いて食べる食べ方もあり、こちらは軽食にうってつけだったりもする。

巻いて食べる具をたくさん用意しておいて、自分で巻いて食べるなんて食べ方になると、具を選ぶ楽しみもあって子供受けは抜群だ。別段エイミイも子供受けを狙ったわけでもなかるうが、好き嫌い

の判らない人が居る時もある有効なので、そつちを考えたのかもしれない。

具を作るのはエイミィに任せて、私はひたすらクレープ生地を焼くことに専念することにした。

何しろ食べ盛り5人分である。余裕を持って焼いておかねば……  
そして、私が砂糖の効いた生地、塩の効いた生地をそれぞれ10枚ほども焼いている間に具の方も用意されたようだ。ひとまず焼けたクレープを皿に盛ってテーブルに置く。

「じゃあ、そろそろ皆を呼んでくるよ」

「おねがいー」

と、屋外……というか屋敷の裏手の訓練場に来たのだが。

何、この空気？

「……ちょ、ちょっとちょっと、何がどうしてどうなってあんな状況に？」

見学席のてすりを握りしめているココットに小声で聞く。

が、反応がない。目の前の光景に集中しているようだ。右手がデバイスを行ったりきたりしてるのが怖いのだが。

私も一つため息をついて、目の前の光景を見やる。

本当に何を思っているのだから、クロノに模擬戦を挑んでいるデインの姿があった。かなりボロボロで。

クロノは悠然たる面持ちで、しかも油断もせず ゆっくりデインの間合いを詰めはじめていた。

「ちいッ」

デインが舌打ちをして照準が甘いながらも相当の密度が練られて



いる射撃を放つ。さらにそれをフェイクとして魔力強化を施して接近、至近からの攻撃にスイッチする。

が、近づく前に最も初歩ではあるものの十分な威力の魔法弾が飛びかかる。当たれば足が止まり、それを避けていけば、遅延発動型のバインドのトラップへと誘導され……

『ステインガレー』

対魔導師にはおあつらえ向けの射撃魔法が直撃した。

コソットがびくりと身を震わせる。いやいや、大丈夫だから、模擬戦だから……多分？

うつぶせになって倒れ伏しているディン。

しばらくクロノはディンを見、おもむろに言った。

「あなたの言う意地はこれで終わりか？」

クロノは一步を踏み出す。

「あなたの言った壁とやらはこれで壊れたのか？」

クロノはまた一步を踏み出した。

「ぐちゃぐちゃと……」

よろり、とそんな音がしそうなくらい力が入っていない足でだが、ディンはゆっくりと立ってみせる。

「ぐちゃぐちゃとつるせえ……へっ……年下のくせに、人生まで説教すんじゃない」

「……そうだな、今はただの魔導師と魔導師だ。魔導師らしく、判

りやすい魔法で語る事にしようか」  
「望むところ……だっ！」

向き合う二人がデバイスに魔力を込め、大きな魔方陣が描かれる。その特徴的なチャージタイムが完了し、抑えきれない圧縮魔力の奔流が訓練場の一陣の風となった。

そして二人の砲撃魔法が炸裂し

一瞬の競り合いの後、クロノの水色の魔力光に押し潰された。

「これだから男の子って奴は……」

エイミイが肩をすくめて口をとがらしている。

ココットはこめかみに血管を浮かばせ、目はしっかりとクロノとデインを睨み付け、無言で八つ当たり気味に甘い具のクレープを巻いていた。具体的にはチョコ、バナナ、メープルシロップ、ブルーベリージャム、ホイップクリーム……見ているだけで胸焼けがしてきた。

その当のクロノとデインはと言うとなかなかに意気投合しているのである。

一体さっきの模擬戦はなんだったのかと言えば、どうもクロノの訓練風景に触発されたデインが「自分の殻を破りたいんだ！」とクロノに模擬戦を頼んだというのが大まかな成り行きらしい。

大まかな……というのは、その後段々とお互いヒートアップしてしまい、そう、言うなれば少年マンガの世界が展開された。訓練場で記録された動画データを見るともうね……

……ああ、武士の情けだ。訓練場の記録データは消去しておいた。残しておけば3年後くらいに本人達に見せつけて、若かったねー、なんてからかうのも魅力的ではあるが。

「でも、驚きだねー、ほらここの3分22秒時のとことか、クロノが張ったバインドトラップも力づくで突破してる部分があるよ？」

と、目玉焼きを挟んだクレープを頬張りながら、携帯端末に映った先程の模擬戦を見るエイミイが私に画面を向けてく………る？ す、すまない………クロノ、デイン。君たちの黒歴史になるであろうデータはもう私の手には届かないようだ。

私はしばし瞑目を捧げた。未来においてからかわれる事がさりげなく決定していきそうな二人に。

それはともかくとして、映像に目をむける。

確かに……「うおおー」とか叫びながらリングバインドを魔力の放出で破っている。叫び声はともかく、先日、親切な先輩が教えてくれた通りのバインドの破り方である。強度の弱い足止め目的のバインドであれば内部からバインドブレイクを仕掛けるよりは魔力の放出で力任せに破った方が早い。もっともこれを授業でやると荒いと見なされて減点を食らってしまうのでもあるが。

ちなみに何が驚きなのかと言えば、その瞬間魔力量なのだろう。

その一瞬一瞬だけなら実はクロノと拮抗できてしまうのだ。

ただし、魔法の構成の甘さや制御技術の問題もあって本当に一瞬しか拮抗はしないだろうけども。

それに……

「今回の目的、通称イケ面君（笑）に勝つという目的においてそれは使える特性ではありません」

コソットが甘いクレープを食べ終わったのか話に混ざってきた。……今何か括弧が使われるような不思議な間を感じたのだが、なんだろうか。

「イケ面君？」

「ティーノがそのひど……率直なネーミングセンスによって言い続けているので、もう本名よりそちらを呼んでしまおうかと」

「言い直さなくてもいいよ……」ココット。判ってるから……」

テーブルにのの字を書き始める私を見て、少し慌てたかのようにメガネを持ち上げ、コホンと一つせきばらいをした。

「今回、挑むにしても学校内の訓練施設を使った模擬戦という形になりますので、使用デバイスは現在のものではなく学校から貸与される練習用デバイスを使用するの事になります」

「……うん？ 出力制限かな」

「その通りですエイミー、さらに言うなら使える魔法にも制限があります。瞬間の出力が大きい事がアドバンテージにはなりません」

「技量と連携勝負ってわけね……形式は3対3で申し込むつもりだったよね？」

そのつもりですとココットは答え、また甘そうなクレープを作りに取りかかっていった。

和やかにランチも終わって、紅茶を飲みながら、今日のこれからの予定を話し合った。

デインはどうやらこの後すぐに訓練場に行きたいらしい。

どうやら先程のランチの最中にもクロノが何か教えて、それを試したくて仕方ないのがデインという構図のようだ。

二人が並んでいると身長差も年齢差もあるのに、クロノの落ち着き具合によって同い年くらいに見えて仕方ない。

同じような事でも考えたのかエイミーも複雑そうな顔をしていた。

「そっいえば」

クロノが思い出したかのように言い出した。対戦相手の情報が判っているならそれを見せてくれないかと。

「コソットは少し首をかしげ、実際見てもらったほうがいいでしょう、と言い携帯端末のデータをクロノに渡した。

皆で分析するのでしょうかと言い、ディスプレイに映像を映し出した。

以前の合同実習の時の映像である。

映像にはあの時の私が防御魔法にも気付かずに接近して行く様子がありありと……

「あああ、見るなあ……私の汚点」

一人悶えているのだが、誰もフォローしてくれない。

エイミィ、にやりと笑ったな。後で覚えている。

その後の私の撃破シーンまでしっかり見終え……たと思ったらクロノがりぴーと再生を始めた。

もうやめて、私のヒットポイントは……

「やはりこの辺りか」

私がイケ面君の罠に引っかかる前、回りこんで奇襲をかけようとしているところで一時停止する。

何があるというのだろうか。

「ここに弱点がある」

と言ってクロノが指さしたのは映像の中で今にも私が入り込んで突っ込んでくるところだ。ポイントだった。

目で説明を促すと話しはじめた。

「それまでの戦闘経過は基本に即したものを崩していない。面白みもないが堅実で隙もない。教科書通りの良い魔導師だ」

しかしそれは指揮だけだ、と言い、端末を操作する。静止していた映像が動き出す。

「この狙われた際、ティーノを誘い込むにしても、幻術が使えるなら自分の幻影を囿にして集中砲火を浴びせればいいだけなのに、何故自分自身を囿にしてわざわざ防御魔法の隠蔽などにリソースを割いたのか」

「……あ」

言われてみればそうだ。

そもそも、誘い込む必要も多分無い。接近に気付いていたのなら射撃を集中させればいいだけの話なのだ。

「それはティーノの奇襲が半分成功していて、周到的な罠を仕掛ける余裕がなかったのでは？」

ココットがふつと疑問を呈するが、いや、とクロノは首を振る。

「間違いなくティーノは誘導されている。さっき僕が指摘したポイントだが、あまりに不自然に穴が開きすぎている。チーム戦なのに他のメンバーがカバーに入らないというのが罠の証拠だ」

うう……見抜けません。

しかし、そうするってえと何で？

「まさかただの格好付けとか？」

「そつだな」

そつなんだ！？ とクロノを除く全ての声が重なってしまった。推測になるんだが、と前置きをしてクロノが話すに。

飛び級を繰り返す成績優秀な生徒というのは、勝ち方も派手なものを期待されてしまうそつだ。クラスメイトは元より教師もそういう期待をしてしまう事もあるらしい。

本人は自分のやりたいようにやっているつもりでも無意識に影響されることもあるそつだ。

もちろん、ただの自己顕示欲とか見栄っ張りな性格という線もあるし、当たっているか当たっていないかを言っても仕方ないのだが。そこは判らなくても考える事が必要らしい。

ただ、私が最後に見た笑みからすると、こつ……職人的なものを感じないでもないのだが。

そして、先程クロノが『弱点』と表現したのは、別に映像の事を言っているわけではなく、その戦い方の弱点、つまるところ……

「その複雑な仕込みをしてしまう手腕を逆手に取る」

とのことだった。何でもクロノが見るには、私を引き込んだ先に融通が効いていないそうで、例えば私が引き込まれた先で予想外の粘りでも見せてかかりきりになれば、その隙を外部から突けたかもしれないとか。ある程度の魔法巧者が陥りやすい穴で、魔法も含め戦術は単純であるのが一番良いと言つ。

余談だが……クロノ君9歳である。重ねて言うが9歳である。私は世の中の不条理を冷めた紅茶で流し込んだ。

方針も決まったことで、具体的な作戦を決めに入る……前にクロ

ノから念話が飛んできた。

(ティーン、二人には翼の事は話してあるのか?)

(あー、いや話してないよ。もう隠すのが習い性になっちゃってね)

翼の事については、これでもそれなりに頭を悩ませているのである。

親しくなった人にはこういう隠し事はよくないよなとも思うのだが、何となく見せにくいものでもあるのだ。

と言っても、何かのきっかけがあって見られてしまった時には明かそうと思っているのだが。

(確かティーンの翼は魔法で隠してあるのだったと思うんだが、その状態でディバイドエナジーで分けられる魔力は確認したか?)

(確認済み。データ送っておくよ)

と言っても魔力総量の測定はそれ用の検査が必要だし、記録に残す気もないので、感覚に頼った大雑把なものだ。

ちなみに、翼を隠すのに使っている常時割いている魔力はおおよそ総魔力の10分の1にも及んだ……1分で。オプティックハイド、燃費悪すぎだ。アリアさんが目を剥いて詰め寄るのも当然だったかもしれない。そしてそれを補うくらいに魔力回復量があるというのだから……確かにこれはいい実験動物にされそうである。翼を隠蔽したらその隠蔽魔法も隠さないといけないとは何たる皮肉。

ともかく、余裕を見積もっても総量の半分くらい……私の未熟シユートバレットで300発分くらいだろう。はディバイドエナジーで渡せる計算になるが、ここで問題になるのは魔力ロスである。

こちらはまだ理論をかじり始めたばかりだし、元々私はその……習得に時間が必要なタイプなのだ。当然魔力ロスも多い。以前、貰



ったデバイスの馴染も兼ねてデインに試した時など、無駄に排出されるロス魔力の方が受け渡された魔力より多いくらいだった。その後、デインの魔力波長に合わせてみたりとした結果、何とかロスは半分まで抑えることができたのだ。

うん、自慢にならないね。アリアさんが渡してくれた資料では平均8割程度の魔力が譲渡できるらしい。あれか、練度不足か。

そんな私のデータを簡単に言えば、最大でシュートバレット150発分が一発補給可能でその回復に5分が必要な補給人員である。私からデータを受け取ったクロノは同じようにデインとココットの魔導師としてのデータを受け取って、考え始めた。

ややあつて口を開いたのは丁度ウルトラマンのカラータイマーが鳴りだしてしまっくらいだっただろうか。

「こんな作戦でどうだろうか？」

クロノが言うには。

一対一の状況を作っておき、一番よく知るデインをイケ面君に当てる。これですまず型にはめて考えさせる心理的な一段目の罠。

熱血ぶりを隠そうともしないデインが砲撃魔法を惜しげもなく使って魔力を消耗すれば、相手も油断する。それが二段目の罠。

中近距離までデインに引きつけたところで、私とココットも急速に合流。子供のことから心配で集まったのだからという憶測もしてもらえればよし。そうでなくても包囲される形になるので一見したところは不利に見える。それが三段目の罠。

魔力を温存しておいた私がデインにデイバイドエナジーで魔力譲渡、その際の隙はココットの速射による牽制でフォローしてもらう。考える暇を与えずにデインが最大威力の砲撃で囲んでいる形になっているだろう三方のうち出来れば指揮官を撃破。

後は常に数の有利を頭に入れて教科書通りに戦うといい、とのことである。

「……なんというか、ストレス溜まってないか？ 若白髪とか洒落になってないぞ」

「クーロノー？ 将来の士官候補生がこんな悪らつでいいのかな？」

私とエイミーである。

「ひ……ひどいな、君たちは……」

いやだつて、ねえ？

演技もはったりも必要としない、配置と行動だけで心理トラップ仕掛けてくるとか。

徹底的に油断させ、最後に私の特性を配置することで完全に向こうの思惑を潰す構えだ。

そして一旦奇策が成功したならば後は定石通りという手堅さ。

二人の方をちらつと見れば……

デインはしきりにウムウムと頷いている。いや判つてないだろ。

ココットに至っては、携帯端末に向かって創作に走っていた。ちらつとへたれ責めクロ……とか見えたような気がしたが全力でスルーしておく。ネルソフ魔法学校の文芸部は魔窟だと聞いたが……若年のココットまで浸食されていたとは……

そんなぐだぐだな空気も漂いながらも話は進み、その作戦を成功させるための特訓に採まれる事数時間。

なんだかんだで日が暮れようとしていたのだが。流れというかなんというか。

そのままお泊まりすることになってしまったのだった。

「おおお、お泊まり会なんか久しぶりだ。嬉しいけど親御さんの許可とかいいのか？」

さすがデイン！ 私に出来ないことをやってのける！

アリアさんがちょっともの悲しそうに故人の家だとか、母親の姿をまだ見てないとか、いろいろその、家庭環境でごちゃごちゃ有りそうで話出せなかったのだが、こやつ遠慮なく切り込みおった。

だがクロノは少しだけ困った顔をする何事もないかのように言っただった。

「母さんは仕事で遠くに出ているからね、この家もここ一年ほどは僕が管理している」

エイミイが気遣わしげにクロノの手を握った。

気付いたクロノは少しだけ含羞の色を浮かべながら口を開く。

「賑やかな方がいいのは確かだ。今日は遠慮なく泊まっていきたい」

## 十五話

寮監さんに「今日は泊まるからー」などと連絡したら大目玉を食らった。

若い身空であなたたちは何をやってるんですか！ とかまあ、ひとしきり……うん30分は説教されたか。

宿泊する家はハラオウン家だと言うと打って変わって安心したようだった。実はビッグゲームなんだろうか？

「お……終わりましたか？」

ココットがおそるおそる聞く。

この子は丁寧で感情をあまり感じさせない話し方とは裏腹に押しに弱いところがあるのでこういう時話を通すのは、おおむね私の役になっている。

大丈夫、なんとかなったよーと言って、ほっとした感のココットを連れてキッチンへ行く。

「その、ティーノ……りよ、料理を私にも教えてくださいますか」

と、妙な感じになってしまっている丁寧語でいかにも恥ずかしげに言われては、聞かないわけにはいかない……いやあ、メガネつけた女の子の恥ずかしげな上目使いはアレだった。鼻の奥がきゅんとした。

ここに来て同年代の私やエイミイが料理してるのを見て、思うところがあったのかもしれないが。まあ、なんだ……恐らくは乙女心という奴だろう。詮索するものは馬に蹴られて死んでしまうという例の心である。推して知るべしなのである。

あまり人様のキッチンを好き勝手に使うのはよろしくないのだが、

女子寮には共用の簡易的なものがあるだけだし、生徒のほとんどは学食ないし外食で済ませるのが我が校なのだ。手軽に料理の練習をすることもできないので、今回のような機会はある意味貴重である。そうになると、さわりだけとは言えメニューも考えないといけない。「とうわけで今日の題目はカレーライスなのだ」  
「確か学食で見かけた事もありますが、食べた事はありません。どういう料理なのですか？」

よくぞ聞いてくれたココット。とカレーライスの概要について説明する。

明治期に日本に持ち込まれすっかり日本でも定番となってしまう料理がなぜミッドにもあるのかと言えば、誰か輸入した人がいるのだらう。

実は料理をこれからする人にも最適。皮を剥いて野菜を切り、炒め、煮るという一通りができ、味付けも余程変にならない限りはリカバリー可能という素敵メニューなのだ。

ジャガイモと人参、タマネギの切り方を一通り教えて、具を切っけてもらう。

その間に私は米を研ぎ、水に浸けておく。

さすがにこの家に常備はされていなかったもので、さつき手近な店でカレーのルーと共に買ってきたものである。さても高級住宅街と言ったところか、どのルーも通ってきたのか魚沼産コシヒカリをミッドで見る事になるとは思わなかった。

そして大鍋にブイヨンと香り付けのハーブ、セロリやタマネギの切れ端などの香味野菜を入れコトコト煮出す。

丁度野菜も切り終わっていたので、そろそろいいかと豚肉、野菜と順繰りに炒めてもらってスープに投入。火が通ったらルーを溶き入れて火を止め置いておく。

米は鍋炊きなので、そう目を離すわけにもいかない。強火で煮立

つたら中火、弱火と鍋の具合により火を変え、仕上げに蒸らす。  
付け合わせの野菜のサラダでも作れば、これで完成である。

「ほい、召し上がれー」

と軽いノリで始めた夕食はなかなかというか相当な好評だった。  
さすがはカレーの魔力。ミッドであまり普及していないのがもっ  
たいない。

「ちなみにデイン、そのカレーはココット作だったりするんだよ」  
「ま……まじでか！？ いつの間にこんな……！ 昔の炭クツキー  
の名残もないっ」

「……！ デイン、過去の過ちを思い出すのはよろしくないのです。  
それにあれは鋼材成型用オーブンでレシピ通り20分焼いてしまっ  
たからなっってしまっただけであって生地を失敗したわけではないの  
です」

ココット……昔そんなことしてたのだね……

まあ、絆創膏だらけの指を後ろ手に隠している健気さに免じて聞  
かなかったことにおこづ。

「はいはいお代わりもあるぞー」

ルーを甘口にしておいたので、やはり食べやすいようだ。早速と  
いった感じでデインとクロノが2杯目突入である。

エイミイにもレシピを教えておく。本当は一晩寝かせてやると味  
が馴染んでもっと美味しくなるのだ、という事も添えて。

夜も更け、訓練疲れでしつかり二人が寝付いている事を確認して部屋を出た。

テラスに出て、夜気を浴びながら文字通り羽を伸ばす。幻術魔法を解いて翼を晒し、ブラッシングを始める。

日常の手入れというやつだ。実は地道に地球にいた頃からやっているのだが、これを怠るとたまに虫がついたりするのだ。厄介なものである。

以前は煙で燻したっけ……

あれはきつかった。虫落としとはいえ、スモークチキンになってしまうところだった。

羽毛の根元から羽先へ、柔らかいブラシを入れる。翼を持たぬものには判るまい、とても気持ちがいいのだ。

「ふふ」

何の意味もない笑いがこぼれる。グルーミングの気持ちよさというものかもしれないな。猫が目を細めるのも判る気がす……る？

「うひえワ！？」

「んーふふ、ティーノちゃんめっけー。そーらそらもふもふもふ」

「お……おおう？ ああ……ちよっ待ってエイミィッ！ うあッ」

うおお、人の……話を……聞かないっ！

ちよっど、翼の地肌はやたら敏感なんだからちよっど待て……！

「……え、えいみい……気はすんだ？」

私はちよっぴりレイプ目という奴だったかもしれない。

エイミィは心なしか、月明かりに照らされるお肌がつやつやしてるが。

まあ、なんだ。

物思いにふけっているところをエイミィに奇襲されただけである。油断も隙もないのである。腰砕けになりそうなのである。

「エイミィ、触るくらいだったら文句言わないから奇襲はやめて……」

「あはは、いい反応だったねー」

今度は優しくねー、とブラシをとられた。

背中手の届きにくいところをやってくれるらしい。

すっすつとリズム良くブラッシングされる。私も何となくリラックスマードに入ってしまった。

暫くはブラシの音と時間のみが過ぎていたが、ふつとエイミィが口を開いた。

「今日は二人を連れてきてくれてありがとうだねティーノ」

「クロノの事？」

「……うん」

の、割に元気が無い様子だ。どうしたのか聞いてみれば。

「んー、やっぱり男の子は男の子同士で馬鹿やってた方が楽しいのかなと思ってさ」

「デインと模擬戦やってるときとか生き生きしてたもんね。お姉ちゃんとしては可愛い弟が姉離れしたようで寂しい？」

と、私が言うとエイミィは戸惑ったかのように手が止まった。少し考えているようだ。

しかし、ふと思いついたが、昼食後に見せたあの複雑そうな顔はそんな事を思っていたのかもしれない。



「……寂しいのかな？ 妬いてるのかも？ 私が時間かけて近づいていったのにディン君は一足飛びにクロノと親しくなっちゃったから」

「男に妬くたあエイミィ姉さんも嫉妬深い事で……」

「茶化さないのー。今でこそ割と喋るけど初めて会った時のクロノなんか病気じゃないかってくらい大変だったんだから」

全く人と解り合おうとかしなかつたんだよー、と力説する。

その後も出るわ出るわ。

いつの間にかエイミィの悩みに乗っていると思っていたのだが、愚痴の相談に切り替わっていたようだった。

まったく……

右の翼を大きく広げてエイミィを巻いて黙らせる。身長に合わせて翼も伸びているので今はなかなかの長さがあるのだ。

「ほい、そろそろストップねエイミィ。寝るにはいい時間だよ？」

……返事がない。

もしもーと声をかけると、小さい咳きが聞こえてきた。

「ふ……ふふ、もふもふが一杯。うふ……うふふ」

「しまっ……！」

慌てるも既に時遅く、私はまた夜空に妙な奇声を……あげないために我慢したさ。うん。

そんなハラオウン邸での一日から一週間が過ぎ、今度こそあの実

習より続くリベンジマッチの開始である。

なんと言つてもイケ面君はなかなか目立つ存在なので、突き止めるのは簡単なことだった。人に聞けばいいだけなのだ。

今日も今日で女の子に囲まれている。

もつとも、よく見ればマスコット扱いなのは判るのだが。本人もちやほやされて満更でもなさそうなので、ある意味ハーレム状態と言つていいのかな？

「よお、相変わらずだな」

「デイン、ココット……君は？」

そういえば前回会った時は何かごたごたしたままだったので、名前も教えてなかったか。

「ティーノです。今日は一つお願いしたいことがあって来ました、……デイン」

「ああ。模擬戦を頼む」

「イケメ……失礼、先輩方に魔法を教導していただきたいのです。3対3の実習形式でお願いできませんでしょうか？」

さすがにデインの物言いはぶっきらぼう過ぎると思ったのかココットが口添えをした。

イケ面君はそのオレンジにも見えてしまいそうなブラウンの髪をなでつけ、少し考えたようだったがすぐに頷いた。周囲の人目も気にしていたのかもしれないが、断る理由もないのだろう。

明日の放課後、模擬戦室の予約をとつてあるので、そこで行うことを告げる。

では、明日よろしくお願ひしますと言つてその場を後にした。

その晩は景気づけというわけでもないが、私が腕を振るって鍋で

ある。

そろそろ季節柄厳しいのではあるが、これだと卓上コンロとまな板をおけるだけの台があれば作れるので良いのだ。

場所は、私がよく木刀を振っている寮の裏庭に、倉庫に放り出されていた折りたたみテーブルを置いている。

ここならまだデインが飲み食いしても問題なさそうだ。

ちなみに駿を担いでちゃんこ鍋にしてある。別に相撲するわけではないが、鳥肉メインなのは確か二足歩行なので手に土つかないといったところから駿を担がれていたはず。

白星を稼ぐという意味で白い肉団子を入れたりもするのだったか。ミッドまできて何やってるのかも思うが……こういうのは自己満足だ。いいことにする。

明日に備えて補給だー！ とばかりにがつついていたデインだったが、段々ペースが落ちてくる。

何かと思っていたが、どうもナーバスになっているようで。

「いや、勢い任せで来ちゃったけど、明日なんだよなあ」

クロノを信じないわけじゃねーけど……

と、時間をかけて刻まれた劣等感だのもろもろが蛇のように首をもたげてしまっているようだった。

私はココットに目配せをする。お前何とかしてくれと。

ココットは何か意味を変な風に受け取ったのか……目をまんまるに開くとメガネを外し、深呼吸を一つ二つ。まるで、ココット行きます！ とでも言いそうなくらいに決意した目を私に向け一つ頷いた。

お、おう……何だか知らんが頑張れ……

「デイ、デイン、月並も良いところですが……かか勝ったら……その……キ……いえ、わたしのなどが褒美になるのでしょうかいやで

も

吹いたら悪いと思いながらも吹くところだった。  
テンパっているココットに気付いたデインが、何だ？ とばかり  
に振り向き、ココットはなおさら混乱度が増したのか……

「！！！」

「！？」

ココットがデインの唇を奪った。

「あつ……え、あの、さ、先払いですデイン！ これで明日は絶対  
負けません。因果律がひっくり返りました。結果が先に来たのです  
から明日は絶対負け不会です！」

ココットが一息に言いはり、真っ赤になってその場で小さくなっ  
た。

ぶしゅうと音がでてきそうなくらいである。私の位置からはその  
ふわふわのハニーブロードしか見えないが。

ココットの目の前に居るデインはそりやもう呆然である。しかし  
段々理解が追いついてきたのか顔に赤みが差しはじめココットに負  
けず劣らず真っ赤になっていく。

私はもはや見てもいらねず、こそこそと席を立つ。右手には寝ら  
れないようならと、出そうと思っていたワインを持って。

我ながら馬鹿みたいな身体能力を無駄に使って目についた木をひ  
よひよいつと登る。

座りのいい枝に腰を降ろし、ワインを口に含んだ。

「なんて甘酸っぱい……」

それは眼下の光景かワインの味か。  
一つだけ判るのは、月明かりの中、木の上でワインを飲んで肩をすくめている少女というのは考えて見ると大層シユールだろうと言  
う事だった。

肝心の模擬戦であるが。  
何というかその。  
うん。

「こんなに目論見通りいくとは……」

あつさり勝ってしまったのだった。高等部相手に。  
昨夜、あんなことがあったので二人のメンタルを心配していたの  
だが、なんだか上手い具合にはまったらしい。

クロノの読み通りに動いてくれてまず最初にデインがイケ面君を  
撃墜。

その後は指揮を失って連携が一時的に取れなくなった二人を3対  
1の形で集中砲火。  
終わってみればあつという間だったのだが……  
いやなんというか実感がないな。

「ココットの月並みのアレが効いたのかねえ」  
「テ、ティーノ！」

わやわやと冷やかす私に慌てるココット、をさておいて、デイン  
は床に腰を降ろしているイケ面君に歩み寄って言った。

「俺の勝ちだよな」

「ああ、僕の負けだよ」

ディンはその言葉を聞くと大きく息を吸い、吐く。  
どっかと床に腰を降ろすと深く頭を下げた。

「へ？」

「長らくつかつかかちまって悪かった！ お前に負けっぱなしなのが悔しかったんだ」

実に直線。ストレートな言葉である。これには思わず毒気を抜かれたらしい。

「僕はてつきり君には嫌われているもんだとばかり思ってたよ」

「いや、俺が殻破れなかったのが原因だ、正直すまんかった」

仲直りしようぜと握手なんて交わしていたりする。

途中で名前を呼ばれたような気もしたがなんだったんだろうか。

ともあれ、せつかくの仲直りの舞台に水を差すのも野暮だ。

「ココット、祝勝……いや、復縁を祝つてのちよっといいいランチセツトでも買いに行こうか」

考えてみれば、何も関係してない先輩方二人にも付き合わせてしまっているわけだし。昼食くらいは出さないとこちらもちよっと申し訳ないのだ。

手持ちぶさたにしているココットを連れ出して店に走る。

しかし、本当に実感が無い。

でも存外勝つ時というのはこんなものなのかもしれない。そうでなければ勝って兜の緒を締めよなんてことわざは産まれないのだ。

ただ、こここのところの密度の濃い日々は随分ためになった。

空を見れば既に初夏の日差しが出てきている。

時間が過ぎるのは早い。

入った当初はほとんど飛び級してやるぜなんて思っていたものだが、そうそう簡単でもないというのは判った。

「私も先の事をきっちり考えていかないとなあ」

「ティーノ、先のこともいいですが目先のこととも考えないと、あまり待たせるのは良くないですよ」

仰る通りなので、私たちは考えるよりもとりあえず足を動かすことを選んだのだった。

## 幕間二

試験管の少女は唄を紡ぐ。

誰にも聞こえない唄を。

その大きさをさえ無視すれば、そう形容してもいいかもしれない。

意味などはないのだろう、言葉は知らないのだから。

ときたま、泡のきらめくその培養槽の中で少女は口をぱくぱくと動かしていた。あわせてその背中の小さな翼や、紅葉のような小さな手がゆらゆらと動く。

白衣の男がそれに気付くとリズムをとって、コン、コンとガラスを指で叩く。

何が嬉しいのか、あるいはただ真似しただけか、そのリズムに段々合わせるように少女も内側から同じように叩き返す。

その不思議そうな表情に、最近めつきり笑い上戸になったと感じながらも男はまた小さく吹き出した。

最初は薄暗く、何の飾り気もなく、鉄とプラスチック、電子音とコンソールを叩く作業音しかなかった部屋に段々彩りが増えて行く。それは小さい人形であったり、男が小さい時に好きだったレトロなブリキのおもちゃであったりもした。

それは決まった時間に小鳥がワルツを歌う時計であったり、時間が来るとくるくると回ってピエロたちが踊り出すオルゴールだったりもした。

デスクの中央にいつしか飾り瓶が置かれ、造花が飾られる。冷たいリズムをとる音しかなかった空間にピアノを基調としたクラシックが流れる。

その壁に飾られた、男が自分ではよく判らないながらも買ってきた……と思わしき壁掛け、絵画、押し花、といったものも10を数えた頃だっただろうか。



色合いに踊るような赤い色が混ざったのは。

「これも、これも、これもだ！」

男は何かに憑かれたかのように書類を燃やしていた。

換気も十分効いているだろう室内にすらその煙が充満していく。

それを吸い込んだ男はひとしきりむせ返ると、胸を押さえ苦しみはじめた。懐から錠剤を取り出し、異様な形相でかみ砕き嚥下する。ふうと一息吐き、頭を一つ二つ振るとコンソールに向かい操作を始めた。

「……アドニア、君はすぐに自由になる。次に目が覚めた時には暖かいベッドの上だよ」

何らかの複雑なプログラムらしき文字の羅列がディスプレイを巡り、そこから目を離さずに男は呟いた。

やがて、培養槽から液体が抜け始め、少女に幾重にも絡みついていた管もゆっくりと外れる。

槽の液体が抜けきると同時に駆け寄った男は何らかの器具、ガスマスクのような形をしているものを少女の口にあてがい、スイッチを押す。小さな駆動音と共に少女の気管と肺を充満していたであろう液体が排出され床に流れる。

耳を近づけ、ひゅ、ひゅ、とという浅い呼吸音を聞き取った男は一瞬安心して力が抜けたかのように表情を緩め、次いで厳しい表情となった。

男が入り口をゆっくり振り向き、長身の人影を見ると体に緊張が走った。

「相変わらず君は肝心なところで徹底できないな、セフォン研究員。やるなら後腐れなく始末するか、後遺症など考えないで強力な薬を

使いたまえよ」

「……主任」

主任と呼ばれた長身の男は荒れた室内と、ディスプレイに明滅している情報をざっと見、感情の全く出ない顔のまま向き直り言った。

「しかしまあ……全くよくもやってくれたものだ。これで、もう8年にもなるこの研究所とも別れを告げねばならん」

「主任……僕は……」

何か言いかけようとした男 セフォンの言葉を遮るように「言わんでいい」と主任は言った。

「ああ、言わんでいいとも。その実験体に情が移ったのだらう。研究者としては失格だが人間としては正しいのかもしれない」

主任はそこで初めて右頬を歪めて薄く笑った。

「尤も、数々の人体実験をしてきた身としては、甚だしく今更と言ったところでもあるのだらうがね」

「……それでも、僕は」

「言わんでもいいと言っただらう。行くならほれ、退職金だ」

デスクになにがしか入っているような膨らんだ封筒が置かれた。セフォンの目が大きく開かれ、申し訳なさそうに歪んだ。

「……主任、すみません……」

「謝るな。君も感じている通り、この実験は行き詰まりだ。……考えてみれば無理があったのだらうよ。『無限の欲望』の成功例が奇跡に奇跡を重ねたものだったというだけだ」

主任はそう言うとももない虚空に目を向け、重く、長い息を吐き出した。その吐息で10年は年老いてしまったかのように声がひび割れる。

「あの成功があつてから研究所も、スポンサーも気が狂つたよ。…もしかすれば過去の英知を復元できるのかと。または人が過去から完全に複製されるならそれは不死ではないのかと」

愚かな事だつた。と首を振る。主任は自らの小刻みに震える両手を見ながら続ける。

「……この手で私は何百体切つたのか。……この手は何千の死刑執行書にサインを書いたのか……私は……！」

見つめる手の平に何を幻視したのか、恐怖でも覚えたように目尻がひきつっていた。もう老人にしか見えないその瞼を閉じると、一息、二息と呼吸を落ち着けた。

「君のリークした情報で、管理局も動き始めたようだ。あるいは、証拠の隠滅かもしれんな。さ、もう行くといい」

セフォンは無言で軽く頭を下げ、少女を懐に抱きしめ、出口に足を進める。

お互い背を向け合った所で思い出したかのように主任が声をかけた。

「行き先を決めていないようなら、その封筒の中の座標に行ってみることだ。逃げる為の専門家が居る。幸運を祈る。ペル・セフォン 研究員」

セフォンはその声を聞くと唇を噛みしめ、弱気そうな顔をくしゃくしゃに歪めながら小走りに走りさった。

## 十六話

偶然も二度続けば偶然とは呼ばない。

かといって、必然と呼ぶには差し障りがある。

何を言いたいかというと、久しぶりに夢見が悪かった。

妙に印象の強い電気音と泡の音、ガラスを叩く音……

そう言えば、検査の時に精神がどうか記憶がどうか言われていたことを思い出す。

ふとした拍子に突拍子もない記憶が見えることがあるかもしれませんが、その時は落ち着いて近くの掴めるものを掴んで。パニック発作とおおむね対処は同じです。落ち着けると思う事が一番です……だったか？

多分フラツシユバツクのようなものを想定しての言葉なのだろうけど、夢で見たせいだろうか、今ひとつ実感もなければパニックにもならない。その上、ぼんやりして覚えてないことも多い。

確かに突拍子もない記憶ではあるのだが……あまり、認めたくないような。記憶と思いたくないような。何かの実験体だった壮絶な過去とか真つ平なのである。

性別は違えど、人並みに変人に囲まれ、人並みに仕事一筋になりすぎて彼女の一人も出来ず童貞を嘆いていた、地道な過去の方が有り難いのである。人並みの人生かどうかは議論の余地があるとしてもだ。

「うおお……いかん。どつぼにはまる……」

こめかみをぐりぐり親指で押しながら洗面所に向かった。

冷水をこれでもかと顔に浴びせて頭を冷やす。

もはや本来の目的よりも、雑念退散とか集中したいときに振るようになったってしまった木刀を引つ掴み寮の裏手に出るのだった。

何とはなしに癖になっている、木刀を片手で地面から垂直に持ち上げてからの一振り。調子を見るための最初の一刀を振るう。

予定より大分ずれた。

少し前にのめるような形で振るう。

ずれが少し直る。

体の成長期もさることながら、実は翼も日々成長している。

当然ながら、生身の翼である以上それなりの重さがあり、普通にしているように見えて実は随分重心が人とは違っていたりもする。ついでに言えば関節の動きもちよつと複雑である。レントゲンを撮れば面白い写真が撮れるに違いない。

もっともその辺がなおさら既存の剣術とかを学ぶのに不向きにしているのでもあるが……

それはもう身体の問題なので仕方ない部分もある。片腕の人間は片腕で扱える剣術を使うしかなく、翼なんか生えてる人間はそれ用の剣術を使うしかないと言う事なのだろう。それ用なんてないので、奇しくも以前恭也に言われた事、私自身の剣を作るしかない、という言葉に被ってきてしまうのだが。

私自身はある種の趣味になっているのと、毎日の癖のようになっていて、ただで剣術に身を捧げるというタイプでもないのだが。まさか、自らの流派でも立てると？

そんなやくだいもないことを考えているうちに素振りを終え、汗を拭く頃には起きた頃の気分の悪さなどはどこかに吹っ飛んでいた。やはり我ながら適当なもんだった。

焼きたてパンの暖かみを紙袋越しに感じながら、駅前広場のベンチに陣取る。

ミッドでも地球でも、パン屋では紙袋。そんなところは変わりないらしい。さつそく焼きたてベーグルサンドを取り出してかぶりつ

く。少々行儀が悪いかもと一瞬思ったものの、考えてみれば戸籍年齢11歳だった。このくらいは平気だろう。何よりこの食べ方が一番美味しい。

カリッと焼き上がったベーグルに目玉焼きとチーズ、ハムといった定番の具が挟まれているだけなのだが。冷える前に食べるのとは味が格段に違うのだ。チーズが程よく柔らかくなり、中身がしっとりとした食感になる。ハムの代わりにカリカリにしたベーコンでもまた食感が変わって美味しいが。

と、あつと言う間に食べ終えてしまった。

またもや行儀が悪いとは思うものの親指についたチーズを舐め取る。

栄養的にはサラダか何か欲しいところだが、一食分くらいは気にしないでおく。ついでにパン屋で買った紙パックのコーヒー牛乳にストローを刺してちゅーちゅー吸いながら時計を見た。

電車の来る時間までびったり10分前。

今日は、突然ながらに施設の子たち、姉たちが連れだって遊びに来るのだ。

本当に突然である。何しろ連絡がきたのが昨晚のことなのだ。

聞けば、納得のことで、一応施設に在籍しているはずだが、一年の半分は旅をしているカーリナ姉が丁度帰って来ているらしい。あの人はいつも唐突だ。

一ヶ月フラッと旅に出たと思ったら一ヶ月は施設でグータラ過ごしていたり、時には先生とチェスをやっていたりもする。

自分の理論で、よし遊びに行くぞ、なんて言っただけで場末の酒場に子供を連れ回してみたり、お前には才能がある、なんて言っただけで追跡術をティンバーに教えてしまったり、行動もまた唐突な人だった。

出版社と契約を持っており、紀行文で収入を得ているようで、なんで施設に居るかと言えば……愛着もあるのだろう。アットホームな所だし。多分。とりあえず帰れば飯が出てきて風呂に入れるから、とかでない事を祈りたい。

きつといつものごとく、何も説明しないで「よし、ティーノのところにも遊びに行くぞ」とかそういうノリで引っ張ってきてしまったに違いない。

見た目は颯爽としていて格好いいのだが、何で性格がああなのだろうか……

赤毛……というには紫がかっているマゼンダに見える髪を長く伸ばし、長身をさらに細く見せてしまうような暗めの色のスーツを好んで着ている。さすがにもうじき夏に入るといふ時期でもあり、薄手のサマースーツのようだ……が？

いつの間にか待ち合わせの時間になっていたようだ。構内から歩いてくる姿が見えた。ああこら、カーリナ姉、歩調考えないからデユネットが取り残されてるぞ、ああラフィ、ナイスフォローー。

何とも危なっかしい施設の連中を見て、見てるについあわあわしてしまふ。何となく私も彼等に向かって歩き出し。

「久しぶりだな、ティーノ。およそ三ヶ月ぶりか……ん、大きくなっただか？」

唐突に抱え上げられた。高い高いというあの格好である。勘弁してほしい。

「そりゃ成長期だから伸びるさ……というか降ろして……降ろせー」

さすがに人目が恥ずかしい。ただ、手足の長さに絶望的な差があるためじたばたしかできないのが悔しすぎる。文字通り手も足もないので困る。

羞恥に悶える私を二度三度持ち上げると、うむ、とか一つ頷いてやっと地面に放してくれたのだった。なんだよ、うむ、ってなんだよ。ああ顔が赤い。



「ご愁傷、さま？」

「おつかれ、ティノ姉」

デネットとラファイが慰めてくれる。ありがてえありがてえ。いい気味だとばかりにせせら笑っているティンバーには後でワサビクツキーでも食わせる。

「カーリナ姉さん、連れてきたのはこの三人で全員？ 誰か迷子になつてたりとかはないよね？」

「ああ、さすがにラファイやティンバーより小さい子を連れてきたら私の手に負えないからな。そこまで常識知らずじゃないぞ？」

カーリナ姉はその常識レベルが平均と違っている可能性があるの  
で、困るのだが……

聞けば施設の方は私達以外の年長組の二人、ヘクターとティズリ  
ーに任せてきたようだったので、少し安心した。

さて、と私は目の前でパンと軽く手を叩き、気分を入れ替える。  
時間も勿体ないし行こうか、と先に立って案内する事にした。

この魔法学校の規模を考えると、割と中途半端な事に気付く。

自分で案内をし始めてからそんな事をふと思った。

学園都市や学園町と呼ぶには小さいし、そこまで都市計画に練り  
込まれているわけでもなさそうだ。

しかし、ただの学校と呼ぶには規模が大きい。年中無休の購買や  
各所にある学食、喫茶。服飾や雑貨などを取りそろえる店も入つて  
いるし、休日ともなれば、敷地の一画を解放してフリーマーケット  
として解放したりもしている。魔導師を育てる都合、相当な補助金  
でも出ているのだろうか。小規模ながらも美術館や博物館。そして

文学、歴史、魔法学などの資料が雑多に集まった資料館などもある。もつとも、色々と見て回れるものが多いという意味では、案内する立場としては助かっているのだが。見る物が多いゆえか、カーリナ姉がふらつと姿を消した……まあ、いつもの事だ。

そしてその資料館へ案内するつもりでいたのだが、入る途中でデユネットの足が止まった。

「……これは、私と似て、否なる気配……」

ふらふらと一室の方に向かって行く。擬音なんて眩きながら。

……そっちは、ええと。悪い予感がひしひしと押し寄せた。

資料館と大雑把な呼び方をしてしまっているものの、部屋数のある建物なのでそのままクラブルームとしても使われている。

そしてデユネットが向かっているのは……『文芸部』と書いてある部屋だった。

「おや、ティーノではないですか」

折しも文芸部のドアより出てきたのはココットである。そう言えば部員だったつけ。

どうしようかと思っている私を見、何か手をわきわきさせているデユネットを見、私達の後ろにたむろしているラフィとティンバーを見、ぽんと手を打った。

「部活見学ですね。なるほど、やっとティーノが私達文芸部の誇るハチマルイチ文化を手にとってくれる日がやってきましたか。でも、フフ……そんなに人を集めなくても、そう怖いものではないのですよ?」

いや、そんな……お客さん初めてかしらん? みたいなノリで誘

うな。

妙な戦慄を感じてあつあつ言っているとココットの目が輝いた。

「ふふ、さあ歓迎します。これからは同士と呼ばせて頂きましょうか」

ココットの手が伸びる。駄目だ。今のココットは常のココットと違っては駄目だ。今私の前に居るのは腐界の住人、B Lという禁断の果実を食させようとする蛇に他ならない。

というか、確かにココットには計り知れ無いことでもあるが、未だ男性であったときの事だって根深く引きずっているというにその上、腐女子になれとかどんな新境地を開けばいいのだ私は!?

「くっ……」

得体の知れない妖気のようなものに圧され、身を震わせる幼い二人を庇う。

そんな私をさらに庇うように手で遮ったのはデュネットだった。

「ティーン、私は部活見学してくる。行って」

「なっ、デュネット! それでは……」

まるで……まるで人身御供ではないか。

絶句していると少しだけデュネットはこちらを振り向き、大丈夫、と言う。

「大丈夫、私は染まらない……」

「……く、デュネット……いずれまた再会の時まで……無事にいるよ……」

私は子供達を連れて退却に成功した。 デュネット、君の尊い犠牲は忘れない。

「なー、ティーノー。何か感動してるとこなんだろうけど腹減ったー」

ティンバーの子供らしい素直な訴えによってこの寸劇は幕を閉じた。

時間を見れば確かに昼に近い時間になってきている。

学食でもいいのだが……ここは一つ子供たちの社会勉強も兼ねるとしようか。

そう考え、一旦学校を出て最寄りのアーケード街へ行く事にしたのだった。

デュネットには一応行き先をメールしておく。後で来れるなら合流すればいい。

この辺りには駅前通りまで行かなくても、学生が中心の購買層になっているアーケード街がすぐ近くにある。

といつても、そもそもが片田舎と言ってもいいので、さほど自慢できるほどでもないのだが。

ゲームセンターやファーストフード、派手目な服を扱っている店、音楽ショップ、アクセサリーショップなどがここに集中している。

学生にとつての息抜きの場というわけだ。休日ともなればそれなりに人も多い。

こんな場所で社会勉強も何もないという硬い大人も居るかも知れないが、なかなかもって子供には大切な勉強の場にもなってくれる。

特に通常の保育所、初等科の学校に通えない、うちの施設の子供たちにとってみれば、基本的な社会のルールを学ぶという部分が抜けがちになってしまう。多分カーリナ姉もそういう部分を考えて時折子供達を連れ回すのだろうけど……

ともあれ、お小遣いを渡して、決められた上限の中からどうやってやりくりするか、なんてのも実地で学べるし、こうした人混みなんてのも子供の頃に慣れておかないと大人になっても苦手になってしまうものだ。

ついでにティンバーには女の子にあげるプレゼントの選び方でもレクチャーしておこうか。

入学時に貰ったプレゼントを思い浮かべそう考えたのだが。

……うん、やめた。難しいことはすっぱり忘れて楽しむことにする。

二人の顔を見れば、それはもう綺麗に盛りつけられたデコレーションケーキを目の前にした時のような表情できよるきよると見回している。手を放せばすぐに飛んで行ってしまいそうだった。

「二人ともー。気になった店があったなら入ってみようか」

と、水を向けてやると、よっしゃーとばかりにはしゃぎ出すティンバー。ラフィはラフィで手を控えめに引っ張ってくるので、どうやら行きたい場所があるようだ。

こんなに喜んでくれるなら、もう少しこういう場所に連れ出してもいいかもしれない。ただ、施設の周辺はちつとばかり田舎もいところなので、こういう華やかな場所に欠けるのが一番の問題でもあるが。

早くしろー、とせき立てるティンバーを抑えつつ、財布を出す。

地球換算で千円くらいだろうか、の小遣いを渡して「今日で使い切る事」だけ約束させ、行きたい店というのに順番に回ることにする。もっとも、ちよつとしたお菓子や玩具でも買ってしまえば飛んでしまつような金額だが、居残り組へのお土産代を考えればこの辺がせいぜいだった。ふがいない姉を許せ、ティンバー、ラフィ。武装局員とかになつたらもう少し頼りがいのあるところを見せてやるからな？

しかし、私の資金も大分減ってきた。いや、元々そんなに多いものでもないのだが。地球で稼いだ現金をミッドの金に替えてもらっている。ついでにここ一年の間に農作業の手伝いなどで貰ったちょっとした小遣いを地道に貯め込んだりしたものだ。

実のところ、生活費は生活費で院長先生から振り込んでくれるのだが、実はこつそり施設の帳簿を覗き見たことがあるので有り難いけど気軽に使えないのだ。そっくり取っておいて、弟妹たちの学費にでもなれば良いと思っている。大体、私自身は割と一人で何とかできてしまうのだから……そろそろ、アルバイトの一つでも探さないといけないとしても。

そんな、難しい事を忘れてすっぱり楽しむ、なんて思った事もすっぱり忘れ……頭を悩ませつつ店を回ったのだった。例のごとく、途中で考えてもじゃーねーとばかりに三人で楽しんだのだったが。

「ん？ 何か呼んだティンバー」

色とりどりの物が並んだ雑貨店を出ると、ふといつぞやのように名前を呼ばれたような気がした。ティンバーは覚えがないと首を振る。

おつかしいなーと周りを何とはなしに見ると、見覚えのある姿が見えた。

「あれ……ティンと、イケ面君？」

ゲームセンターの入り口に設置してあるガンシューティングに興じている二人連れ。妙に熱中しているようだった。やがてリロードをミスしたティンが撃たれたようで、ティンの方の画面に大きくGAME OVER！と表示される。あちゃー、と割としっかり落ち込んでいるティンに近づいて声をかけてみた。

「よ、敗北者」

「うお！？ ティーノかよ……いきなり敗北者はねえだろ」

「傷を負ったものには容赦なく塩と唐辛子。私はそういう主義なんだよ」

「……ティーノってそういうキャラだったか？」

「ココットがないので頑張ってみました」

右頬を上げてニヤリと笑ってやる。

しかし、こんな近くでダベっているのに隣のイケ面君はまるで動じない。ものすごい集中力である。

というか上手い。ターゲットが登場する位置とタイミングを弁えているかのように淡々と撃ち、リロードの速さと言ったら無駄のないこと。

結局最後までノーミスでクリアしてしまい、ぴろりとハイスコアを更新。それまで食い入るように見入っていたティンバーは大興奮。

「すげー！ 兄ちゃんなら稼ぎ頭のヒットマン間違いないぜ！」

ティンバー……微妙すぎる褒め言葉だそれは。

そこで初めて私達に気付いた様子のイケ面君、この人集中しすぎだろう。

「お……ああ、確かティーノさんだったか。こんにちわ、良い天気だね」

やあ、なんて手を上げて挨拶してくる。いや、何か別に不思議でも何でもない挨拶なんだけど、なんだろうか……私の中で作られていた強者のイメージが……

模擬戦で勝てたとはいえ、あれは作戦勝ちでもあり、戦う前に勝

負は9割9分決まっていたという類のものだったのだ。

思い返すと私もやつきになりすぎていた気もする。負けん気に流されたというべきか。模擬戦という勝敗を競う場でないのに勝敗を競ってしまったのはちょっととした黒歴史認定である。

実際一対一で技量を競えば私が届く届かないというレベルではない所にいるわけで、あまりこう……ばやばやされると調子が狂いそうになる。

そんな間にもティンバーに銃のすばらしさを説いているイケ面君。

「ちょっとまで、質量兵器禁止の世界で何物騒なことを子供に話してるんですかアンタは」

「いや、なかなかこのリコイルするシステムも作り込まれててね、つい」

今時珍しいプロップアップ式が、とか言い始める。

「そこまでにしておこうぜ、お前の銃好きは判ってるけど長くて仕方ねーや」

ディンが途中で割って入った。どうせだから昼飯でも一緒に食おうやーと提案する。

丁度いいかもしれない。ティンバーとラファイも途中で小さめのホットドッグを買い食いしたただけだったし、そろそろランチタイムで混み合うピークも外れてきたはずだ。賛成しておいた。

入ったのはファーストフードと喫茶店の間のような店である。

自分で具を選べるサンドイッチとサラダ、コーヒーを頼んだ。

「ティンバー、カウンターによじ登らない！ ラファイ、ホットサンドは判るけど格好いい名前だからってゴルゴンゾーラは早いと思うよ、こっちのリーダーチーズが良いんじゃないかな」



などと子供の世話を焼きつつも室外にあるテーブルに落ちつく。おおむね形式は日本のファーストフードと同じなので、コーヒーはカウンターですぐに出して貰える。客がそれほど多くない今なら料理は後で運んでくれるらしい。

ブラックのまま一口すり、味わい、おもむろにカップを降ろす。……ミルクと砂糖を素直に投入することにした。子供舌が恨めしい。さて、と落ち着いたところで改めて子供達を紹介する。

「私の出た施設の弟と妹、ティンバーに、ラファイだよ。ほい、挨拶してね」

と、二人に挨拶をさせ、次いで子供達に二人を紹介する。

「こっちの赤髪ツンツン頭がディンで私のクラスメイトだね。そんなこっちの銃オタっぷりを見せてくれた人がイケ……」

ディンが吹いた。失敬な。私もあだ名で考えすぎて、つい出てきてしまっただけだと言うのに。この人の名前は……

あ、あれ……えーと……そう言えば、今までの遭遇がなんだかバタバタしてて聞きそびれていた？

「ええと、どちらさまでしたっけ？」

……いかん、滑ったようだ。イケ面君の額から冷や汗がたらーりと。

「そ、そういえば、僕もちゃんと名乗ってなかった気がするけど、ディンからは聞いてなかったのかい？」

「あー、ええ。何となく流れで」

私が適当に言った名前がそのまま何となく使われてましたとは言えない。

やはは、と日本人らしく笑ってとぼけていると仕方ないなどとも言いたげにため息を一つ吐かれた。落ちてきた一房の茶色の前髪をかき上げる。そんな仕草をなにげにするから妙なあだ名もつけまうんだぜー、と自己弁護だけはしておいた。

「ティーダ。……ティーダ・ランスターだよ。よろしくねティーノさん、ティンバー君にラファイちゃん」

「ん、よろしく、ティーダ先輩と呼んだ方が？」

「やめてくれよ、ティンもココットも僕の事は呼び捨てなんだ。同年なのだろうし君もそれで頼むよ」

了解と言い、口の中でティーダと発音してみる。ふむ……

「ちょっとティン、ティーダのこと呼んでみてくれる？」

「おう、なんだそりゃ？」

「いいからいいから」

と、ティンに発音させると、うん。

「何かこの間から呼ばれる気がしてたと思ったらティンの発音のせいであったばいね」

ティの部分が強イイントネーションになっているのだ。紛らわしい事である。そして、ティンの発音を直させているうちに頼んでおいたランチが出てきたのでそちらは一旦停止し、食事に集中した。

モツツアレラチーズとトマトと生ハムとレタスの相性が絶妙だ。シャクシャクモチモチとして食感も良い。この組み合わせ今度自分

でも作ってみようか。

そんな私が食事に集中している間にも、デインとティードは口を休めない。行儀悪いぞー。しかし、こう見ると仲良かったというのは本当らしい。性格的な相性もあるのかもしれない。

模擬戦の時とは裏腹にティードは妙におっとりしているようなところがあるようだ。見た目と同じように大人びていて余裕があるだけかもしれないが。話にしる強引に自分の話したい話に持っていくのがデインだとすれば、柔らかく、いつの間にかその話にしてしまっているのがティード、そんなところだろうか。

「こいつな、俺やティードと同年のくせに一人だけ高等部三年なんだぜ？　しかも今度の夏休みには空士の一次試験受けるんだってよ」

そんな事をティンバーに愚痴るデイン。いやお前……8歳児に愚痴るってどうよ。

そんなデインはぷくぷくと頬を膨らましている。本気で不満そうなので。

「デイン、劣等感とかは乗り越えたはずじゃなかった？」

「んな簡単になくなるかよ、真つ正面から見れるようになったただけだっつうの、それにな……」

デインはティードの方を向くとちよつと真面目に言う。

「ティード、これからも俺に限らずこういつ……ええと、妬みとか羨ましいってのは付きまとして来る事になると思うぜ……なんだ、まあ、負けるんじゃないぞ」

「……ああ、心に留めておくよ」

麗しき友情的一幕である。

「これがドラマでよくある熱い友情という奴か……とするとこの後  
ティノ姉も含めてファミリー同士の泥沼の抗争に!？」

「しっ、ティンバー。静かに見てる。そんな展開にはきつとならな  
いよ、あたしはティノ姉が唐突にバットで二人を殴り飛ばしてギャ  
グ展開に持っていくと見た」

二人の子供妄想家のおかげでその一幕もただすべりになってしま  
った事は残念である。一応聞こえないように小声で話していたよう  
なのでデコピンで勘弁しておいた。

良い時間になってきた。ディンやティータはこれからまた二人で  
遊びに行くようなので別れる。デュネットと合流して、暗くなる前  
に帰らせる事にした。何だかんだでカーリナ姉も含めて20より上  
の人が居ないメンツなのだ。そう遅くに帰らせるわけにはいかない  
日が暮れるまで特訓とかがしていたちよつと前の自分は盛大に棚上げ  
である。

お土産もしっかり持たせ。駅前デュネットを待っていると本が  
詰まった重そうな紙袋を両手に抱えて、えっちらおっちら歩いてく  
る姿が見える。どうやらココットも見送りに来てくれたようだが、  
あの様子からするとどうも古本屋巡りでもしていたようだった。

「まさか、SAN値を下げて801の浸食に耐えきるとは思っても  
い wasn't でした、また会いましょう好敵手デュネット」

「ふ……ふ……。ラン!! テゴスを思い返さねば危ういところだった。  
ココットこそ……やる……いずれ決着を」

聞こえない。らあんでごすくとうるうふたぐんとか聞こえてない。

尽くし責め俺様受けとか謎の呪文も聞こえてない。

何か二人を会わせた事で変な化学反応が起きた気がするなんてことはない……ないんだ。

「ティノ姉、頭痛いの？」

ラファイが頭を抑えてうんうん唸る私を心配してくれたようだった。ああ、癒される。半端に耳が良いのも良し悪しなのだ。

ともあれ、デュネットとも合流し、ホームで見送る事にする。

「それじゃ皆も元気でね。あと夏休みに入ったら私も帰る日があるだろうからその時は前もって連絡しておくよ。それといつまでも胸を揉むなティンバー」

「ごん、といかにも突っ込み待ちのティンバーの頭にいい音をさせる。

「ラファイ、連行」

「うーい」

実は相当な力持ちのラファイが軽々とティンバーを担ぐ。

やがて出発の時間となり、電車に乗って離れていく三人をばたばた手を振って見送る。

………

………三人？

「帰ったようだな」

後ろからハスキーボイスが聞こえた。

「カーリナ姉さん……なんで居るのさ」

「ティーノは私が居ると嫌なのか？ それは……寂しいな……」

「いや、引率……」

「忘れていたようだがデュネットは私と同年だぞ？」

「……そうだった」

同じ16歳なのにデュネットは13歳に見えてカーリナ姉さんは19歳に見える。不思議！

それはともあれ、何か用事でもあったのだろうか。

私が首をかしげると、ふふんと笑い、ジップ付きビニールに入ったアクセサリーを取り出した。

「SOTM？」

そんなアルファベットがゴテゴテとデザインされているシルバーアクセサリーだった。Oの部分が高蓋骨のデザインになっていて、何というかこう、ふつふつと若い頃を思い出してしまうような、盗んだバイクで走り出してしまいそうなデザインである。

そのアクセサリーを私に見せ終わると、無造作にポケットにしまった。

カーリナ姉の琥珀色の目が細められ、唇は肉食獣のような笑みを浮かべる。

この人たまにこの笑みを無自覚でやるのだが、正直結構怖い笑みである。何というか殺す笑み？ 自称冒険家がそんな殺伐としていいのだろうか。いやこの人だと何でもありそうで困る。

「ティーノを監視していた男が持っていたものさ。うちの子達がいける事情持ちだというのは知っているな？」

そりゃまあ、私もある意味その一人であるし。肯定の意を込めて

一つ頷いて先を促すと、また先程のアクセサリーを取り出した。

「これはソウルオブザマターとかいう小悪党どものシンボルマークさ。単に頭文字を集めただけのようだけどね……最近うちの子達の誰かを狙い始めたらしい。施設の方は平気としても一人だけ離れるティーンが一番危ないしな」

それで私が来たってわけだよ。なんて肩をすくめて見せる。有り難いのだがなんともむず痒い。

いつものごとく考え無しに来たとか思ってたすんませんでした。

そしてソウルオブザマターとか、何とかひしひしと香ばしい気がしないでもない。異端は異端を呼び寄せるというあれか？ 私という香ばしい存在は香ばしい連中を引き寄せるのだろうか？

翼なんて真つ先に隠してるしオッドアイだってカラコンで隠しているというのに……

「何を落ち込んでいるかは知らんが、一つ聞こうか。見張りが倒された。組織が持っている情報は、現在ターゲットは外出中である。連れがいるかもしれないが、管理局員というわけでもない」

さて、どういう行動に出ると思う？ なんて聞いてきた。

ええとそりゃ、見張りも定時連絡くらいはしてるだろうし、それが途切れれば様子見に行くよね。で、その口ぶりだと多分カーリナ姉がまあ、豊んでしまったんだろう。かといって、現在ターゲットはかなり無防備な状態で、学校という守られてる場所から離れた場所に居て……うん。言いたいことはなんとなく判った。

「判ったようだなティーン。ついでの仕込みもしてある。連中も焦って動き出してる頃合いだ。一匹残らず炙り出すぞ」

そう怖い笑みを浮かべながらカーリナ姉は耳のピアスを弾いた。



## 十七話

カーリナ姉の口車に乗って、というか流されて。あえてその、私達の誰かを狙っているとかいう小悪党をおびき出すための餌を演じる。

人の気配の無い裏通りを通ってみたり、郊外を歩いてみたり。餌役なんてのも実は歩いていて間相当緊張しているもので、普段なら疲れも全く感じないような距離なんだけど、いつ襲われるかと思いながら歩くとなかなかにこう……気疲れというか、うん。大変なものである。

装いも新たにされた。

ジーンズにＴシャツという何とも色気のない格好だったのだが、餌としても不味そう！ とカーリナ姉に一蹴され、店で剥かれて着せかえられた。今の私は黒地に大きな白い蝶がデザインされたワンピースである。胸元にあしらわれたひらっとした淡い赤いリボンがモノトーンな服のワンポイントになっている。

バレッタで纏めてあった髪も降ろした。実のところ長さが半端なので大きく開いた肩に毛先がちくちくとして痒いことこの上ない。

何故か興奮気味なカーリナ姉にミュールも履かされそうになったのだが、そこは流石に固辞した。ハイヒールは流石にごめんなのだ。

「なぜだ！？ 院長先生に教えられていた時はドレスもヒールも気にしてはいなかったじゃないか！ ああ、惜しい！ 画竜点睛を欠くというものだ」

「あ、あれは開き直りも大分混じっていたし……いや、何か論点違うぞ！ これから囿やるつてのに歩きにくい靴履いてどうするのさ？」

なんて一幕もあつたりしたのだが、なんとかまあ、それまで履い

ていたスニーカーで勘弁してもらった。

しかしこれもよくよく考えてみれば……地元警察なり管理局なり頼めば済んだ事だったのでは……

そうだ、そうしよう。カーリナ姉がざつと調べをつけられる位には世の中に名前が出回ってる違法グループなのだろうし、狙われている事さえ示せば……ああ、カーリナ姉の奪ったアクセサリがあったか。なんだ、私やカーリナ姉が動かないでも何とかかなりそうじゃないか。

そう思っただけでカーリナ姉に連絡をとってみる。あの人は今、私という餌に食いつくような、不審な動きをする人間が居ないかを遠巻きに監視中である。

だが、帰ってきたのはどうも思わしくもない返事だった。

「テイノ、お前の進路にケチをつけるわけじゃないんだが……私はちょっと管理局とはな……」

と、歯切れが悪い。昔、管理局と何かごたごたでもあったのかも知れない。

ともあれ、最後の段階……確保した連中は管理局に引き渡すような事を言っていたので良しとした。別に局に真つ向から喧嘩売るようなマネをしたいわけではないらしい。良かった。

姉の実力に関しては、まあ。地元で軽く伝説を築いていたりするし、自称冒険家と言う割に紛争調停とか、遺跡で危機に陥ったスクライアー族の救出劇などで週刊雑誌に出ている事もある。性格はともあれ、実力の方は確かなはず……いくらせがんでも魔法の方は何だかはぐらかされて、見せてもらった事もなかったが。

……まあ、考え無しっただけではないだろう、しかし……時間がかかる。

気付けばもうとつぷりと日が暮れそうになっている。早く餌にかかれー、この時間になれば学生だから寮に帰っちゃうぞー。なんて

考えてしまっ。

そんなことを考えていたからだろうか、何時からか囲まれている事に気付かなかったのは。

最初は前を歩く通行人がいつまでも同じ背中だった。

次第に横や後ろにも一人二人と人数が増えてくる。学生一人を連れ攫うには随分慎重なことだった。……ああ、突然見張りが居なくなっっていれば慎重にもなるか。

(カーリナ姉さん、把握してる?)

念話で呼びかける。私自身もあまり得意にしているわけではないが、身近で魔力パターンもよく知っているのでそれなりの距離でも通じるのだ。

(大丈夫だ、そこから100メートルばかり道なりに歩いたところで仕掛けてくるぞ。清掃業者を装ったバンだ。荒っぽいありきたりな手口だが、人員を使って人払いをしてあるところがなかなか手慣れているな)

(感心しないで、どう動けばいいのか指示を……)

(何もするな)

え? と聞き返してしまった。聞こえにくかったか、ともう一度何もするなと言う。100メートルばかり歩いたところで休んでいると。

なんて念話を交わしてる間にそんな短い距離も歩いてしまっっているわけで……

ちよつと見回してみれば、周りはすでにカタギと思われない人ばかりで、建物なんて見ても工事中の建物であったり、明らかに廃屋だったり、シャッターの閉まった店であったりする。確かに人の目が無く、攫うポイントとしてはいい場所のようだった。

まあ、実のところ平静に考えられる事はできているのだが、緊張感でうなじの産毛がそそり立っている。冷や汗も一筋流れてしまっているようだ。実のところ荒事に関わってしまうのは初めてではない……とはいえ、さほど経験豊富なわけでもない。カーリナ姉を信じてはいるものの、こいつらのこの圧迫感どうにかならないだろうか。

やがて、私から見て後ろから車両の走る音が聞こえてきた。周囲のその手のお兄さん方は露骨に囲みにかかり、リーダーと思わしき男が前に出る。

黒い男だった。第一印象はそれだろう。褐色の肌に少しぼさついた黒い髪、吸い込まれそうな真つ黒な瞳。黒いレザージャケットを羽織り、黒のレザーパンツに黒いブーツである。ところどころの金具と胸に付けられたS O T Mのシルバーアクセサリーがきらきらと眩しい。

その黒い男は私の足元から頭のとっぺんまで眺め、眉を一つひそめると紙巻き煙草を取り出し、啜え、隣立った者が火を着けた。

大きく吸い込んだ煙を上に向かって吹く。そのままじろりと私を睨め付け、かすれた声で話しかけてきた。

「解せないなお嬢ちゃんよ、あんたがうちのごぶッ」

うわあ、と声に出そうになった。

なんと言えばいいか。

カーリナ姉が上空から、男の上向きの顔面の上に『到着』した。手土産のごとく両手に一人ずつ縛り上げられた男をぶら下げて。そんな荷重がああ速さで頭にめり込んだら……その答えが目前にある。

「ん、到着というわけだ。……どうしたティーノ啞然として。ここは危機一髪に到着した姉に惚れるシーンだろうか？」

何か失敗したか？ とでも言いたいかのように小首を傾げて見せる。さらさらとマゼンダ色の髪が流れる。

その足の下モノがなければ、ちよつと惚れたかもしれない。

あまりのインパクトに私のみならず困んでいたお兄さん達も口を半開きにして驚いている。

「哀れ黒ずくめ……最後の言葉はごぶツか。同情する身の上ではないが、それでも君の死の様は忘れない……」

何か言いかけたようだが、未練を残さず迷わず成仏しておくれ。軽く手を合わせておく。

「ところで、姉さん、その縛られている二人は？」

「ああ、人が近づかないよう用にと配置された。こいつらの端末でも確認したわけだが、この場に居る連中がほぼメインメンバーのようだ」

随分、力を入れたものだなと肩をすくめる。

いちいちサマになる姉である。

「……てめえか、S O T Mの名前使ってあちこちに喧嘩売ってくれやがったのは……」

かすれた声が響き、カーリナ姉の足首をがしりと手が掴んだ。

おお生きてたのか黒ずくめ。

流石バリアジャケット。念話と同じくよく使われる魔法ナンバーワンである。顔面防衛もばっちりらしい。

うん、この連中、中核メンバーは魔導師で構成しているのだ。そうでないと管理局に知られている状態でそうそう逃げ回れるわけもないのではあるが。

しかし……

「カーリナ姉さん、もしかして前言ってた仕込みってのは……?」「ああ。ちよつと奪ったアクセサリー、団員証っぽくもあつたからな、裏社会の大手を一回り」

ぐるつと人差し指を回してみせる。

「適当に襲つた後にサイン代わりにスタンプしてきたのさ」

「もしかして昼間姉さんが居なかつたのって……?」

カーリナ姉はにやりと笑うと、お前の想像通りさ、と言う。その時間に襲撃していたらしい。

「……え、えげつねえ」

そんな言葉しか出ない。そんなあからさまなマーキングであれば、まず組織同士を共食いさせようとする罠じゃないかと怪しまれるだろう。ただ、それも一カ所二カ所の話である。大手を一回りと言つたが、そうなるとメンツを潰されたという事のみが問題になつてくる。示し合わせてS O T Mを潰しておいて、報復は済ませた事にし、てしまつても良い話なのだ。大手のマフィアなどからすれば。

そうして、切り捨てられたS O T Mは選択肢が狭くなる。懇意にしている大手に泣きつくか、犯人を見つけて突き出すか、いつそ解散してしまうか。いや、その選択肢を選ぶ時間もなかつたのかも知れない。何しろ私につけておいた見張りが倒されて、一連の騒動が起きたのが一日足らずの中のことなのだ。

そして誘導されるように、私という餌にばつくりと食いつく。いや、食いつくしか選べない状況になつていたことだろう。何とも……まあ。

「くっそあああああああッ！ そんな目で見んなあああああ  
ああ！」

気合い一発、叫び声と共に黒ずくめはカーリナ姉を押しつけて立ち上がったのだった。

しかし、ふらつと揺れる。ああ、ダメージが一見無いように見えて脳震盪起こしてたのか……

「だ、大丈夫か！」

駆け寄る部下達を右手で押さえる黒ずくめ。

頭を抑え、うめき声を上げつつもその狼のような目はカーリナ姉から離さない。

「てめえら、油断すんな！ こいつは魔導師だ、呆けてねえで魔法をぶち込めえッ！」

そう言い放ち自らも魔法を編み上げるものの

「もう計算済みだ」

黒ずくめが叫んでいた時は面白いモノでも見るかのように笑っていたカーリナ姉が、急につまらないものでも見るかのように目を細め、そう言った。

耳のピアスを親指で弾く。

「え？」

黒ずくめの男の撃った魔力弾は自らの味方であるはずの男に向か

って飛んだ。

部下達の撃った魔力弾はでたらめの方向に向かい、バインドはどうでもよさそうな小石を縛り付け、至近での砲撃なんて危険な真似をしようとしていた奴もいたが充填されるはずの圧縮魔力が集まらない。

それどころか……

「やめっ！ やめろ！ もう撃つなああああ！」

黒ずくめの男の魔力弾が放たれては部下が倒れていく。涙でぐちゃぐちゃのひどい顔になっている男はデバイスを手放せばいいのに、混乱しているのか地面にデバイスを何度も打ち付けて止めようとしていた。

やがて、狂乱とも言うべき自滅劇が終われば、残っていたのは魔力弾を食らって気絶した男達と、地面にへたりこんで泣き笑いの顔のまま魔力切れで気絶したリーダーの黒ずくめの姿だった。

何というか……うん。私の表情も呆然としていただろう。何をやったか私には判らないんだが……本日二度目の言葉を繰り返す。

「え……えげつねえ……」

早速管理局に引き渡してしまおう。そう思ったのだがカーリナ姉からストップがかかった。何でも聞き出したい事があるらしい。

とは言え、当のリーダー本人は気絶したままだし、魔力切れでの気絶は通常の気絶とは違って時間がかかる。

最近身につけた魔法を思い出したので、持ってきて良かったと、ポケットからカード状になっている待機状態のデバイスを取り出し、起動。



引きずり起こして起きるまで往復ビンタをかましそんな姉を止めて、適当に平均的な設定のディバイドエナジーをかけておく。

単純な話で、魔力切れで気絶してるなら魔力を分ければいいのだ。後は体に分けた魔力が馴染めばおいおい気がつく事だろう。

「それで、カーリナ姉さん、さっきの現象は何さ？」

まだ気がつくまで時間がかかりそうだったので聞いておく。魔法の暴発を誘因した？ にしては私とカーリナ姉の場所には流れ弾の一つも飛んでこなかったのだ。身構えていた私が馬鹿みただった。何か凄いことをしたのだとは判るのだが、全くその凄いことの中身が判らないので悶々する。

カーリナ姉は肩を一つすくめると、別に大したこっちゃないと前振りした上で答えた。

「答えは魔力干渉によるデバイスのクラッキングだよ」

そう言った上で耳のピアスを親指で弾く。

……？ 何も起こらないように思うのだが。

姉が人差し指で指した部分をよく見てみる。路上のタイルの上を何か極細の光る糸のようなものが動いている。

「ただの魔力糸さ。ただ、私の意志に応じて割と自由に変化が効く」

そう言うと、糸が束ねられてプードル犬の形になった。ご丁寧に尻尾が揺られて舌も動かしている。トコトコと足音が出そうなくらいリアルに作り込まれたそれを私の足元まで動かして見せた。何とこの操作力が……

「す……すこ……何で今まで見せてくれなかったんだよ？」

「……本当に大した魔法じゃないんだよティーノ。大体、私には魔導師登録するほどの魔力すらないんだぞ？」

少し困惑気に、困ったような笑いを浮かべながらそんな事を言う。そういえば、私の足にまとわりつきそうな魔力系のブードルだが、感じる魔力が極端に少ない。

いや、問題はそこではなく。いや魔力系の技術もとんでもない操作用なのだが。私は一つ息を整えて……言った。

「デバイスのクラックなんてされたらこの世界の根本を揺るがしかねない珍事なんだけど？」

そこなのだ。基本デバイスってのは登録された人間でしか使えないように認証機能はこれでもかという程に付けられているし、その認証パターンには接続された魔力の波長なども含まれている。インテリジェンスデバイスは多様すぎるので、もしかしたらクラッキングされてしまうような頭のネジの緩んだデバイスもあるかもしれないが……通常のデバイスにおいてはそんな心配はするだけ無駄。

……というのが魔法世界の共通認識なのだ。常識外れというか常識というものを正面から殴ッ血KILLのような事をやっているのだ、この姉は。

そんな、私の言語野が痺れてしまうような事をあっさりしでかした本人は全く困ったそぶりもなく、言い放った。

「要は計算しているだけだ。デバイスに流れる魔力に対してノイズになる程度の魔力干渉で十分用は足せる。ほれ、プログラムに割り込むのとデバイスのシステムに割り込む違いはあるがバリアブレイクと同じ要領だ」

「ばりあぶれいくと同じ要領だとおっしゃるか……」

この姉にかかつてはそれなりに高等技術なはずのバリアブレイクもばりあぶれいくと言ったものに違いない。未だ自分の瞬間出力より低いバリアやバインドを力任せに引きちぎるしかできないディンや私の姿を見たら何て言う事か……

「……ケツ、それがトリツパーとか言う連中のレアスキルという奴かよ……卑怯臭え」

カーリナ姉と話している間にリーダーが目を覚ましたようだった。しかしトリツパー？ 旅人？

カーリナ姉は思い当たるふしでもあるのか、目を細めるとゆらりと男に向かつて音もなく近づいた。いや、だから怖いって……。私からは表情は見えないが、男の顔を見るに、想像して余りある。

「その情報、どこで掴んだ？ 吐いて貰おうか。いや、吐かないと言うなら構わないが……長い夜になるぞ」

その冷たい表情を見てしまったのか。

男はひっ、とくぐもった悲鳴を漏らして後ずさりしようとするも、手足を拘束済みなのでずりずりと尻をすりながら芋虫のような後ずさりにしかなくていない。

本当にどちらが悪党だか判ったようなもんじゃない光景である。

「一つ言っておくと、これはレアスキルなんてもんじゃないさ」

カーリナ姉はそう言って男の手首を軽く掴むと、ねじった。180度。ぐるつと。回っちゃいけない方向に。

男は目を丸く開いている。というか男の手の甲が変な方向を向いている。痛そうである。見てる私の方がぞくつと鳥肌が立ってしまった。

「ただ数字を計算しているだけに過ぎない。さて、どうだ、痛みを感じずに関節が外される感覚は？」

男はあわあわ言っているのみである。現実味のない光景なのだろう。自分の右手首が本来回らない左側に回転していて、痛みもないのであれば。

「感想がないのなら次に行くか」

「ちょ、ちよつとカーリナ姉さん……喋るも何もいきなりそれ？」

流石に突っ込みを入れてしまった。

いや、私も尋問とかはしたことなんて無いのだが、こういうのはまず話を聞いてから云々というものではなかっただろうか？

そんな事を思っていると、顔に出ていたのか。

「ん、ティーノは優しいな。だが、こういう小悪党は手足と肋骨の3、40本でも折ってからのの方が話が通りやすいんだよ」

などと言って男の左手もあっさり捻る。あわあわ言っている男も恐怖で顔が蒼白になっていようだった。

……姉さん、そんなに人間肋骨と手足多くないです。どんだけバツキバキにしてやるつもりだったのさ。悪党に人権はないとかそういうのは管理局には通らないんだよ……

頭痛を感じてきたので、矛先を変えてみる事にした。

「え、ええと。リーダーさんや、知ってる事を話してくれないかな？ 今ならまだ穏便なうちに済みそうなんだけど」

「馬鹿者、誰が穏便になど済ませてやるものか。私の家族に手を出したのだ。10年は消えない恐怖を植え付けてやるに決まっている

だろう」

ぎぬると、漫画なら擬音が出そうな位の鋭い目で睨んだ。

男はヒイツとばかりに芋虫移動で私を盾にするかのように後ろに隠れる。いやいや、盾にすんな。あんた、最初に見せてたあの無意味な大物臭はどこにやったんだ。

「歳も行かない女を盾にするとはやはり相当な小悪党だな、ふふ、あはは。喜べ小悪党。背骨の関節24カ所でヘルニアの気持ちかわえるぞ」

男は既に何というか、もう一押しで漏らしそうである。そりゃもうがつくんがつくん震えている。

私は深くため息を吐き、精一杯の笑顔を浮かべて、できるだけ優しく聞いてみた。

「話してくれるよね？」

「ひゃ……ひゃい、は、話す……話すよ」

落ちたな、とばかりにニヤリと笑ってみせサムズアップをするカーリナ姉。

ええまあ、途中から気付いてました。話に聞く、尋問時の飴と鞭という役割だったのである。せめて念話でなり合図してほしいものだった。

さて、とカーリナ姉は男に無造作に近づいて、身を固くする男の手を掴んだと思うと次の瞬間には元に手首が治っていた。

計算とか言ってたが、何というかどういふ力加減であんな真似ができるのか……魔法より魔法らしい事をしてのける人である。

驚いたのは男も同じだったのか、目をぱちくりしていたが、落ち着く暇も与えずに情報を引き出しにかかる。

「それでは話してもらおうか。まずは何の目的でティーンに近づいたか……からだ」

一通り話を聞き終え……事態の面倒臭さに上を向いて息を吐く。

どうも星が綺麗……というわけでもなく、今日はひときわ星のまたたきが多い。明日は雨かもしれない。

なんだかんだとしている間に時間も経ってしまった、いつしか夜と言ってもいい時間になってしまった。

寮監さんにまた説教されそうである。一応メールは入れておいたが。

話を整理してみよう。

彼等、ソウルオブザマター側からすれば、実は私を狙っていたのではなく、狙っていたのはカーリナ姉だった。施設か私のところか、どちらかに接触すると踏んで網を張っていたら施設を張らせて居た仲間はへまをやったらしく、地元の警察に捕まったらしい。そして私の所に張らせていた仲間が消えたと思ったらいつの間にか狩られていたのは自分たちになっていたという事のようにだ。

なぜ、カーリナ姉が狙われるかといえば、先ほどにリーダーが漏らしたトリッパーなる存在が関わっている。

なんでもここ最近になっての話らしいが、トリッパーと自称する人物がマフィアさんに捕まったらしい。未知の技術を知っていたり、レアスキル持ちだったそうで、組織だった連中からすると金の卵だったようだ。

同じような存在もまだ居るらしく盛大に賞金をかけたらしい。死体でも持ち帰れば一生遊んで暮らせる大金だと言うから大盤振る舞いも良いところである。

なぜ、そこでカーリナ姉が絡むかといえば、横流しされた管理局内の個人情報でのカーリナ姉の項目、佐官以上のみに閲覧が許されたデータのようで、かなりの大問題なのだが……そこにTC、トリップチャイルドなんて書かれていたデータがあったらしい。

それを聞いた直後、カーリナ姉は苦虫を100匹はまとめて噛みつぶしたような顔になって、男の胸ポケットから煙草を勝手に拝借すると火を付け、紫煙と共にため息を吐き出した。

「トリップ違いだそれは」

と、一言。いつも颯爽としている姉にしては語気が疲れている。

「……昔、私達が実験の副作用で苦しんでいる時だ。その様子を見た研究者共が「まるで麻薬でも飲んでバッドトリップしたストーリートチャイルド共のようだ」なんて冗談から付けられた呼び方だよ。そもそも最近の話ではない。既に10年も前の事さ」

管理局のデータベースにそのまま登記されてるとは思わなかったがな、と肩をすくめてみせる。

何となく空気が重たくなってしまったので、それを振り払うように私も言った。

「えーと、つまり賞金狙いでカーリナ姉さんは間違っって狙われて、私は煽りを食らったと？」

うむ、と姉が頷く。男はそっぽを向いた。目を合わせようとしな。い。この場合最も割を食らったのは誰なのだろうか。

勘違いされたカーリナ姉さんか、巻き込まれた形の私か、勘違いで虎口にほいほい足を突っ込んでしまったSOTMの連中か。

まあ、話も判ったことだし、後はこいつらを管理局に引き渡して

終了である。

私が端末を取り出して連絡を取ろうとするとリーダーの男が急に慌てだした。

待て、待ってくれ！ と叫んでいる。

「今更見苦しい。大体お前達はマフィア共に明日にでも潰される身となっっているのを忘れたか？ むしろ管理局の法の下で刑務でも受けていた方がよっぽど安心だろう」

あなたの策のおかげですけどね！ と突っ込みを入れなかった男は偉い。私だったら思わず口走っていた。

しかし、当の本人はそれどころではないようで、かなり必死になっ  
って頼んでいる。

「三日、いや二日でもいい、待ってくれ！ 必ず出頭する。何だった  
ら俺のホームコードも渡してもいい、頼む！」

とまで言われて私もカーリナ姉と顔を見合わせた。

気が抜けていたというのもあるのだろう。

私も「何か事情でも？」なんて聞いてしまった。後悔先に立たず  
という奴である。

「金が……俺たちには金があるんだ」

なんて話し始めたところによると、まあ、なんだ。ドラマや小説  
にはよくある話。

元々ソウルオブザマターなんて香ばしい名前なのは、ミッドチル  
ダで暴走族集団なんてものをやっていた時のままに使っているらし  
い。

うん。暴走族である。走るというよりこちらのは飛ぶだけ。そ



こは世界に関係なくどこにでも若くて法律に真つ向から齧り付くのはいるようだ。

そんな彼等であるが、流石に目立ちすぎてミッドに居られなくなった。その能力に目をつけたのがマフィアさん達で、飛行能力と管理局と追いかけてこをしていた経験を生かして運び屋として仕事をもらっていたらしい。その腕前もあつて割と自由に立ち回っていたそう。

ただ、そんな生活をしているうちにやはりズブズブと沈んでいくのが裏社会の恐ろしさ。

何とSOTMのリーダーを張っていた男が賭博で大金を溶かしてしまい、バツクに居たトロメオファミリーなるマフィアに捕まってしまうたと言う。

さらに悪い事にはこのリーダー、メンバーの名義で金を借りていたらしく、一転して借金生活である。担保として抑えられたのは家族であつたり付き合っている彼女であつたりしたと言う。というか露骨に人質である。返済が滞れば、それはもう言うまでもない事になるらしい。

そういえば、この黒ずくめ男がリーダーかと思つていたら違った。何でも副長らしい。困難にあえぐチームをなんとか離散させずに守つてきた苦労人だったようだ。その元リーダーの事を言う時など合間合間に死ねばいいのにあの野郎と呪詛が漏れていたが。しかし話を聞くとどうも……

「まあ、その、客観的に見ると……マフィアさん達は首輪はめたかつたんじゃないかな？ 話の流れを読むに姉さんの情報もそのトロメオファミリーが出元だろうし、もし姉さんの表の情報、雑誌とかそういうので知っていれば失敗の可能性も高いよね？」

借金と人質だけでは完全な首輪にはならない。失敗した上でファミリーに迎え入れるという迂遠な形をとってこそ成り立つ首輪とい

うのものもあるのだろう。

そんな事をしてでも子飼いにしたいものなのかもしれない。この姉相手だからこの体たらくだったが、魔導師としての腕でいえば私などより遙かに格上なのだろうから。

いい金策の手段があるぞ、これで一山当ててお前達の大事な連れ合いを買い戻してみたらどうだ、とでも言つて、中途半端な情報で襲わせる。失敗前提で……いやこの場合成功したら成功したで幾らでもやり口はあつたわけか。どちらにしてもファミリーの方には得しかない。

「どのみち、私は当て馬というわけか。随分馬鹿にされたものだ」

くく、なんて笑つておられる。トロメオファミリー逃げて早く逃げてなんて言葉がふと私の頭にも浮かんだ。

ともあれ。なんと言うか……言いますか……敵対した人間の事情なんて聞くモノではなかった、とも思う。

夜空に向けてため息を一つ。

「何とかできないかな、カーリナ姉さん？」

……言ってしまった。

我ながら情に流されているのが判る。そのくせ自分ではいい手も思いつかなくて結局頼るはめになってしまったっている事も判る。

全く悔しい。自分の手で収まらないなら手を出すべきではないのに。

そんな私をまじまじと見つめる姉。やがて、ふつと笑い。

「こういつ時に感情的なものを優先させるか。この先苦労するぞテ  
イーノ」

「判つてるよ。てやんでー」

「てやんで？」

「エドってこの言葉だよ。ところで策はない？」

その前に、とカーリナ姉は前置きをして男に向き直り、長い腕を伸ばして頭をがっしと掴む。

「まず、約束をしようか。この一件が済んだら、管理局に出頭しろ。いいな？」

コクコクと頷く男。冷や汗が額に浮いている所を見るとすっかり苦手意識がすり込まれているようだった。

よし、と一つ頷いた姉は。そのまま続けた。たまらない笑みを浮かべて。

「これから私はトロメオファミリーを潰しに行く。貴様も手伝え。金策などしなくていい。取り戻したかった全てのものを取り戻させてやるさ」

そんな言葉を力強く、この姉にしか言えないような自信に満ちた口調で言ったのだった。

## 十八話

ソウルオブザマター、略してSOTMの現リーダーである黒ずくめの男。

適当に黒ちゃんとも呼ぼうとしたら姉に止められた……まあ、普通に名前を聞き出したのだが、ラグーザと言うらしい。

そのラグーザに連れられていかにも趣味の悪い廊下を歩く。趣味が悪いなんていう表現、そうそう使う事はないだろうと思っていたのだが、大きな間違いだった。世の中は広い。あるところにはあるのである。うーん、悪趣味。と唸ってしまふような装いというものが。

例えば、床が総大理石で赤くて金色の縁取りがしてある絨毯などが敷かれ、花瓶がところどころに飾られている廊下だが。それだけならいかにも普通の成金趣味である。ただ、花瓶に活かしてある花は全て造花であったり、飾られている絵などは、確か美術館から盗まれたと騒がれていた絵であったり、傷のちよつと多めの剥製が飾られていたりする。人間の。

全く持って趣味の悪さにどん引きだった。さすがマフィアの館なのだ。

私とは言えば両手を拘束され、魔法の詠唱も出来ないように猿ぐつわなどもされている。デバイスも取り上げられ済みだ。

そんな私を鎖で引き連れている形のラグーザなのだが、私の容姿が容姿である。第三者から見ればそりやすごい絵だったかもしれない。

何でそんな事をやっているのかと言えば、姉の一言に尽きる。

「ティーノ、お前が言い出した事だ。一役喰んで貰うぞ?」

なんて言われて何も考えずに肯定してしまったのが運の尽き。い

やまさかこんな王道パターンをさせられる事になるとは思わなかった。

意外と姉はこういうやり口好きなのだろうか？ 餌か皿を用意して、食いついている間に大暴れというやり口である。夕方の皿とい、私は犯罪者用の釣り餌か何かだろうか？

気分は八岐大蛇に酒でも飲ませにいくような心持ちなのだが、まあ、そんな事を考えている間にもお目当てのボスの居る応接間らしき場所に通された。

ラグーザと私が入室すると重厚なドアが後ろで閉まる気配がする。ボス自身相当な心配症なのか、一応味方という認識であるはずのラグーザまで警戒しているようで、応接間にボディガードと思しき男が4人ほど居残っている。

部屋の奥にこれまた重厚な節くれ立った檜を使った椅子があり、腰掛けてるのがボスなのだろうか？

マフィアのボスとか言うのでついつい映画のゴッドファーザーに出てきたドン・コルレオーネのような人を思い浮かべていたのだが、イメージ違いである。どちらかというところこれは……二足歩行の猪？ 大柄とは言えないのだが、太い体に太い首が乗っている。地球で言えばアラブ系の顔立ちというのだろうか、彫りが深く浅黒い肌にまた立派な髭を生やしている。

ボスはまたその趣味の悪い指輪の嵌った太い指をデスクにコンコンと打ち言った。

「報告を聞こうかラグーザ、どうやら君の持ってきてくれた土産はカーリナ・ベ어링グではないようだが、できれば私の今晚のワインが楽しめるような話が聞けるといいな」

「あの女にはしてやられましたかね、ボス、こいつはそのカーリナの妹ですよ、人質程度にやなるでしょうや」

なかなかもってラグーザも演技派かもしれない。へりくだる感じ

が板についている。むしろこつちが地だったりして？

ふむ、と手を組んでしまったボスに対して、焦ったかのように私に手を回す。

「ボス、それだけじゃありませんよ。こいつは偶然だったんですが、珍しいでしょう？」

そんな事を言っただけで乱暴に私の背中をまくり上げる。

ボスが息を飲む音がした。ちなみに翼は魔法で隠されてはいない。久しぶりに服の中で小さく畳んでいる。凝りそうだった。

前もってカーリナ姉に言われていたのだ。ボスに会ったらまず翼を見せて気を引いておくようにと。翼の事を知っていたのかと私は驚いたのだが、カーリナ姉は知っていたらしい。苦笑いしきりだった。案外隠せていなかったのだろうか？ ともかく、カーリナ姉が言うには、これを見せればボスが無防備になる瞬間がかなりの確率で来るらしい。その時はしっかり暴れるとのことだった。にやけ笑いでフフフとか笑っていたのが大分気になるが、そこは無理矢理忘れておく。今のところは筋書き通りだ。何やら大分興味を持ったように背中を舐めるような視線を感じる。 鳥肌が……ジョークにもなっていないな。

「なるほど……なるほど。うむ、いや、ラグーザ、よくやってくれた。まさか生きてラエル人種を手に入れられるとは思わなかったよ。あの世界は酷く行き来が難しいからな。トリッパー達ほどではないにしろ大した土産だよラグーザ。これは今晚のワインは極上の味わいになってくれそうだ」

一転して上機嫌になったボスは控えているボディガードらしき男に指示を出し、札束をラグーザの前に置いた。

「君に対するボーナスのようなものだよ。今後も期待しているぞ」  
そう言って手を軽く振る。退室の合図らしい。ラグーザが下がる  
うとしたので、何となくその背中を追いかけるも、ガードの男に腕  
を掴まれた。

「お前はこつちだ」

そう有無を言わず連行され、連れてこられたのはそれまでとは  
ちよつと違つてそれなりにシンプルな部屋だった。天蓋付きの赤い  
ベッドとソファ、小さいテーブル、酒瓶の並んだ棚と本棚が壁に  
並んでいる。

奥にはトイレやシャワー室のようなものがあるようだった。客間  
か何かなのだろうか？

私が部屋に入るとガードの男は拘束を外し、大人しくしていた方  
がいい、とだけ言い残しドアを閉める。鍵をすする音が響いた。

ぼーっとすることしばし。

「お、おお！？ いかん！ 閉じ込められた！」

いやあまりにあのボディガードさんの手並みが慣れてるので、つ  
い。というかボスが無防備になる瞬間とかどんな時だよカーリナ姉、  
むしろこれって単に監禁されてないか？

一通り部屋をうろついてみるも、監禁ゲームによくあるような秘  
密の出口なんてものは見つけ出せない。床にあぐらをかいて首を捻  
つていると外から声が漏れ聞こえてきた。

部屋に見張りでもついているようで、雑談でも交わしているよう  
でもある。分厚いドアを挟んでいるので私の耳でなければ聞こえな  
いだろう声だったが。

「……今夜は強い酒でも飲んでとつと寝ちまえよ」  
「そうするか、俺もあのぐらいのガキがいるからちつとなあ……。  
ボスも物好きなことだよ、羽とか生えてるからつてなあ」  
「ああ、あの後聞いたんだがな、ラエル種つて言つてたる、ボスが」  
「そういや言つてたか、どっか辺境にでも居る種族なんだろ？」

どうも話が私にも興味ある方向に向いているようである。  
そういえばラエル種とかあのボスがさりげに言つてたし、なんだかカーリナ姉も知つたようなそぶりだった。案外知られている種族なのだろうか。130世界の私と同じ姿をした種族は。

私は言葉を逃すまいと壁に耳を押しつける。

「なんかとんでもなく行き来がしにくい世界の種族らしいぜ、管理外のくせに管理局が出張つてるなんて話もあるらしい」

「そいつあ、変わった世界もあつたもんだな」

「まあ、ボスが目付き変わったのはそこじゃねえさ……何でもな」

と、そこで一旦焦らすように話を切る。焦らすな、良いところだろ！ むきだしのままの翼がせわしなく動く。

「何でもな……とてつもなく具合がいいらしい」  
「ブツ」

いや下ネタに走るな！ 見張りのガードも吹いてしまったじゃないか、冗談はたいがい……大概にしるよな？

ちよつと顔から血の気が引いているのが自分でも判るのだが、その間にも外で会話は続いた。

「良いつて……ガキだぞ？」

「ボスが言つには文献だと割と小さくても問題ないそうだ」



「試した奴が居んのかよ……」

私といえば、さすがに冗談と片付けることもできずに、呆けていたのだったが。

いや何それ、有り得ん、やめてくれ。もしかして有名なのって、そっちの方向性で有名だったりするのか？ カーリナ姉がにやにや笑っていたのはこれか？ いや、そりゃ、あの姉のことだから私が危険な状態になることはないと踏んでの事だろうが……

「うおおあ……知ってたなら前もって言っておいて欲しかったかも……」

整理が付かねえ……頭を抱えてふかふかのベッドを転げる。

香ばしい容姿、魔法適正微妙、精神不安定に続いて具合が大変良い、なんて属性が付いちまったよ……

ひとしきり、うがー、と転げ回り、仰向けで大きいため息をついた。

「……しかし、そうなると因果な種族だなあ」

そんな種族だとしたらまあ、狩られたような逸話があってもおかしくなさそうだ。むしろ、それに追いついて行けるかもしれない世界にわざと居るっていう可能性すら出てきた。130管理外世界への道筋はなかなか遠そうである。

そんな事に気を取られていた時だった。

がちやり、とドアが突然に開いて、ガウンを羽織ったボスが悠揚と入ってくる。

とつさに攻撃準備でもできれば良かったのだが、先程の話が頭に残っているせいで、何というのか……こう、男に対する嫌悪感のよくなものというか、自分が今女の身体であることを強く感じてしまっ

ているというか。複雑な感情がもたげてきてしまつて固まつてしまつていたというのもある。

ボスが入ると再びドアから鍵のしまる音がした。転げ回つて乱れたベッドを見て言う。

「大人しくして……はいなかったようだね、お嬢ちゃん。まあ、悪くはない。悪くはないさ。元気なのは良いことだ」

グフフなんて笑つてみせる。初めて聞いたよグフフなんていう笑ひ方。そのまま、ボスは本棚の前に立つ。

「元気でなければ」

右端の大きな辞典をどかし、その奥に手を入れ、何やら操作した。啞然である。絶対ここの設計者は趣味人だ。しかも歪んだ。

本棚が文字通り床に沈み込み、その裏からスライドするようにして様々な……その……物騒な器具が所狭しと並んだ壁が動いてきた。

「到底長くは持たないからねえ」

こちらを振り向きその太い顔に似合つた太い唇をべろんと舐める。恐怖を与えるためだろうか。ゆっくりとこちらを向いて悠然たる足取りで迫ってくる。

まあ、実際おつかないというか、嫌悪感が……かなりあつて顔が相当ひきつっているのが自分でも判るのだが……

このおっさん、裸の上にガウンしか着てないから青大将が……ああ、そこまで太くなくてもいいだろうに。

まあ、作戦を言われた時、カーリナ姉が言ったのだが、こちらをたかが木っ端魔法しか使えない子供だとあなどっている。油断している。デバイスさえ取り上げれば何もできないと思ひ込んでいる。

実のところ、初めてかもしれない。魔法による模擬戦でも試合でもなく、危害を加えようとして明確に暴力を振るう事になるのは。棚の上に飾ってある花瓶を手にとって思い切り睨み付けた。

「うわあああッ！」

気合いを入れて殴りかかった。

相手もさすがに暴力と脅しのプロである。

私の異様な馬鹿力を持つてしても、経験だけはどうしようもなく部屋中をむちゃくちゃにして、やっとケリがついたのが20分も経った頃だったか。時間の感覚もちよっとおぼつかないが。

決め手は毎日木刀を振っているだけあって、いろいろ壁から出てきた物騒な道具の中から拾った火かき棒での一撃だった。到底何に使ったかなんて考えたくない棒でもあるが。

頑丈そうなロープなんてのもあるので、その火かき棒と組み合わせせて脳震盪を起こして気絶したボスをがんじがらめに縛っておく。

外がどうなっているのかを聞き耳立てて確認すると独り言が聞こえてきた。

「終わったか小休止か……今日はまた一段と激しいな……あの子も可哀想に、ああくそ酒が欲しい」

良い具合に勘違いしているようだったが、毎回こんな騒がしくしてるのか……なんてかまあ、想像したくないな。

ひとまず、精神的にかなり疲れたので、棚にある酒を取り出す。アルコールに弱いのは承知しているので、リキュールを炭酸水で薄く割って飲む。

「くあー……」

思わず声が出た。グラスを右手に持ったまま椅子にもたれかかる。なんとというかえらく緊張していたようだった。

喧嘩とかに明け暮れている人はこれを毎日やっているわけで、そりや度胸の据わりも違うわなあ、と思う。

全くカーリナ姉は……人の感情考えるのだけは苦手なんだからなあ。

やがてドアの向こうで小さな物音が聞こえたかと思うと、ドアが開き、気絶した見張りを掴んでラグーザが入ってきた。様子を見て一言。

「悪い、遅れたなお嬢、そいつの相手を任せちゃった」

「あー、いいっていいって。それよりカーリナ姉さんは管制室に行けた？」

そっちはばつちり上手くいったらしい。

指向性の念話が使えればもう少し連絡も取りやすいのだが、見えないひそひそ話はここのボスが嫌いだそうで、建物の内部では念話が通じにくいのだ。

まあ、作戦としては私とラグーザでボスを引きつけている間にカーリナ姉がこの館の管制室にチームの手引きで潜入、防御システムの改竄で混乱させた後に管理局を呼んで離脱というシンプルな手順だ。

ラグーザに端末とデバイスを渡してもらおうと早速、姉から通信が入る。

「こちらはその部屋の監視カメラで状況は把握している。お疲れさまだったなティーノ」

「その軽いねぎらい、さらにどっと疲れた気もするよ……」

何でもシステムの改竄とデータのサルベージに時間が少々かかるらしく、10分ほど待機してきてくれとのことである。

その部屋に残っていては袋の鼠になりかねないので、ラグーザの誘導にしたがって同階の防火シエルターに隠れた。

そういえばと、気になっていた事を聞く。

「その元リーダーさんと人質として捕まっていた人たちは？」

「元リーダー、ね。あいつは逃げてたよ……人質達は全員無事だ。皆連れ出させてもらった……そうだな、これもお嬢のおかげだ。すまねえ、ほんとに助かった。この恩は必ず返させてもらうぜ」

深々と頭を下げてみせる。どうも律儀なところがあるようだった。お礼なら受け取るけど、恩返しはカーリナ姉さんをお願いするよ。と言つと、同じような事をカーリナ姉も言つたらしい。

不思議な沈黙が続き、唐突にカーリナ姉から通信が入った。

「大まかに仕事は終わったが、どうも管理局の動きが鈍い。恐らく管理局のそれなりの上の方に鼻薬でも嗅がせているのだろう。二人は自力で離脱が可能か？ 不可能なら私がやるが少々派手になるぞ」  
「……姉さんの派手宣言は怖そうだから、自力でやってみるよ」

そう言つと端末に現在の館の見取り図と組織の人員状況がダウンロードされる。何というか情報が丸裸である。怖すぎる。

既に入入り口は当然のように固められているが、防護システムが混乱しているので、館内を動き回るのはそれほど難しくはなさそうだ。

「行こうか、ラグーザ」

声をかけ、シエルターから足を踏み出した。

この館には最上階に広いテラスが設置されている。そこで私はラ  
グーザから飛行魔法のプログラムをデバイスに移してもらっていた。  
バリアジャケットは学生用の極めて簡易のものだが、とりあえず落  
ちても死なないし、ある意味ミッドの空を自由に暴走していたラグ  
ーザという先達が居るので例え高速飛行魔法に適正が無くても、フ  
ライトとしてはそれなりに安全だろうと思う。後ろから撃ってくる  
連中さえ居なければ。

館に居る魔導師連中に気付かれないうちに距離を離すのが目下の  
所の目的だった。

「よし、お嬢、魔法のインスト終わったぜ、ちょっと設定が俺用だ  
ったからかなり緩くいじり直しておいた、何とか平均値に近いはず  
だ」

「ん、ありがと。そんじゃ一丁真夜中のピーターパンとウエンデイ  
でも気取るうか」

「なんだそりゃあ？」

忘れてくれ、と言い直した。顔が赤い。初フライトで舞い上がっ  
てとてつもなく恥ずかしい例えを出してしまった。くそ。後で調べ  
直すんじゃないぞ。

「トリック・オア・トリート」

ハロウィーンの設定台詞、お菓子をくれなきゃ悪戯するぞ、なん  
て起動トリガーを使っているのは私だけだろう。初めて使う魔法な  
のでこっそり口の中で唱える。お守り代わりだ。

まあ、格好つけても、高速飛行が使えなければ普通に浮遊で浮い  
て、それを引っ張って貰うつもりだけでも。

「行くぞお嬢！」

なんてあっさりラグーザが手を引いて飛び出すので私も慌てて魔法を起動した。

姿勢制御、慣性制御……うん面倒臭い。適当に感覚で制御して、演算はデバイスに任せるとする。

夜風を体一杯に受け、私は空を飛んだ。

この感覚を細胞一つ一つが覚えていような感じさえする。

やばい、楽しい。これはまずい。目的を忘れてしまいそうになる。星に手を伸ばせば届きそうだという表現がぴったりくる心理状況になつてきている。

背中の翼をぴんと張って魔力の流れを捉える。羽の一枚一枚が溜め込んだ魔力をゆっくり放出し燐光を放つ。浮いて、ロケットのように魔力噴射で飛ぶだけでは不完全だ。不恰好だ。もっと綺麗に飛べる。

「あは」

こらえきれない笑いがこみ上げて来た。

「あははは」

海の潮流のように、あるいは谷を流れる風のように魔力にも流れがある。それに乗るだけで何て気持ちよく飛べる 것인가。

「お嬢！」

「うえ？」

腕を掴まれて我に返った。

さっきまで私の中にあつた全能感が潮の引くように消えていった。

感じた事は覚えていても、どう感じればいいのか判らない。  
もどかしい感覚が身を包む。なんだか泣きたくなかった。

……一瞬の後、普段の感覚になっってしまうと、別の意味でも泣きたくなかった。

それはどちらかというところ、中学生の時に作った詩集を高校生になっ  
て読み上げられた時のような泣きたさだったかもしれない。

布団に入って枕を抱きながら足をじたばたさせるアレである。

何があははは、か自分に酔っていたとしか思えない。

「む、むう。ごめんラグーザ。ちょっと調子に乗っちゃったみたい  
だ」

「……ああ、いや、初めて飛んでそれなら上出来もいいところだろ  
うよ」

確かに今までにない感覚というのはちょっとある。

やっぱり鳥は鳥という事なのだろうか。どうもこの飛行というの  
は相性が良すぎるようだ。気分も高揚してきてしまう。

鼻歌など歌いながら飛行を続け、暫くすると念話が飛んできた。

(リーダー！ お嬢！ 無事でしたか、こっちはです)

魔力スフィアが夜の暗闇の中に明滅する。

どうやら先に逃げたチームの連中が集まっている所らしい。

しかし、気にしてなかったけど私をお嬢ってのはもう本決まりな  
のか……いや別にいいのだが、お嬢って柄じゃあないんだよな。

そしてラグーザはもうリーダー本決まりのようだった。

私とラグーザが合流し暫く経った頃、ようやく管理局の魔導師が  
続々と転移してきた。

練度も大したものだしやはり数は力である。一応新興勢力として  
大きな力を持っていたはずのトロメオファミリーはあっけなく管理



局の手によって制圧されていった。

そんな頃合いである、再びカーリナ姉からの通信が入ったのは。

「どうやら、これで今日と言う騒がしい日も幕のようだな」

「うん、本当カーリナ姉さんも今日はお疲れさま。それと途中から我が儘聞いてもらってありがと」

素直に礼を言ったら、面白い顔になった。口をぱくぱくして顔を赤くさせ、ティーノも人をからかうのが上手くなったなとか言っている。この姉はほんとツボがよく判らん……

だが、またこの姉は唐突に爆弾を投げ込むのだった。

「管理局にはティーノとラグーザが通報した事にしてある。上手く口裏を合わせておけ」

「へ？」

「それと私は例によってまた旅に出てくる。施設の皆には二、三ヶ月後にまた顔を見せると言っておいてくれ。では息災でな」

そう言いたいだけ言って通信を切られた。

……し、信じられんあの姉。

「全部後片付け投げ出して行っちゃった……」

私は呆然として唇の端をひくつかせるラグーザに言ったのだった。

その後はその後で大変だった。

何とか口裏を合わせるといつか、しどろもどろだったのだが、カーリナ姉が既に編集していったのか、監視カメラに残っていた映像

で全て信用されてしまった。

金目当てで攫われた私と、何とも好青年風に改心したチームとそれを率いる切れ者青年ラゲージが協力し捕まっていた人質を奪還。管理局に通報し、そのまま離脱。なんて流れて事件を解決に導いたなんてことになった。

姉の仕業であった館の防御システムの改竄はただの管理不足ということになり、聞いた限りでは押収したデータから私や姉のデータはもとよりトリッパーとやらに関する情報も無かつたらしい。

いや、カマかけとか得意でないので隠されたら判らないのでもあるが。

姉が臭わせていたマフィアと管理局と通じていたのではないかという疑いの方は、当然ながら有り得ないものとされていた。実際あったのかどうかも判らないところではあるが。管理局が管理していた情報が流出していたという事を考えると、団体での癒着はあまり考えられないにしろ一人二人は居そうではある。

そして何が大変だったかということ、祭り上げられてしまったのである。マスコミに私が。

私みたいな子供映すよりは黒づくめのラゲージでも映してやれと言いたかったのだが、そっちはそっちで約束通り全員自首して、今は拘留中の身だ。流石に犯罪を犯した人間を大々的にメディアに流すわけにもいかないのだろう。

それで私である。

最近ではもうほぼレポーターの声には「ハイ、ガンバリマシタ」か「管理局ノ皆サンノオカゲデス」がでるようになってきている。デインもココットも最近では遠慮を無くしてきたティードもこれには馬鹿笑いだった。

レポーター風に訪ねられただけでその癖が出れば無理もないだろう。

そして、調子に乗ったマスコミと人手の欲しい管理局により新た

なドラマが捏造された。

いずれは局員？ 白銀の妖精が闇に生きた男達に正道を照らす。  
こんな文字が躍り、その上に私の顔があった時には頭を地面に打ち付けて整形でもするしかないかと思った。

そのネタでもまた友人達にからかわれる事となったのである。

人の噂も75日と言うが、夏休みが終わる頃には終息している事を願う。

それまではひたすら隠忍自重の日々を続けるとしよう。

## 十九話

朝一番に運動がてら木刀を振り、割と適当にセットした格好で授業を受け、放課後はディンやココット、最近ではティータも時折相手をしてくれるのだが、と魔法の自主練、あるいは遊びに行ったりなど。

地味ながらも波風立たない日常が私の生活だったのだが、最近ではかなり変化してしまった。

端的に言う则有名人になっているのだ。それなりの。

これが目立ちたくて仕方ない、あるいは自分が中心に立っていたくて仕方ないという希望があるのならいい。問題は私自身がさほど目立ちたい欲望があるわけではないと言う事だった。

マスメディアに妙な名前、そう……頭を力チ割りたくなるような名前をつけられてからというもの、私の思いとは裏腹にその熱は加速しているようだった。

出回った映像にも問題があったかもしれない。

あの折、カーリナ姉に買って貰ったワンピースなんて着ていて、なかなかにそう、女の子しているのだ。容姿が。姉風に言えば、美味しそうな餌である。

あるいはその姉が編集していったと思われる映像なんかも問題だったのかもしれない。

管理局の検閲を通し、その後の事件発表と共にメディアに渡された映像である。ここの学生の身の上だと準局員扱いになるので、顔にぼかしは入らなかったのだ。個人情報はずすがにでないのだが……

私がああ妙な客室に連行される時の姿など光源の影響が、妙に弱々しく、儚く映っている。

さらに言えば、あのボスを散々な素人喧嘩のすえ何とか倒した時点の、顔を真っ赤にさせて息を荒げ、服を乱れさせている様子など

はどのサービスシーンかと思った。子供のサービスシーンなど一部にしか需要もないだろうが。

もっとも、その映像を初めて見た時は、何とかピンとこず完全に他人事として見ていたわけだが……それも無理もないことだと思う。その後の映像を見ればさらにそうなる。

……黒ずくめのラグーザの手を引き、前方を指さして何事か話している光景など、密やかな月明かりのライティングを当てられる編集をされ、お前はどこの聖女さまかと。そして、ああ、画面の中のティーノさんよ、何故あなたはそんなにオーラを身にまとっているの？ と聞きたい。確か、この時は夜目の利く私が先頭に立って進んでいて、敵影が見えたので注意していただけだったのだ。こんなにキラキラした覚えはない。

そして飛行魔法を使う時の魔力光。目に痛く心に痛々しい銀色の魔力光が、また目を引く。翼は姉が事細かに映像をいじってくれたようで、映っている様子がなかったもので有り難かったのだが、調子に乗って空をひらひら舞っている様子はさながら蝶か何かのようで……この様子からマスメディアはその……白銀の妖精なんて思っていたのだろう。

ちなみにこのとき当の私はどうもかなりのハイテンションだったので、記憶もちょっとアレなのだが、後ろから狙撃されていたようだった。

マフィア側のカメラから見るとその様子がよくわかる。直線で飛んでいたら危なかったかもしれない。酔っぱらったようなテンションによる不規則な動きで命拾いをしていたようだった。

うん。まあ……総合するとカーリナ姉が悪い。面倒なのでそういう事にしておく。あからさまに管理局のCMに使われている気がするが……後片付けをしないでとっと逃げ出した姉のせいにしておく。私は許さない。今度帰った時には姉が嫌いで仕方ないと言っていたラム肉のシェパードパイにチーズをたっぷりつけたものを連日食べさせてやる所存だ。それを話した時のニヤリとした感じはひっ

かけてやるつかという顔だったが、姉相手にはさらに一枚裏をかかねばならない。きつとあれは本当に苦手なのだ。

……ともあれ、元より目だの耳だの無意味に良いというのも関係しているのだが、人目が気になつて仕方ない。被害妄想気味だというの判っているのだが、何分、日常会話の中で普通に私の名前がぼろぼろ出てきたり、視線を始終感じたりする。ストレスがマツハでやばいというか頭髪が心配である。円形脱毛症にならねばいいけども思つてしまつくらい髪が……さすがにこの年で抜け毛を気にする事になるなんて、本当に思つてもいなかった。

そんな事もあり、放課後。今日も今日で、世を忍び人目を忍ぶように影から影へ移動中である。

やつてきたのはいつぞやの資料館。

設計段階ではもしかしたら校舎の一部にされる予定だったのかもしれない。

三階建てで、広さも小さいデパートくらいはあるだろうか。部屋数もかなり多く、10室あまりがクラブや同好会に使われている他、空き部屋も多いようだ。

有り余る学校の資金力を生かしてかき集めただろう本の類や、卒業生が持ち込んだと思われる妙な管理外世界のお土産品まで雑多にしまい込まれている。

その量ときたら、話に聞く本局の無限書庫とまではいかないまでも、年々増える資料の整理に当たっていた館主が心を病んで入院してしまつた程である。生真面目過ぎたのがいけなかったらしい。

かといって放置もできず、今は部活やクラブの有志による活動で地道に整理が進んでいる状況だ。

コソツトの所属している文芸部も当然とばかりに参加しており、日々精力的に文学関係の本を仕分けている。

最近では、ここが私の憩いの場になっているのだった。

「お疲れ様です、ティーノ」

先に来ていたココットがお茶を出してくれる。

一息ついて、ありがたくお茶をすする。ほっとしたところで部屋を眺める。

「ありがと、ココット。皆はもう資料室に？」

「ええ、私もそろそろ向かいます。いつも通り留守番だけしてくれば好きにしてもらって構いません。あ、お薦めはその」NEです。やはり基本は抑えておくべきでしょう」

ココットはそう言っで一画のスペースを指さし、部屋を後にした。基本……基本ねえ。アレな予感しかしないが、薦められたものだけに少し目を通してみるか……

「……………お、おう？」

ぱらぱらとページをめくる。喉の奥から妙なうめきが出てきてしまった。

何と耽美な……………いや案外これは、絵柄の線も美しい。そしてこの構図は……………ううむ。

そして、この心理の後にこう絡んでくるのか……………何と磨かれた伏線だ。で、では次はまさか……………な、に、芋けんぴだと!?

ごくりと喉が鳴った。一旦本を閉じ、何となくキョロキョロと見回してしまう。

いや、別に誰かに見られているってわけでもないのだけだね。

またそつとページをめくろうとしてしまい　ハツとした。

「いや、いやいや、まてまてまて、何をしている私は？　そんなあっさり新世界の扉を開いてしまうとか何だ、有り得ないぞ、ちよっ

と正気に戻れいいか深呼吸だ。うん、ひっひーふー」

駄目だ、これじゃ何かがうーまーれーるー、なんて一人コントを  
してしまふ。

ぴたつと止まり、何となく間が空く。備え付けのソファで横に  
なつて大きく息をついた。

「本当最近疲れが溜まつてるのかもなあ……」

私は天井のマス目を無意味に目で追いながらぼやいた。

あるいは虚脱感か。

あんな荒事に巻き込まれ、慌ただしいまま過ごせばこうもなるの  
も無理もないのかもしれない。なんて自己弁護を凶ってみる。

「よし、今日はサボろう！」

上半身を起こして両手をぱんと打つ。

バッグの中に入れてきた教科書はこの際忘れることにした。

一応これでも初心は忘れていないのだ。難しいとは判つてはいる  
ものの、魔法学校を短期間で卒業するには飛び級制度の活用は必須  
なので、まあ、悪い頭なりには頑張っているのである。

とはいえ、このテンションで勉強に集中というのも難しい。

しっかり息を抜いてしっかり心を休めるのもきつと大事なのだろ  
う。

私は理論武装を終え、様々な本が羅列されている文芸部の物色に  
とりかかったのだつた。

コソットが部室に戻った時に、薦められた例のあの本を開いたま  
ま片付け忘れていたのを見られ、ニヤリと……おぬしも好きよのう  
といったような笑みを浮かべられ、戦慄したのはここだけの話。



そんな、双六で言うなら一回休みのマスを挟んだ後の話である。実のところ一回休みで済めば良かったのだが……まあ、その。文芸部にミッドも含めた管理世界の様々な料理材料の紹介本などがあって、読み進めているうちにあつという間に一週間も経ってしまったのだ。びっくり。

これまでもちよこちよこその手の情報を探してはいたものの、ミッドはどうも文化をあちこちから吸収しすぎて、本当に多種多様な食材があり、それを使った料理があるのだ。なにに世界のどこ地方のレシピブックといった限定的過ぎるレシピ本がずらーっと並んでいるような状態なのである。

それでもある程度編纂した人が居たようで、セオリーな料理をまとめたミッド食大全なんてものもあるが、これはほぼ地球で食べられているようなものを考えればいい。人間どこの世界でも食べるものはどこかしら似てくるようだった。

問題はそれ以外だ。せつかく地球では手に入らない食材なども例えばファンタジーでおなじみ竜の卵とか、巨大な昆虫っぽいものなどあるのだが、なかなか手を出しにくいものだった。

そんな痒いところに手が届く本がコレだったのだが、発行年が古く、しかもどうやら出版元が既に潰れているようで、立派な絶版本である。

まさかこんな無造作に学生の部屋に投げ込まれているとは思っていなかった、卒業までに全部メモってしまう予定である。

ともあれ、そんな知識を早速生かしてみる事にした。休日になり、朝から寮の簡易キッチンを使わせてもらう。作ったのは見た目、何の事はないサンドイッチであるが、挟んであるものが工夫の一品だ。

「ティーノ、飲み物セットは持ちましたよ」

「ん、サンキユ。こつちも詰め終わったところ、と。んじゃー行くか？」

バスケットにランチセットとしてたつぷりのサンドイッチを詰め終え、ココットと女子寮を出れば、暇そうにしているディンがやつと来たかと挨拶をしてきた。

三人連れで高等部の男子寮に向かう。

バスケットを抱えている私とココットを見れば子供三人でピクニックにも見えるかもしれない。

もつとも、用事はそれよりは少々真面目で、ティータに勉強を教わりに行くというものだったのだが。

うん、最初は私も独学で飛び級してやんぜーと勉強に励んでいたのだが、考えてみれば先達が居るのだ。身近に。うっかりしていたとしか言いようがない。

思いついたら即と言った感じで頼んでみたら、何とディンも乗ってきたのだ。

どうやらディンは本当にわだかまりを乗り越えたようだった。

そしてディンが参加するのであるならココットが乗らないはずはなく、勉強会などと言うものをする事になったのである。

寮の門前で出迎えてくれたティータに案内され部屋に向かう。初等科でも十分な広さだと思ったものだが、高等部の寮はさらに広くしつらえてあるようだった。

ワンルームではあるものの、部屋に最初から付けられていたと思わしきテーブルやソファ。私のサイズからすれば大きく見えてしまふベッドにAV機器も充実している。

壁には網棚が張られ、まあ、何とか趣味のモデルガンがコテコテと飾ってある。質量兵器禁止のこの世界だと相当マイナーな趣味ではないだろうか？

見たこともないような拳銃もあれば、どこかで見たような銃も存在する。もしかしたら97管理外世界の銃がモデルになっているも

のも混ぜっついているのかもれない。この古めかしい銃など怪しい。シリンダーには海に船が戦っている様子が刻まれている、いかにも年代物っぽい銃だ。映画か漫画で見たような気もするが……はて？ 見れば、コソットがキヨロキヨロと不思議そうに見回している。やはり男の部屋というものは物珍しいものらしい。

「面白みの無い部屋で悪いけど、くつろいでくれよ」

コソットの拳動に若干苦笑をしつつ、ティーダが言った。言うまでもなくデインなどは勝手知ったる何とやらなのか、とつとソファでくつろいでいるわけだが。

おのおの、テーブルの周りに腰掛けたところで、さてと前置きをして話し始めた。

「まずティーノの目標はできるだけ早めに卒業だったよね、その為にこの間渡してもらった君のデータから考えて組んでおいたメニューを渡しておくよ」

と、書類を渡される。礼を言って受け取り、目を通すことしばし

……  
しばし……

しばし……

しばし……

しばし……

「ティーダさんティーダさん。私のメニューには睡眠時間というものがほとんど計算されていないのですが？」

思わず敬語になっちまったよ。ぎっちり詰め込まれてはいるメニューである。構成を考えると芸術的とまで言える。アリアさんに作

つてもらった魔法練習用のメニューもさりげに組み込まれている隙がない。なさ過ぎる。秒刻み休憩とか生物には厳しすぎる。どれどれと覗き込んできたティンとココットの顔も引きつった。

「ティード……さすがにこれは死ぬんじゃない？」

「自分の敗因の引き金となったからと言ってこれは……イジメかっこ悪いです」

二人からじとつとした目を向けられるティード。

「い、いや、冗談だからね？ ほらこれが改訂版」

慌ててもう一つの書類を渡してきた。何でも、アリアさんの考えた魔法練習メニューがよく練られていたので、つい凝り性が出て最高効率パターンのメニューを作ってしまったというらしい。

この人意外とパズルとか始めると周囲が目に入らなくなってしまつたぐいの人なのかもしれない……

幸い改訂版のメニューは自由時間も流動的に設定されていて、何とかこなせそうだったので安堵のため息を吐く。

もつとも、あくまでそれは暫定的なもので、状況を見ながら調整していくそうだ。

というわけで、後は私の覚え次第というわけである。

とつと卒業して、ガンガン現場に出て稼ぎまくるのだ。いや、何か目的がずれてきているような気もするが、懐は寒いより暖かい方がずつといい。何よりモチベーションを程よく上げるのに丁度いい。

そんな生臭いやる気を出したおかげか、午前中はあつという間に過ぎてしまった。

ティードの教え方というのもこの年にしては異様に上手かったというのもある。困った事にいちいちハイスペックな奴なのだ。案外

クロノと良い勝負なのかもしれない。ただ、あつちが魔法の才能が……私では全く底が見えないわけだが。

いい時間なので、持参してきたサンドイッチと例によって紅茶セツトを持ち出す。

皆頭を使って脳の栄養でも枯渇していたのか、我先にと手を伸ばす。

「お……う！ これは……？」

あるサンドイッチを一口食べたディンが固まった。目をまんまるに開いている。

先だって文芸部に転がっていた本の知識を元に入手した第18管理世界で食されているマリエン鳥の卵を使ってみたのだ。

試食したところ卵の味は濃いのだが、火を通すとぱさついためバターとコーンスターチでふわとろの状態に炒めて挟んである。

驚きの表情から覚めるとガツガツと食べるディンの様子を見て、密かにガツポーズ。

「ティーノ、そろそろネタを明かしてくれませんか？」

つんつんと肩口をココットに突かれた。ココットも卵サンドを頬張っている。

そこまで勿体ぶる事でもないので、さっくり説明をしておく。

「というわけで、現地では離乳食やお年寄り、あるいは病人用として食べられているみたいなんだ」

「なるほど、でもこれだけの味であればもっと出回っててもいいと思うのですが……」

なんてココットと話していると何故かティータが食いついてきた。

「ティータは離乳食とかにも詳しいのかい？」

そりゃ、作るうと思えば作れる。施設で院長先生からの直伝をさ  
れているのだ。実際そのくらいの子の受け入れをする事も稀にとは  
言えあるそうだし、私自身好んでいる料理の事である。当然熱も入  
ってしまい、そこんじよの駆け出し主婦にはなかなかもって負けな  
い腕だと自負しているのだった。

そんなことを言つと、突然手を掴まれた。

「は……へ？」

「頼む、僕に離乳食の作り方を教えてくれ！」

さすがのティータさんも目が点である。

いや、待て待て、考える。なぜ、離乳食が必要かといえは、子供  
が居るからだ。しかも生後半年前後から一年までの赤ん坊。

ふつ　と以前見た、女の子に囲まれてなかなか満更でもなさげ  
なティータの姿を思い出す。

……まさか。

「ま、まさか、ティータ・ランスター……あなたは既に孕まさせて  
いたとでも言うのですか……い、いえ、友人は信じなくては。この  
場合自然なのは高等部ですからむしろ学部のお姉さまに寝込みを襲  
われた可能性ももあまつさえ複数人ででで」

ココットが妄想を爆発させて沈んだようだった。私と似たような  
想像をしてしまったらしい。

私は流石にいろいろ耐性もあるというかつん、今こそ人生経験を  
發揮してしっかりした今後の指針を示してやるべき。

「ティーダ……子供ができてしまったことは仕方ない。むしろその年で墮胎という方向に行かなかっただけまだ優しいのかもしれない。ただね相手も学生なんだろう？ 学生同士は今後の事というのについてよく考えないとね、一般にする育児より何段も高いハードルだから。うん、一つ言えるのは、私は、私達は味方だから、幾らでも相談して欲しいんだ」

そこでようやくディンも話に理解が追いついたのか、マジカ！？と大きく目を開く。

「水くせーぞ、ティーダ！ 正直、正直複雑な気はすっけどさ、いや、うん。これからはきつちり俺にも話せよ」

そう言ってディンはティーダの肩をばしんと叩く。

当のティーダは目を白黒させていたが、やがて理解が及んだようで、感激に肩を震わせると一言。

「ちがーーーーー！！！」

近所迷惑な声が寮に響きわたったのだった。

普段の穏やかでぼやんとした表情もどこかになぐり捨て、身振り手振りも交えて私達に説明したことによると。

離乳食のことを聞いたのはどうも実家の妹の為らしい。そのくらの年なんだそうだ。

私は当然。

「うん、ティーダがそんな不実なことするわけないよね。私は信じていたよ！」

と無意味に歯をきらりと見せておいた。少しひねってしまった目で胡散臭げに私を眺めたティータが、ぼつり。嘘だ……と呟く。少しその……いじりすぎたかもしれない。

まあ、気を取り直してもらったためにもちよつと水を向けてみる。

「でも、何でまた急に覚えよう？」

不思議だったのだ。この頭のいいティータの事だ、必要そうなら前もって調べておきそうなものだった。

ああ、それは　と話してくれた事はまあ、なかなか茶化すことのできない割と真面目な理由だったのだが。

何でも、ティータの母親の方は産後の調子がよろしくなかったそうで、子供が離乳食の期間に入って安定したところを見計らって一度入院するそうなのだ。

その間は父親とベビーシッターを頼んで何とかするはずだったが、ティータの方も丁度夏休み期間に入るので、帰省して力になりたいらしい。

「ん、そう言うことなら喜んで力になるけどね」

「そうか、良かった。ありがとうティータ」

ティータはぽやんと微笑んだのだった。

「一ついいですか？」

「コソットが何かあるようだった。どうぞ？　と促してみると私を見る。」

「ティータは確か手頃なアルバイトを探していましたよね？　家事全般請負いますという条件で」



何で今その話を？ 確かにちょっと財布の暖かみが薄れてきているので、絶賛お仕事募集中だったが……

そんな事を考えているとココットは次にティータの方に向き直り、私を指さした。

「良いベビーシッターが居ますが、どうでしょうか？」

その発想はなかったわ。

それを聞いたティータも、そんな手があったかと驚く。

確かにそれは非常に好都合だ。

私は私でティータに勉強を教えてもらう事も継続できるわけだし、乳幼児はさすがに初めてなものの子供の扱いという点では慣れている。

ただ、ティータの実家は聞けば西部のエルセアの方らしい。まあ、ぶつちやけ距離がかなりある。

交通費用は学割どころではない、申請すればほぼ免除なんて制度があるのでそれを利用するとして、泊まり込みでの仕事になりそうなんだけど大丈夫かと確認すると、なぜかティータがうるたえていた。

部屋が無いとか？ んー、いざとなれば野宿用のテントを引っ張り出してくるか。その場合ちょっと施設に行きがけに寄って……なんて算段を浮かべていたのだが違うらしい。

「ええと、昼間は父さんも仕事で出てしまっわけで、なんだ……。何で僕の方がうるたえているのさ？」

何というか私があるかと言いたいところではある。

ともあれ、話もまとまった……と言っても当然本決まりではなく、これからティータが親に交渉してどうするかという事になる。

上手く行くといいのだけだ。

そんな勉強会もひとまず終わり、私は疲労した頭を揉んで疲れを取りながらある場所に向かって歩いていた。

歩いていた。歩いていた。歩いていた。

……いつも思うのだが、この学校無駄に敷地面積広すぎである。

グラウンドを抜け、校舎を抜け、模擬演習所を抜け、また、だだっ広い空間をとっている場所に入る。使用許可代わりになっているカードを通してその練習所　飛行訓練所に入った。

ミッドの魔法の主流が射撃、砲撃魔法であるので、実はこの飛行訓練所はいつも閑古鳥が鳴いている。

ある程度初歩の魔法で通常の浮遊、飛行魔法は覚えてしまうので、それで十分だとする人が多いからでもある。

実際、対魔導師戦闘でもなければ、普通にプロテクションでも張っておけば大抵の質量兵器は効かないので避ける必要すらないわけだが。そして対魔導師戦闘において、局員は基本『数』を持って連携で当たるものなのである。特出した機動力そのものがあまり求められる職場ではないというのもあった。

もちろん例外も居る、というかその最たるものが、先日まで一緒に冒険を広げていたラグーザであり、その率いるソウルオブザマターという暴走族上がりの集団だったわけだが。

どこの世界にも速さの浪漫に引かれる男というのは居るといってとだろ。

そんなわけでこの飛行訓練所の予約を取るといっなのは初等科の子供にも割と簡単なのである。

身体をほぐし、デバイスを起動させる。今回は安全装置付きのきちんとした訓練所なので持ち込みデバイスも可なのだ。

あの時、初めて飛行魔法　正確には高々度高速飛行魔法だが、

を使った時の感覚を思い出す。

体が浮き、とりあえず飛ぶ。制御系の面倒な計算は例によってデバースに丸投げである。クロノあたりだと必要な部分だけ演算させて無駄を省くのだからけど、私にそんな脳味噌は搭載されていない。ひとまず直線に飛んで100メートル地点のフラッグを越えてターンしてみた。

……うん。普通に飛べる。違和感がなさ過ぎるくらいに。首をひねるが、なぜそれをおかしいと感じるのか……それも不思議に思えてくるから困った物だ。

次のルートはより短いライン取りを目指しターン。クリアすれば次はもう少し複雑に縦回転で。ちよつと捻りを啜えて錐もみに降下もしてみる。

くるくる、くるくる。風に落ち葉が舞うように回る。

段々思考がクリアになつてきたような、思い出せそうな思い出せなさそうな微妙でもどかしい感覚にとらわれる。

ただ、やはりあの時のような……なんだ。ハイテンションな状態にはならないようだった。

なつたらなつたで困るのだけでも。

不可視状態のままだが翼を広げてみる。

目をつぶって集中すると、やはり魔力を感じることができた。空中の魔力素だろうか。いや、感じているものはもっと漠然とした流れでしかないような感じだが。

ただ、これはしつかり感じるためには幻術魔法を解くしかないようだ。原理として翼の周囲に魔法を薄くコーティングしているようなものなので、感度が低い……というか手袋をした状態で氷の冷たさを感じ取れと言うようなものである。

しかし、幻術魔法を解いてこの翼持った姿が知れ渡れば……まあ少数なら仕方ない。そう言うこともあるだろう。問題は記録にでも残ってしまった場合である。いつでもカーリナ姉が居てくれるとは限らない。

あのマフィアの言い分からするとどうもその、性的に付け狙われそうだった。知れ渡るリスクが高すぎる。

ちよつと想像を巡らしてしまい、唇の端っこがひきつった。うん。こりゃいつものごとく考えない方が精神的に良さそうである。

気を取り直して下向きにバレルロールの軌道で低空飛行。床に手を突いて縦回転。両手を広げて着地してみる。

全力で飛行魔法を使う事はちよつと出来そうにないが、これはこれで気分転換には最高だった。これからもちよこちよこ来るとしよう。

我ながらなかなか満足げな息を吐いた。

ティードから連絡があつたのはその日のうちだった。

何とも性急なことである。

あれ……いや、もう夏休みまで2週間切っている？

……悠長だったのは私の方だったようだ。

休み前の審査試験が終わればすぐじゃないか。

しかし、ティードは大した信用度だった。普通ベビーシッターを雇うなら少なくとも話してみたら決めるだろうに。ティードが推薦するならそれで良いよと言う事らしい。

「いやいや、僕がしてやられた人物だと教えたら、一度見てみたいとか言いだしてね」

……おいおい。あれはクロノが凄いただけで私は凄くないぞ……。

もしかして盛大に勘違いされた？ いや、まあベビーシッターに行くのだから、関係ないといえばそれまでなんだが。幻滅はさせてしまふのだからなあ。

ちよつと肩が落ちる。

ともかく、必要な取り決め。個人契約アルバイトの場合のテンプレートなんてのも管理局製が出回っているので便利なものだったが、報酬を取り決め、契約書を交わす。作られた契約書のデータはそのまま労働局に送られて、適正なものであるかチェックされて受諾されれば労働契約が発生する。

ここらの一元管理の仕組みはミッドならではと言ったところだろう。こうしたある程度保護された労働契約の形でもない若年層が契約を結ぶとか危なっかしくて仕方ないのだ。実際にはもう少し複雑らしいが。

一通りの連絡を終え「おやすみ、良い夜を」なんてちょっと気取って言って通信を切ったのだった。

ベッドに乗せられている敷き布団に身を横たえる。

私に気がついた時に潜り込んでいた、ある意味この世界でもっとも付き合いの長い存在でもある。

実のところ考えること、調べること、ありすぎて困る。

普段は思考の外に外してはいたが、私が何かの実験対象で、男であつたはずの記憶なんてものを埋められて地球に放置された可能性なんてものだつてあるのだ。

ただ、それは考えても仕方がない。可能性なんていくらでもあるのだから。

今日は頭をたっぷり使ったからか、横になれば睡魔の浸食は異様に早く、私の意識は朝のもやのように薄れていった。

## 二十話

「本日よりお世話になります、ティーノ・アルメーラです。赤ちゃ  
んのお世話はまだ不慣れな事も目につくとは思いますが、気になっ  
たらどうか遠慮せず指摘してくださいね」

短い間ですがよろしく願います、と頭を下げる。

挨拶は基本なのだ。普段の私を知っている施設の子達たちが見れ  
ば噴飯ものなのだろうが、それはそれ。一応の礼儀くらいは知って  
いる。

「あらあら、ご丁寧ありがとうございます。こちらこそよろしく願います  
わね」

「うん、よろしく頼むよ……しかし、何だティーダと同じ年と言っ  
が、随分しっかりしているなあ」

と答えたのが、ランスター家の奥さんと旦那さんである。ちなみ  
にティーダも多分このくらいは平然とこなすと思いますよというの  
は頭でだけ呟いておいた。家だとそれなりに子供供しているのか  
もしれないしね。

奥さんはちよつと痩せ気味で調子が悪そうだったが、ほんわりし  
た人である。明るくオレンジにも見える赤毛を緩くまとめて前に流  
している。ティーダのぼやんとして見えるところなんかは案外こ  
の人の遺伝なのかもしれない。

旦那さんの方は口に啞えたパイプがトレードマークの大柄で朴訥  
そうなおじさんである。割と年の差夫婦なのか、旦那の方が少々老  
けても見えるが……仲は良いのだろう。奥さんを労る仕草がどうも  
板についていた。

時節は夏、ミッドにアブラゼミはいないが、何ともしれぬ虫の音色が喧しくなってくるのはどこの世界も一緒のようだ。

そして、さすがにまだまだ余裕な一学期の考査試験を終えて、ついに夏休み突入である。

メディア露出でちょっと噂になってしまい、困っていたが夏休みなんて長い期間が挟まれば沈静もするだろう。してくれい……

ともあれ、約束通りにベビーシッター……感覚的には友人のお手伝いなんて部分もあるが。に、来ている。ちなみに、ミッドの文化は割と欧米圏と被る部分があつて、ベビーシッター業などは案外ポピュラーなアルバイトでもあるのだ。多くは通いで小遣い稼ぎのよくな形でもあるが、友人に頼む時などもあるようで、今回の私のような例もそう珍しくはない。

就業可能年齢も低く、そこは日本で戸籍もなく見た目子供で稼ぐのにも苦労していた身からすると、ありがたいような妬ましいような……私も気がついてすぐミッドであれば苦労はしなかっただろうに。

いや、思い出すのはさておき、ランスター家である。

それなりに市街地から遠い喧噪を離れたところにある住宅地の一角。変わったところも取り立ててないような極めて普通の家だったが、持ち主の人柄か木製品が多いからか全体として柔らかげな印象がある家だった。

とりあえず初日ということで家の中を軽く案内してもらい、あてがわれた部屋に荷物を置かせてもらう。

肝心の赤ちゃんの方は今おやすみ中だということで、この際にお茶を頂いた。しばらくお話して子供の好物、癖、嫌がることなど教えておいてもらう。

奥さんは貧血気味なのか、顔色があまりよくないが、やはり一番可愛い盛りだからなのだろう。できれば自分で最後まで面倒を見

たかったようだ。しかし、それを見ている旦那さんの方が心配して病院でしっかり治療させたがっているらしい。

そんな思いが伝わってくると……なんだ、私もそう軽い気持ちで引き受けたわけでもないがしっかり面倒みてやるうじゃねーかべらんめーという気分にもなってくる。

と、寝室の方からむずがる声が聞こえてきた。子供が起き出したようだ。ティータが寝顔を見に行っていたはずなので、頬でもつついて起こしてしまったのかもしれない。

「あらあら、ごめんなさいね、お話の途中に……」

そう言っただけだと寝室に足を向ける。

うん……丁度いい機会だしお目見えさせてもらおう事にした。

ランスター母と共に寝室に入ればまた何とも……。ベビーベッドの隣でぐずついた妹をどうやってあやせばいいか判らず拳動不審な動きを見せているティータが居た。

「まったくこの子は……」

苦笑を浮かべ、頭をぼんぼんとするとキョドっていたティータも大人しくなる。さすが母の手力。

そしてぐずつく赤ちゃんを横抱きに抱え上げ、ゆっくりと揺らし始める。

ふわりふわり。

見ている方が眠くなってしまいそんな絶妙の揺らし加減だった。

さすがの赤ちゃんもそれには対抗できずに、段々と大人しくなっていく。あーあー泣いていたのが次第にうにゃうにゃと言いはじめ、やがてすっかり大人しくなった。

「母さんにはかなわないな」



ぼそつとティータが呟いた。うん、世の子供の多くはそう思った事があると思うよ。

しかしなんかまあ、不思議な感じだ。

子供は散々相手していたというのに……

ちよいちよいと手招きされた。

「じゃあ紹介するわね、ティアナ・ランスターよ、よろしくねー」

そう言つて赤ちゃんの右手を持ってフリフリしてみせる。

む、むづ。これは……なんとも。ともあれ、ちよつと挨拶をば。

「ティーノ・アルメーラですよ、し、しばらくの間だけどよろしくね」

そつと手を出して手に触れると指を握られた。

お、おおお……

ちよつと感動である。というか先程から私もティータを笑えないくらい拳動不審な気がする。

そんな私を見たのか、ランスター母は軽く笑つて、じゃあ抱っこしてみてね。なんて言われる。良いんですかい、なんかちよつと大雑把な私としては怖い気も……ってシッターがそんな事言つてられない。

何故か出てきた弱気を押し込め、おそろおそろティアナちゃんを抱っこさせてもらう。

確か、まだ股関節脱臼とかしやすいから両足を揃えて抱きかかえないようにだったか。お尻を手で支えて肘と腕で背中と頭を支えるように……私自身が小柄なので少々大変だが出来ないことはない。

「ふふ、確かにこの子は横抱きが好きだけど、もう首も据わってい

るし普通に抱っこして大丈夫よ？」

なんて言われた。普通に縦抱きでも平気らしい。いや、まあ。聞こえてはいるのだがなんと、なんとも。

にへらと口元が緩んでしまうのが自分で判ってしまう。直そうとも思わないが。

腕の中の赤子が可愛くて可愛くて……いやなんというか、保護欲？ 違う……なんだろうこれは。あああ、もどかしい。

「ティーノがなんだか……お花畑に行ってしまったてるよ……」

「赤ん坊のあなたを抱いてる時の私も似たようなものだったわよ？ ……さ、私は今日までしかティーノちゃんを歓迎する日がないだから、せめて息子のガールフレンドに美味しいご馳走を作ってくるわね」

「そ、そんなんじゃ……」

などと聞こえてたりもするが、まあなんだ。腕の中の暖かさを感じていると、不思議な感覚が次々とわき上がってきていて、私も整理に一杯一杯である。

ランスター母が部屋を出て行くと、若干赤ちゃんもまたむずがりだした。やはり母親と居たいらしい。真似をしてふわふわ揺らしてみるのが、なかなか上手くはいかない。あ、あわ。慌てるな私。

え、ええと、せめて、もこもこしたモノでも。ああそつだ。

翼の幻術を解いてみる。目の前に羽をちらつかせると思った通り興味を示してくれた。よし、よしよし。良かった良かった。

ふわふわなんだよーとティアナちゃんのお尻の下に翼を敷いて支えてみれば、うん。なんだかふにふに押されたり羽をしゃぶられたりしたが、落ち着いてくれたようだ。

ひとまず安心である。

ゆらりゆらりとそのまま揺らしているとそのまま寝息を立て始め

た。  
どうにも顔のゆるみが止められない。こんなに私はアレだっただ  
ろうか。ああ、認めたくはないがアレかもしれない。いやもう認め  
よう。

私はそのまま声を絞り出した。

「ティータ……すまない」

「は……え？ 白い翼とか……あれ？」

「私は相当なロリコンだったみたいだ、ティアナちゃんをください、  
むしろ義兄と呼んでいいだろうか？」

「……いや、いやいやちよっと待てその理屈は何かおかしい、とい  
うかどこを何から突っ込んでいいか僕も混乱してきたよ!？」

ええい、まどろっこしい奴め、男ならしっかりしろ。翼の一枚や  
二枚で騒ぐな、そんなものケンタッキーに行けば売ってるだ……ろ  
う？

……お？

「おおおっ!？」

「ああうー」

驚いた私の声に反応してティアナちゃんも起こしてしまった。い  
かんいかん。

ゆるゆると揺らしながら、声のトーンを抑えてティータに話しか  
けた。

「あー、えーとな……この翼の事なんだけど……」

「あ、ああ、うん。何というかびっくりしたんだけど……」

だよなあ、いや、迂闊だったというか、ティアナちゃんの魔性に

やられた。この子の笑顔にかかれれば私の秘密の一つや二つ軽いものである。

「いやまあ、どう説明するか……と頭を悩ませたものの、そう浮かんでくるわけもなく。」

「あー、うん、面倒なんでぶつちやけちやうと、こういう種族なんだ私。ラエル種とか言うらしいけどね」

何かあまり考えたくないアレで狙われる事も多い種族みたいだよと説明しておく。

誤魔化そうかとも思ったけども、下手に誤魔化してもボロが出るに違いないのだ。

さて、どう出るだろうか。

ミッドが様々な人が集まると言っても、本局ほどではなく、ほぼ通常の人間なのだ。人は変わり種を排斥する。今のところ私の姿を見て気味悪がられた事はないが、何故かそう扱われた事があるかのようにビクビクしている部分が私の中にあるのも事実だった。

「で、ティードはどうする?」

「へ? 何をさ?」

なんて鈍い言葉を吐く。

「いや……あんまこつというのが気味悪いとかなら今回のシッターの話は……」

私の言葉をティードはジェスチャーで遮った。

「何を心配してるかは判ったけど、僕は気にしないし、うちの家族も気にしないよ?」

「……ん、そつか。良かった」

我ながら不思議なほどに安堵が広がった。

とはいえ、一応家族には秘密にしておいてくれと念を押ししておく。そりゃ、仕方なくバレる時はあってもことさら宣伝するようなものでもないのだ。

何となく力が入っていた肩を緩め、寝息をまた立てているティアナちゃんを見た。うん、可愛いもんだ。私はふっと思いついたように言ってみた。

「ところで、ティアナちゃんくれない？」

「断る、大事な僕の妹だ」

パイ料理がランスター家の味らしい。

お昼が出来たのでとお呼ばれすれば、小麦粉の焼き付けられた良い香りが漂う。

出されたのはきのこのシチューパイとアップルパイだった。パイシートで作ったのだらうか、店で出せそうなくらいに綺麗なパイである。

ひとまずアップルパイの切り分けられたものを頂いてみると。さく。

「……！」

これは……。

中の層はふわふわで、一番外側は何というサクサク感……

何より鼻に抜ける香りが。シナモンは勿論、これは小麦の香りが引き立っている……？ 生地を打つ時に何か手間をかけているのだ

ろうか。

これは美味しい。確かめるように、さくさく食べていたらいつの間にか終わってしまった。

「気に入ってくれたようね、良かった。私の得意料理だから」

そんな事を言いながらちよつと大きめに取り分けてくれる。

そんな物欲しそうな目でもしてしまっていただろうか……

しかし、このお母さんとも会うのは今日だけという日程なんだよな……ここは一つ食事が終わったらさりげにレシピでも聞いてみることにしよう。

「ところでうちのティアナとは上手くやっけていけそうだったかしら？」

「あ、はい。手のかからない子みたいで……あ、でもやっぱりお母さんが居て欲しいらしくて、部屋を出てった時はちよつと焦りましたけど」

あはは、なんて誤魔化して頭を掻いておく。

いや、その後は赤ん坊に夢中になって隠さないといけないものを颯爽とバラしていたなんて今考えると阿呆過ぎるぞ、私。

し、仕方ないんだ、ティアナちゃんバラ色ほっぺがいけない。

あの顔でむずがられたら際限なく甘やかしてしまえる自信がある。

その後もしばらく歓談していたのだが、流石に疲れた色を見せてきたので、ティイダに目配せをすると流石に察しがよかった。

疲れた顔してるよ、などと言って休ませに行く。

後片付けはしておきますので、と見送った。

さて、と腕まくりをして皿を洗い始める。ついでに離乳食の用意もしておいたほうがいいかもしれない。まだ1日1回のペースだが、もう完全にさらさらの状態でなくても食べられるらしい。冷蔵庫に

貼つてある昨日までの献立を確認してジャガイモのポタージュに細かくちぎったパンを入れて少々煮溶かしたものを用意しておくことにした。

おりしも出来上がった直後にティアナちゃんもお腹が空いたのか、子守をしていたお父さんに抱かれて運ばれてきた。もう、自分の意志も割と出せるみたいで、私が鍋の前で何かしらやっているのを見ると手をさしのべてあーうー言っている。た、たまらん。じゃなく熱いままなのでちょっと待って貰わないと……ええと。

大きめの鍋に水を入れてその中に離乳食の入った小鍋を浮かしてかき混ぜる。

「ちょっと待っててね、ティアナちゃん。すぐ冷めるからねー」

やー、なんて返事してくれた。

人肌程度まで冷ましたものを私もあーんなんてジェスチャーをして、食べさせてみる。

しかし、本当これは危険な可愛さだ。将来管理局員入りを目指していたが、いつそ保育士でも目指すか？

次のを催促するようにあーんと口を開けるティアナちゃんを見てそう思ってしまうのだった。

夕食は頼み込んで私も手伝わせてもらった。昼間のパイのレシピなんかも実際に作りながら説明してくれる。うん、私の料理のバリエーションもまた少し豊富になった。まさか小麦粉の段階でオーブンで焼き付けるとは。感じた小麦粉の香りはこれが。

「学校でのティードですか？」

「ええ、あの子ったら母親の私が言うのもなんだけど、何でも一人

でやってしまおう子でね、あまり学校のことを親に話してくれないのよ」

ランスター母は贅沢な悩みだとは判ってるんだけどね、と頬を掻いた。

と、言われてもである。むしろティーダについてよく知ってるのは、長年……というわけでもないが、当初からの知り合いだったティーンとココットであって、私は最近の事しか知らないわけだが。

ありきたりの事かもしれないですが、と前置きして学校での事を話しておいた。

例えば、ティーンという古くさい少年漫画の主人公のような子と最近仲直りしたことや、高等部にさっさと飛び級してしまった事でちやほやされるものものやっかみも大変なものらしいとか。

年上の女性にはとても人気が高い事や、実は校内の非公式チエス大会で連続優勝してるとかまあ、他愛もない話である。

……もしかしたら自分のことで母に心配かけたくなってティーダは話してなかったのかもしれない。ともあれ、その事で逆にストレスになってしまったては本末転倒というものだろう。

「そんなわけで、付き合いのまだ浅い私が言うのもなんですが、最初見た頃より表情が柔らかくなっただし、楽しくやれているんだと思いますよ?」

「そうかー、うん。ありがとうねティーンさん。おかげでティーダが最近の連絡で明るくなってる理由がわかったわ」

そう言っておつとりと微笑む。

そして柔らかい笑みのまま爆弾を投げ込むのだった。

「ところで、うちのティーダを貰ってくれる気はない?」



いや、奥さんティードは犬や猫ちゃんいますねん……

そんな突っ込みを入れたくなかった。現実には、へけつと変な音を出してむせただけだったが。舞った小麦粉が喉に入っただけである。いや、まあ私もその手の冗談はそれなりに言われてるので今更初々しく反応したりはしないが。とりあえず手をひらひらと振って。

「私なんぞより星の数ほど出来た女の子が居ますって、大体ティードの事だから彼女もさくつといつの間にか作ってますって」

「あらら、残念……今ならティアナも付くのになえ」

なんです……と!?

思わずイエスイエスイエスと言ってしまいそうになったが何とかこらえる。

私の落としどころを短期間で見抜くとはこの母親……やりおる。

「でも本当に残念ねえ、料理上手なお嫁さんとか楽で良いのに」

そんな、さらつと本音っぽいことが聞こえたような気がしたので、私は全力で聞いていない事にして、目の前のパイ生地を折りたたむのに集中するのだった。

楽しい時間というのはあつという間に過ぎてしまつものである。

気付けばこの二週間、この機会にティエーダから勉強をみっちり教えて貰おうなんていう目論見もすっかり忘れて、ティエアナちゃんを構い倒していたような気がしないでもなかった。

いやほんと、私も何故こうまで構ってしまうのか判らないくらい飽きずに構ってしまっているのだが。

「なーうー」

と、最近では発音が楽しいらしい。もごもごにゃあにゃあと声を出しては……まあ、私もいちいち反応してしまつので、遊び感覚なのかもしれないが。それで上機嫌になつてくれれば良いのだ。

そして私が覗きこむと、やっときたーとも言つかのように「やー」とか言つて腕を上げた。抱っこして欲しいらしい。

よしよし、お望み通りにしてやるうじやないですかい、とそつと抱き上げ揺らす。

きゃっきゃつとはしゃぐティエアナちゃん。……うお！ アホ毛を嚙らないでーそんなのに栄養ないよー

さすがに飲み込んでしまつても困るので引き離したのだが涎でべつとりになつてしまった。人差し指を立て、ティエアナちゃんに向き合つて言う。

「駄目だよ、ティエアナちゃん。これが無くなつたら私は出入り口とか自分の体がくぐり抜けられる大きさかどうか判らなくなつちゃうからね？」

「そのハネた毛は猫のヒゲかい？」

ティアナちゃん以外に聞いている人が居るとは思っていなかった  
ので油断した。

人差し指を立てたまま、私は固まった。

「……見られて恥ずかしいならやらなきゃいいのに」

ほのかに顔に血が上っているのを感じつつ、私も口を開く。

「は、早かったね買い物……あ、いやさ、お帰りティード」

ティードは一つ笑って肩をすくめると、頼んでおいた食材を冷蔵庫  
庫にしまい込みに行った。

実はティード、何でもできるようで家事スキルは全く無かったの  
で基本のことをちょこちょこ教えている。その成果もぼつぼつと  
見えてきたようだ。

風通しの良いところに置いてある野菜籠と冷蔵庫に食材を分けな  
がらしまい込んでいく。タマネギやジャガイモなども蒸れないよう  
に包装から出していた。

やがてしまい終わるとリビングに戻ってくる。

「うー！」

兄が構ってくれると思ったのか、ティアナちゃんがハイハイにて  
突撃を開始した。

そう、もうハイハイが出来るようになったのだ。子供の成長とは  
恐ろしく早いものである。

私に来て一週間ほどだったか……ベッドの上でころんと転がった  
と思っただけゆっくりハイハイで私に近づいてきたのだ。

それまではコロコロ転がっていたので、いやそれはそれで可愛い  
ものだったのだが。

と言つてもまだ四つん這いでしつかり足を使えるわけではなく、どちらかというとはふく前進に近いのだが。ともあれ、それに合わせることのように、不安定だった座っている姿勢も安定してくるようになった。座っていても、いつ転がるか判らないという不安定さは無くなったものの、今度は行動範囲が広がって大変である。

なんとかティータの元までたどり着いたティアナちゃんはお兄ちゃんに抱き上げられた。ゴールだ。

「よし、良く頑張ったなーティアナー」

ティータも人の事を笑えないのである。目が細くなりすぎて線と言ったほうがいいだろう。立派な兄馬鹿である。元から割とぼやちんとしているのに、こんな調子ではもうとろけたプリンのように形容したほうがいだろう。

偉いぞ偉いぞーなんて言いながら、頬をスリスリ。ティアナちゃんもきききと上機嫌だった。

ああ、楽しいのはいい。うんいいことだ。

私はちよつと所在なげに手をぶらぶらさせていたが……

いや、むくれてなんてないよ。本当だよ。

夕食用に仕込んでおいたパンを焼く。先程ティータに買ってきてもらったパプリカ、タマネギ、セロリを炒め、柔らかくなったらペーストになるまで潰して、ブイヨンを入れて味を調える。冷めたらオリーブオイルと卵を入れて混ぜれば優しい味のパプリカソースの完成である。鶏肉のソテーにでもソースとしてたっぷりかけてもらう予定だが、そのまま離乳食としても使える。

一通り作り終え、あとは温めればすぐ食べられるようにしておいた。

まだ時間も余っていたので、仕事で疲れたお父さん向けの夜の酒に合う肴でも用意しておくか。

たしか、夜中に一人ウイスキーグラスを片手に読書にふける姿を見た事が何度かあった。

ならば、とちよつと考え生ハムで人参、レタス、アスパラ、チーズをそれぞれ程よい大きさに切り、巻いて皿に盛りつけ、冷蔵庫に入れておく。

キッチンの後片付けと掃除を終えて、時計を見れば、そろそろ夕方になる頃である。

エプロンを外しながら、すっかり馴染んでしまったキッチンを見渡す。

うん、汚れは無し。シンクも棚もぴかぴかである。

後はそろそろ、パパさんが帰ってくる時間になるのでそのくらいまでに荷物を纏めるだけである。

そう、なんだかんだで今日がシッター最終日だった。

実のところ仕事と学業を忘れて楽しんでしまったというのが実情だった。

そしてティアナちゃんとはまだ遊び足りないというか手放したくないのだが、私は私で既に今日の夜の列車で施設に里帰りの予定になっているのだ。すでに乗車券も入手してしまっているのである。

いや、施設の子たちを忘れているというわけでもないし、徐々に合う院長先生にも土産話がたんまりあるので、里帰りも楽しみみではあるのだが。

ま、まあ、友達の家遊びに来るだけなら理由もいらなわけだし、うん。

今度はディンやココットも誘って遊びに来るのもいいかもしれない。

いよいよ、いい時間となって薄暗くなってきた夕空の下で挨拶を

交わす。

「では、これで失礼します。パパさんもお酒と煙草は控えてくださいね？ 一家を支えているのだから、体を悪くしたら事です。おばさまにもよろしく伝えて下さい。美味しいレシピを有り難うと」  
「……うむ、こほん。酒と煙草については鋭意努力するよ」

ちょっと目が泳いでいたので、信用度が今ひとつだったが仕方ない。こういうのは他人が言ってもなかなか上手くはいかないものだ。

「ティータは来週が空士の一次試験だっけ？ 一次はそれほど難しさじゃないらしいけど、頑張れ。私達の世代の出世頭くん。そして受かったらお祝いに旨いものをご馳走して？」

「あ、ああ。頑張るさ。……いやまで何かさらっとおかしかった！ 普通はご馳走してくれるもんじゃないのか？」

「チッ」

なんて戯れていると私が別れを惜しんで抱っこしているティアナちゃんが真似をしはじめた。とはいえ歯がないとこの発音はね……

「いっ……いー」

なんて発音になるのだが、段々声を出しているうちにご機嫌になってきたらしい。楽しげにいーいー言っている。

お、おう。ほっこりしていたらいつの間にか五分も経っていた。

「ええと、それではまた遊びに来させて頂きますね、ティータもまた、学校で」

簡潔に言つてバスの停留所に歩きだす……事ができなかった。  
ティータに腕をがっしりと掴まれている。  
くっ、私の力でもはがれないとは何という……

「その前に、ティアナをナチュラルに連れて行かないように」  
「くっ……」

渋々とティータにティアナちゃんを譲る。赤ちゃん特有のぬくもりが腕から逃げてゆく。

「うっ……うっ、ティアナちゃん、また遊びに来るからね、ティーノお姉ちゃんを忘れないでくれよう」

きゃいきゃいとはしゃぐティアナちゃん。どうやら別れの悲しみは私一人だけのものようだった。

まあ、いつまで寸劇を続けていても仕方ない。最後にふわふわの母親譲りなのだろう、オレンジにも見える明るい髪を撫でつけ、くすぐったそうに目を細める姿を目に収め、別れとしたのだった。

列車の背もたれにもたれかかつて、そんなランスター家での事を思い返しながら軽く目をつむった。

いや、いい仕事だった。仕事という意識もなかったが。アルバイト代を貰うのが申し訳ないくらいである。

ちなみに学生シッターであるので、相場もそう高いわけではなく、日本で言えば高校生が学校帰りにアルバイトをして貰える一ヶ月分の給料くらいなのだが。

夏休み前に子供達にもたせてやった土産代や、友人との付き合いもあるので少々寒い風の吹いていた私の懐も、やっとこさ温もりを

取り戻したようだった。

……思い出してしまったので、カバンを開けてごそごそと探し、本を取り出す。本当ならティードに教えを請うつもりだったのだが……  
ひどく今更だが、せめて施設のある東部域までの道のりくらいは勉強に充てることとした。

駅からバスに乗り換え、いつかも通った道を通りながら田舎道を走る。すでに早い子は寝てしまうような時間である。もう乗客も私一人だけなので、施設の前まで送ってくれると言う。その辺の融通は田舎ならではというところだろう。

やがて懐かしい気持ちすらしてしまう施設の前でバスを降り、夜気を胸一杯に吸い、うーんと背筋を伸ばす。

さすがに長時間の移動で背筋がこった。体をほぐしていると、バスが来たのを中から見ていたのか、玄関のドアが空いて院長先生が出迎えてくれた。

「おかえりなさいティーノ、さ、みんなもう待ちかねていますよ」

そう言っただけ先生は微笑む。

私も何となくその笑みが伝染したのか、ほっとして表情が緩んだ。ただいま先生と答えて、施設に入る。が、広間に入ったと同時に明かりが消え

「今だ！」

というかけ声と共にクラッカーの斉砲火を食らってしまった。

正直、驚いたのなんのつて。ティンバーが居るんだからこのくらの悪戯は予想しておくべきだったか……！！

何か言おうとしたのだが、舌がもつれる。



まごまごしているうちに明かりがつけられた。

「誕生日おめでとう！」

皆が思い思いにそう言ってくれる。

飾り立てられたテーブルの上にはごちそうが並び、院長先生お手製と見られるケーキがどんと鎮座している。悪戯が成功したことを楽しみながらも、子供たちはテーブルの上の料理に目が釘付けだったりもする。

そう、今日は書類上ではあるものの、私の12才の誕生日だった。皆が祝ってくれるというので、ちょっと頑張つて帰ってきたのだった。

院長先生がゆったりと歩いて入ってくると、自然と騒々しかった空気も収まる。

「さ、ようやく今日の主役も到着したことですし、今日は堅い事は言わないでおきます。では、ティーノの12才を祝い、乾杯してから頂きましょうか」

ワインを持ち上げながら、堅い事は言わないながらも略式のお祈りだけは欠かさない。

子供達も子供用にアルコールのほぼ入って無いワインを持ち上げ、グラスを隣の子とぶつけて遊んだりして賑やかに乾杯をした。

私も注がれた一杯を飲んで、ふうと一息吐く。

いやはや……

「ふふ、帰って早々に慌ただしくて大変でしたねティーノ」

ふくみ笑いをしながら先生が私の頭を撫でてくる。

まあ、何となく面映ゆいのだが、この人には何故か逆らう気がし

ない。ちびりちびりとグラスのワインもどきを舐めるように飲む。少々もの足りない。空いたグラスに注ぐとボトルに手を伸ばすと横からさらわれた。視線を移せばラフィがボトルを持って待機している。空いたグラスに飲み物を注いでくれるようだった。

「どうやら今日は大人しく主賓らしくもてなされる、と言うことらしい。」

「そうして、何とも騒がしく、楽しい夜はそうしてふけていく。」

「しかし。しかしである。」

「どうもこう、子供達が可愛く見えて仕方ないのだが、どうしたものでしょうか。」

「やはり、ティアナちゃんには私の中の何かを目覚めさせられてしまったていらしい。ロリコンやないんやーなどと言っても誰も耳を貸さないだろう……落ちるところまで落ちたものである。」

「うふふ……ふ」

「な、何だ……ティアノがおかしな笑い方してる？」

「ティンバーが不気味に笑う私にちよつと引き気味である。まあなんだ。」

「逃がさない。がっしりとばかりにティンバーの腕を掴んで引き寄せ、椅子に座っている私の膝の上に乗せてモフった。」

「んーふふ、おねいちゃんを驚かせてくれたからなあ、今日は逃がさないぞ」

「お、おおおい、ちよつと待て待て待て待て！ 酒っ臭っ！ 誰だティアノ姉に本物のワイン飲ませたのは！？」

「おお、テンパると私を呼ぶときも姉が付くのかーそうかー。」

「んふふー、うい奴めうい奴め、ほれほれ、セクハラするのは得意

でもされるのは苦手かー」

「ぎゃあああ！ そんなとこに手え入れんな！」

ふふ、マフィアに手込めにされそうになったほどのエロ種族（暫定）を舐めるな。全く関係ない気もするが。

……そういえば考えていたことがあった。

ふっと思いつき出し、ティンバーを抑えていた手を緩めると、敏捷にホールドを抜け出された。ちよつと残念である。

少し瞑目し、ゆっくりまぶたを開く。うん、明かそうと思ったもののやはり勇気がある。何故だか知らないが。

手をパンと一つ鳴らして注目を集める。

「皆、聞いてくれるかな？」

そうやって私は隠し通して来た翼の隠蔽を解き、大きく広げて見せた。

うん、いい機会なのだろう。おりしも誕生日だし、ティータにも見られてしまったことだ。何より、院長先生やカーリナ姉は最初から知っていたようだし。

堅物のクロノやアリアさんからは「リスク管理がなってない」とか言われるかもしれないが、施設の皆は家族も同然である。あまり秘密にしておくのも少々心苦しいものはあったのだ。

「見ての通り、こんなのが背中に付いてたりするんだ。まあ。こんな機会でもないとなかなか明かせ……ってええええ！」

うん。子供達に揉みくちやにされた。

「すげえー！ これ本物？ 抜いていい？」

「うわー暖かいんだけど何コレ、何コレ」

「羽根……古き者ども、深き者ども、ディープワンの親戚？」

デュネットそこ、さらっと私を妙なものと一緒にしないでほしい。ちびっこ共、羽根抜くな痛い！

とまあ、大騒ぎである。

そんな一幕も何とか収集がつき、流石に騒ぎすぎて疲れたのか、寝ぼけた子も出てきたのでお開きにした。いつも通り、年長のティンバーとラフィに連れていかせる。

「ああ、全くみんな元気だなあ」

ちょっと羽根がむしられて文字通り鳥肌が見えてしまっている翼をさすりながらパーティーの余韻に浸る。

「そうね、子供たちには屈託のない元気な顔が似合うと思うわ、けどねティーノそれはあなたも同じ。いい顔になってますよ？」

すつきりしたみたいですね、と微笑みかけてくる。

何とも見抜かれているというのは面映ゆい。頬を搔いて誤魔化す。

「ところで、カーリナ姉が言うには一ヶ月ほど前にこっちでも変なのが居たらしいけど、子供達は不安になってなかった？」

と、強引に話題を変えてみる。

まあ、地元の警察に逮捕されたという間抜けなSOTM、ソウルオブザマターの見張り君の事だが。

「大丈夫よ、それにティーノ。こんな訳有りの子供たちばかり預かる施設が何の備えもしていないわけがないでしょう？ 私自身、魔導師でも何でもないけれど昔のツテで聖王教会には顔が効きますか

らね」

確かベルカ貴族の教師役だったというあれか。

どんな備えを、とは言わなかったものの自信げである。

それにね、とちよつと悪戯気な顔になる。

「あなたも気付かなかったみたいだけど、ご近所さん、果樹園のナシユアおじさんや初等科の授業をしてもらっているダグウッドさんも引退したとはいえベテラン魔導師なのですよ？」

聞けばかつてグラム提督の下で動いていた管理局員だったらしい。しかしまあ、言ってくれば良かったのに……

アルコールも手伝ってか、どうも子供らしい表情が表にでてしまう。唇を突き出してちよつと拗ねた顔になってしまふ。あらまあ、なんて言われながら私は頭を撫でられたのだった。

### 幕間三

少女は唄っていた。

どこかで聞いたような、あるいはどこにでもあるような旋律。

情感をそそられたのだろうか、緑溢れる山林の大きな岩に腰掛け、飽きずに口ずさむ。

目を閉じ、そのリズムに合わせてるように背中の翼が揺れている。

やがて少女は納得のいかないフレーズでもあったのか、二度三度と歌い直し、首をかしげた。無意識にだろう、お腹に手を当ててもう一度歌う。……と、今度は上手くいったらしく笑顔が出た。

じやり、と足音が聞こえ、少女が振り向くと、もう若さも顔から抜けたらしい男の姿があった。

少女は子供らしく、パツと表情を変え男に文字通り飛びかかった。極度に色の抜けた白銀の髪が風になびく。

「パパ！ おかえりなさい！」

「はは、ただいまアドニア。何か元気いっぱいだけど特別なことでもあったのかい？」

男は細身ではあるものの、そこは父の矜持でもあるのか、飛び込んできた少女をがっしりと受け止め、笑ってみせた。

「ん！ あったよ！ パパが帰った！」

「それは特別なことなんかじゃ……ああ、痛い痛い！ うん特別なから！ 許してアドニア！」

さすがに腹に頭から突っ込んだ体勢で頭突きをされれば堪えるよ  
うだ。

そんな調子で、親子はふざけ会いながら家路についた。

山林と思わしき光景はすぐに一面の海になった。

青く透き通った海面に少し緑がかった空と真つ白な雲が映っている。

まるで山の傾斜を削りとって、巨人の階段にでもなっているかのような形の白亜の箱形の家二人は連れ立って入った。

「あら、お帰りなさい先生、隣町への出張お疲れ様でした。アドニアちゃんもお帰りなさい」

赤みがかったブラウンの髪を肩口で綺麗に揃えた女性が出迎える。ワンピースの白い衣服で食事の用意でもしていたのだろう、袖を捲っていた。少女と同じように翼もその背中から覗かせているが、その羽根の色は髪の色と揃っていた。

「ただいまお母さん」

「やあ、ただいま。しかしまだ『先生』呼ばわりかい？」

男がそう口を尖らせると、何がおかしいのか女性は小さく笑った。山遊びを覚えて、手足を汚してしまっている少女を濡れた布で拭きながら答える。

「それなりに結婚したてなのに、肝心のお嫁さんを放り出して仕事に明け暮れている人ですから、そんな人は仕事関係のままの呼び方以外してあげません」

そう言って「笑わない笑み」としか言いようのない表情を浮かべ、男を見やった。

男はさすがにたじたじになり、諸手を挙げて全面降伏の構えである。

「悪かった、悪かったよ。こゝ今度は患者が助けを求めてきても家族一番で、もう見殺しちゃうから……ってそういうわけにもいかないし……って、ええと僕にどうしろと？」

「……………ぷっ」

慌てる男を見て女性はたまりかねたように吹き出し、冗談です冗談と手を振った。

「そういう人なのはお手伝いしていた時から見てきましたから、今更文句は言いませんよ。アドニアちゃんも居ることですし」

そう言って、女性は手の中でむずがる少女の頭を優しく撫でた。

「それに……………」

柔らかい笑みになると自らの下腹部をそつと撫でる。

不思議そうな顔になるアドニアの頭をもう一つ撫で、察しると言わんばかりに男を見た。

一瞬男は呆けたかと思うと、その意味することに気付いたのか、驚きに目を開く。

女性はニュアンスが正しく伝わったことにこりとして。

「名前を考えておいてもらわないとですね」

男はどうやら混乱と驚愕が抜けないようで、むやみにアドニアを高い高いなどして目を回させていたが。

それは平和な風景、気弱で優しい父とそれを包み込むような支えるような母。



無機質な実験室の中では決して手に入らない風景。ただそれはひどく脆くて儚くて

瞬く間に時は過ぎる。

三回ほど夏と冬が通り過ぎた頃には少女は生まれが生まれだからだろうか、少々の発育不良に悩まされながらも、技術者であり医者でもある父の処方による所もあったのだろう、すすくと大過なく育った。

「アラエル？」

「そう、大昔の言葉で鳥を司るものと言う意味らしい。我々の持つこの翼……」

と、黒板の前で講師は持ち前の黒っぽい翼を広げる。

石造りの舞台、祭りなどがあれば踊りや劇に使われるそこで、集落の子供達を集め、歴史を教えていた。

「私達にはあまりにも当たり前になってしまっているが、鳥と同じ類のものだ。かつては空を自在に飛び回っていたという文献もある。そして、海に住む人たちについては同じようにガギエルという呼び名がある。……地の人、海の人と呼ぶようになって久しく、今では彼等もその呼び名を伝えているかは怪しいものではあるが」

講師は少々大げさな身振りで慨嘆し、次の話題に入る。年頃のアドニアもその講師の話の聞く子供たちの中の一人として混ざっていた。

ところどころで小ネタに走ったりもしながら、話は続いた。伝承として古い文献にしか残っていないという。かつて大きな大

地の変動があったこと。その折に神々も姿を消し、空を行き交うものの翼は空を飛ぶ力を失い、海に住まうものは水から呼吸することを忘れた。環境の激変に適応せざるを得ず、限られた土地、食料を求め、あちこちで争いが起き、溢れるようだった人口も減り続け、いつしか集落ごとにまとまり、互いにより干渉することもなくなつたという。

帰宅したアドニアは、さっそくと言つた形で今日聞いた事、考えた事を物知りである父に話していた。

「うん……うん。確かに飛べたら楽しいだろうねえ、しかしそうか、神々と、そう伝わっているんだね。なるほど。……しかし、そうなると、やはりかつては圧縮魔力を通すことで飛行を？ いやそれだと羽根に張り巡らされた魔力神経網が理解できないか……あるいはリンカーコアの……」

いつしか、アドニアの理解を超えた言葉をぶつぶつと呟き始める。こつなつてしまうと、普段はちよつと鬱陶しいくらいに構つてくる父の面影はなく、研究者然とした顔が表に出ていた。時折神経質そうに指でテーブルをとんとんと叩く。急に思いつきをメモすることもある。この時の父の顔、いや、雰囲気だるうか、アドニアは何故か懐かしい気分になるのだった。

ただ、対照的にそういつた空気の嫌いな存在が一人居たのを忘れていたのは父親としては失格だったかもしれない。

「ねー、パパがまた止まってるよ」

「はいはい、ミュラは私と遊ぼうね」

日も沈み初め、薄明かりの中、近頃隣の集落から交易商が運んで来たというボードゲームで二人は遊んだ。

やがて、食卓に皿が並び、キッチンから美味しそうな香りが流れてくると、さすがのどっぷりと思考に浸っていた男も気を取り戻した。

少々面映ゆげに人差し指でぼりぼりと頬を掻き、食卓の自分の椅子に座った。

「さ、そろそろ出来上がるからゲームは仕舞ってね」

「はあい」

母に声をかけられるが、どうも今ゲームの丁度いいところのようだった。二人して生返事を返す。

配膳も終わり、一つため息をついた母はぼんと手を叩くと、自分の背中の羽根を一枚引き抜いて、アドニアの首筋をこそこそとくぐる。

「うっ……ぷはっ！ あははっあはははあっはやめ、やめてお母さん。ゲーム辞めるから！」

色白すぎる肌は見た目通り敏感肌らしく、効果はてきめんだった。文字通りひいひい言わせられた。

ミユラはその年にして既に要領がいいのか、姉の惨状を見ていち早く食卓に着いている。

「ふふ、アドニアちゃんは反応良いわねえ」

地獄の蓋は開いたばかりだ、とでも言わんばかりににこやかに微笑みながら二本目の羽根をもつてもう一カ所、脇腹も同時にくすぐりだした。

にぎゃああああとどこか猫の声にも似た悲鳴を父と弟は冷や汗を流しながら全力で見えていないふりをした。

そんな素朴ながらも明るく楽しい夜が過ぎる。

きっかけは何であったのか

日ごとに美しさも備えてくる少女を唐突に対等な女として見てしまったのか。

あるいはアドニアの前でしか見せない男の研究者然とした姿を度々見る事に耐えかねたのか。

下世話な噂話、男が大事そうに幼子を抱えてこの集落に訪れた時から本当に妻にしたい女は決まっていた。年増の助手など間に合わせに過ぎない。という根も葉もない噂を信じてしまったのか。

産まれた我が子の将来を思って訳のわからぬ不安にでも駆られたのか。

堅く結んだ糸が突然ちぎれてしまうように、終わりはゆっくりとなんてやっては来なかった。

それは炎に塗れた光景だった。

白亜の家の壁を炎が蛇のように舐める。

慣れていない手つきで父が作った手製の木馬、大事そうに飾られていたアドニスの花。弟の誕生日を祝ってアドニアが野山を駆け回って作ったリース。

赤く爛れた炎が伸びれば何もかもを黒く焼け付かせていく。

アドニアは現実味がいつまでも感じられないままにその一部始終を見ていた。

初めはただの口げんかのようなだった。

いつしか普段は寛容な母が噂話などというものを根拠に感情的になり。

アドニアについて隠し事があるのでしようと聞かれた時、いつもは優しい男が厳しい表情で「話す事はできない」ときっぱり言った。それが決壊の一言だったのかもしれない。

母は泣くような、笑うような表情でアドニアを振り向いた。

何かを感じた男はアドニアを庇うように動いたがそれは逆鱗を逆撫でただけだったのかもしれない。

この地の人々の力は強い。男は掴みかかれ、何事か言葉にならない事を言われながら、首を絞められた。

やがて男の体に力が無くなった。

「あ、あ、私、わたし……殺しちゃった、セフォンを？ 誰が？ 私か？」

喉の奥から唸るような声を絞りながら、行かなくちゃ、私も行かなくちゃ。と呟き油を家中に撒いて火をつけた。

その時には既に何かが狂っていたのだろう。

アドニアを振り返るとにっこりと笑って、自らの首に包丁を当て、引いた。

血がしぶき、ゆっくりと倒れる。自ら被った油に火がつき、凄まじい煙と共に黒く黒くなっていった。

アドニアが気付いた時には清潔なベッドの上で左手に幼い弟がすやすやと眠っていた。

「……夢？」

なんて怖い夢なんだろう、と思うと同時に涙腺が急に開き、滂沱と言った方がよいほどに涙が流れた。

そして、そのまま泣き疲れていつしかまた眠ってしまったのだ。眠っていた場所が自らの家ではない事にも気付かぬまま。

「えーと、夢よ醒めろ醒めろ醒めろ」

夢の中で醒めると目をつぶって念じるなんて器用な真似をした。私の足元には眠りこける、今の私を少々幼くしたような子と幼児がすやすや眠っている。触ろうとしてもすり抜ける。部屋の外……壁や窓からは手を出すことは出来ない。この訳のわからなさ……うん夢だろこりゃ。

ちよっと思いつく限りの行動、例えばほっぺたを引っ張ってみたい、逆立ちをしてみたり、バク転をかましてみたりしてみる。

……段々楽しくなってきたので、人目があると絶対にできない一人シャドーボクシングなんてやってみる。

「シュシュッ」

腋を締めて打つべしっ打つべし打つべしっ

「そして止めのッ黄金の左ッ！」

K1の番長のごとき左ストレートで決める。

仮想敵はティータである。ティアナちゃんを独り占めしおってさらに、妬ましや。

夢の中でくらいフルボッコにしてやるのだ！

「気は済んだ？」

突如かけられたハスキーな声にびたりと腕が止まり、ぎぎぎ、と私は振り向いた。

ベッドを挟んで向かいに足を組みながら座っている女性が居る。

女性であることしか判らない………というか輪郭がはっきりと認識できない？

思わず目を「じ」ごとくすった。

「まだ、それほど繋がっているわけじゃないから、声だけでも通るなら僥倖と言ったところ」

「繋がって……てかさっきの見てた？」

女性らしき影は一つ肩をすくめたようだった。あっさりと言う。

「初めから最後までばっちり」

「……ぐああ」

羞恥で私は頭を抱えた。

というかどうかという状態なんだこれ、ちょっと考えてみるとかなり訳判らん状態でもある。いや、何となく直感で理解してしまっているような部分もあるようで、難しいのだが。

ひとまず聞き出さねばならない。女性の影をきつと睨む。

「あなたの考えている事は判る。あなたもいずれ判る」

それが嘘を吐いていないことも何となく理解できる。理解できてしまうのだ。

頭が上手く回らない。

現実逃避気味に体を動かしてみたところで血が頭に回るわけではなかったらしい。

ただ、一つだけ気になっていることもあった。

あの姿は似すぎている。いや、やはりこの身体は……私は？

「一つだけ……私は……私はアド……」

だが、聞く前に室内というのに霧のような薄ぼんやりしたものに

段々覆われ、見えなくなってきた。いや、意識に霧がかかっている？  
理解できない。

「ティーノ、あるいはツバサ。いずれまた。あなたには知ってほしい」

何を？ と声を出す事も出来ずに霧に飲まれ意識ごと溶けていくのを感じる。

本当に……訳のわからない……



## 一二話

何時にない明晰夢だった。

「ごつという夢を見てしまうと現実がどちらなのか判らなくなってしまう。」

見当識の混乱というやつだ。

右手を天井に向けて持ち上げる。小指から一本一本指を折り曲げ、親指からまた順に広げる。カーテンの隙間から日の光が漏れ、手の甲に細い光を当てる。

真っ白な手。血の色ばかりが透けて見えてピンク色にしか見えな  
い爪。日々木刀を振るったり料理などしてるので、少々指が荒れて  
いる。

ゆっくりと息を吐き、ゆっくりと吸う。

やっと、意識がすっかりしてきたようだった。

私は自分で自分の身体を抱きしめて少し震えた。

寒いからではない。

「……しかし、まあ。なんなんだよあれは……」

アドニアの陥った悲劇といい……いやああいうすれ違い、ボタンの掛け違いは探せばそれこそあちこちに転がっているのかもしれないが。

大体あのエーゲ海にも似た風景はかつて私が見せて貰った第130世界の数少ない資料の映像そのものだったわけだし。

単純に結びつければ、私が記憶障害か何かで昔の記憶をぼつぼつ思い出してきている？ いや、それなら途中で入った女の影は……

「変な呪術でもかけられてんじゃないだろうなあ……？」

魔法がある世界である。遠くから触媒を通して夢を見せる。そんなものの一つや二つあったとしても驚かない。

知る限りのミッド魔法にはそういうものは無いが。

流石に今度は軽く流すこともちよつと難しく、うーうー唸りながら考え込んでいた。

やがてラファイが遅くまで起きてこない私を訝しんだのか部屋を訪れてきたようだった。

「ん……」

流石に子供達にこんな弱ってる姿は見せられるもんじゃない。

お腹に力を入れ上体を持ち上げ、両手でちよつと強めに頬を叩いた。

……強めに叩きすぎたようだった。痛い。

ともあれ、気分は強引にだが変えられそうだ。

「おはようラファイ。ちよつと昨晚の酒でも効いたっばい……寝坊しちまったい」

あまり意識して作ったことがなかった笑みを見せておく。

昼も過ぎる頃にはさすがにもう朝の動揺は引きずっていないなかった。不思議には思っていたが。人間いろいろと順応してしまうものもある。

「いずれまた」という言葉はすっかり覚えている。きっといずれはまたあの不思議な女性の影にも接触する機会はでてくるだろう。

私宛に手紙が届いているというので確認してみれば、いつぞや私

が書いた手紙への恭也と美由希からの返信だった。

手違いでもあったのか、寮ではなくこちらの施設の方に届いてしまったようである。

そういえば、適当に「届けておいて」なんてお願いしてしまったが、ロツテさんが辻褄を合わせてくれたらしい。地球で押されたものらしい消印は欧文印で、宛先はロンドンのグレアム家にステイしているティーノ・ツバサ・アルメーラなんて事になっている。

口に出してみるとツバサなんてのも懐かしく思える。一応、管理局への登録時にミドルネームとして残してあるのだが、私自身が適当に名乗っていただけという由来なので、ちょっと今となっては恥ずかしくて使いにくい名前でもあるのだが。

「いやー、あの頃は大変だったな……」

それほど昔というわけでもないのだが、懐かしく思えてしまう。気を取り直して手紙を読んでみれば、恭也らしい簡潔な文で、近況報告と私が使っていた工場跡地の秘密基地めいたものは近くに山場などあるので修行の拠点に使わせてもらっている事などが書かれている。

文章のうちの半分近くを美由希の成長具合がどうか、小さい妹がどうか、家族の話が入っているのもまた恭也らしいのかもしれない。なかった。

美由希が書いた手紙はまた何とも女の子しているものだった。ハーブの香りのついた薄い黄色の紙に丸くて小さくまとまった文字で書かれている。

こちらはこちらで自分のことより恭也のことの方が多く書かれていたりする。何でも恭也が最近変な味のたい焼きばかり買ってきて困るとか、中学に入ったにも関わらずやっぱり友達居ないとか、おいおい、自分はどうなんだと突っ込みを入れたくなる。いや実際次に出す手紙で突っ込んでおくでしょう。

最後に写真が一枚同封されていた。家族写真のようだ。撮った場所は中庭だろうか、縁側に腰掛けたパパさん、ママさん、そこに挟まれるように、ちよつと気恥ずかしげな恭也と、妹さん……なのはちゃんと言うらしいが、を抱きかかえた美由希が写っている。美由希はあまり変化がないが、恭也は年頃らしく伸び盛りに入ったようだ、私が覚えていたより随分と背が伸びていた。私の低身長を思えば10センチほど分けて貰いたいくらいである。いやこれでも私も伸びてはいるのだが……ぐぬぬと言わざるを得ない。

そして、この美由希の膝の上に抱かれた妹さん、なのはちゃんはお母さん似なのだろうか、元気そうな目元がそっくりだ。頭の上に美由希の顎を寄せ、何が楽しいのか、にこにこ笑って写真に写っている。何はともあれ元気で居るようで何よりだった。

今は無理だが、局員ともなれば、申請が面倒になるものの地球への旅行も可能になってくる。

そうだったら、うん。真っ先にとまではいかないが、遊びに行くでしょう。こういう目的もモチベーションの維持にはぴったりでもある。

一つ大きく伸びをして、ソファ行儀悪く転がる。何とはなしに笑いがこぼれた。

なんだかんだで今の私は恵まれているだろう。いろいろと紆余曲折はあるにせよ、だ。こうして笑っていられるのだから。

夏休みの間の里帰り期間は3週間の予定である。

私は懐かしくも感じてしまう施設での暮らしを始めた。あの夢はあれ以来出てこない。本当によく判らないものである。

すでに学生であるので、施設でやる日々の学習からはもう外れてはいるのだが、こちらはこちらで飛び級もかかっているので勉強に励んだ。実のところ狙っているのは中等部である。仕組み上いきなり

高等部なんて離れ業も可能ではあるのだが、私の頭では少々心もとないのだ。毎日の弛まぬ努力があったとしても厳しいものがあつた。

「むうう」

マルチタスクに関する脳神経と魔法学の関わりなどの項目を読み終わり、長時間同じ姿勢でいたせいかすっかり凝ってしまった首をもみほぐす。

少し休憩することにして、お茶でも入れようかとドアを開ける。

見たのは廊下でうずくまって困つたような顔を浮かべているラフィの姿だつた。

「ちょ、ちよつとラフィ!? 大丈夫?」

慌てて抱え起こす。その小柄な体の割にずっしりとした重さが伝わつた。これは……

「あは……ごみんねティノ姉。ちよつと動かなくなつちゃつた」

「あのねえ……ラフィ。ちゃんとこういう時は人を呼ぶんだよ?」

「うーい」

判つたような判つてないようなお決まりの返事をする、私の胸に頭をもたせかけてきた。

原因も判っているので横抱きに抱え上げ、一階応接間の大きなソファまで運んで横にする。

事情を一目で把握した院長先生が早速行きつけの病院の技師に連絡を取つた。

一時間も経つた頃だろうか、ラフィは動きが取れないので暇をもちあましたのだろう、眠ってしまった。

私はというと、ちよつとした思いつきなどもあつて、ラフィに膝

枕なんてものをしていただけのだが……

「あ、手が滑ったああ！」

「……………ッ！」

足から走る電気にも似た感覚が背筋を伝う。声にならない悲鳴が私の口から出ているようだった。

「ティ……………ンばあああ、覚えていろおおお」

涙目で睨み付けておくが、この小憎らしい奴はせせら笑うばかりである。

そりゃまあ、一時間も膝枕なんてしていれば痺れるわけで、それに目をつけたティンバーが悪戯に突いてきたりするわけで……

「ほれほれー、ここか、ここがええのんかー？」

誰が教えたか判らないオヤジギャグをかましながら指でしこたま足を突いてくる。

悔しいのであまり反応したくないのだが、びりびりと刺激が走るたびに顔が引きつった。

なかなか間合いの取り方も上手く、私の手の届かない範囲にすぐ退いてしまう。見事なヒットアンドアウェイ戦法だった。膝の上で寝こけているラファイが居るのでそう身動きも取れない。

……………そうだった。手が出なければ別の……………。

何と今度はマッサージ用のツボ押し棒などという凶器を構えて向かってくるティンバーを睨みすえる。

少々前屈みになり、背中の翼の片方を使って……………手の感覚でいうと裏拳だろうか。翼の関節部分で撃墜する。

「ぐほあぁ」

うむ。何となくこの翼の使い方もこなれてきたような気がしないでもない。関節部分の可動域が広がってなかなか融通も効くのだ。

そうこうしているうちにかかりつけの技師が到着して見てくれることになった。

ラフィは一度寝てしまおうとよく眠るので、その間に見てしまおうということになる。

院長先生の部屋にテーブルと堅めのクッション、シーツを敷いて簡易的な診察台を作る。

技師がその特徴的なツールナイフのようなデバイスを取り出すと、ラフィの肩口に当てて魔法を発動させる。

腕が取れた。

同じように動かなくなっている義肢を外していく。

ラフィは物心も付かない幼い頃に事故で四肢が無くなってしまったという。

両親が最後の最後に縋ったのが、生体と機械を融合させるという研究をしている研究所に被検者として娘を預けることだった。

結論から言えばラフィの四肢は戻った。ただ、それを喜んだのもつかの間、研究所は何の理由もなしに突如閉鎖してしまった。

生体といってもその義肢はどこどころに機械が入り、魔力伝達の助けとしている。高額メンテナンス費用が必要な義肢でもあった。

稼ぐ為に親は無理を押し通し、ちよつとした不注意から……あるいは日頃の疲れからか、交通事故を起こして亡くなった。

残されたのは3才になるかならないかの高額の負担が必要な幼児である。

あちこちの児童擁護施設を転々とし、今日の前で心配そうに見ているカラベル先生が初めて見た時は、それはもう衰弱しきっていたらしい。

一時間ほどもした頃だろうか、義肢も元通りつけられ、簡単な検査を終えてこちらを向いた。終わったらしい。

「どうやら、体が成長したことに対するひずみを義肢が受け止めかねたようです。簡単に設定だけいじって動くようにはしておきましたが、そろそろメンテの時期ですし、一週間ほど入院してもらって調整するのがいいでしょうね」

「そうですね……ありがとうございます。日を改めてまたお伺いしましょうかしら」

「そのつもりでしたら、予約の手続きもここでしておきましょうか？」

話し始めた二人に、ラフィを部屋に連れてくるねと一声かけ、抱っこして運んだ。

途中頭を私の腕にぐりぐり当ててきたので、どうもどこからか知らないが起きていたらしい。

ベッドにラフィを降ろし、無言のまま頭を撫でておく。

何となく、歌を口ずさむ。

歌い出して気付いたが、The Sound of Music だった。古くからある超有名ミュージカルの代表音楽だ。何となく頭に残っていたのだろうか。

湖から飛び立つ鳥の翼のように羽ばたきたくなる、か。割とできなくもないのだが。ここで本当に羽ばたいても当然ながら無粋なだけである。

自然をありのまま美しく歌い上げたこの歌を歌っている間にラフィは今度こそ本当に寝息を立てていたようだった。

夏ではあるものの、体を冷やさぬようタオルケットくらいはかけておく。

この子はこの子で事情を抱えているし、私も妙な夢だの記憶がどっだのといった事でありあまり悩んでいる暇もなさそうである。



ニコニコしながら寝ているラフィの頭を撫でている自分に気付いてしまった私は、一人で何とも言えない羞恥に悶えていた。  
いや本当いつか子供襲ったりするなよ私？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7834x/>

---

道行き見えないトリッパー

2011年12月24日07時53分発行